女子文壇

第五年壹號　（一月號）



本品は最も完全なる白毛赤毛染なり

又本品を以て赤毛を染る時は有に半ヶ年以上を保つと云ふ

奏効禮狀日々多大なり

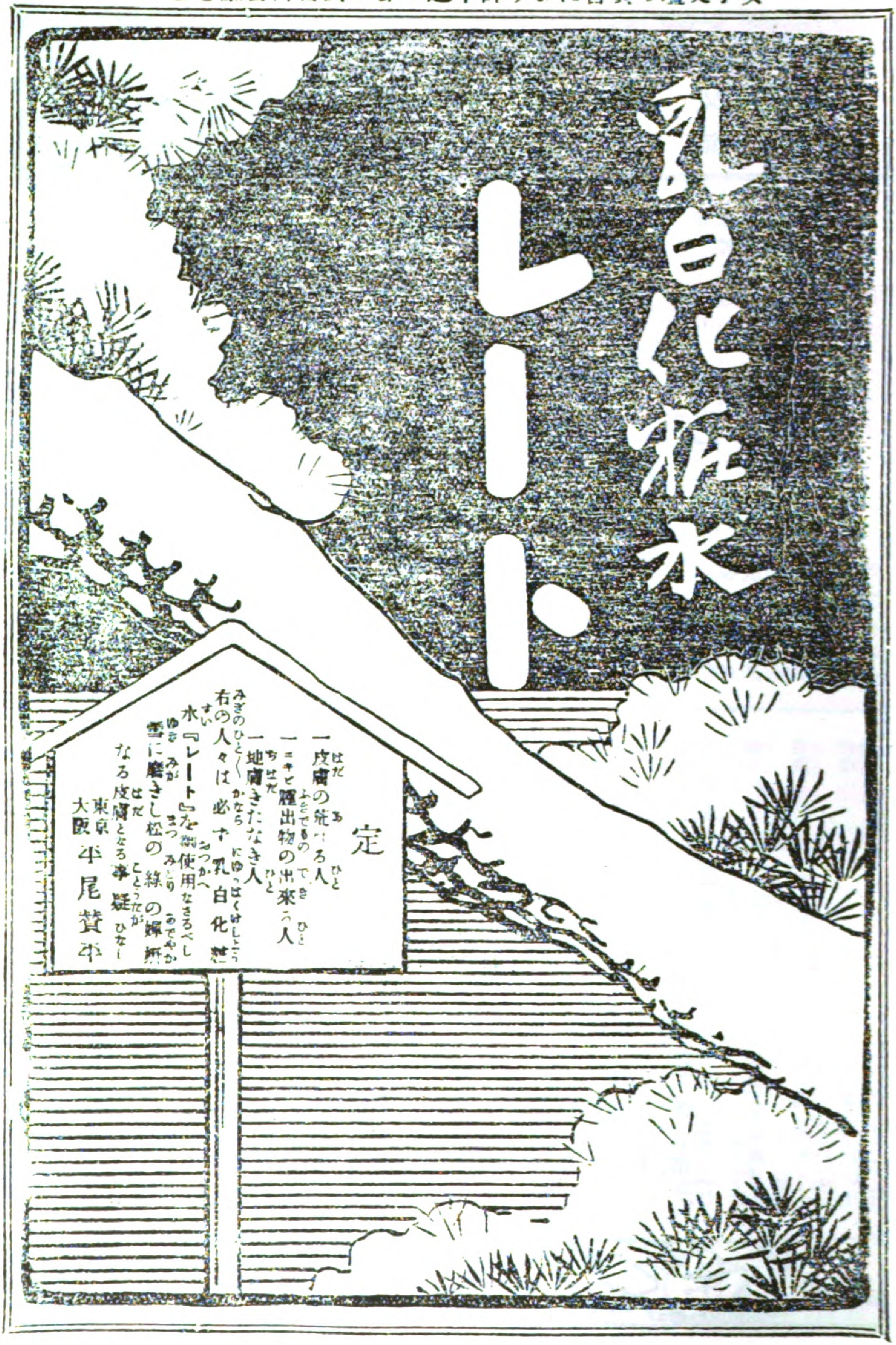
全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店


乳白化粧水
レート
定
一 皮膚の荒る人
一 ニキビ腫出物の出來る人
一 地膚きたなき人
右の人々は必ず乳白化粧水『レート』を御使用なさるべし
雪に磨きし松の緑の婦嫻なる皮膚となる事疑ひなし
東京 大阪 平尾賛平

女子文壇

第五年第壹號

目次

附錄

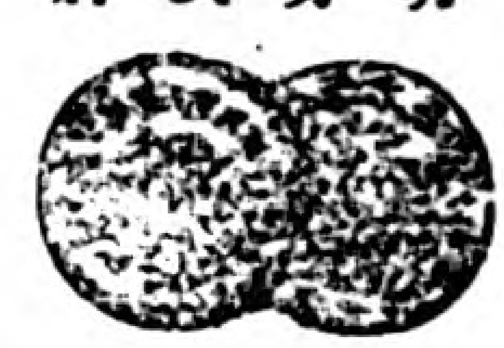
女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標 壽美禮おしろい

五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ぬり製 大壜二十錢 小壜十二錢
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎壽美禮白粉

は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艷麗ならしめ濟々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◎西洋皮膚艷麗劑 壽美禮あらひ粉の特性

鐵、鹽、紅彩蝶香ひ 罐詰入 錢
別製罐詰 五拾錢
大袋 二錢 小袋 一錢

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艷深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舖 東京東兩國元町（兩國橋際） 壽美禮堂謹製
（電話浪花二七六五番）

販賣所は各國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

快活



（大江原色版部）


千代田白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新原料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉 大瓶 卅五錢 水製 廿五錢
小瓶 二十錢
香油 大瓶 卅五錢
中瓶 廿五錢
小瓶 十七錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三


高等美顔料
ピアスクリーム
すゞみのひまもやすき此
時期には使用あれば
美人となる
化粧料
東京市
日本橋區橘町四
山田篤三製

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添をこふ



女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新春の盛装を凝せる婦人世界空前の美觀

材料豐富

婦人世界

內容整頓

正月 一日發行 毎月一回 四巻 第一號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共壹圓五錢 一年分貳圓五錢

◎破天荒の大文字 男女必讀 夫婦情愛論……村井弦齋

◎生涯を通じて大愉快……棚橋絢子

（日本婦人を妻とせる英國の紳士 妻君評

◎支那の宮妃殿下を訪問す 侯爵夫人 鍋島榮子

◎初產當時の所感 下田壽惠子

◎私が三人の娘を嫁にやりし當時の實驗……公爵大山巖夫人 大山捨松子

◎新渡戸博士が養父の意に從はず西洋婦人と結婚せし話

◎流行の衣裳と顏に似合ふ衣服の着方……高橋義雄氏夫人 高橋千代子

◎大珍附錄 名流日本婦人の今昔 第一流の婦人數十名の今昔の寫眞大判附錄珍又珍

◎三十七歲にて始めて結婚したる私の實際談……前高等師範教諭 牛田のち子

◎四十六年前の正月につけたる私の日記……跡見女學校長 跡見花蹊

◎婦人の毛髮を美しくする最良の方法……醫學博士 岡村龍彥

◎美しき師弟の情……下田歌子

◎高輪御殿のお正月 小山中佐夫人 小山みつゑ子

◎十五人の子女を牛乳にて育つ……

◎京都婦人と東京婦人比較

◎名流婦人の頭相判斷 當代名流婦人の運命性行を縱橫無盡に解剖批判す痛切を極むる大珍品本誌獨特也

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番） 全國賣捌書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添をこふ



獨奏



三原蔵三郎筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

英語を知らざれば時勢に遲る

新式獨習

英語講義錄

英語研究の好機を逸する勿れ

通信教授 第六學期 會員募集

各科第七號一月一日發行 此際入會者には取纏め送付す

講師及賛助員には左記諸氏の外猶數氏あり

帝國大學教授 陸軍大學教授 アーサー ロイド

立教學院總理 ウィリヤム タッカー

萬朝報英文記者 英學生主筆 山縣五十雄

東京外國語學校 高等師範講師 片山寬

講師 松島剛

東京高等商業學校教授 高島捨太

神戸高等商業學校教授 山口造酒

ベチオロー チブアーツ 阿部啓吉

開成英語學校校長 星野久成

初等科	中等科	高等科

各學科六ケ月**卒業** 講義錄毎月二回配布一冊紙數八十頁 趣味多き應用講習雜誌毎月一回配布

本會は初學者及中學生の爲に英語の發音、綴字、音讀、譯讀、文法、會話、作文、和文英譯、英文書翰等一切を網羅して開發的に教授すると共に是が應用方法を指導し自由に英文を讀み英文を草し英語を話し得る程度迄教ゆ

會費 全學科一ケ年半分金九圓 各學科六ケ月分金壹圓七十錢 三ケ月分八十五錢一ケ月分卅錢宛外に入會金廿錢を要す

會則進呈 猶本會講義錄の特色は會則に詳説せり 希望者には往復端書にて申込次第進呈す

本會講義錄は**有名なる英語大家の講述**に係るが故に他の無責任なるものと異り何人も**信用して學び得**

文章は解り易き**談話體**にて**發音**には一々圖解を挿み**如何なる初學者にも**學び**易し**

嶄新なる組織に依り毎號新式お習**日課表**を附して研究方法を指導し日々**登校**して學ぶと何等の**差**なからしむ

學力の進歩を計り且**應用**に練習せしめんが爲め毎月**英語雜誌**を**無代進呈す**

見本（第壹號）各實費金十五錢宛送付者に**頒つ**是本講義錄の**特色**を**尤も正直に説明す**

◎**第五期講習完結**初等科六ケ月 中等科六ケ月**取揃**えあれば便宜上取纏め**送附**の需めに應ず

本月中入會者には特典あり

入會金全廢（一ケ月限り有効）（女文）振替貯金口座東京八三六

東京市麴町區富士見町六丁目十

大日本國民英語學會

（B 一）

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

●美き聲の出る新藥

（藥名ウエーヌス）
藥價 小包送料共
壹劑 壹圓拾五錢
特製 參圓拾五錢

人の美は聲にあり……人の愛は聲にあり

▲聲美しくして—淑女は窈窕たり—▲聲麗しくして—男子は威嚴あり▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり—謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり

發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發すると確證す

「ウエーヌス」有効感謝狀 近着の分二三を左に拔載す

私儀此度當市興行の際非常に音聲を痛め候處貴舗より「ウエーヌス」と申す藥頂戴仕り服藥候處早速全快に至り實に其効神の如きに驚入申候依て茲に御禮及證明仕候也
明治四十一年二月五日 竹本大島太夫㊞

拜啓妾儀時々音聲をいため色々の藥を用ひ居り候處更に効能もなく拾貳時中苦勞致居り候際はからずも當市出勤中貴舗の「ウエーヌス」をいただき候に忽ち音聲も本復仕り難有存じ候實に其効驗の大なること驚入申候乍失敬以紙上御禮申上候也
明治四十年壹月 大阪女義太夫 長廣㊞

拜啓小生儀過般咽喉に異狀を生じ從來の美音（？）は再び小生自身さへも聞く事能はずと存じ營業上頗る困却罷在候處貴製の「ウエーヌス」を服用す僅に二回にして全く本復仕候段偏に貴舗の賜に有之候間茲に以書面謝辭申述べ併せて音聲を以て世に立つの大方諸君が必携の良劑たる事を證明致候也
明治四十年三月廿四日 新派俳優 菊池武成㊞

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新舘藥房

●有効保險前代未發秘傳奇術

全壹册正價郵税共金拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄大要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪必生法●臭汗治法●白髪を染る法●毛髪の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽凉にする法●雜紗類を汚さるインキ痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●水を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず[illegible]衰へざる法●拔毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の醜婆を二八の娘に變ずる法●腳氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盗人を見顯はす神術●女に〇れらるゝ藥法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を〇〇かす藥法●堅き女の氣を〇〇す藥法●陰〇を長大にする藥法●そばかす必治法●女を〇〇にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に〇れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘樂●即座に男精を増す法●毒蛇に驚いたる時腫ぬ特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法●即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を〇せしむる法●記憶力を増進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破り奇術●黑字夜光の奇術●老人終身職取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服劑新法●發丹の藥法●頭痛速治法●酒癖病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●脹滿を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●腋病の治法●月經の不順を治する法●病氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最[illegible]法●頭髪をまくする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の弱法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●小風除防の新法●痰痔の妙法●ん服・酒のしみたるる視のずして落す法●火傷斷治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髪豫防新法●土藏い鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●[illegible]小便を治する秘法●頭術を治する法●川だわを治する法●いぼを取る法●よさを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸痔治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により閨房の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●葡萄酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣をけする法●簡易洗顔新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）着金即刻送本す

專賣元 東京市神田區五軒町拾九番地 日新舘商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

ケーバ石鹸値上謹告

本品は全世界を通じて化粧品界の大立物と稱せられ今や各國如何なる片田舎と雖も愛用者を見るに至れり然る處今回本國より突然値上の電報來るに接し再三交渉の結果止を得ず



愈よ四十二年一月元旦より

壹個に付 大形 五錢 小形 參錢 の値上仕候

（理由） 生活程度の進みたる爲め本國職工賃錢非常に上りたり

東洋代理店

東京市日本橋橘町二丁目

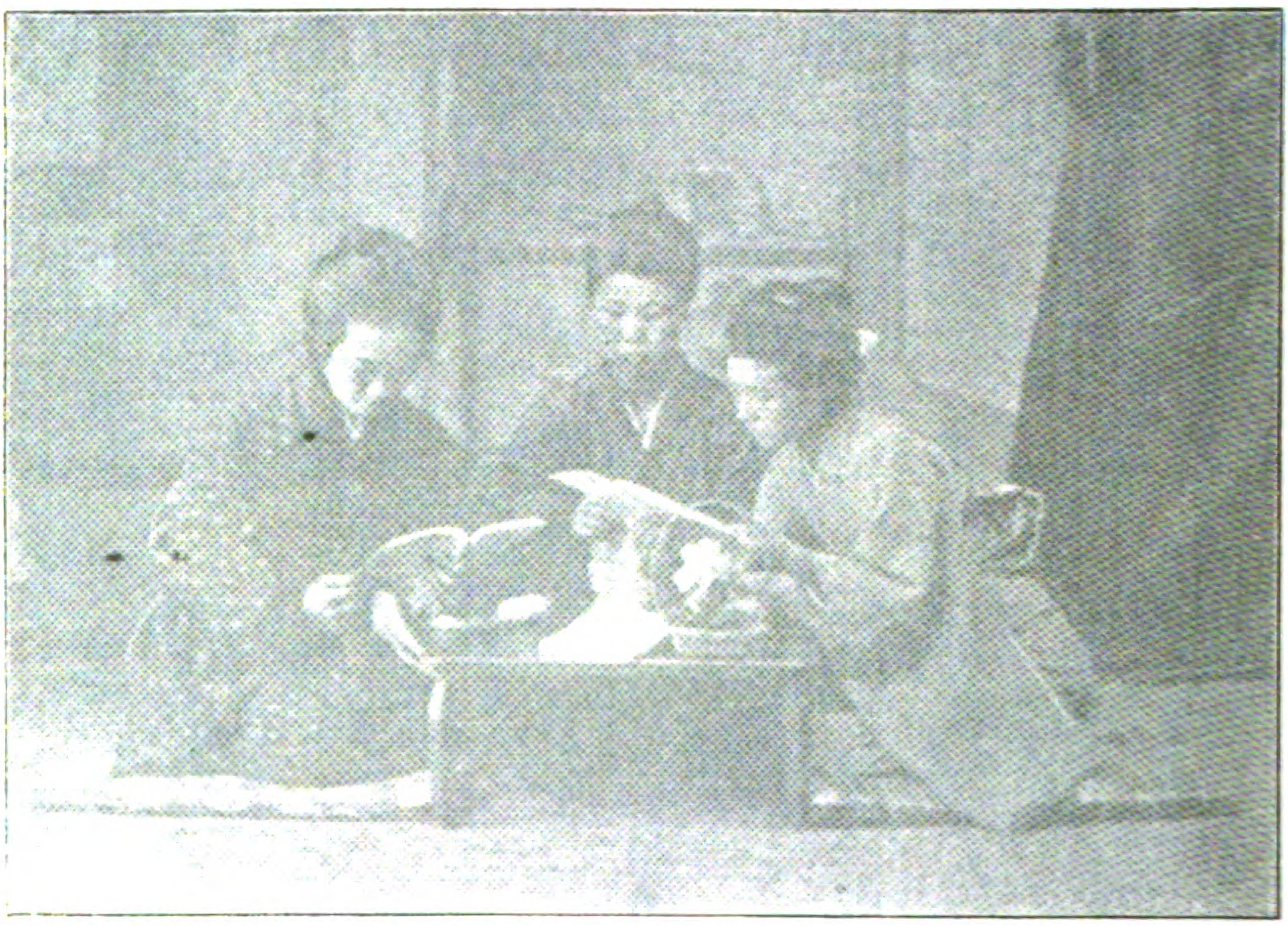
竹間商店

（B四）

友愛



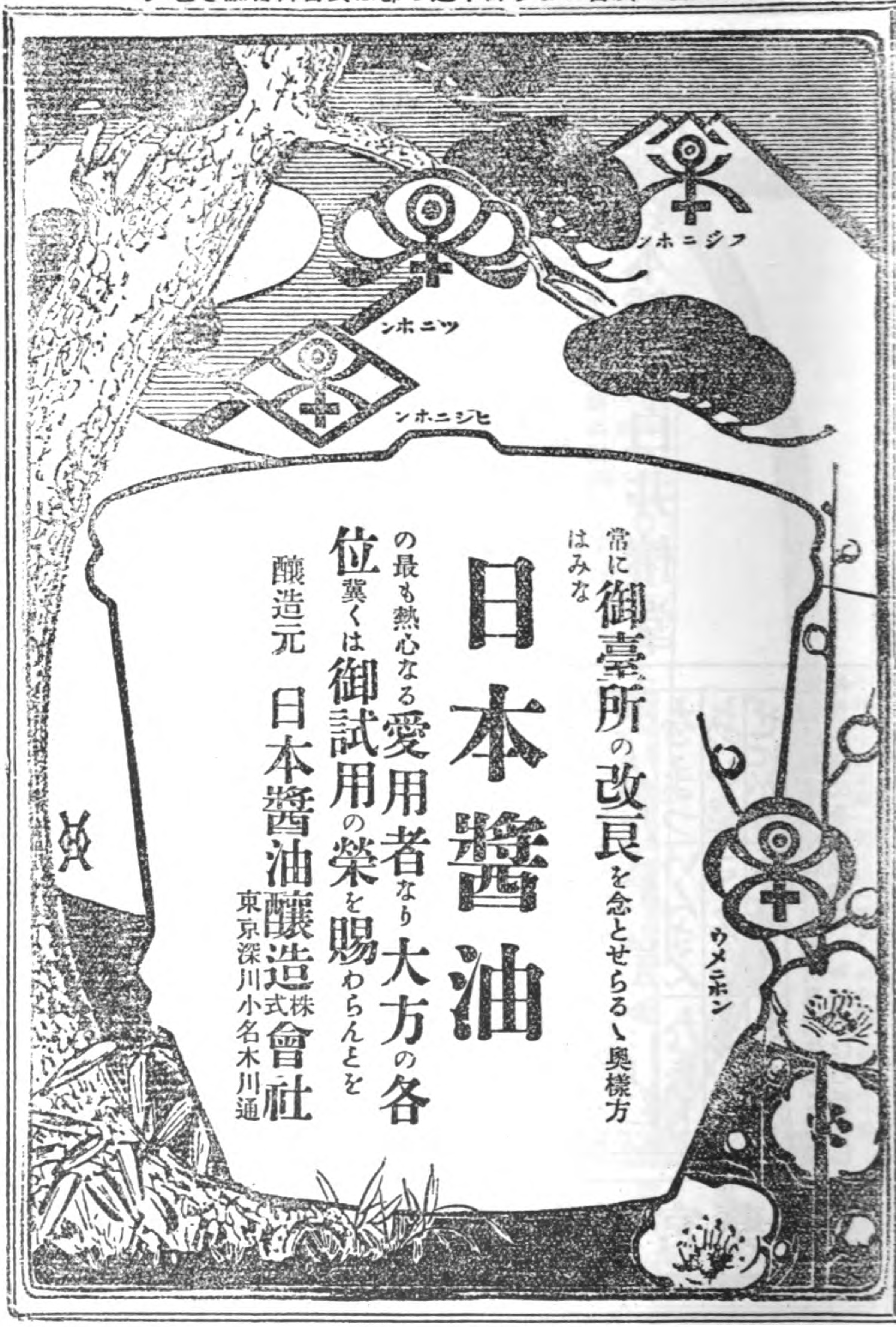
(紀伊) 杉名富美子　花岡てる子



(信濃) 白百合女　白薇女　白菫女

聲




フジニホン
ツニホン
ヒシニホン
ウメニホン
常に御臺所の改良を念とせらるゝ奥樣方
はみな
日本醬油
の最も熱心なる愛用者なり大方の各
位冀くは御試用の榮を賜わらんことを
釀造元　日本醬油釀造株式會社
東京深川小名木川通

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新年の贈答品

圖書と文房具

商品切手調進仕り候

金子文江・石川壽美・三好幸子共著 ◎家庭造花術全書 和裝全二册 正價一圓六十五錢 郵稅八錢

森本毅子著 ◎家庭編物全書 和裝全一册 正價八十錢 郵稅八錢

宇野彌太郎・渡邊鎌吉共著 ◎家庭西洋料理 洋裝全一册 正價九十五錢 郵稅八錢

赤堀峯翁・赤堀峯吉・赤堀菊子共著 ◎家庭十二ヶ月料理法 和裝全二册 正價壹圓 郵稅八錢

未杏庵櫻葉著 ◎實驗和洋菓子製造法 洋裝全一册 正價六十五錢 郵稅六錢

赤堀峯翁・赤堀峯吉・赤堀菊子共著 ◎即席惣菜料理 洋裝全一册 正價三十五錢 郵稅四錢

小野鵞堂編書 ◎增訂女子手紙文 和裝全一册 正價四十五錢 郵稅六錢

落合直文著 小野鵞堂書 ◎女子消息雁のゆきかひ 和裝全二册 正價九十錢 郵稅八錢

關根正直著 坂正臣著並書 ◎筆のゆきかひ 和裝全二册 正價九十錢 郵稅八錢

醫學博士大澤謙二著 ◎生理學上より見たる婦人の本分 和裝全一册 正價五十五錢 郵稅八錢

美麗なる外國製封筒

箱入壹個金六拾錢より金五圓迄

東京日本橋 **大倉書店** 振替貯金二三八番

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

新學期開始＝絶大新案通信教授

如何ほど文字の惡しき方でも

本會獨特の特許速成（實用新案特許 專賣特許）の方法にて練習すれば如何なる生來の惡筆にても僅少の時日にて先天的能書家と稱せらるゝ樣に上達する事機械的である之は特許の數字に依て遺憾無く說明されてある尙之迄教授したる會員の書蹟が如何に上達して居るかは會則に附してあるから御覽になれば分る事である

顧問 伯爵 東久世通禧閣下◎楷行草三體及假名文（細字とも）六ケ月卒業

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生及外講師大家數名

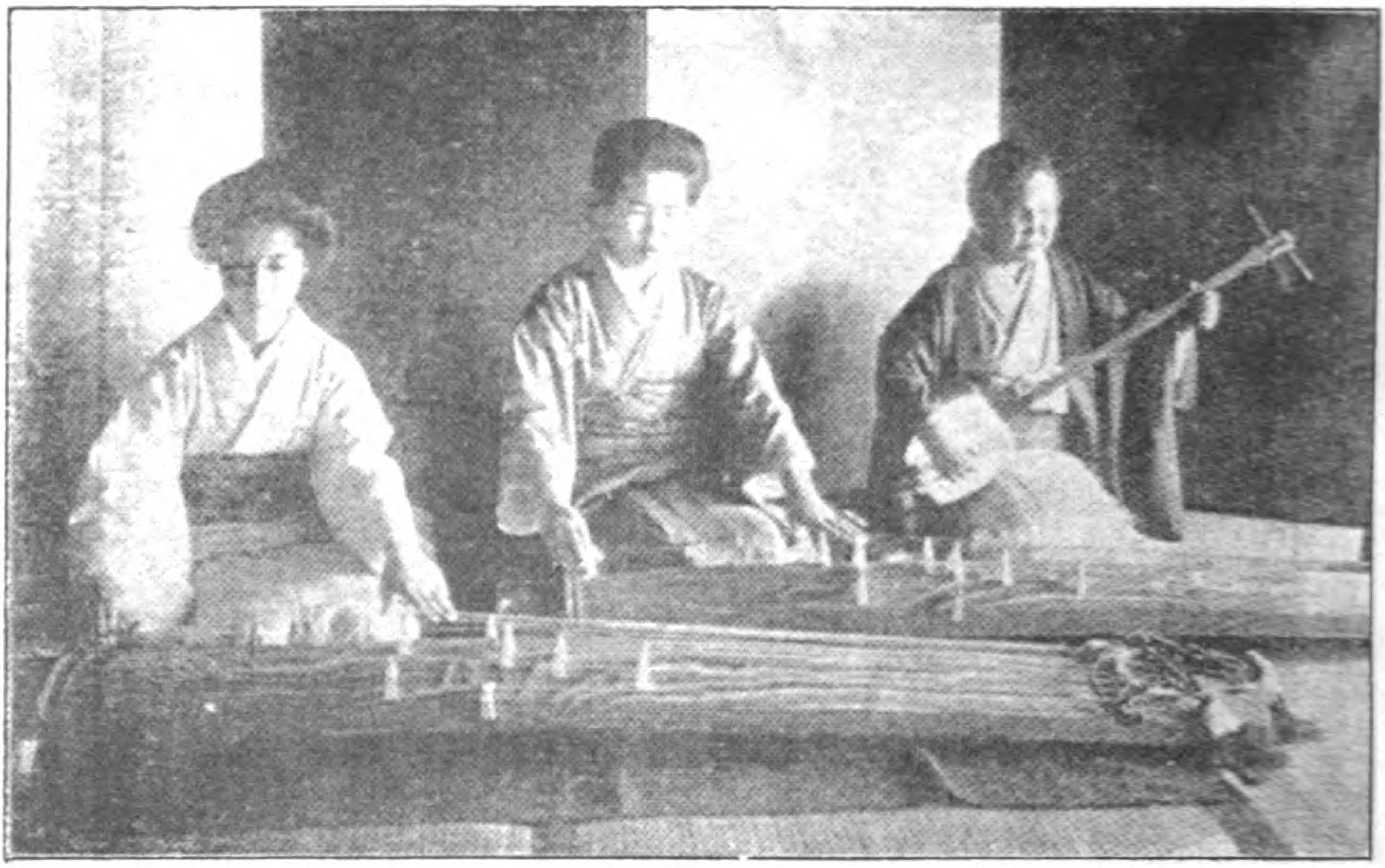
見本 詳細會則無料進呈 一

東京本郷森川町
電話下谷三〇一壹
帝國習字速成學會

東京婦人生活(一)



洋樂合奏（東京音樂院芙贊會員）



箏三絃合奏（古今調子）

（寫眞研究會主事 坪川辰雄撮影）

親睦



（千葉　伊橋ふく子寄贈）



（土佐　牧野たき子寄贈）


水おしろい
大和屋
本舗東京



（沼津　八代美代子寄）

沼津誌友

新春の遊樂



(かるた會)



「寫眞研究會主事　坪川辰雄撮影」

(初卯詣)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女學部新設

實用女學講義錄發行

▲本會は中學講義錄の發行に從ふと既に五ヶ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ヶ年半、此間に於て高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講説し圓滿なる主婦を作る事を目的とす。

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月女學雜誌『姫百合』を發行して會員に限り毎號無料進呈す『姫百合』は現代知名の女子教育家及び專門大家の訓話學説創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切なり。且つ會費極めて低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◎新學期開始‖至急入會者に限り入會金全免すべし◎

無料 見本つき規則 進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

恭賀新年

書籍雜誌 東海堂

卸賣專門
價格低廉
發送迅速

女子文壇特約販賣所

東京市京橋區尾張町二丁目
振替貯金口座第八六七番
●電信略號 荷印 ○カ 電話新橋二、〇一五

圖書出版
賣捌擴張
取扱親切

梅毒根治新劑

新出なり此二十錢皮膚病に對して奏效する消症かさ。しつ毒、かんそう。よこね。ようてい、そう。いど、痔核。らい、れき。ひふ。
等ぶらゐ。べんとく。ふしぶしのいたみ等一ならば如何なる難症にても即ちはいどく。
い特別製**誓つて根治**するこふ證すも從來の賣藥等百方手を盡せし者は
分にこ效治の効なし、して其の賣藥等と異なる也
速に本劑を試用し病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價特劑分壹圓拾錢武劑分貳圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

本劑は獨逸ドクトル一某氏多年の研究實驗を重ね効力ある最新發見の結果成れる物なれば現世紀に於ける唯一の根治特効藥
の第一ばい毒根治特効

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑一藥價送料共壹圓九拾錢郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スヒーゲル氏の發見に係る

男女**生殖機不能**即ち**陰萎病**。**腎虚神經衰弱**
遺精。夢精。早漏。過淫。元氣衰弱。老衰無力。生殖器萎縮。生殖機能障害。早老。精液稀薄。精液缺乏。不妊症。冷症。發育不全等に用ひ其効は
四劑乃至六劑にて難症は八九劑**可驚奇効**ある所謂新發見藥也
にて根治の目的を達し天下無比の**精力**
を**増進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試みよ世にありふれたる
奇効は實に一驚すべく其偉大なる特効は本劑の卓効に類するものなし
名ある醫師に就て承合せば明白也

奇効確證 美容新劑 やせる藥

定價一劑分（送料共）壹圓廿錢貳劑分（特別製）貳圓八拾錢九劑分（特製）九圓拾錢（前金即刻送藥す）

本劑（一名コードチリン錠）は學理上實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏ぶくれ、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質、多血質、脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

▲唯一無二 **痳病消渇の根治新藥**

りん病 痳疾

痳疾は最も進歩したる最新の痳病消渇治療秘藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌消毒力頗る强烈なる一新藥を主劑として**痳病消渇**の原因たるゴノコッケンを内服し滅殺する處方に基き製したる新藥にて**根治**を確證す
症は特劑重症（一劑）にて必ず根底より**滅殺**し新藥に付屬す
但し彼の普通洗滌劑の如き無効有害の粘膜を害する强烈なる品と異なり實効確實なる唯一の良藥なれば用藥者は一藥にて快癒を見る
それだけ藥價不廉なり定價壹圓五拾錢特別製貳圓拾錢
せよ（郵券代用は一割增しの事）

根治確證新發見藥 わきが臭

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病的改良根治新藥なり速に試み治癒を實驗せよ
根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢
但し輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢（前金即刻送藥す）

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共禿頭の病、はげの病、やけどの病、其他
及てまぎわの薄き人、はつぼうはげ口ひげの薄き人、其他毛の生ずべき所に毛なき人等に用ゆれば忍ち毛髮は
て毛のある所に毛なき人等は一個を用ゆれば忍ち毛髮は々
と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛は
藥とは其効力勿論同日に語るべきものにあらず實に天地月鼈の大差ある
に付杀に玉石混同視することと勿れ

藥價送料共特別製大瓶貳圓▲中瓶同廿錢上等壹圓廿錢

以上六藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

第貳拾六回年度報告

貸借對照表

借方負債ニ屬スル分

一株金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一諸積立金	二七九、一九二・二〇〇
一預金及保信金	五〇、三六七・四二一
一得意先勘定	一九六、九〇九・七三〇
一支拂手形及未拂金	七九四、四五七・三九五
一消費税金	一二、〇七九・四五〇
一前季繰越金	七〇、三〇一・六一四
合計金	三、四〇三、三〇七・八一〇

貸方資産ニ屬スル分

一新株未拂込金	五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一不動産器械及什器	一、〇三一、九八六・七〇三
一石炭需用品及消耗品在高	五八、四五五・五八二
一原料仕掛物及屑物在高	七一四、四七〇・八四五
一製品及製品送荷在高	三四五、六七五・三〇〇
一約定濟製品仕高	一二八、一五五・〇八〇
一未收入金及假拂金	五一三、〇四七・九九七
一職工貸金	三一、六一五・七〇五
一銀行當座預金及現金	一四、一八九・四〇九
一有價證券	二、五〇〇・〇〇〇
一當半季損失金	六三、二一一・四八九
合計金	三、四〇三、三〇七・八一〇

損益處分

金三十四萬九千九十二圓五十九錢八厘　當季總益金
金七萬三百一圓六十一錢四厘　前季繰越金
合計金四十一萬九千三百九十四圓廿一錢二厘
内
金四十一萬二千三百四圓八錢七厘　當季諸經費損失
差引金七千九十圓十二錢五厘　利益金
右次季へ繰越す
右之通り候也

明治四十一年十二月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本鉸之助
監査役　人見新助
監査役　金子良吉

追て監査役任期滿了の處何も再選重任せり

本誌大發展の曙光

第九卷 第壹號

秀才文壇

四十二年一月一日發行　改正 價一冊 金拾參錢　郵稅一錢五厘

口繪

△ロメヲ、アンド、ジュリヱット（原色寫眞）……フランククシー筆
△東宮殿下 同妃殿下 △英國現代の沙翁劇○カリントンとワルバートンの「シーザー」「ブルータス」○ロバートソンの「ハムレット」とエリオットの「オフィリア姬」△美髮か△勝利か
死か！△佛蘭西文明の名畫朝の日△雪中の松△錦帶橋

◎辛い芝居、苦い芝居……坪內逍遙
◎自然と人物と落想……後藤宙外
◎文壇の變移……夏目漱石
◎行はせる藝術と考へさせる藝術……島村抱月

新作小說

△銀行……小山內薰
△惡感……永井荷風

◎逃避者の文學……片上天弦

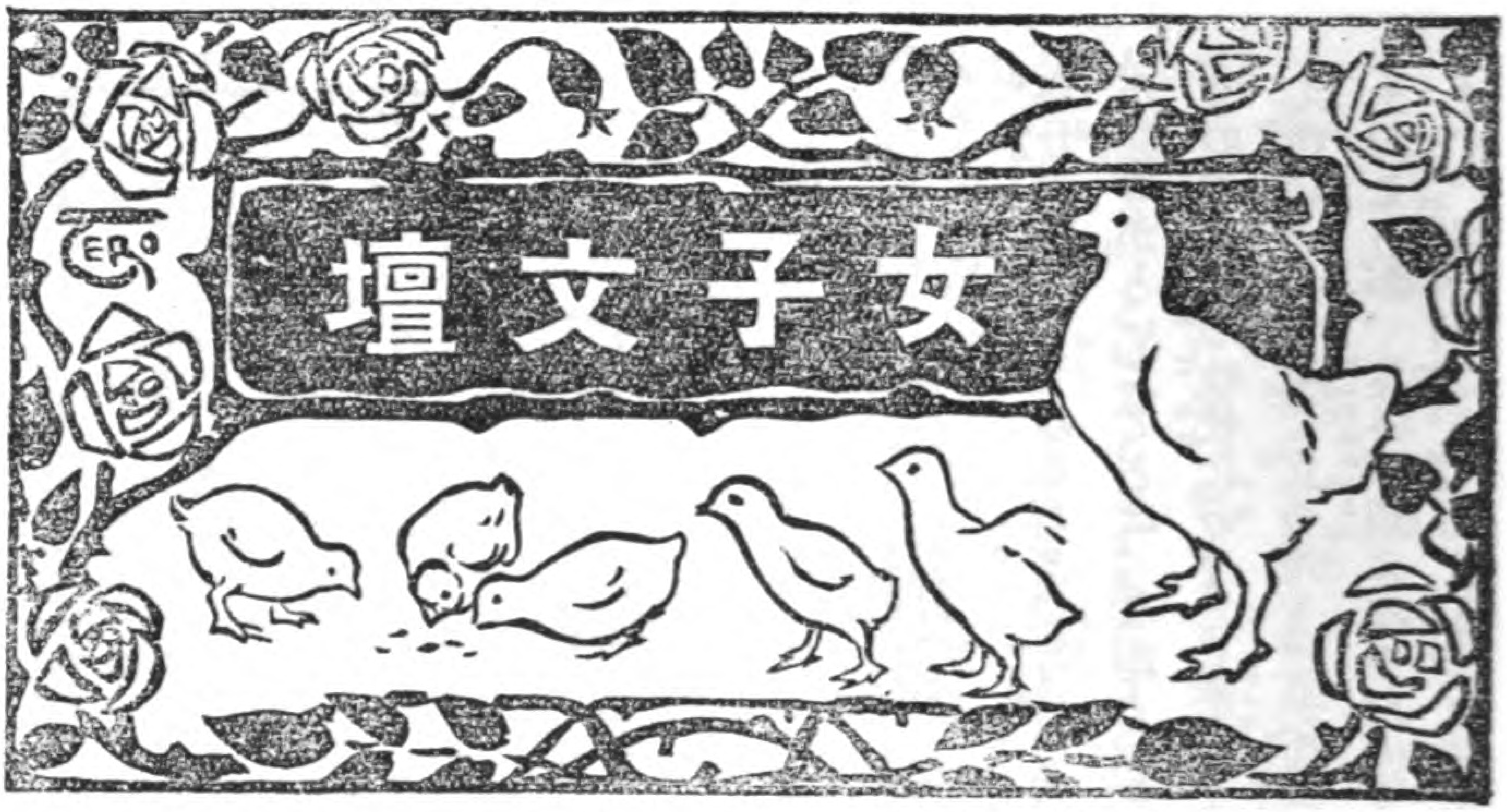
◎冬の森より……秋田雨雀
◎新詩……三木露風
◎二日間……人見東明
◎無題三篇……相馬御風
◎矛盾錄……小川未明
◎水壺……西村濤陰

◎英國文壇の現在……服部嘉香

▷青年文壇撰者◁

德田秋聲　寒川鼠骨　中島孤島　河井醉茗　人見東明　西村醉夢　尾上柴舟　岡本松濱　前田夕暮　小笠原虛舟　服部愿夫　小川未明　西村濤陰　矢部白雨

發行所　東京神田旅籠町一丁目　文光堂（振替口座一九五五）　賣捌　東京堂○北隆館　東海堂○至誠堂



第五年第壹號

明治四十二年一月一日發行

窪田通治

花咲かむ
夜ともおもひて
油添へてはともし火に
けるかな照し

與謝野寛

埜あかき
ゆうり栗うゐ
たわゝと
ゆたかに降りぬ
森のおわ[illegible]

佐々木信綱

木の芽ふく
南おもての
日あたりに
今日も來て啼く
名も知らぬ鳥

晶子

京の衆に
初音まゐろと家ごとに
鶯飼ひぬ愛宕の郡

尾上柴舟

草見れば
草をよろこび
鳥聞けば
鳥をよろこぶ
身と生きにけり

前田夕暮

人戀ふる血潮は
わかき男のみうけしや
春の
夜をひとりぬる

平野萬里

あけむ朝
うぐひすに似る聲をもて
さましまつらむ
うま寢しおはせ

金子薫園

かたくなに
とけぬ地の影暮くれど
いふかひもなく
空にうつりぬ



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第一　最初の目標は何か（まづ一人前の人となる事）

自分の現在してゐること、考へてゐることの、よいか悪いかといふことは、なか〳〵その場では分らぬもので、娘の時代にいや〳〵ながらしたことが、却て後に一生の役に立つたり、一生懸命に骨折つて覺えたことが、案外不用になつたりするもので御座います。私の學校時代は、已に十四五年の昔となり、また私の獨身時代は、殆ど十年の過去となりました。私は近頃になつて初めて、自分の學校時代または獨身時代の勉強のしかたや、修養の工夫のよかつた所また間違つてゐた所々に追々と本當に思ひ當るやうになりました。これより皆樣にお話しゝたいと思ふことはこの事で御座います。

動かぬ目標

若き方々の修養の土臺となるべきものは、何かといひますと、私は、まづ何よりも男女に關らず「一人前の人になる」といふことてあらうと思ひます。教師になる積りとか、奥さんになる積りとか、又自分の家は資産家だから何ても貴婦人になる稽古をしやうとかいふ樣な考を先に立てゝ居りますと、後に樣々の都合のために、教師になる積りてあつた人が奥さんになつたり、奥さんになる積りてあつた人が教師になつたり、年月のたつ中には、資産家も又昔のまゝてはないといふ樣なこともあり、始終不得手な事をして、生涯を不愉快に送る樣なもとにもなりませう。十五年前の學校友達が集つて、いつも不思議なものと話しあふのはこの事て御座ます。美くしい一人娘て、組中て一番先きに、婚禮するのはあの方だらうなどゝ話して居つた友達て、今も獨身て居る人もあり、組中の交際家と言はれた友達は、名もあり位地もある人に嫁ぎましたけれど、結婚して滿一ケ年目から、殆んど毎年お産をするといふ程の子福者て御座いますので、外出といふものは一切出來ず、昔の御轉婆の報いてせうなどゝいつてゐるお友達も御座います。私なども書くことには興味を以て居りましたけれど、別段にいまのやうな生涯を送らうなどゝは思ひもつかぬことてあつたので、十二三年の間てすらも、已にこのやうて御座います。この先二十年三十年と立つ間に、めい〳〵の生涯が又どのやうに變るかも知れません。本當に人のなりゆきといふものは、不思議なもので御座います。先生だの奥樣だの、貴婦人だのといふものを目標に修養するのは、後になつて不都合のものだといふことが知れませう。何ても「一人前の人になる」といふことを第一の土臺として修養しなければならぬといふのはこの爲めて御座います。

一人前の女の資格

ては、一人前の人といふのは、一體どんな人かとい

ふことになります。或人々はきまり通りに女學校に通つて、さうしてそれを卒業すれば、自然に一人前の婦人になるのだと思つてゐる向もあり、また女學校を卒業しただけでは、とても一人前ではない。挿花も音樂も裁縫も料理も一と息勉強しないではといふ人もあります。私は女學校を卒業して、挿花も音樂も料理も裁縫も、更にその上に何程勉強しても一人前の人には容易になれないやうにおもひます。それでは一體どの位勉強すればよいのかと不思議におもはるゝでありませうが、前程の勉強をした所で、それで直に一人前といふ事が出來ないと共に一人前の人になるのには、必ずしも女學校に行かなければならないといふ譯はありません。一人前の人になるとならぬとは、全くめい／＼の心掛け一つにあることで御座います。金團を拵へることを覺えても、七面鳥の料理が出來ても、お惣菜が出來なければ、一人前ではありません。床の間に挿花を[illegible]ることが出來ても、掃除を奇麗にすることを知らなければ一人前ではありません。最も實際的の意味に於て、女の一人前といふものは、自分自身で最も手輕に生活の出來る人をいふのであります。人手を借らずに生活することの出來る人で御座います。一人で生活する必要があつたなら、女中でも、裁縫師でも、または學校の先生でも、職業は何でも構ひません、兎に角何をしてゞも獨力で暮して行くだけの自信と實力をもつてゐること、さうしてまた自分を庇つてくれる人だの、世話を燒いてくれる人だの、着物を縫つてくれる人、髮を結つてくれる人、おつくりをしてくれる人だのと、自分の身のまはりに、樣々の人がなければ、生活することが出來ないといふやうな、厄介なおつ苦うな身躰でなく、身一つで何所に行つても、安心してきまりよく居ることの出來る人を、まづ／＼一番手近な標準に於ての、一人前の女といふことが出來ると思ひます。

普通一般の家の娘はいふまでもなく、どんな金持の娘でも、位地ある人の子供でも、一人前の資格を備へた立派な人にならうといふのには、必ず初めにこの目標に向つて進み、これ丈けの修養が充分に出來た所で

それを土臺にその上に種々の建築を始めねばなりません。前に云つたやうな最も手近な最初の一人前の資格を得ることは、これを建築に譬るなれば、丁度土臺に當ります。大きい家小さい家、平家、二階だて、宮殿も茅屋もありますけれど、どんな家でも一番初めに土臺を据えてその上に様々の細工をするのです、若しも土臺を置かずに、家をたてたなら、形だけは何程立派に出來上つても、少しの風にも少しの雨にも忽ち崩れてしまふてありませう。女學校を卒業して、音樂も英語も、挿花も裁縫も稽古はしても前に云つた手近な一人前のことが出來てゐないなら、土臺のない家と一般その人の身の上といふものは如何にも危いもので御座います。

危い許りが人生でない

危いとはドンナに危いかと云ひますと、さし當り誰の考にても浮むことは、金があつてもその金はいつなくなることがあるかも知れず、夫があつても何時寡婦にならぬとも限らぬといふやうなことでありませう。成程それも最もで御座います。金持の家庭に育つた娘が年をとつてからお針女におちぶれたり、早く寡婦になつて苦勞する人も決して少くはありません。私共は勿論このやうな場合の用意の爲めにも、前に云つたやうな一人前の人となつて置く必要がありませう。併しながら一人前になることが、こういふ場合のためにのみ必要でありますならば、世間には一生富貴で終る人もあり、早く寡婦にならない人は猶更澤山に御座います。折角骨折つて、前にいつた様な一人前の修養をしても、そういふ場合には、骨折損といふ事になりませう。或は骨折り損になるかもしれないといふやうなものならば、それは考へものでして、いるかいらぬかわからぬことに大切な時間と勞力を費うのは惜しいことでありますゆゑ、しかしよく考へて見ますると、私共の一人前になつて居らなければならない必要は、決して夫に分れたり、貧乏した時のためばかりではありません。

こんな例がございます

私の知人の中にかういふ人が御座います。今はもう三四人の子供の母となつて居りますが、まだ其の人の娘の頃に、一の縁談がありました。兩親も自分も兼て先方の人柄を深く敬慕して居りましたから、この上もない仕合とおもひましたが、困つたことには、その人には、嚴しい母親一人の外は、家も屋敷も財産もなく當人も學校を出たばかりの身の上でありますゆゑ、月給もまだ〳〵ホンの少しばかりで御座います。自分はまた何の不自由もない家に生れて、祖母や兩親の寵愛を身一つに集めてゐる娘様そだち、その様な所に嫁に行つて水仕の業は勿論出來ず、兩親は女中を使つて暮せる位の財産は分けてやるといふ考て居りましたが、先方ては前以て私共のやうな貧乏な家に來て下さつて、身分相應に暮して下さるお心ならばといふのてあつて、暗に持參金や、實家の世話になるやうなことは御免蒙るといふ心を洩してあるので御座います。父親はそれに就て今の世に珍らしいと、ひどくその男らしき心意氣に感心して、出來ないながらも向ふに行つて一生懸命、女中の仕事までもして見る氣はないかと云つてくれました。併し母親は、良人一人なら、それも出來やうと思ふけれど、人並み以上に嚴しい姑の目の前て熟れない仕事を覺束なげにしてゐるならば、氣にいらぬのは知れた話て、母子夫婦の間がそのために氣まづくなるやうては取り返しがつかないからといふ考て御座いました。それもさうだと思はれますし、自分の考もまだ定まらずにゐる中に、また一つの申込みがありました。それは相應に資産のある家の總領息子て、ずぬけて秀れた人物といふ譯てはありませぬけれど、充分なる敎育をうけ、至つて穏かな人柄てありました。父親一人は前の人物のいかにも惜しいといふ所から、容易に思ひ切らぬのてありましたが、祖母も母もまた親戚なども、後の申込みこそ、此方の柄にシツクリ合つてゐると申しますので、遂に自分もその氣になりました。その後十年の間に、前の男子は名聲隆々として

あがり、金こそはありますまいが、天晴れ當世の名士となりました。縁づいた方の家は、矢張引續き立派に暮しては居りますが、或時この婦人は「あの方が何程立派におなりになつても、少しも私は此家に來たことをくやみません。私は今も矢張私のやうなものゝためには、あゝいふ晴々しい家よりは、このやうな靜なキマリきつた家の方が、ドンナに仕合せか知れないと思ふからで御座います。併し唯一つ若しも自分が琴だの花だのといふやうな稽古をする前に、人間一人前のことが出來てゐたなら、恐れずに先方の所望に應ずることが出來、共に骨折つて、日の出の勢でたちのぼる良人の名聲を矢張共々喜ぶことの出來る、張合のある身の上にもなれたのにと思ひますと、自分の不甲斐ないことが恨めしいと思ひます。そうすると人間一人前のことの出來てゐないために損をするのは、決して一生一度の大事ばかりでなく、このやうに無事太平な家に居つても、私は毎日そのためにドンナに不愉快な目をしてゐるか知れません。女中は幾人でもいる丈け使ふことが出來ますけれど、大勢の女中を使ふといふことは決して樂なこととてはありません。さうして人手が大勢になればなる程、物事がます／＼自分の思ふ通りに行かないもので御座います。若しも私に家中の日常の仕事が苦まずに出來る人間でありましたなら、自分の身體を動かして、一人でも雇人をへらしたならば、ドンナによいかと思ひます。自分が何も出來ないで、さうして人を使ふ程苦しいことはありません。併し今は苦しいとは云ふものゝ、かうして人を使ふ事が出來ます故まだ／＼仕合せてありますけれど、若も一朝人を使ふ事も出來ない身分になつたなら、私の樣なものはどうしてよいものかなど〻おもひますと本當に心細う御座います」と云はれた事が御座います。

安心して生涯を送る法

まづ一人前の人になるといふ事が、どんな身分の人にても大切であるといふ譯がお分りになつたてありませう。自分に一人前の事が出來て居ると、いつても心

強く快活に暮すことが出來ますが、若しさうでなかつた日には、不自由のない境遇に居ながらも、一生の間、おちぶれた時のことか、不如意になつた時のことなど考へて見ると、獨りて心細くなるといふのは眞に事實てありませう。況んやこの婦人程の資産家てもなくして、而も一人前のことが出來なかつたならどうてせうか。

どうぞ勉强ざかりの皆樣には、めい〳〵に自分は最も實際的に手近い意味に於ても、果して一人前の人間てあらうか、自活は出來るか、自分の身のまわりに少しも人手を煩はさずに、キマリよく生活が出來るものだらうかと考へて頂きたいと思ひます。いくら學校がよく出來ても御飯を炊く事を知らない方、一枚の着物に幾日も〳〵かゝらなければ出來ない方は、決して安心が出來ません。實は私自身も自分の好む方にのみ骨折つて、人間の最も手近い一人前の修養を怠つたものて今に樣々の不便を忍ばねばならず、充分後悔してゐるものゝ一人てあります故、皆樣にも切にこの事を考へて頂きたいとおもひます。

このやうに申しましたなら、成程それもさうかと思ふけれども、併し學校が忙はしいので、そんなに種々の事を習ふ暇がないから困るとお思になる方もありませう。御最もとおもひます故、次號には最も手近き意味の一人前になるのにはどのやうな方法で修養したものかといふことに就て記したいとおもひます。

●●●記者曰、右羽仁夫人のお話は女子の修學時代から嫁入前までの心掛を最も適切に、最も有益に、而して新しい意見を發表されることになつて居りますから、毎號一般婦女子の爲め重要なる讀物として御覽を願ひます。



近代女性の自覺

近頃の女子が能く謂ふ自覺に就いて左記六氏の談話を聴く事を得た。晩近婦人問題は啻に婦人丈けの間に止まらず一般社會の問題となつて居るが、矢張り婦人其人に取つては猶ほ當の問題である。本誌は這の消息を解するが故に飽くまでゝも諸種の衷情あるところを酌し極めて眞面目に各家の意見を叩いた、問ひ答へも固くるし過ぎたかも知れないが、座興半分の談話とは自ら違つて居る事を御了承願ひたい。併せて左の諸家が談話の爲に百忙中の時を割かれた御厚情を謝する次第である。且談話筆記に於ける一切の文責は記者に在ることを茲にお斷りして置きます。

大人格の出現を要する

木下尚江

どうも是れは大問題で解决などと云ふことは容易では無い。一體吾邦に於て斯かる重要なる人生問題に就いて指導開發する白髮の思想家の無きことは非常な恨事であつて、若し其れ等の人が豊富なる經驗と高遠なる識見に依る意見を發表して聞かさるれば幸ひと思はるゝが、如何にせん老大家は保守的固陋の見多く、さりとて若手の人に至ては徒らに西洋の直譯をやる位ひな事しか出來て居ない。

自分は斯かる邊僻の地に居て、若き婦人の現狀なぞも分らないけれ共、絕えず此現代の潮流に動搖して居るとせば適宜の指導は必要であらうと思はれる、しかし自分は此問題を唯單に女性の自覺として解したく無い、實は是れ個人の自覺と云ふべきである。其理由は吾邦に於いて維新の革命にて封建制度と云ふ風呂敷が裂けて仕舞つた、それに就いては其風呂敷に包まれて居た個人個人が蜘蛛の子の如く八方に散つた、それて從來の家族主義と云ふものにも多大の影響を及ぼした、殊に其尤も慘憺な目に遭遇したものが士族と云ふ

一階級で、これは昔は大名に抱へられて祿を食み唯劍を擊ち文を學ぶ位な事をする外生活に就いての屈托はまあ無かつた、あるにしても其れは一家の戸主丈けて二男三男に於いては那麼事は素より無いまして娘や何かに於てをやてある、これが此革新に依つて破れたから各自が獨立して吳れなければ戸主たるものゝ負擔は實に堪まらなくなつた、かうなると共に從來の服從道德など云ふものも亦自から破れざるを得なくなつたので各個人〳〵が獨立對等と云ふ位置にある事になつた、かゝる制度の激變が先づ影響を受けたる男子をして自覺せしめたが、時代の變遷が又女子にも遷るの止むを得ない事になつたので、詰り其自覺が男女其時の遲速が有つたに過ぎないので猶ほ今後もこの舊習の惰力が薄らげば薄らぐ丈け個人の自覺が强くならうと思はれる。茲を以て云へば進化觀から云つても人文の發達から云つても是れは必然免れない勢と云はねばならないのだ。

其れから恁かる生存の要求を自覺したに就いては男女の競爭と云ふものが起きて來た、女子の職業など云ふものが出來て漸々男子の領分を蠶食して行く、事實男子は女子に負ける事が多い、是れは實に怪しからない現象で男女其者を同じ出發點に立たしむれば決して那麼事は無い筈だが今日事實さう云ふ傾向が見える此女子の職業と云ふ事も必然の勢であらうが、人間生存の要求の根底には衣食の慾と猶一方には生慾問題がある、是れが亦實に容易ならない問題だが、自分の見るところでは若き婦人の自覺なるものは自然と結婚を忌避する狀態に趨らうと思はれる、是れも考へて見ると何ても無い事で、嘗て男子が感じたる如き自覺を後れ馳せに感じたのに外は無い、一體今日老人の人等が靑年男女の風儀などを見て不品行だなどと苦々しく云ふけれ共、僕思ふに男子の不品行と云ふ事は今も昔も變りは無いのだらうと思ふ、其れは老人に聞いてもわかるが只此の不品行の相手が變つた丈けの事に過ぎない、昔し遊廓に出入してそれら狹斜の間に喃々應接は實に權謀術數を盡し扨ては又技巧の妙を極めたもので

あつた、一面から見れば是れは實に華麗なものだが、又内心それらの相手たる者の心持は一代の全盛も惡くすれば卒都婆小町の果てであると果敢なむで哀痛を感じたものと思はれる、是れが今は自由獨立の態度を以て直ちに青年男女間に行はるゝ事になつた、自分は其事を必ずしも肉體的關係と云ふのでは無く、精神的?――と云ふのも變だが、先づ或は詩や歌のやりとりをするとか云ふわけて實に表面華やかな外交官の夜會てゝもある樣に言葉と云ひ態度と云ひ派手をつくすのだが、其愛情はもはや權略術數乃至技巧の上に移つて仕舞つて居る、故に婦人は



一面この自由戀愛を願つて結婚と云ふ鑄型に入ることを忌避しながら、猶ほ不斷に不安を感じて居るものであらうと思はれる、斯樣な事は實に人生の禍ひに相違ない、さればとて封建の昔しにかへる事が宜いかと云ふに其れはさうては無い、かの時は只服從と云ふものに壓伏されて居たからて不品行と云ひ愛の純眞と云ひ共に其價値を問ふ事が出來ないのてある、故に自分はどれが宜いどれが惡いと云ふ事は云へないと思ふ、是れを云ふべき標準が定まらないから、たまく老人連が云ふは古しへの舊道徳を以て云ふのだけれ共左樣のものは今や根底から壞れて仕舞つて居るのだから我

く々が又破れ風呂敷にかへる事は出來ないのだ、是れに高き理想標準を與へ、此不安を救ふことは律法では駄目、是非共大人格の出現、わけても宗教家が天にまで屆く呼號に待たねばならぬ云々。

さうは人情が許さない

農學博士
法學博士　新渡戸稲造

良妻賢母は素より可い事で、之に反對する者があらうとも思はれない、しかし婦人の數は何國の統計を見ても文明と共に增加する傾きがある、かうなると日本の如く容易に離緣の行はるゝ國に在ては食ひはぐれの女が澤山出來て來る、內緣の妻等はどうせ長持すべき關係でない、自活の女はますく增加して來らねばならぬ事になる、勢ひ良妻賢母ばかりを理想として說く事は出來ない、一方を怠れば飛んでも無い事になる無論其ればかりを說いて他を搆はぬ人は無からうが、今日よりも一層敎ふる必要は迫まつて居る。

此間も或る新聞記者が來て、文部省では良妻賢母一點張り耶蘇敎の學校にては獨身生活一點張りだと云つた、予は文部省が良妻賢母一點張りとは思はない、又耶蘇敎が獨身奬勵とも信じない、這は聞く人が間違つて居るとは思ふが、併し云つた人も相當敎育ある人間違へても正反對では無く幾分か據りどころある事と思はれる、假に双方の說が分れて居ると見るも正反對にして相容れざる議論ぢや無い、即ち敵視すべからず、相補ひ相互俟まりあつて完全なる社會組織を爲すものである。文部の當局者が獨身生活を誤まりの樣に見るけれど、よしや其樣な事を奬勵する共人情が許さない、假りに法律で命令しても行はれまい、法律以外の人生に關する事だから、女性の性能を撥無するとか何とか無い限りは心配する事は無い。

併し單に議論として云つても賢妻良母に反すると云ふので無くして賢妻良母のみで解き得なかつた事を說く殉に結搆な敎へである。女必ず人の妻たらねばならぬとなると今日の習慣では實に見るに堪へない腐れ緣

て繋がれて居らねばならぬ事になる。日々の新聞を見ても其虐待に堪へ切れずして自殺する者の數は實に多い、加之現はれざる者が更に幾萬人あるかも知れない、厭々ながら不本意ながら殘酷なる夫に仕ふる事を良妻と稱して居る、よしヒステリーに罹らずとも朝夕不快の念を以て脩めて居る其家庭は如何、更に其間に育てらるゝ子供に及ぶ影響は云ふまでもない、恁うなつては如何に賢母になり度くとも賢母を作る境遇が無くなるのだ、實に憫むべきの至りだ。

其れから又夫が亡くなつたとする、其日から途方に暮れて如何ともしがたく路頭に迷へる婦人が何萬人あるか。順境の時は良妻賢母一點張りも猶可しとするも人間生まれて逆境に立つの覺悟を要する、是れを思へば寧ろ獨身でも通り通す丈けの備へは必要である、獨身を奬勵するのでは無いが何時獨身になつても差支の無い準備が無ければならぬ。

婦人の爲すべき事業は隨分ある、かの慈善事業など男子には不相應な仕事だ。それから女囚を改悛せしむるに今では男の教誨師が兎角やつて居るが、那れなぞも婦人が衷心から働くべきだらう、又手近な處で下宿の婆の改良が必要だ、現今學生の腐敗の導火はどうも下劣な下宿の婆にある、教養あり見識ある人は振つて一生を此間に貢献したらば面白からう、爾うして自分の産むだ子の賢母とならずとも廣く世の子供等の賢母となるが宜い、從來の社會が感じなかつたから婦人其者に教育もさせず習慣も違はなかつたか、是れからさうでないから物躰も主格も違つて來ねばならぬ、つまり婦人を何處までも開放して獨立せしむると同時に社會も其れ〴〵道を拓かねばならぬ。

それ〴〵道を拓いて遣らねばならぬ

三輪田高等女學校教頭　三輪田元道

絶對の意味より云はゞ、教育にしろ學問にしろ決して惡いもので無い事は言を待たぬ。しかし或は多學の結果思想の統一を缺き、畸人を以て目され世に容れら

れぬ者となる、是れ學問の弊と云ひ得べく、教育も程度を誤まれば却て惡しき影響を蒙る事がある、此故に教育は人生の幸福と離れざる筈のもので無ければならぬ。此點よりして女子の高等教育を危ぶむ論が起つて此問題に就いては北米を中心として、次ては英、獨、伊、典等て未だに何等の解決を見ない、我邦も亦此渦中に投じて比較的議論が盛んである。

處で其利害得失は別として、女子が高等教育を受くる時は如何の變化を生ずるかと云ふに、從來我邦にては支那傳來の無智蒙昧を御する秘術を以て治めて來た德川時代の政治が其れて、朱子派の學を尙び所謂依らしめ知らしめずして成功したものである。今日から云はゞ國民を愚にしたと云ふ批難もあらうが、或は其れが當人に取つて幸福だつたかも知れない、字を知るは憂患の初めて、學問した爲め苦しい目をするならば、結果から見て愚になつて居る方が得策だつたかも知れぬ。斯の如き寡人専制を少にして一家に就いて見るも亦同樣て、一家の妻女にさまでの教育を加へずに主人の命の儘唯々諾々として服從せしむると云ふ事て、自分は何事をも知らず夫に依りて一切の運命を保たれ、自己の心を勞せずして安逸を得るのだから、婦人から主觀的に考ふれば尤も幸福かも知れぬ。しかし又一面より考ふるに人生が長く事なきが必ずしも幸福ではない「汝自身を知れ」と云ひし古聖の語の如く、人間の本領を自覺し、我と云ふものゝ存在を自らも認め人にも認められ、快苦共に意識する事にならねばならぬ、快苦共に感覺する事に依りて人間らしき生活の繼續を覺り幸福なりと知る時即ち醉生夢死に等しき昆虫生活を離れたものである。朝に道を聞いて夕に死すとも可して、人の人たる所以は人格の自覺と云ふ事に歸着する。此點より云はゝ知り得る丈け知り修養の出來る丈け一日でも長く一字でも多く教育を受けたものが幸福である。

以上極端と極端の傾向を比較して見ると、各々一理はあるけれ共、其一部に偏する事は中庸の道では無い中庸の道より云はゞ女子は事情の許す限りに於いて教

育を受くべき事男子と擇ぶところ無くして可なるも、其程度を超ゆる時は即ち却て教育の中毒を來すとも云ひ得る、兎も角も今日は過渡時代である、此際の女子は辛き經驗を覺悟せねばならぬ、何となれば相當なる學殖經驗に依り一個の人格が出來て嫁いた後も、猶ほ男子の同情が得られない、婦人が立憲的態度で居るにもかゝはらず男子は依然君主專制主義てあるから此間の不調和より有らゆる不滿足が生ずる。其れて嫁いて苦勞するよりも職業に就いて獨立しやうと云ふ事になる、此結婚を忌む傾向も追々米佛諸國に多くなつたが、今に日本も其轍を踏む



かも知れない、さて職業として如何なる職業を求め、幾何なる方面に處世して宜いか、婦人の職業としては教員、或は會社の事務員遞信省の女子判任官なぞて十分の地位が無いが、是れ等は教育の進歩に伴ひて要求されて來やうと思ふ。

要するに婦人の教育學問が進むと共に婦人の精神が一變して來る、其處へ以てゝ外部の狀態が依然として舊なる時は、種々不調和を生じ無秩序混亂の時代が來る、現に事實問題は逐次に現はれて來る、例へば下婢問題なぞが左樣て昔しは主從の關係で有つたが今はたゞ契約關係である、それて一方は主從と心得他方は契約と心得て爰に

意志の疏通を妨げ調和を欠くのである、是れは唯一面に過ぎないが凡て斯様な實際問題がある。
歐州に於ける婦人問題は十八世紀の末から十九世紀を通じ二十世紀の今日猶ほ下火にならない、近來我邦もます／＼盛んであるが、殷鑑遠からず、教育の適度の制限婦人の地位等を研究して未發に解決の必要が有らう、歐州で慘憺たる流血後に出來た憲法は、幸にも我邦にては陛下の大御心に依りて和氣藹々の間に樹てられた、其れと同じく女子教育問題も大なる葛籐や軋轢無くして解決したいと思ふ。
一躰私は實際に當つては、絶對そのもの丶如何に係はらず、其時代善とか或は日本善とか云ふ方針を立て丶推移發展せしむべきものと思ふ、婦人の位置、職業の如きも常に教育と一致せしめねばならぬ、それ丈け教育が進めば社會がそれ／＼道を拓いて遣らねばならぬ、其れをしないで依然舊習を以て女子に對するから煩悶も生じて來るのである。
尤も女子は母胎たるべき事は根本に置くので、教育に就いて事情の許す限りと云ふのも金力能力情質の具備は云ふまでも無い事である、其他特別の天才的教育の如きは別になつて居る、どうしても生産力ある國民の母胎たるべきは望ましき事であるが、是れと共に地位を高める事にも心掛けねばならぬ。

何處までも同等を自覺して

早稻田大學講師　安部磯雄

從來女子が男子に對し、非常に優劣の懸隔あるもの丶如く考へて居たのが、漸次に進むで同等の位置を自覺したと云ふ事は、時の勢の自から然らしめたるもので、元來女子と男子とは異りある筈のものでは無いのである。然るに猶ほ其獨立を妨げ、舊習の取扱を爲すが故に女子に取て煩悶も生じ來るのだらうと思ひます。
　女子の見方如何に因て其教育にしても或は女子に男子と同樣の學問は要らない、唯一家の主婦を作らば宜

いと云ふ意見がある、又一方には男子と變らず飽くまて受け得らるゝものならば授くべきものだと云ふ意見が出來た、つまり家庭的のものとして敎育するか人間として敎育するかと云ふ事になる。此解決は事實を見れば宜いので、いくら保守的の事を言つても時の勢が其れては立て行かぬ、丁度雞が家鴨の卵を抱えて自分の子と心得て居たが孵化した家鴨はドシ〳〵水に飛込む、其れを彼是危む間にも世界の大勢はズン〳〵進むて行く、今日歐米の實際を見ると、婦人の爲めの特設と云つては無いが、婦人は男子と同等の大學に入て男子同樣の敎授を受けて居る、しかし之は如何にも少數なるが故に一般に當て嵌まらないと云ふ反對が有るかも知れないが、さう言へば男子も亦然りて、日本の帝國大學にしろ西洋の方のにしろ高等敎育を受くるは何時も少數の才能ある者に限られて居る、然らば此結論も亦男女共通であつて、國家は其機會を共に與へねばならぬ、即ち男女を區別することは可笑しく思はるゝのである。て、婦人の自覺と云ふならば其一部は慥かに此處から來るので、丁度昔し平民の自覺が彼れも人也我も人也と云ふ處から來れる如く、婦人の男子に對する考へも同じく早晩斯くあるべきて、私共は寧ろ之を喜ぶ者であります。

勿論之と共に煩悶は生ずる、其れは前述せる敎育を受くるに就いての煩悶て、或は敎育を受くる資產の無い者とか、資產が有つても親が頑眠で許さないとか、特に學才のある人が其れを伸す遑なく非常に若くして好まぬ結婚を强ゐらるゝとか云ふ塲合には立處に此煩悶が生ずる。しかし亦爰に注意すべきは此煩悶は獨り女子に限るので無く男子も亦然りて、今日學問無ければ世に立つ事が出來ぬと知つては如何にして學問しやうかと悶えるので、無智蒙昧の者に煩悶は無いから、此煩悶も亦女子に取つて寧ろ喜ぶべく、斯くてこそ男子と步調を共にする事が出來るのである。

次は生活問題ですが、是れが考へて見ると矢張り新舊思想の衝突を免れない、之に就いても多數の女子敎育家が、婦人は男子に養はれて行くもの故婦人に職業

を授くる必要なしと云つて居る。社會全軆の上から見ても婦人が職業に就く事を何となく下品なものと心得子供無き夫婦などの共稼ぎと言ふ事も、男子から云ふと意氣地なしと見る樣にして有る、兎に角不必要に云ふけれ共、之も矢張り議論と實際と一致せず社會は事實に於いて婦人の職業を要求して居るので、今日では啻に小學教師のみならず、或は會社と云ひ或は鐵道と云ひ、漸次に男子の職業範圍を蠶食するに至つた、其れて恁う云う事は將來宜ろしく無いなぞと憂へる人があるが、惟ふにそれは愚論です。此議論は男女の議論よりも經濟の問題で、同一の仕事をして賃金が廉ければ誰れだつて其廉い方を求める、現今の如く女子の賃金が男子の賃金よりも廉き以上はいくら防遏せんとするも其領を冒す事は必然である、一例をあげると丁度先般米國であつた日本勞働者排斥の樣な者で其國民は愛國心から排斥する、是れは尤もだが矢張り其資本主はお構ひなく容れんとして居るので、さうなれば愛國心も何もあるものでは無い、是と同じく經濟上の趨勢から起つた事を今更ら婦人の爲めにならない、家庭の爲めにならないなぞと議論を出して來ても何にもならない實に迂濶な事である。事實は此通りでありますが、自分の之に對する意見は婦人の職業の如きは決して差支は無い、將來ます／＼盛んになるべき事を望む、さうなれば社會全軆の上は兎も角、婦人の爲めには宜い、何となれば婦人が自活の途を持たない以上は男子の侮辱に對して防ぐ事が出來ぬからである、男女同等などと云つても其自活に於いて獨立しない限りは駄目である、婦人の開放に就いて保障を與へる事が出來ない。

凡そ今日の如く婦人は厭ても應ても結婚せねばならぬと云ふ考へが不可ないので、結婚しても可しせぬても可しと云ふ考、罷り間違へば自活と云ふ考へを平素から持せて置かねばならぬ。其處で愈々婦人が職業に就くと云ふ事になると、今日男子と同樣の煩悶を感じて來る、結婚しなければならぬと考へて居る時に生活上の煩悶は無い、つまり食はして貰へば宜いのだから、しかし自活となれば男子同樣の煩悶を感ぜざるを得な

くなる、私共は隨分前から生活難を稱へて居る、社會の一部の者が困まつて居る事は夙くから分つて居た、近頃は漸く我邦の文學に此色彩が現はれて來たと思ふ、例へば小説にしても數年前ならば貴族の生活を描くとか、平民にしても男女の戀愛を寫すとか云ふのであつたが近頃のは——尤も中央公論の短篇もの位で廣くも知りませぬが——私の見たのは殆んどどれも是れも生活難で持ち切て居た、是れは社會の反映てそれを文學者が映す様になつたものでありませう。



私は婦人にも此生活難の衝に當らしめたい、此自覺と云はうか煩悶と云はうかは婦人の特種のもので無く男女共通のものであると云ふ事が分つて、男女共に此生活難を自覺するに至らば、始めて之を切抜けて行く道も講じ得らるゝのである、或は此煩悶の結果が社會全躰を救濟する事になるかも知れぬ、斯くして社會全躰の人が自覺せば社會全躰の救濟も行へやう、眠て居ては駄目、覺むれば其處に進歩あり又解脱の道が開かれて來るのであります云々。

若し「ノラ」の樣な確つかりした婦人あらば

文學博士　姉崎正治

私は婦人問題と云つて特別のものゝ如く扱ふ事を欲しない。徳川時代には獨り婦人ばかりで無く男子も亦服從の制のもとに有つたので、其制が無くなつてからは婦人と雖も服從を美徳とする必要無き樣自から時勢が成つたのである。其れで婦人が教育を受けると云ふ事を何か變つたものゝ如くに云ふけれ共、男子も亦同樣教育を受くるものは常に少數で、所謂衣食足て禮節を知ると謂ふ語の如く、先づ家事經濟を第一とした後の事になる、處で今の學校教育が何かと云はゞ、つまり職業に就かしむる爲めの知識教育である、故に此職業教育問題と修養教育問題とは自から別にならねばならぬ、即ち學校で知識を授かる事は誰れも彼れもと云つては出來ないけれ共、修養問題とならば家庭に教會に寺院に或は集會を開いての談話に其れ〳〵道があらうと思はれるので、是等救濟の途は旨として宗教家の事業である。

現代の女性に勿論煩悶もあるべく又彼のイプセン作中の「ノラ」の如き反抗の情もあらうけれ共、果して其れが如何なものか疑はしい、若しノラの樣な確りした婦人が有つて男子の壓制に反抗すると云ふ事があらば是れは寧ろ保護しても遣るべきでせう、しかし實は其樣な深いのでは無いのかと思はれる。

一躰現今の文學がクラシカルの傾向を欠いて居るのは宜くないことで、其處へ持て行つて直にイプセン物なぞを鼓吹する必要は無からうと思ふ、イプセン或はドストイエフスキーに走るに先つて學校なり社會なりが讀物として今少しクラシカルのものを尚ぶ風を取らねばならぬと思ふ。

現今女學生の風紀頽廢だとか何とか云つて喧ましく隨分恁麼事に就いて新聞や雜誌から意見を聽かれる事もある、私は實情を知らないから分らないけれ共、煩悶にしろ頽廢にしろ實際女子當人に取て其れ程の考へ

も無く又其樣に頽廢ても無き事を、却て我々の意見發表の爲めに擲き立てる樣な事に成りはしなからうか、從て左樣の煩悶の人があらうとも其れらに對して說く抽象的の談議は猶ほ病人に病理の說明をする樣なもので其れが何の救濟になるものでも無い、どうしても是れは社會全體が注意して其の父兄なり敎師なりが其の個人々々を救濟すべきものだらうと思ふ。又此の女子の煩悶は獨立と云ふよりも寧ろ何者かに依賴せんとするのではあるけれ共、其中直ちに敎師の許にても走て切迫詰つた衷情を訴へる者は其れ程にも無く、或は社會が惡いとか人間が惡いとか徒らに罪を他に嫁せんとする樣になつて居る。人は一面に自己の尊嚴を何處までも持すると共に、又他には年長者とか先輩とか或は既に神に配られた人とかに服從する勇氣が無ければならぬ。

良妻賢母は勿論結構として其事を兎角云ふのぢや無いが、文部省が一廉其心算でやつて居ると遞信省では女子の職業を要求する、是れもプラス、マイナスて宜い樣なもの丶、要するに未熟なる社會である、此際若し女子にして給料が取れると云ふので其れを獨立と心得、獨立と心得て煩悶を起すと云ふ事てはつまらない、私は職業敎育以外にもつと心靈的な、云はゞカソリツクの貞操の敎養の樣なものが必要てあらうと思ふので、根本の救濟はどうしても宗敎だらうと考へる。此邊の事を話すに好模範無きは尠からず遺憾である。

其れから實例として趣味と信仰とを具體して書物の評釋などの必要がある。婦人の讀み物と云つて何か特に有るか知らぬが若し其樣なものがあらば多分つまらないもので、私は是れも特に女子の爲めとは云はず男女共通のものてバイブルでも論語でも——論語はちと一般に困るかも知れないが、——平家物語てあるとか。唯男女の見方がどふ違うかと云ふ事てあつて欲しい、殊に平家物語の如きは日本人として誰れが讀むても面白き日本人の感情が現はれて居る、又謠曲などにも其樣なのが幾千もある、平語の中て例へば建禮門院の運命は男子に於いても深き同情若くは興味を持つと

共に、又熊谷の事蹟に對して女子の方から同樣の心持を感ずるだらうと思ふ。今の學校の教科書などにも女子のだからと云つて女子の事を多く入れる樣に見えるが、あれなぞは女子のにもつと男子の讀む樣なのを入れて宜い、是れと共に男子のにももつと女子のを入れたら宜からう、是れらて男女が同情を持ち相知る機會を作らねばならぬと思ふ。

若し分れるものと云はゞ先づ職業である、これは自然の分岐に屬するが猶ほ男子の間に於いても亦其れ其れ自然の分岐のある事を知らねばならぬ。

事實可能力ある事を自覺した

日本女子大學校長　成瀬仁藏

私は直接女子教育に從事してから三十年餘にもなるのて、女子問題を聞く毎に變遷の跡を顧み感慨に打たるゝのてあります。私が明治十一年大阪の梅花女學校を創立した時は、未だ高等女學校なるもの無く、ミッションスクールの如きものも組織立つて居なかつたのみならず、女子にして小學校に入る者さへ少數でありましたから非常なる困難を見ました。其後十年經つて明治二十一二年頃からミッションスクールなぞ盛んになり、女子も亦學問せねばならぬと云ふ輿論を喚起して參りまして當時伊藤公其他朝野の縉紳の發起て虎の門の女學館を設立されたやうな形勢を見るに至つた、しかし又二十三年頃から其反動が生じたのてすが、其時私は洋行致しました、其後の十年は猶ほ遲々たる進歩に過ぎませぬが、女子の小學教育は昔日と全く面目を改めた進歩を見ました。私が外國から歸た明治三十年頃は漸く普通教育の基礎も定まつた頃てしたが、猶ほ社會全體は高等女學校程度の教育に贊成せず、全國の校數十三に過ぎませぬ。然るに更に晩近十年は長足の進歩を爲し四十年迄に校數百五十以上、即ち十年前と十倍以上に增加し、東京丈けても私立の女子學校が七十あるそれて全國の高等女學校の卒業生が毎年凡そ八千人有るのてすが其中て尚進んて以上の教育を受

くる者、或は高等女子師範、女子大學などに入るものが六七百人位有るので何しろ十年の進歩は驚くべき速力です。處が今から十年前に私が此女子大學校を創立せんとする時の有樣は猶ほ高等教育に就いて、反對にあらされば尚早論者が多く、發起人中の出資者も三十人か四十人の生徒あらば可し位の考へてあつた、しかし實際となつて見ると實に案外て大學部は二百人の定員を夙く超過し高等女學校に三百人、家政學部の如きは遂に希望を充しむる能はざる程でありました、是れは實に豫想外の事てすが其れが如何云ふ考へて來たかと云ふに、多數は高等女學



校を經たものですが、地方から上京した者は多く上京を阻止されたので、中には校長が證明を渡さないと云ふのもだん〳〵有りました、から故次第で皆自分の志から來たものである、此傾向は今日も猶ほ見る所であつて、隨分親類や知己の反對があるが自分の熱心なる志と、それから今一つ母親の熱心なる幇助とに依りて決心したものだ、故に其根抵が非常に固く出來て居る、是れはつまり自分の自覺したものと云ふ事が出來るので、隨て困難に打勝ち迫害に堪へると云ふ意志は當初にあります。恁う抽象的に云ふと獨

斷の樣に聞えるが是れは慥かに見た實驗です。
　また女子が自ら工夫し自ら經營すると云ふ樣な事になると如何かと云ふに、一例を云へば先般秋季運動會を催ふしたのですが八千人以上の來賓があつた、其會は終始生徒の經營にかゝり、千三百の生徒は各々其れ〲の分擔を定め、接待衛生裝飾經濟等組織を立て又料理の係もあつて其れが六七千人分の献立から庖刀凡てを司つて、教師は少しも係はらなかつたが、其れても來賓に滿足を與ふる事が出來、あとて見ると組織も完全して居る。一昨年慈善市を催ふした時も隨分大きな計畫を女子の手てやり遂げました、本校の卒業生は既に七百人に上り其團體を櫻楓會と稱し、新聞雜誌時には出版物も發行する。商業部實業部と云ふ有機的組織を作つてある、是れ等に就いては數萬圓の豫算の編成から其整理から事務を執るが、ビジチスの頭も發達して自動的活動をするに堪へ得る、即ち婦人が矢張り人間であるから教育を受くると共に又自己の精神を實現し得る可能力を持て居る事を自覺するに至るのてある、その獨立的自覺は又自から行ふ働きに依てますます鞏固になるのである。
　次には女子も亦國民たる事を自覺したので、之を近く日露戰爭の如き國に危急の事が起つた時或は家庭にて助け或は愛國婦人會の如き婦人の活動機關に依り、各女學校の生徒なぞも本氣に爲つて被服を縫ふとか慰問袋を送るとかした、今日ても國家が二十何億の負債があるから勤儉充實の生活をせねばならぬと或は女子の副業を爲し家庭の經濟を整へ、國家の爲めに盡さねばならぬと云ふ國民的意識が瞭乎として存して居るのを見るのであります。
　其れから賢母良妻と云ふことてすか、一口に賢母良妻と云つても昔し言つたのと今日言ふのとは内容が餘程違ふ、昔しのてあると意味も狹く理想も低くかつた、今日の所謂良妻なるものはさうてなく、夫の人格が家庭の要素なるが如く婦人の人格も亦同じく家庭の要素となるべきもので、妻は知識上に於いても精神上に於いても夫の伴侶となるべきものである。八千人の高等

女學校卒業生中更らに其れ以上行かうとするのは決して獨身生活を爲さんが爲めては無く、更らに夫を助け伴侶となるべく知識を磨き人格を高めんが爲めなのである。賢母良妻になるにはどうしても自分の人格が出來、能ふ丈け知識も該博になり品性が高潔にならねば子供を立派に育てることが出來ない、それて自分の家庭も亦國家の一部てあり子供も國民の一員てあり、將來國家の運命に干繋すると云ふ根底の自覺が出來ねばならぬと思ふが、漸く近頃婦人の中に其自覺を見る事を得て心強く感じます。

私が過去七年の經驗に依ると最初集まつた五百人中の大學部二百人の自覺には勿論何か信仰主義と云ふものがあつたから、唯知識の供給を受くる丈けては滿足せず、何か得んとする精神的要求があつたがドグマの信仰ては滿足が出來ず耶蘇敎ても自由研究に赴き、或は禪に走り、其他哲學に動かされ小說にかぶれる事もあつたが、次第に其要求に應ずるやうにして今日ては其矛盾の考へが統一されて其渴仰を滿されることが出來た、それは其信仰を以て實行する事です、新知識を受けると、之を統一するに信仰を以てしてゝに品性となり生活となりて滿足するのてあります。

學校生活了つて家庭に入り社會に出づるに就いては皆それ〳〵覺悟をして其矛盾を切拔け融和適應自分の理想を實現せんと思つて居ます。

要するに國家進步の大勢に伴ふて敎育の效果が現はれ來り婦人の自覺となりて社會家庭の改善と向上を認むることの出來るのは何より喜ばしいことてあると思ひます。

口繪「快活」の說明

此繪は原作の題を「パーチエルとソフイア」と云ふ、パーチエルもソフイアも共にゴールドスミスの著はした小說『ヴイカーオブ、ウエークフイルド』の中の人物の名てす。此繪はヴイカー一家の者が野原に出て枯草を刈つて居る處て、宿屋てヴイカー一家と近づきになつた パーチエルと云ふ男子が、ヴイカーが自慢の妹娘 ソフイアの機嫌を取つて居るのてす。パーチエルも一しよになつて野の仕事を手傳ひながら殊に熱心に ソフイアの方ばかりを手傳ふて居る、ソフイアは其好意を受けながらも、後に此男がソーンヒル 男爵になることも、又自分が其男爵夫人になることも知らずに、只パーチエルは快活な面白い人だと許り思つて興じて居る處てす、繪者はウイルヤム、マルレデイー(香)

描寫

小杉天外

永い間小說を書いて居るうちに、自ら會得したこともありますが、偖て其れを聯絡つけて咄すと云ふことになると、鳥渡むづかしいので、お尋ねてすから描寫と云ふことに就いて少し意見を述べてみませう。

元來、私が小說を書き初めた頃は、滑稽趣味と云つたやうな一方に偏した描寫を爲て居た、ヂッケンスのクリマスカロルを愛讀して、彼の細工した文章を眞似て居たが、それが又批評家にも好く言はれ、世間にも受けた。

すると一年餘り經つと批評界の樣子が、がらりと變つて來た、今まで褒めて居たものが反覆して褒めない許りか、盛んに惡口を言出した、さあ何うして好いか分らぬ、自分の態度について甚だ煩悶した。

批評家の言ふことは的にならぬ、世間の人の趣味の變遷もあやしいものだ、此間まで盛んに褒めたゝへられたものが一朝にして捨てられて了ふ。鳥と云ふ鳥は餌を食ふのに物陰を選む、屋根の上で食ふ時も雲の下を探して食ふ、處が雲はいつまでも同じ所に居ない、自分は其陰に居ると思つてゐるが、雲は何時の間にか何處かへ行て跡かたもないやうなものだ。

批評家の言葉とか、世間の趣味とか、ずん〴〵變遷して行くものを標準にして小說を書いて居たら、迚も大きい作は出來ないと思つた、之は何でも永久不變のものを目的として、自分の信ずる處を其處に置いて書かねばならぬ、永久不變のものは大自然の外にない、是だけは變らない、何でも此の變らない大自然を捉まへて、其處に立脚地を置かねばならぬと思つたのが、私の謂ふ寫實主義の出發點でした。

大自然の前には醜もない、美もない、善もない、悪もない、只有りのまゝがあるだけだ、其有りのまゝの裡に人生の變らぬ姿がある、それを自分が感じる、感じた通りを人にも傳へたい、それが小説の描寫ではあるまいか。

然う考へたので、更に立脚地を改めて書いたのが「蛇いちご」であつた、あの作に出て來る人間にはタイプがある、郷里の出來事であつた、此の『蛇いちご』が私の作の第二期に入る初めてあつた、それから「初姿」を書いた。

其頃私は他の作物を見ても一向に感心しない、書くべきことが書いてなく、書かないで可いことが書いてある、皆自分の趣味とか、智慧とか、通とかを透して小説を書いてゐる、甚しきは專ら自分の通を世に知らしめたい爲に小説を書いて居る人さへあつた。



小説に書くべきこと、畢竟描寫と云ふものは自分の感じた通りを人にも感じさせると云ふのが主意だけれど、只見たまゝ聞いたまゝを用捨なく書並べてそれで描寫とは云へぬ、描寫即內容で他のことは問ふ必要がない、描寫にもあゝ　れば好いとか、斯うすれば好いとか云ふことは考へねばならぬ。

小さい例だが『初姿』にある寡婦が、若い男を尋ねて行

く時、弟のやうな若い男は婆やの家に居る、寡婦は入るのに極りが惡い、何誰ですかと問はれた時に、女が「わ、た、し」と長く引張つて答へた、此返辭が此塲合、女の情を表はすのに最も肝腎なことで、「わ、た、し」と切つて云ふのは、實際であるが、何うして之を表はさうかと工夫して、一つ一つコンマで切つた、此等が描寫の工夫と云へば云ふべきで、言葉はなか〱苦心した、苦心すると云ふのはこしらへると云ふ意味でなく、自然の儘を出すのがむつかしい、こしらへるのなら容易い、人間の對話には矛盾もあれば、戯談もある然ういつも裁判官の前にあるもの丶やうに、きちんと極り切つた對話ばかりしてゐるものではない、前と後との聯絡がなかつたり、不意に笑ふて見たり、怒つて見たり、其不用意の間に却つて個人の性格が表はれてくる、其笑ひ方が說明出來ないからと云つて、其笑ひ聲を無視して見逃す譯に行かぬ塲合がある、それが描寫の呼吸だ。

其描寫が完全したものでなければ藝術とは云へない、何うして描寫を好くするかと問はれたら「術」と答へる外はない、見たまゝ聞いたまゝをだら〱と書いて少しも讀者を感じさせなかつたら何にもならぬ。描寫の術は何んなものかと云ふに、先づ一例に取捨と云ふことがある、一歩進めて言へば附加へることになる、有りのまゝを書くと云ふうちにも此取捨は必ず伴ふべきもので、畫工が衣服の襞を描くのに見た通り悉く描くかと云ふに、多少は取捨する、と云つても空間藝術なら描寫の術が小說などと工夫に違ふところがある、繪師が筆を取る時には土手から描いてもよし、舟から描いてもよし、川から描いてもよしと云ふこともあるが、小說は一行一行と重ねて行つて讀者の空想を喚起さうとするのだから、其處にだけても描寫の術が要る、若し此術を認めなかつた日には古今の大作に價値は無くなつて了ふ、要するに藝術は描寫を捨てゝ成立つものではないと思ふが、何うでせう。

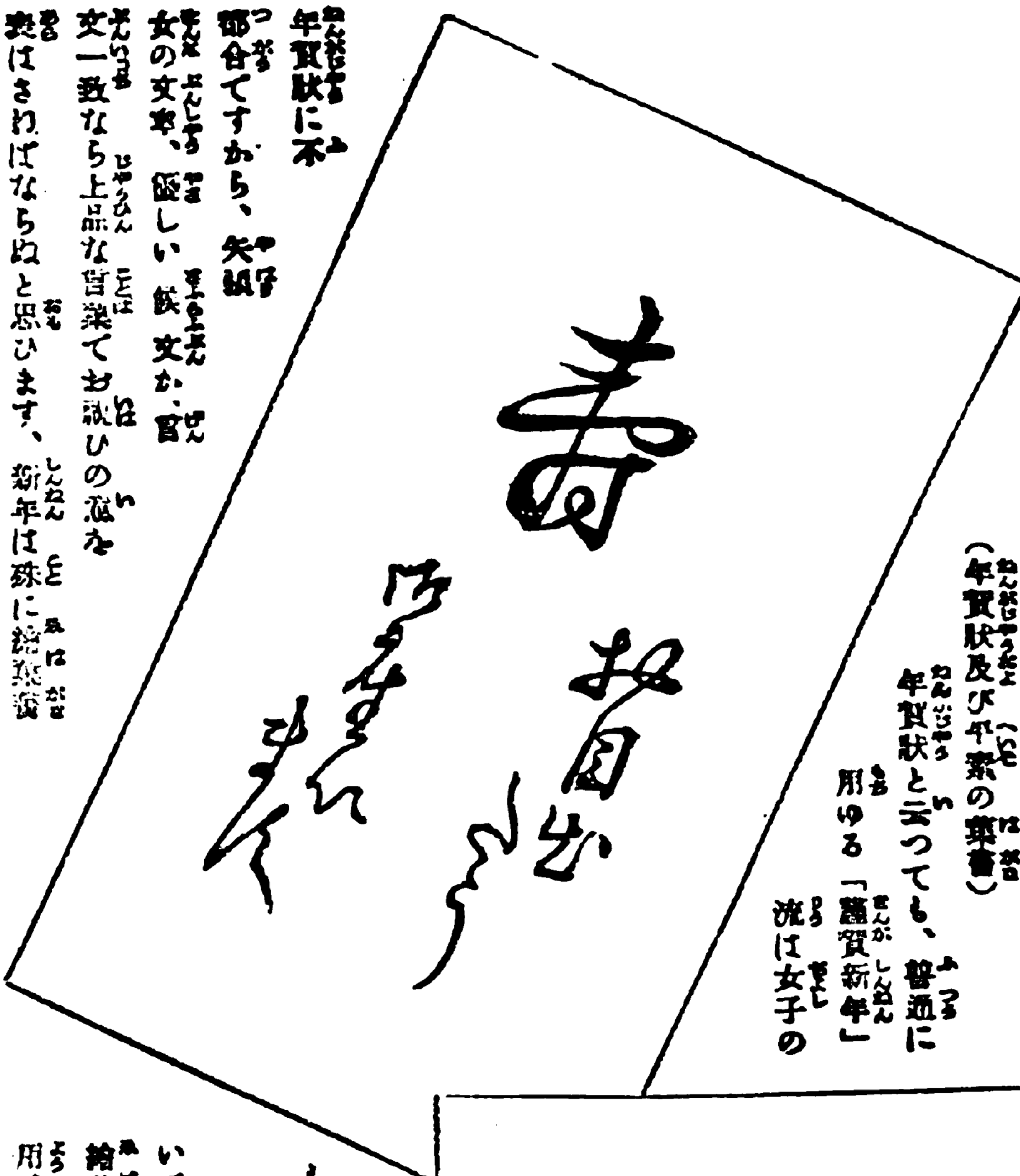
是は別の話だが、此頃の排技巧、無技巧の議論を聞いて斯んな話を懐い出した、漆を製造するものが、漆だけにはして置かない、薯蕷を摺つて混ぜる、混入した薯蕷は分らないで漆の分量が増加して見える、處が或る漆屋が私の漆には薯蕷を混ぜない證據に摺らないで入れて置くと云つて、芋の形のまゝ入れて置いたさうだ、處か實際は矢張其漆にも薯蕷を摺つて交ぜてあつたと云ふ話がある參考になる比喩だと思ふ。（談話、文責在記者）

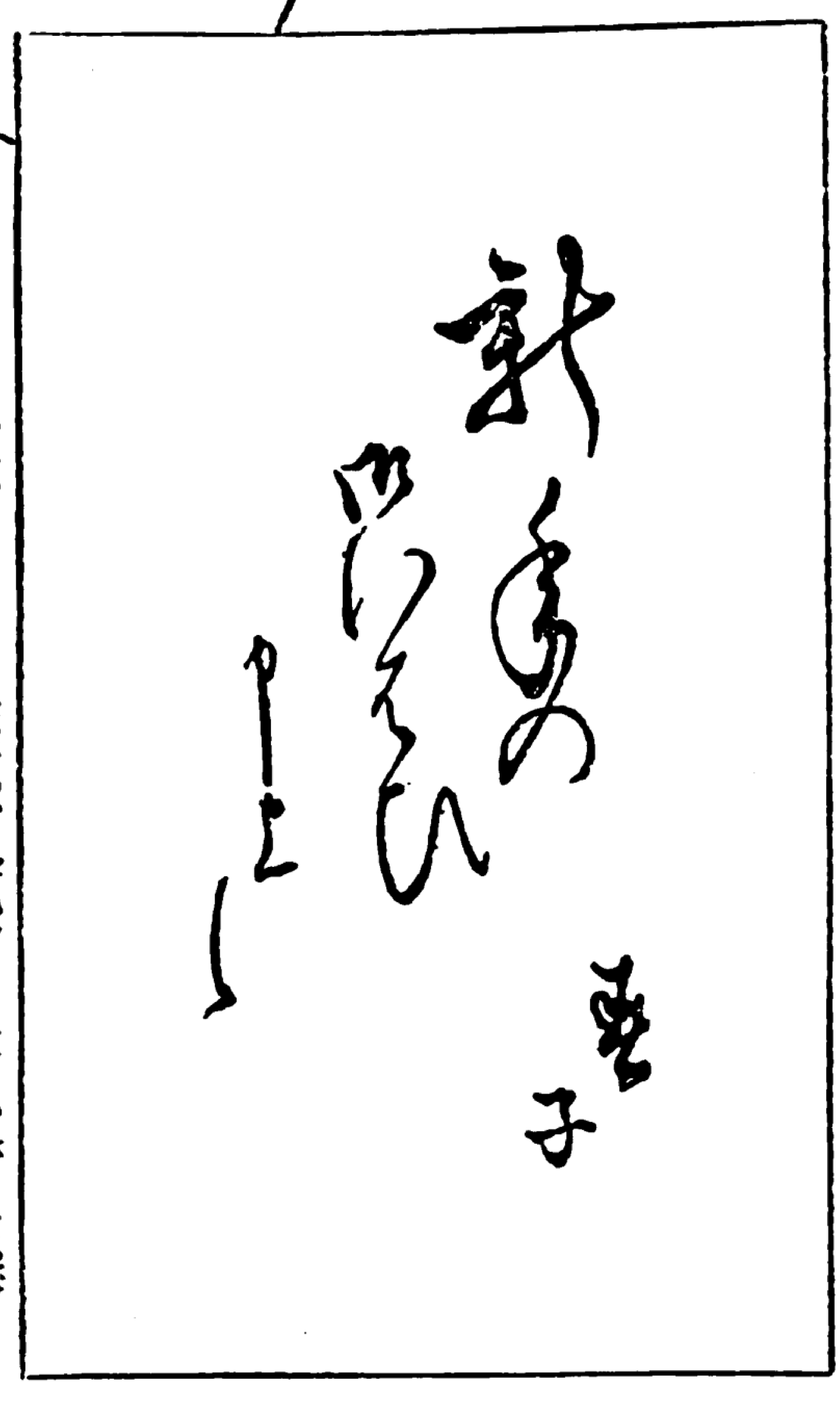
繪葉書の認め方

鎌倉笹目にて　星野天知

（年賀狀及び平素の葉書）

年賀狀と云つても、普通に用ゆる「謹賀新年」流は女子の年賀狀に不都合ですから、矢張女の文章、優しい候文か、言文一致なら上品な言葉でお祝ひの意を表はさねばならぬと思ひます、新年は殊に繪葉書を多く用ゐますが、是を書きやうによりて、折角の繪葉書が美術的になります。

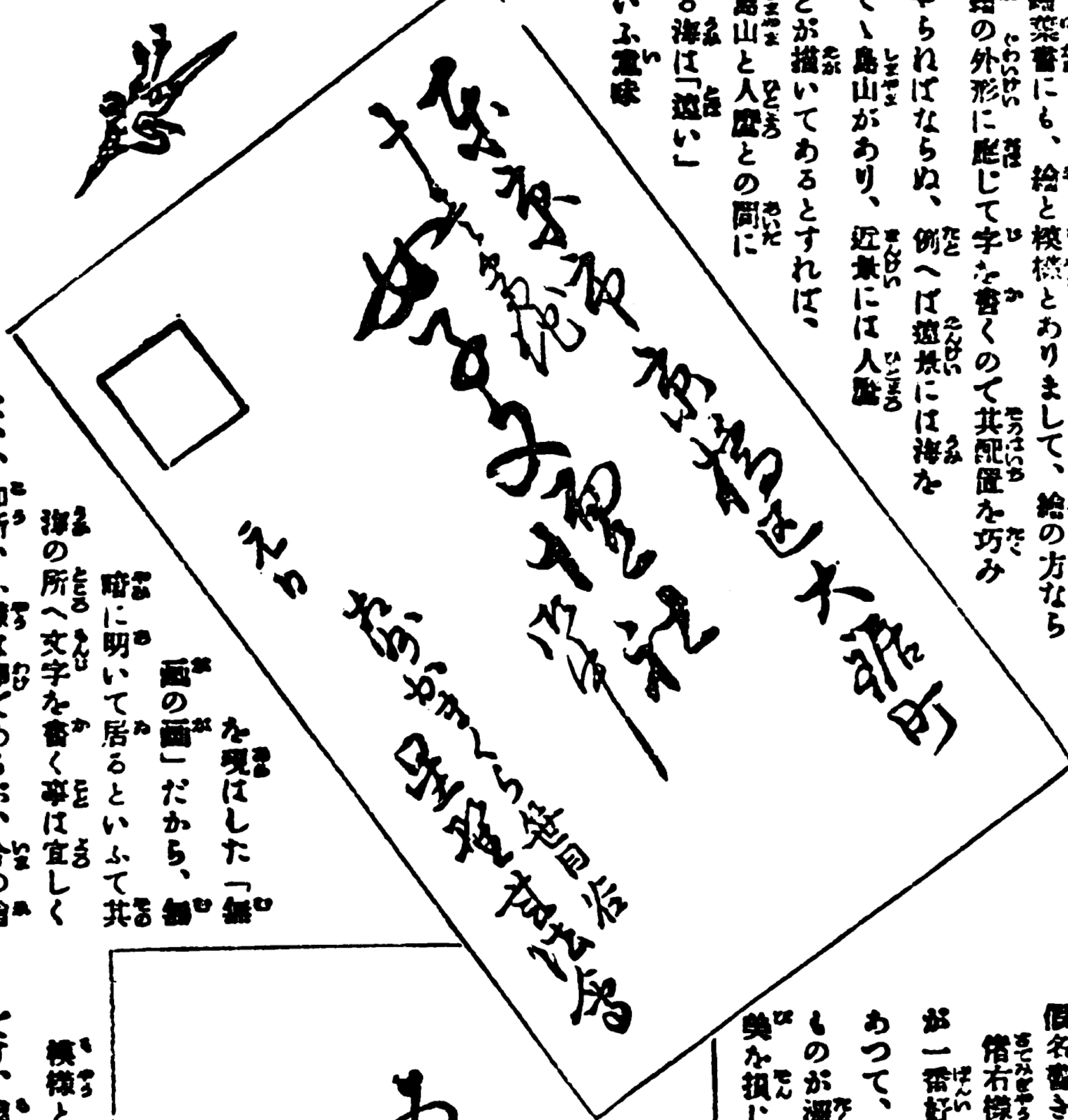


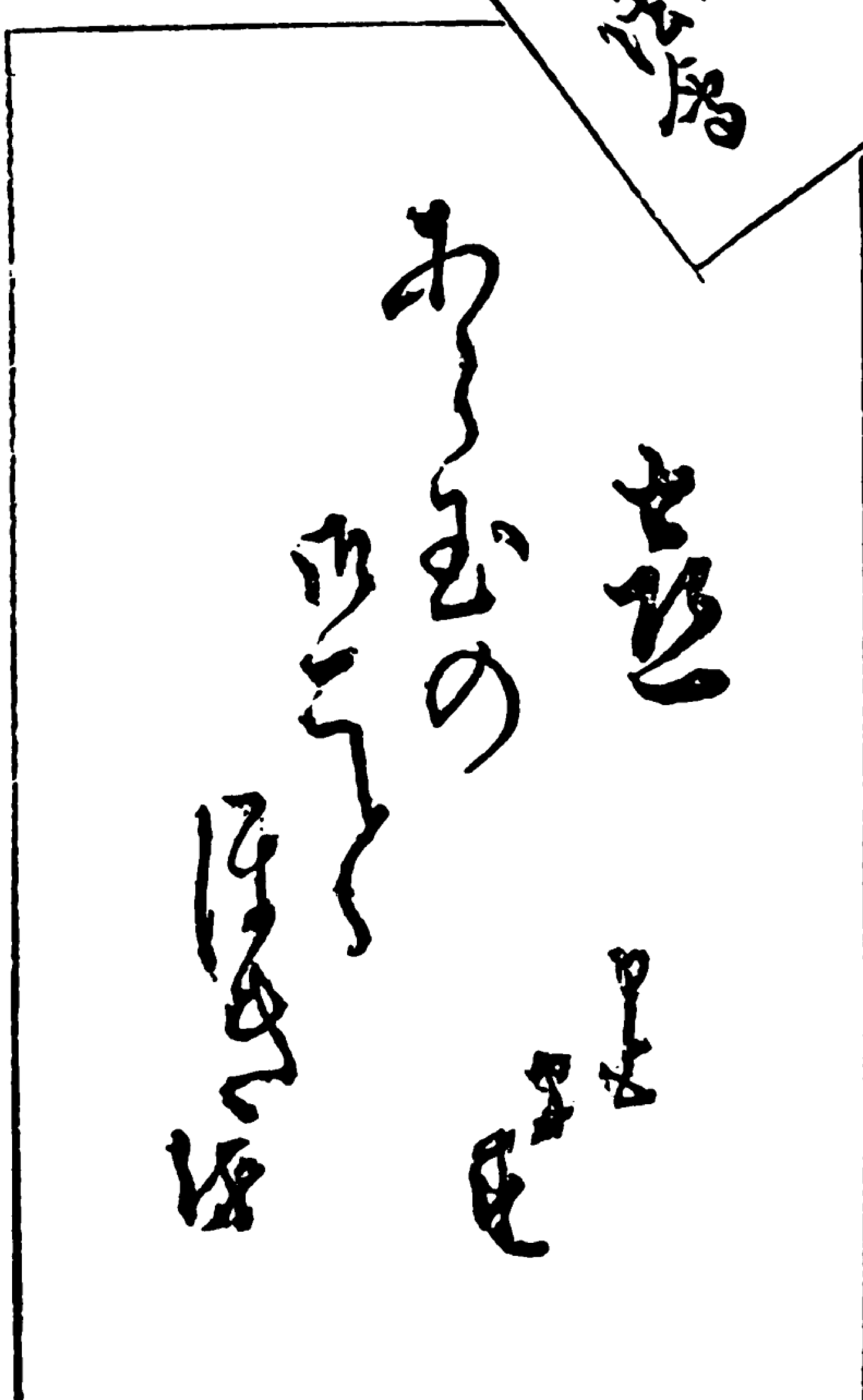


特に年賀狀に限つた譯でなく、繪葉書の上へ文字を書くには多少の心得が入ります、むやみに繪の上へ書いて見たり、書く可らざる所へ書いたりするのは見苦しいので、女が使ふ場合には殊に優美に心掛けたいものです。

私は繪葉書に代ふるに半葉書を以てしたら宜からふと云ふ意見を抱いて居りますが、爰には話す餘白が有ませんから他日に讓るとして鳥渡繪葉書の事を述べて置きます。凡そ繪葉書も其繪を描く人と、又之を使用する人の字を書く工夫とが、能く適合して居ないと、折角繪葉書を用ゐながら、其趣味を損じて溫かい美術的の意義がなくなります。

繪葉書にも、繪と模様とありまして、繪の方なら其繪の外形に應じて字を書くので其配置を巧みにやらればならぬ、例へば遠景には海を隔て丶島山があり、近景には人處などが描いてあるとすれば、其島山と人處との間にある海は「遠い」といふ意味





を現はした「無畫の畫」だから、無暗に明いて居るといふて其餘の所へ文字を書く事は宜しくない、如斯いふ様な譯であるが、今の繪葉書は字の書込めないのが多い、是は畫を描く方で大に注意して貰いたい、尚詳しい事を知りたい方は此社ても取次される吾お速成書法課義の假名書き之部にあるから見るが宜しい。

倩右様の理由だが、更に一歩進んで言へば其繪も文字も自分で書くのが一番好い、昔は色紙など云ふものを書くにも、公卿達は皆繪画の嗜みがあつて、繪も自分で描き字も亦書いたものです、今日では繪葉書と云ふものが澤山あつて、自由に使へるから、其に字を書く人は能く注意して、美を損じないやうにせればならぬ。

模様と云ふのは畢竟既案です、此方は模様次第で何う書いても宜いのです、模様の上へ書いて差支ないのです、模様を殺さないやうに書くには、注意を要しますが、それは一々實際に就いて經驗すべきことで、詳しい説明は出來かねます。

それから葉書の表書ですが、是も甚だ亂雜になつて居ます、一見して住所氏名の明瞭なるを要するは言ふまでもないことですが、大體の見當と云ふものをつけて書かればなりません、初めに宛名を濃い墨で書く、少し細い文字で肩書を書く、肩書が二行になれば一行目は小さく書く、然うすると恰好が宜い、宛名を書くには、葉書の左の上にある切手形の所を除して見て、其殘りの部分の中央から少し左りに寄つた方、即ち「郵便はがき」とある文字の「は」の字の下あたりから大きく書き下すと宜いのです。元來、文字の配置には、生花にも謂ふやうな眞、添、體と稱するやうなものがあつて、其法に適ふと自然恰好が宜く見えます、右の葉書の表で言へば、宛名の所が眞と云ふやうな譯です、中心です、中心が無いと全體の體裁が崩れて了ひます。葉書の表書など何でもないやうなことですが、扨て他の書いたのを見ると、百枚の内で二三枚しか是は宜いと思ふやうなのがありません、皆缺點があるやうです、と云つて何もむつかしいことはないので、平素から一寸注意してゐれば宜いのです、六かしくない證據には吾書法會で習ふ人は十六回目に葉書が奇麗に書けるやうに成ります、どうか年賀状を初めとして追々葉書や手紙の上手に成るよう注意して、各々其品格を發揮するよう氣を付けて貰いたいものです。

あを空（散文詩）

河井醉茗

豆畑

白い胡蝶が一つ舞ふて來た、又一つ舞ふて來た、二つになつて縺れ合ふて居る。

豆畑に半身を現はしてゐる女の姿を私は一心に凝視た。

私は明日都會に歸らねばならぬ、三百哩以上の汽車に乘つて東京に歸るのだ。

東京へ歸ると新しい詩歌も讀む、胸の血を吸はれるやうな小説も讀む、今にも人間に革命の起るやうな激しい議論も聞く、自分も藝術家の一人になつたやうな心持になれる、自分の名を囃されると嬉しくもなる、毎日何か知ら新しい事を敎へられる。

一日も早く都會に歸らなければならないのだ、迚も爲すこと無く田舍に居られない。

それだのに斯ふして居ることが、或る滿足を感じ、或る憧憬を誘ひ、或る快樂を覺えしむるのは何故であらう。

女が私の心を引きつけて了つて、女が一心になつて豆を振いて居るやうに、私の一心は又女の魂と一しよにならうとしてゐる。

戀と云へば世間の人の誰もすることとて、つまらないことかも知れぬ、或る一人を自分のものにしやうとする心の働きと云へば美くしい。

何んな大藝術家の作つた詩でも小說でも、生きた人を前に置いて味ふほどの、深い、しみ〳〵した調子の出るものではない、早く歸らうと思つた私は、未だ眞の人生の空氣を吸ひ足らぬのだ。



對手は普通の田舎娘で、人懷しいと云ふだけかも知れぬが、心の底の純潔が在りの儘に表はれるので、却つて對手の心を引寄せやうとする私の言葉が笑止になり、慚しくなつて、何も言はないで居る。もう斯んなに批評的になつては迚も私に戀は出來ない、思ひ切つて汚れた都會の空氣を吸ひに歸らう。

睡眠

起きてゐるのは自分だけだ、自分は少しも寢むたくない、誰も寢よと言はぬ。

人間が悉く眠つて、起きてゐるのは自分だけなら、何故自分の魂魄はもつと目覺しく働かないのだらう、多くの人が起きてゐる時と同じだ、自分一人目覺しいことが出來ると思つたのが間違ひだ。

眠つた靈魂も、起きた靈魂も同じだ、眠つた靈魂が夢に働いてゐると言へば、覺めた靈魂も夢に働いてゐる、何の變りがあらう。

燈火を點けて置いても眠れるのだ。

眠るのはわけない、凡てのものが眠つてゐるからと云つて、何うすることも出來ぬ、起きてゐても何にもならぬ。

凡て眠つてゐるものを何うかしてやりたいと思ふけれど、自分の靈魂と、他の靈魂と、眠つて居ても、起きて居ても、別々に働いてゐる、自分だけ起きて居やうが、寢て居やうが、他の靈魂は關はりなしに好い夢やら、惡い夢やらを見て居る。

お窓の姉さん

前は草原、子供が能く遊んで居る。

或る家の窓があつて、其處から十三四の女の子が能く顔を出してゐる。顔の見えない時は讀本を讀む聲か、唱歌を歌ふ聲かゞ聞える。

子供等はお窓の姉さんと呼んでゐる。

子供の居ない時は胡蝶が遊んでゐる、馬が草を食べて居る、鷄が餌を拾ふて居る、お窓の姉さんはそれを見て居る。

雲も見える、林も見える、葉の落るのも、實の熟つて居るのも見える、けれども滅多に人の來ない草原だ、お窓の姉さんは何時までも此窓に凭るだらうか。

豫告

花言葉　水野葉舟
短歌評釋　窪田通治
美文の作り方　西村醉夢
山桔梗　横瀨夜雨

右四項は本號に掲載すべき手筈なりしも紙面の都合にて餘儀なく次號に廻したり、此段讀者の諒察を請ふ

The fountains in their secret
places cool;
And it is He
who leadeth up the sun,
And ordereth up the starry
influences,
And tempereth the keeness of
the frost;
And therefore, in the plenty of
the feast,
And in the lifting of the cup,
let Him
Have the praises for the
well-completed year.
(Wil.is)

湧きて絶へぬは
彼のわざなり。
神の外なし
大陽を導き
蒼天の星辰を
統御し
霜雪の嚴寒を
和し得るは。
然らば目出度き
此筵にて
祝の杯高くあげ
事なく終へし
一年を與へ給ひし
神を稱へん。

My Dear Readers—

The editor has asked me to write this year something much easier than what I have done so far. I am at a loss how to help you in English, but believing that you take some interest in the language, I shall give grammar lessons from time to time. May I ask you to read them carefully, and apply them? If you understand the National First Reader thoroughly in reading, translation, and in grammar, you are already English scholars. I trust that these two columns of English are not entirely lost to you.

Very sincerely,
Michi Kawai.

讀者よ，

記者より我に注文あり，即ち我記事の以前に比して一層容易ならむ事なり. 如何にして諸姉に幾分なりとも英文の助をなし得べきや其道を知らず. 然れ共，讀者は英學に趣味を有さること信じて，之より時々文學を講ぜんとす. 願くば，注意して讀み，且又之を應用し給はん事を。若しナショナル第一リーダーを完全に素讀し，理解し，其文法を會得なしうる者あらば，此人は既に英學者と云ふを得べし。僅々二頁の此英文欄と雖も讀者に全く無用とならざらん事を祈りて止まず。

敬具　河井道子

英　文

(第五年第一回)

女子英學塾講師　河井道子



Wishing you
a Bright and Happy
Christmas and
all Prosperity in the
New Year.

壯快なるクリスマスと，
祥榮なる新年とを，
諸姉の爲に祈り奉る。

The New Year.

Fleetly hath passed a year;
the season came
Duly as they were wont,—
gentle Spring,
And the delicious Summer,
and the cool
Rich Autumn, with the nodding
of the grain,
And Winter,
like an old and hoary man,
Frosty and stiff,—
and so are chronicled.
God hath been very good.
Tis He whose hand
Moulded the sunny hills,
and hollowed out
The Shelter of the valleys,
and doth keep

新　年

一年は疾く過ぎぬ.
四季の廻りは
期を違へず,
駘蕩の麗春
綠陰の夏
次て淸涼
黃金の秋は
たり穗を積て欣然たり。
最後に嚴冬
皚々皚々
白髮翁にさも似たり
之ぞ一年の記錄なれ。
神の惠は深かな,
彼の御手にぞ
光陽の山は築かれ,
雅趣の溪谷は穿たる,
而して泉流
幽邃の地に

個人の勝利

(文壇最近の傾向)

服部嘉香

一

文學は小說詩歌の孰れを問はず所詮は個人を語るものである。個人──「我」の全體を自由に主張し得る天地は、只ひとり文學の世界に於て見出さる。吾等は一意この權利の汚れざらん事を努めねばならぬ。

自覺したる日本の文壇は短日月の間に意外の發展を遂げた。最近二三年の間、自然主義の文壇を支配してからは、過去の如何なる時代にも比すべからざる種の大發展を爲した。徒らに外國文學の模倣を事とするに非ずして、根抵的に自己に立脚して偏へに其の充實を欲しつゝある努力は、續々泰西思潮と歸一する所あらしめたのである。作家としての態度及び批評家としての鑑賞に於て、吾は決して彼に劣るものでない。彼此ともに同樣の空氣を呼吸して、而かも一部に却つて彼に對する吾の優越を誇るほどの自信を得たのは兎に角に文壇の進步である。而して此の信念を得るに至つた時代は即ち自然派文學の時代であつたとすれば、何を以て自然派の文學が是れ程の結果を生じたかといふ事は一の興味ある考察ではあるまいか。

思ふに自然主義の文學は「自己の爲めの文學」であつたのである。

自然主義が其の主張の時代から研究の時代に移つた今年の文壇は、默默の裡に其の勝利を承認した。彼等が根本的に自覺したる一境の心地は即ち現實的覺醒であつた。而して此の省察內觀の發露は、文學の上には從來の空想文學を排して新しき觀察文學を齎したのである。特に小說に於て、空想を以て人生を作つた態度を捨てゝ、觀察に基いて人生を描くやうになつた。最近の小說に見出さるゝ新味は即ち此の結果に外ならぬ。

自然派の小說が標榜したる脚色とは、即ち空想を以て人生を作らずと云ふ別言である。自己の主觀を抑へて、ありのまゝの事實を描寫すると云ふ態度、毫末の作爲を加へずといふ新しき約束は、作者自ら觀察を鋭くするばかりで敢て自己を出さうとはしないが、近頃の小說に於て、花袋青果白鳥其他の諸氏の小說が著しく特色的になり、それ〴〵作者の個人性を表はすに至つたのは即ち文藝が遂に「自己を語るもの」たる一事を證明してゐる。

明治文學の過去の黃金時代、硯友社一派の寫實小說より、柳浪一葉の心理小說に移つた當時の消息は、文學が社會的興味から個人的興味に移つた事を示してゐる。現在の自然派の小說が此の二面の興味を併せ有してゐるのは事實であるが、之は決して過去の其れ等の興味では無い。其の理由は、從來の小說が同じく人生を描き人間を寫したにしても、「凡そ人生なるもの」若しくは「凡そ人間なるもの」を傳へてゐたからである。

所謂世態人情の小說、一言にして世相の小說は、つまり人生概論、人間概論であつた。人生とは斯うしたものだといふ全體の相を傳へる事、換言すれば人生表面の消息をば、あらゆる場合に妥當ならしむるやうに示したに過ぎぬ。心理小說に至つては、人間の裏面を書いたものでは無いが矢張り人間心理の通有性を書いてゐる。こんな人生もある、こんな人間もあると、其の個々の斷片に活きた生命を與へた作品は今日に於て初めて見るを得たのである。

例へば心理小說として當時を驚かした二葉亭氏の『浮雲』や紅葉の『多情多恨』の如き、心理解剖の精細緻密な點に於て容易に企及すべからざるものでありながら、『浮雲』の內海文三も『多情多恨』の鷲見柳之助も、其の職業が會社員であり又學校職員である事は餘りに關係しない。凡そ失戀したる人の心理、凡そ妻に先立たれたる人の情緒を知る丈で、或る



特殊の境遇事件に必要なる人間の特異性を具備して居らぬやうな感がする。然るに最近の作を見ると、秋聲氏の『發奮』には「凡そ巡査なる者」を見る事は出來ない。白鳥氏の『[illegible]』には「凡そ新聞記者なる者」を見る事が出來ない。之と同じく花袋氏の『生』にも藤村氏の『春』にも「凡そ人生なるもの」は表はれて居ない。何れも人生の或る一片、人間のある個性が、深く明かに描き出されてある。各々特異性を有した人生若しくは人間の斷片である。

然るに、自然派の作家が單に是れ等の斷片を忠實に描き出す事に努力して敢て自己の主觀を誇示するにあらざる態度を取りながら、各作家の特色が其れ〴〵明瞭に顯し出されたる理由は何であらうか。紅葉は『色懺悔』の序に「此の小說は涙を以て主眼とす」と云つた。敢て公言しないまでも、前期の作には作者の解釋が初めより意識的に示されてあるやうな

氣がする。主觀の暗示である。然るに最近の小說には自らなる作者主觀の反映がある。白鳥氏には白鳥氏の特色あり、秋聲氏には秋聲氏の特色がある、彼と此と共通の點はあつても、それが作者の人格を背景としてゐるので其の特色が明瞭に分れてゐる。思ふに是れ作者の人生の觀方、觀察の仕方より、自然に作の上に浮び出づる作者の人格である。空想を生命とした前期の文學は、大まかに花柳小說、政治小說と云ふが如く、人生に着眼する作者撰擇の分野に依つて作者の特色は分れてゐた。然るに自然派の小說が、現に角使融したる眼を人生に放つ場合に、觀察を生命として敢て自分自己を語らざるにも拘らず、其の觀察の仕方に依つて自然特色は分れるやうになつた。同一の材料を取扱つた二作者があつたとしても、其の材料に對する作者の態度は到底異る事を免さない。自ら二作家の間に何等かの分るゝ處がある。所詮は作者の人格の問題である。

風葉氏の『ぐうたら女』と、白鳥氏の『明日』と、更に葉舟氏の『おみよ』とを見るに、三作ともに一個の女性を中心としてゐる。敢て同一の女ではないが、似通つた賤の女に對して、三作家の觀察の仕方、從つて材料に對する作者の態度乃至は取扱ひ方が、それ〴〵三樣の面目を示してゐる。是は主觀の暗示で無い、自らなる主觀の反映である。茲に至つて三氏は共に其れ〴〵「自己を語つた」ものでは無いか。

二

併しながら、小說に於ける個人の勝利は云はゞ消極的の一面である。

兩者に現はれたる人格の勝利である。新しい詩歌に於ては直接に表はさんとする人格の勝利がある。

詩歌は元來が自己本位の文學である。徹頭徹尾偽らざる自己の人格の表白である。殊に最近の口語詩——之は內容派の自由詩と呼ぶを適當とする、決して散文詩と同一のもので無い——が主張する。極端なる主觀的權威は、個人の勝利を示した積極的の一面であらうと思ふ。

元より自己を離れた詩歌は無い。併し短い歷史しかない所謂新體詩が齎らした産物は單に形式の彫琢であつた。詩とは形式を整へさへすれば佳いものになると思ふやうに見えた。故に形式に於て、ある作家が自己の力を注ぎ盡した時は、詩人としての生命の終る時期である。幾多の詩人が幾度か行き詰つた過去の臨終を殘してゐるのは、即ち形式的に自ら彫琢の局に達して死滅した事を示してゐる。藤村氏は『落梅集』を以て詩壇を去り、泣菫氏は『白羊宮』を以て技巧の最後に達し、有明氏は『有明集』を以て過去の一時期の終とした。勿論歌ふべき材料は、單なる空想より、外界の自然、人生相の一角と云つた風に追々に範圍を廣くして行つたけれども、却つて唯一「自己」の狹き範圍に、無限の生命と形式あるを知らなかつたのである。

有明氏は『明星』の終刊號に於て新しき技巧を示された。全然從來の音數的制約を破つて新しきリズムの形を移さんとする試みを爲られた。動搖は詩人の生命である、氏が茲に一轉機を示されたのは詩壇の爲めに一個の賀兆である。然しながら口語詩——內容派の自由詩には、ラインやスタンザの制約を無視したのみならず、所謂詩語として用ひられた從

來の稚語をも捨てゝ了つた。斯くして彼等は詩歌の内容的要素を全からしめんとしてゐるのである。

こゝに所謂内容と云ふは、詩歌の生命をば形式よりも其の内容に在りと見たもので、此の一事、即ち自己を生命とするといふ一事より、其の主観に於ても又形式に移されたリズムに於ても悉く作者自らの人格の直接なる表白たらざるは無い。散文に於て、自然なる作者主観の反映が、間接的若しくは消極的であつたに對して、詩に於ては全然直接的に積極的に主観を露出する。此の境地に至つて初めて熱烈なる生命と執拗なる印象とは表し得られる。

吾等の或る一刹那の本來情緒――自己全体の高潮に達したる一呼吸――は、熱烈なる生命の燃ゆる一境で、自己に對しても亦外三者に對しても同じく執拗なる印象を要求する。敢て有限なる某々の形式に縛せらるべきものでない。元より自然主義は吾等に客觀化することを教へた、其の經過したる一呼吸をば次の瞬間よりは之を客観せねばならぬ事は勿論である、併しながら之を更に或る七五的調子に必ず收めればならぬと云ふ謂はない。さる苦心をして出來上つ古詩は、アートの苦心に於て取るべき所があらうとも、尊き刹那の主観は其處に封じられて單に文字面に死滅する。文字以上に永久に呼吸を續けて何時までも讀者に印象を與へる事は出來ない。即ち内容の生命は一刹那であつても之が與ふべき印象は永久のものでなければならぬ。詩の用語を口語に取つた要求は、此の衷心の一點より出でねばならぬ。

自然主義は自己を發見する努力である。最近泰西の詩壇に起つた象徴主義、印象主義、若しくは神秘主義は、作者の態度、材料の取扱方より名附けたる名目であつて、自然主義が教へたる自己の爲めの文學といふ一意をば最も有力に主張せん爲めのものに外ならぬ。我が詩壇の新しき運動は、文壇が遂に「自己を語るもの」たる事を最も積極的に證明するものであるまいか。其の事實たるべき作品は此後に於て求むべきものであらう。

短歌俳句に就ては改めて起草する機會を待つ事にした。

(四十一年十二月一日)

虚子

日を受けて光る瀧あり秋の山
末の世は死ぬ人多き墓參かな
參りけり大樹の下の墓五つ
秋風に又參りけり法隆寺
この村や南瓜の後の芋の味

落葉　星の光り

川路柳虹

葉がちる、ちる、ちる、ちる、おちる。
生きた色が死んでゆく世界に、
樹の間を透いて顫へるやうな星が光る、
また……
葉がちる、ちる、ちる、ちる。
暮――寂――吸はれてゆくやうな物音――
闇――青色の羅衣――白い星の瞳……
葉はかすかに……
夢のやうな風が吹いてゆく。
こんな闇にたゞひとり自分の魂が醒めてゐる。
この絶え間なき微かなぞめきをきいてゐる。
人よ、人よ、
魂がこれをきいて顫ふときに、
人よ、汝は何ものをも倶に知らないのだ。
葉おちる、おちる、おちる、かすかに落ちる。
闇がせまる、たゞ微かに星が光る……
人よ、人よ、
汝の眼はその光りに浸つてゐる。
そしてたゞそれより他に知らないのだ。

妻

前田夕暮

やゝませて妻のやうにもみゆる子を二十となさむ日は近づきぬ
妹とすべきか妻となすべきかわかき一人をえてまどひけり
わかき子よ妻とよばれむ願の日まてるがよくも眼にみゆるかな
あゝわかき瞳よいつもわがかたに妻てふ色にかゞやきてあれ
青き空青き木立を背になして日にかゞやきてわが妻立てり
わが妻は赤き夜の灯をもちそへて砂白き庭ゆ海のかたみる
いれしまに君ひとりおき街越えて行かばと時に思ひみしかな
年くれて行くなりあはれこの歎わかつに若き妻ひとりあり
妻の眼のわれをまともにみるまでに馴れて心のやゝ安き日よ
新妻の衣のかをりのなつかしき一夜はあけて年あらたなり
赤き灯の色と林檎とうすけはひさびしき顔と肩しろき夜

短篇小説

小栗風葉先生選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○江村さん（天賞）

播磨　松園女

何を云つてもはー、さうねー、と許り澄してる、江村樣は全で冷血動物の樣だとは學生時代からの人の評、何日だつたか春樣が「あなたでも血が流れてるか蚊がとまつてるわ」と云つたら「さうー不思議ねー」と矢張り澄してゐた。

級會なども皆が喧々騒いでると無言つて人の顔を見比べてゐた、そして濟むで外に出てから「あんな事云つたつてあきやしない」と冷やかに空を眺めるのが癖だつた、誰かが一寸でも男子の話をすると「馬鹿ね彼の人は汚れてる男の垢が着いてゐる」と云つて冷笑して居た、それで居て時々ふいと快活に成ると色々な事をして人を笑せてゐた、夕方散歩などして居ると能く「私の批評をして頂戴」といつた、「あんまり沈欝過ぎるわ」と云ふと「さう」と考へ込むで、「本來は斯んな人間じや無かつたんだけれど…仕方がない社會が斯んなに仕て仕舞つたんだ」と云つて沈默つて仕舞ふのが常だつた。

私は江村樣の心を能く知つて居る學校時代にも一度尋ねて見やう〳〵と思ひながら遂に其の機會を得なかつた、

齋田先生、其れは江村樣が小學校時代に教はつた先生で私等が四年級の時高師を出て入らした理科の先生で鼻筋のよく通つた少し悽みのある恐しく脊の高い先生だつた、

私が齋田先生の事を云ひ出すと、江村樣は直ぐ「嫌やな先生」と顔をしかめて成る可く先生のお話は避ける樣に勤めて居た、丁度五年の秋だつた、私があの運動場の櫻の木にもたれて暮れ行く景色を見て居ると小使

室の方から齋出先生が出て來て、何を仰つしやるのかと思つたら、

「江村はいつでも彼んなに沈じて居るのですか、小さい時はあんな人間ぢや無かつたが——、あなたには何も云ひませんか」と仰つしやつた、

唯其れだけ、それだけだつた。

けれど私は明かに先生のお心を讀む事が出來た、薄暗くなつた廊の中を考へながら彼らへ行かれる先生の後姿を見た時は何だか江村様が恨めしい様な氣持がした、

一層打ちつけに云つて見様かと思つたが又思ひ反した、あの人が何んなに言つ



て怒るだらうと。

天長節の夜だつた、寄宿舎で祝賀會を催して本校の先生も皆ら招きした、其時江村様は秋の裝てふ美文を朗讀して大に渴采せられた、其の頃から目立つて沈みかけた、もう私の室へも遊びに來なくなつて何日も一人で學園の中をぐる／＼と廻つて何か考へてゐる、顏色なども以前よりはずつと惡るくなつて時々言つて居た滑稽も云はなくなつた、

卒業式の終つた時だつた。江村様の室へ行くと下級生は皆送別會の準備に行つて江村様が唯た一人机の上の卒業證書を見つめてゐた、私が其處に坐るとい

きなり「ねー町田樣、こんな物が何に成るんでせう」と如何にも腹立しさうに證書を机の横へなげ捨てゝ獨り怒つて居た。

もう其れから二年になる、此の一月に私が始めて小學校に出た時細々と書いた手紙を寄來して其の終りに小さな字で「齋田先生が奧樣をおもらひなすつた」と書き添へて有つた、私は何うしても齋田先生と江村樣とを離して考へる事が出來なかつた、

今年の夏休みこそは是非にと云ふので私は五里の山道を車に搖られてお訪ねした、學生時代よりは餘程若く成つて活々として出迎へられた、何だか嬉しい樣な、考へて見ると馬鹿らしい樣な氣がせぬでもなかつたがお居室へ行つて差向ひに座つて見ると矢張り昔の儘の江村樣だつた。色々話の序に「齋田先生が奧樣をおもらひなすつたつてねー」と云つたら今迄話して居た江村樣が急に默り込むでしまつて机に頰杖をついてヂッと鉛筆の先を見つめてゐる、

「町田樣――」と思ひ出した樣に顏を上げて

「自分が智的に考へると嫌やで嫌やでたまらない人で情的にはたゞ何となく好きな人があるものでせうか」と云つた、私は思はず

「齋田先生の事?」と云つてしまつた、すると江村樣はクワッと赤くなつて

「此の頃始めて戀だつたつて事を悟つたの――、だつて私、何うしても思ひ切れないのですもの」と鉛筆を取つて字を書くともなく紙の上に目を落した。

「でもあなたは隨分强硬だつたわー、私が云つたら

「皆自分の心をかくす爲めよ」と冷やゝかに云つて

「自分で自分の心を欺むいてそれで得々として居る、――人間は馬鹿だわねー」と自ら嘲るやうに云つた

「學校に居た時分は好い夢許り見て居たけれど此の頃は毎晩先生の夢許り、――何だか夢まで墮落してしまつて」と机の上にうつぶしてしまつた、

私はつくぐ\と此の人も變つたなと思つた。

理智では愛すべからざるものも、情では終に憎む事が出來ぬと云ふ矛盾、それを意識して煩悶する所に近代的の特長がある。終りの夢の言葉も面白い。暗示的な書方も佳(評)

○おすゑさん（地賞）

京都 濱部風窓女

「お新さんお內」ガラリと格子を啓けて這入る

お新は今、一疊敷しか無い玄關の隣の間で髮を結つてゐる、聞き馴れたお末さんの聲なので直ぐ

「お末さん何處へ」と訊く、手を上へ上げてゐたのでつまつたやうな聲でいふ、勝手知つたお末は障子を啓けてズカ〳〵と出て來て後へ手をやつて帯をいぢり乍ら、

「私、芝居へ行かうと思つて……」お新は手を歇めて上眼づかひに「誰とよ」と云つたが、また少し調子が變つてるので例のかとお新は一寸微笑つて

「また始まつたのネ、眞個に困つた人だよモーいゝ主婦ぢや有りませんか」

「だつて私ばかり遠慮してたつてつまら無いもの」

ペタリと横へ座る、裏の鶏のクークーと啼く聲が聞える、

「お末さん」と臺所から男の聲がする、お新の夫の仙吉で巡査を奉職てゐるが午後からは非番なので家にゐる、欠伸でも噛み殺したのか聲が妙に響く、お末は別に吃驚した風も見せず「何ですか」と大きい聲で返事をする、仙吉は火鉢の縁で煙草の吹殻を叩き落して

「お末さんとこの様に餘り夫婦中が能過ぎても困るネ」

「厭ですか」馬鹿〳〵しいといふ様な顔付をして

「始終、苛めてばかし居るんですから……偶にや貴方氣ばらしもしなくつちやねえお新さん」とお新に味方を求める、

「そりやさうだけど……私等の眼から見るとお末さんなんか氣樂なものサネ」

「何故」

「なぜつて」とお新は鳥渡臺所の方を見て「出たい時にやズン〳〵出られるのだもの」聲は些し大きかつた。

「ナニ自棄さ」とお末は帯の間から煙草入れを出して傍に有つた火鉢に鳥渡手をやつて見たが無かつたのか臺所へツカ〳〵と行く

「大層おめかしだね、今日は馬鹿に若く見えるよ」

と仙吉がいふと「有難とう、芝居を奢りますよ」と笑ひ乍ら火鉢の横へ座つて煙草を天井へ吐いてゐる、お新は束髪が出來たのでバタ〳〵と引出を片付けて癖直しの金盥を持つて流し元へ水を捨てに行く、手を洗つて仙吉の眞向ふへ座るとお末は一寸眉をしかめて上眼づかひにお新の頭を見上げ

「能く出來てね」「さう」とお新は左の手をやる仙吉も眼をやつて

「女は煩さいものだね」と云ひ乍ら直ぐ傍に置いて有る隣家から借りて來た毎日新聞の三面を見る

「お末さん、眞個に行くの」とお新が訊くと前の調子

とは變つて

「どちらてもいゝのサ、家にゐてクサ〳〵するとつい芝居ても行つて見たいやうな氣に成つてくるのよ」

「クサ〳〵するつてッ！毎日〳〵面白い事許し有るものですか、藤次郎さんだつて虫の居所が悪い時にやそりや苦い顏もするサ」お新は茶棚から茶器を降して入れ乍ら「もと〳〵好いて夫婦に成つたのじや有りませんかネ」「でも彼麼、片いぢな人とは思はなかつたわ」頭が痒いのか簪て掻いてホッと小さい吐息をする、「お新さん行かないの」とお末が訊く、お新は何を考へてゐたのか「何處へ」と訊き乍ら溜呑を出す、



（天賞）落葉掃き　水戸　北川うめ子

「芝居よ」

「さうそ、行つてもいゝが、ネー貴郎」と仙吉の方を見て「彼の人が來るんてしたねえ」

仙吉は新聞を見たまゝ「ウン、今日來る筈だ」といふ

「誰が來るの」とお末が訊く

「ナニ、今度仙吉が巡査を退職して會社の方へ出るのて其の世話人が來るのさ」

「それじや出られないわねえ」とお末は情けなさそうな聲をする、お新は思ひ付いたやうに

「お末さん、今日は廢して此の次の日曜は如何、さうすりや藤次郎さんも仙吉と一所にネー貴郎」と良人を覗くやうにして「お祝ひにネ」と一寸小さ聲でいふ、
「お祝ひには少々恐れ入るネ」と仙吉は輕く笑ふ、お末は氣が變つたのか、
「ぢや左樣しませうか」といふ、「それがいゝわ」とお新が云ふ、お末は吃驚したやうに
「オヽ、洗濯のしさして有つたんだ」と獨り言のやうにいつて「ぢや今日は歸るわ」と立つので仙吉が
「マーいゝぢやないか」妙な顏をしてお末を見てる、お末は
「エヽ」と謂つたが「今度の日曜は十五日ネ」、と立つたまゝ何か考へてゐたが吃驚したやうに歸つて仕舞ふ、お末の日和下駄の音が聞えなくなつた頃仙吉は大きな伸をして
「お末さんも一向答への無い妙な女だネ」と兩手で伸の爲めに出た泪を拭いてゐる
お新は火鉢に炭を入れ乍ら
「あれでも今に、子供が出來たら癒りますよ、藤次郎さんもあれぢやね……ええそれにお末さんもあんな氣儘の人ですから時々はやるでせうよホヽヽ」と笑ふ
お新は思ひ出したやうに
「貴郎、お風呂へゐらつしやいよ」といふ仙吉は
「ウン」と釘に引つかけてあつた手ぬぐいをさげて出て行く、雛がまたクークーと啼き出した

一種の寫生文のやうに、書いてある事はつまらぬが、出てゐる人物が何れも活躍して、凡ならぬ手腕だ。餘の緻密なる事驚くべし。（評）

○從妹同志（入賞）

神田　田中英子

此二三ケ月、ふつゝり姿を見せなかつたおつるさんが、昨日ひよつくりやつて來たが、相變らず小說や三越の話で持ち切り。……兎に角余程變つた人だ。右手の藥指にはめた指輪を、格別氣にも止めず平氣で居るから、私もだまつて居たら遂々夫について何にも云はずに歸つて了つた。丁度彼を借してから、半年程になるが、もうもらつた氣にでもなつてるのかも知れない、何しろダイヤ入りなのだから、私も惜しくない事もないが、從妹だけに催促する譯にもゆかず、其儘になつて居る。初夏……す足に雪踏はきと云ふ姿で來た時だつた。例の三越の話から、指輪の事を云ひ出した、貴女のやうなのが好きだつて、羨やましがるから、「別に宜いのでもないのよ。私は眞珠の方がすき、……之

れア別に氣に入つても居ないのよ」と云つたら、そんなら少し借してくれないかと云ふから、云ふまゝに借してやつたが、今では大に後悔して居る。おつるさんは、もう廿五になるのだが、今だにひとりで居る。伯父さんや伯母さんもずい分心配してゐなさるやうだけれど、何と云つても一人娘の事だから、我意まゝ通させて居るらしい。茶だの花だの新内もやれば義太夫もと云ふやうに色々と手を出すが、どれも長く續かない。が、大の小説好きで、金色夜叉がどうの、紅葉がこうのと云ふから、此方も、乘氣になつて、少し知つてる事を話すと、急にしよげてしまつて、すぐに話題を變へようとする。勝氣な人だから、茶の事、花の事、そりや何でも話すが、何日も少し深く話すと、止めたがる。

始終「私なんた年取つてしまつて不滿らない、若い人が羨やましい」と云ふやうな事云つて、泣いたりして居るが、それだつて何も眞似目に、自分の行末を考へると云ふでもなく、只だ世の中が、自分の思ひ通りにならないと云ふやうな事思つて居るらしい。或時は、意氣な銀杏返しに、一張らの御召の袷に、黒繻子の半襟を掛けて、すだうになんか、着て來るかと思ふと、もう次にくる時ゝ大ハイカラにして、白金巾のゑりキチンと合せて、女學生風をする。時々は馬鹿に若返つて、一寸した事にもゲラ／＼笑うかと思ふと、急に病氣になつたりして、伯母さんを驚かせる事も少なくない、家が餘り豐かでもないので、小學校終へてから裁縫がきらひだものだから、それなり家に居たので。……父さまなども心配なすつて「如何せそんな事して居るのなら、勤めにでも出たら如何か」などゝ、おつしやる度に、きつと「私なんか何したつて駄目だわ」とすねて、泣き出す、伯母さんも、我意に育つたから、とても」と、笑つて入つしやる。此樣な風だから、ただ一人、心切に世話しようと、云ふ者も無いが、別に夫を悲しみもせず、只々世が思ふやうにならないと、云つては世の中を、われからせまくして居る、私も氣の毒だとは思ふが、又、心切にしても甲斐がないのだから、もう近頃では、そうつとして、敬して遠ざける主義を、取つて居る、少し薄情かも知れぬけれど。……昨日も歸らうとして立かけ乍ら、英語を習ひたいと思ふが、初め如何したら宜いかと聞くから、オホ……貴女が、……とてもだめよ。大人でも素養の無い人は、アイウエオから初めるんだもの。貴女なんか、馬鹿／＼しく

てやれやしないわと、やつてのけると、つと橫を向ひて、だまつて居たが、いつか小聲で、老松か何か、やり始めた。知らん顔して居ると、急にあゝア……と大欠伸して、歸り仕度を始める。ちよつと立ひざして、庭の秋くさを見入つた橫顔の、淋しそうなつまらなさそうな面もちが、たまらなく氣の毒になつて、「もう御歸り……も少し宜いてせう。ね……と私は甘へる樣に、手をにぎつた。

一種の性格小說。今年十六の人にしては充分な出來である。と云ふが、作者の實境を描いたからであらう。原稿の文字が餘り奇麗で無い。(評)

【秀　逸】

○暗い壁

麻布　赤崎あい子

何時ものやうに密と木戸の方にまはると、お美代さんはボンヤリ庭を見つめてゐた。妾は何んとなく驚かすのが惡いやうな氣がして暫く默つてゐたが、思ひ切つて、

「お美代さん」と呼びかけて見た。果して吃驚したと見えて大きな奇麗な眼を見張る。例の如く又何か考へてゐたらしい。

「何をボンヤリしてらつしやるの？」といふと、

「妾？さう、其樣にボンヤリしてゐて？」と何んとも言はれぬ淋しい微笑を浮べる。

妾は木戸を開けて這入つて行つて、縁に腰を下した。極めて晴れた日て、空はキラ〳〵する程澄み、午後二時頃の太陽が斜めに照らしてゐる。併し最う十月末のやうな溫かみは少しも無つた。二三日前に來た時には盛んに咲いてゐたコスモスも、何時の間にか全然萎へてゐる。昨夜の霜の故かも知れぬと思ひながら妾は、

「お美代さん、コスモスが萎れちやつたぢやありませんか。」と顔を覗き込むと、

「あゝ、何んだつて皆萎れちやうは。」と投げ出したやうに言ふ。暗い影が頬の當りに漂ふてゐる。妾も何んだか淋しいやうな氣がしてならなかつた。お美代さんは又默つて了つた。そして妾も言ふ事が無いので、矢つ張り沈默を續けてゐた。暫くすると今度は、

「定子さん。」とお美代さんから聲をかけた。定子とは妾の名てある。

「何に？」

「貴女、恁う悲しい事はなくつて？」と胸の上の方を手て押して見せる。

「妾？無い事も無いは。何故？」

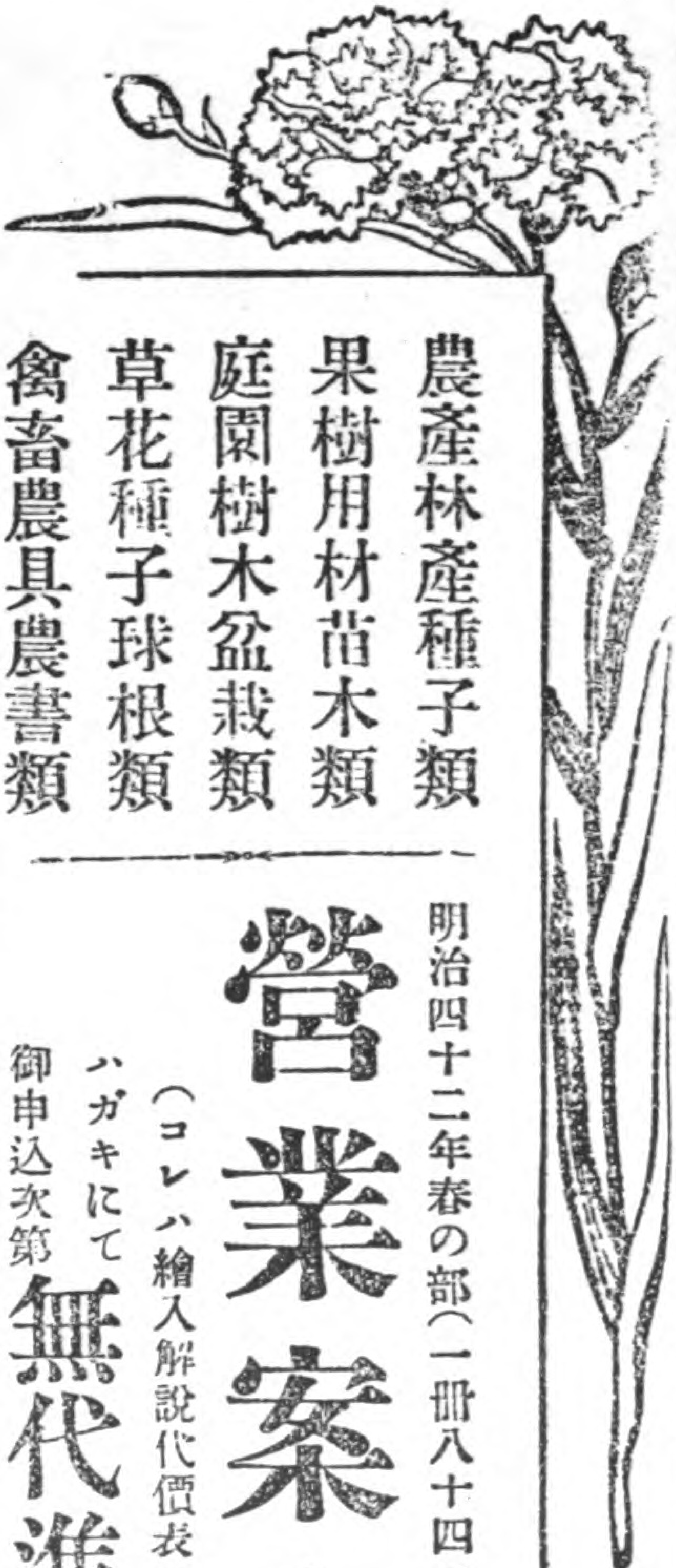
「何故つて事はないんですけれどね、妾此頃、一人て

買物(かいもの)用達(ようたし)

女子文壇社にては愛讀諸孃の御便利を計り東京市内に於て發賣する**書籍雜誌**に特別に**定價の壹割引**其他**文房具化粧品、西洋小間物、玩具**等有らゆる百般の物品は**定價の五分引**其外は手數料申受ず誠實に御用達致しますから多少に拘らず御申込下さい

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
（振替貯金口座東京第壹七貳九番）

女子文壇社用達部
（電話本局六百七番）

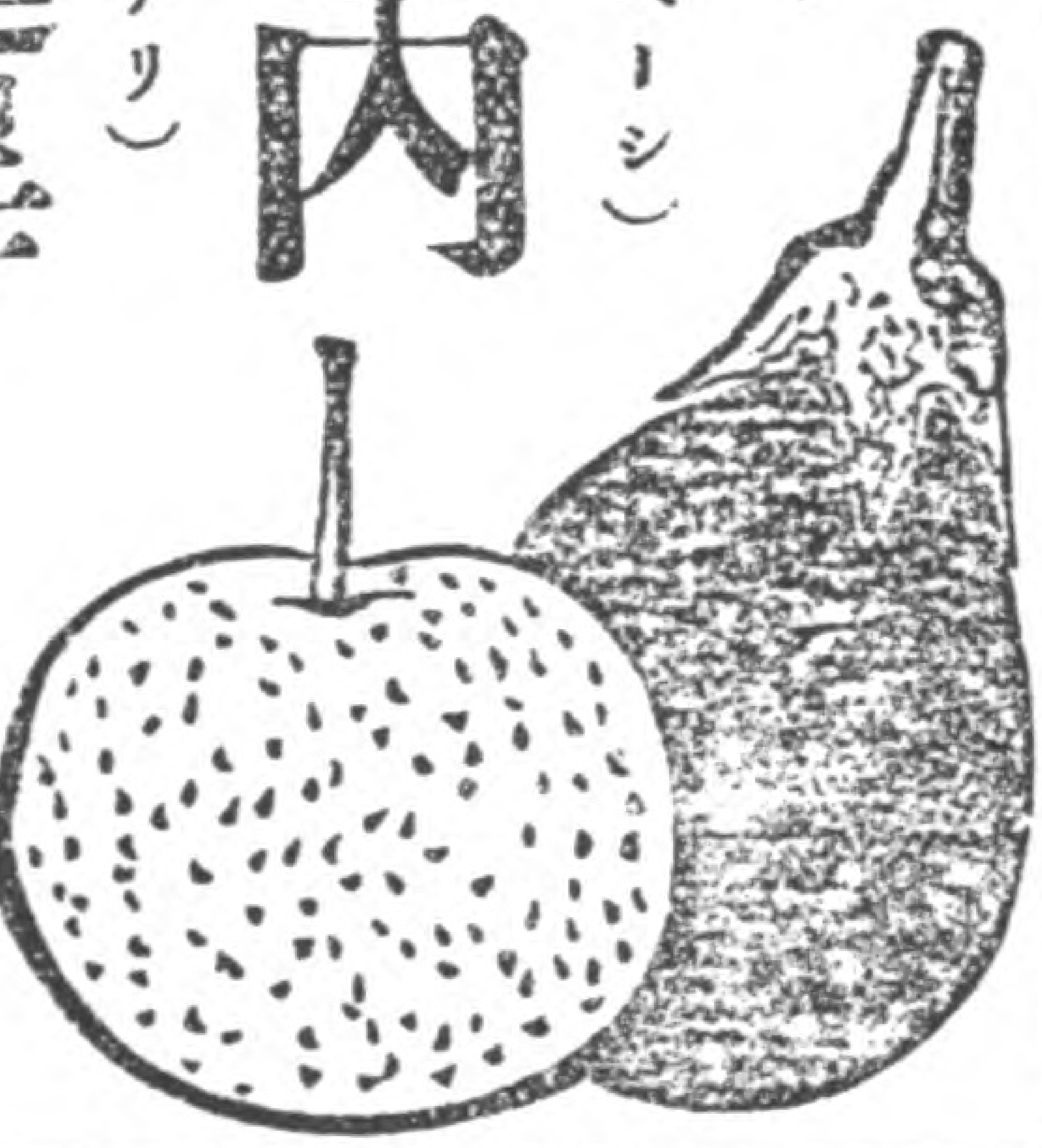


農產林產種子類
果樹用材苗木類
庭園樹木盆栽類
草花種子球根類
禽畜農具農書類

資本金七拾萬圓

營業案內

明治四十二年春の部（一冊八十四ページ）
（コレハ輸入解說代價表ナリ）
ハガキにて御申込次第**無代進呈**



東京 內藤新宿電車終點際
（電話番町一八一六番）
日本種苗株式會社

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大懸賞愈開始
壹等五拾圓
五等迄各贈賞

外に通常懸賞各種募集あり壹回の當賞者三十名以上

(毎月一回一日發行)
新文林
(大々刷新紙數增加)

價拾五錢郵税壹錢五厘半年分郵税共割引九拾錢一年分同大割引壹圓七十錢

新年初刊號出來・口繪(文壇名家秀才才媛泰西名書)七頁・本文百八拾餘頁

小説 濱(附錄)……小栗風葉
小説 空想家……柳川春葉
小説 或る日……德田秋聲
小説 舊思想……眞山青果
小説 小姑……三島霜川
小品 元日物語……齋藤弔花
文壇詩壇評論……蘆谷蘆村
天華地華……渡邊光風
○殘雪(内海泡沫)○除夜(文學士靜也)○闇(佐々木愛湖)○イタバ(山口鐵劍)○辯士月旦 其他材料豐富

文藝陣
是れ青春男女諸君が文技を戰はすの壇場にして毎號壹百廿頁内外を開放す

各欄選者
▲論評文 蘆谷蘆村
▲短歌 渡邊光風
▲叙事抒情 日記寫生文 千葉江東
▲新體詩 蒲原有明
▲短篇小説 大倉桃郎
▲寸珍小説 鮫島大浪
▲五行文 三島霜川
▲口語詩 正富汪洋

▲葉書消息 石丸梅外
▲俳句 關石鐘
▲評釋 蘆谷蘆村
▲漢詩 榎本寬齋
▲新川柳 柳壇諸名家
▲スケッチ書 渡邊香涯
▲筆蹟 坂谷雲岫
▲寫眞判斷 大極堂
▲其他 編輯局一同

發行所 東京神田三河町壹丁目十九番地(振替貯金口座三八一五番使用) 白鳳社

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

學生文壇低廉無比

口繪優美鮮麗なる寫眞版◉評論異溪氏が犀利なる快筆は堕落せる現代の青年を救ふに餘りあり◉文藝▲小説藤公孤山▲小説中學教師玄雨▲小説貧乏神アーヴィング著、雪江譯▲一上山大阪のわらは等◉講義平家物語二葉生……▲其他

何れは改題

學園

第參卷第壹號

一月一日發行

定價一冊金七錢　郵税金五厘　六冊前金郵税共金四拾貳錢　十二冊前金同七拾七錢

價の廉なるは天下無比也。材料の選擇につとめたるは天下無比なり。廉價を以て津々たる趣味をとり得べきものたゞ此の雜誌あるのみ。而も初號より今日に至る迄堅實なる思想を以て世の濁流に抗して立ち俗惡と戰うて一絲不亂なるは聊か誇とする所也。本誌は會員組織を設けて質疑より作文、和歌、俳句の添削に應ず。

發行所　大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文館　振替口座東京第壹參五〇番

東洋婦人画報

四十二年一月一日發行 毎月一回

正月の巻

一部二十五錢 郵税二錢 半年一圓四十七錢 一年二圓八十二錢

◎新年號の畫報は如何に光彩燦爛たる盛装を凝らせるかを見よ

畫報

◎御新築の東宮御所と東宮同妃兩殿下
◎徳川實枝子夫人
◎妃殿下の餘興御覽
◎子爵令嬢の養鷄
◎二閨秀作家の書見
◎追羽子
◎古樂五常樂
◎表彰されし十名家夫人

◎更らに新なる心を持て……大隈伯爵
◎男子に對する態度を一變せよ……新渡戸博士
◎思ひ出多き新年……下田歌子
◎姑となりし初めての新年……鳩山春子
◎私の十才の折の正月……跡見花蹊
◎笑つて過ぎし正月と泣いて暮らせし正月……小川直子
◎娘時代の新年……三輪田眞佐子
◎妻君と下女……大町桂月
◎暹羅の新年……安井哲子
◎女學生とかるた……山脇房子

大附錄『筆はじめ』

は石川寅治畫伯が傑作にして艶麗花の如き美人が新春の書室に於ての筆はじめ二頁大の石版十五度刷の頗る逸品なり

畫報

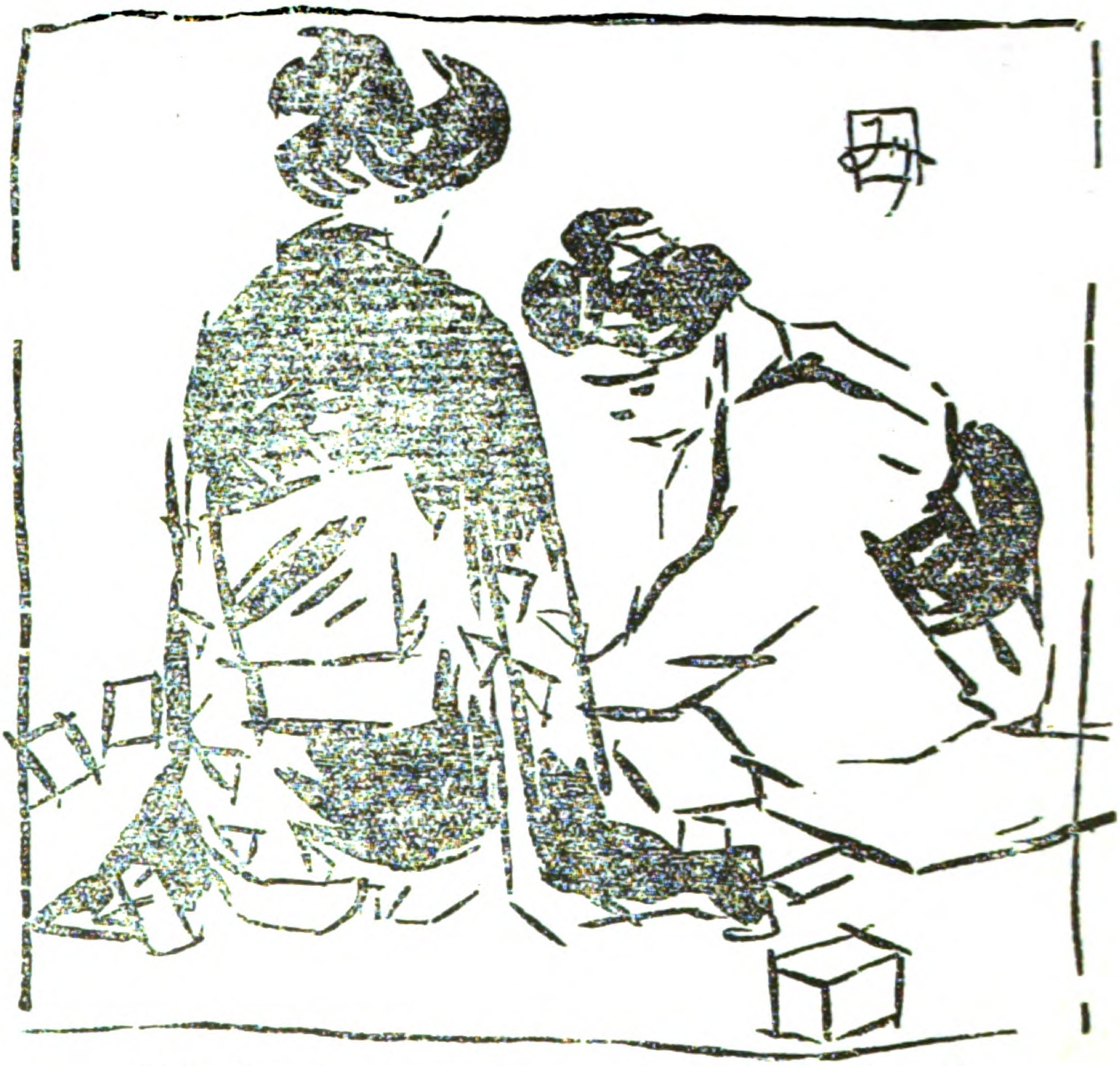
◎女學生の自轉車競爭
◎春装の高橋夫人
◎花の如き新郎新婦
◎御題雪中松
◎令孃鑑
◎姉妹の合奏
◎公爵邸のしるこや
◎若き貴婦人
◎庭園に於ける三女史
◎其他十數の寫眞版

◎支那の新年……清藤秋子
◎新年の小兒の遊び……岸邊福雄
◎主婦の心用ゐ一ッて異ふ兩家の新年……遠山稲子
◎小說春の夜……三宅花圃
◎小說退會……大塚楠緒子
◎初春の歌に就て……太田みづほのや
◎女の理屈……紅芙蓉
◎正月の料理……龜井まき子
◎衛生より見たる歌留多……鷲山彌生
◎其他書のはなし(井上生)占ひ婆(葉舟)流行(をんな)老人笑話。家計簿。正月の花等頗豊富なり

◎新年號の記事は頁數を增加すると共に如何に發展せしかを見よ!!

東京神田 小川町四十一番地 **東京社**

默つて考へてゐると、それはもう堪らない程胸が迫つて來るの：：：。」聲がしんみりしてゐる。
「妾はそんなでもなくつてよ。お美代さんは少しどうかしてゐるのよ。」と妾が言ふと、
「さうね、どうかしてるかも知れないのね、いえ必つとどうかしてるのよ、おつほゝゝゝ妾の頭には濁つた血が一滿なのよ、」と又微笑する。
その時室の中で小母さん（お美代さんの母上を妾は恁う呼んでゐる。）の重い暗い聲が聞えた。お美代さんは立



（地賞）　かるた　紀伊　穂田美津子

ち上つて内へ這入つて行つた。左の足が惡く跛引いて行く後姿を見てゐると妾は又も淋しい淋しい心に襲はれた。
お美代さんは妾よりも二つ上の十八である。眼がパッチリして大きく、色が白く丸顔の美しい顔だ。幼さい時乳母車から落ちたとかで未だに足が惡い。
妾は曾つて小母さんから聞いた事を思ひ出した。小母さんといふのは五十五六の身躰の小格な品の好い顔をしてゐる女で、氣の弱さうな暗い重い聲で恁んな事を言つた。

「足が惡いものですからね、折角の嫁入時を……美代も不幸の娘ですよ。」

と恁ういふ時妾は何んと答へたらよいのか解らないのて、何時でも默つてゐる。そして又、

「可哀相に十二三の時はそれでも大變活潑な娘でしたのに、此の頃の僻ぎやうといふのはありませんもの。」

と小母さんは哀れな娘に就て更に附加した。妾はそれからそれへと考へる。不具な娘、そして娘を思ふ神經質の母——秋の暮のやうな佗しい不透明な色がお美代さんの家全體を包んでゐるやうな氣がした。

暫らくしてお美代さんは障子を開けて出て來た。ポンヤリした調子で「定子さん、お上んなさいな。」といふ。小母さんも中から「お上り遊ばせよ。」と聲をかける。妾は上つた。そしてお美代さんの後に從つて室の中に這入つた。六疊の、天井の低い頭を壓しつけられるやうな氣のする室で、眞似事みたやうな床の間がついてゐる。床の間に比較的寄つた方に、薄つぺらな蒲團が敷いてあつて、色の青ざめた顏をして小母さんが寢てゐた。「小母さん、お加減が惡いのですか？」と妾は驚いて聞いた。

「あゝ、昨晩から少し頭が痛みましてね……それでも大した事は御座いませんのですよ。」小母さんの聲は嗄れてゐた。お美代さんは又何か考へてるのか默つてゐる。妾は火の氣の無い穴の中に這入つたやうな氣がして、緣と反對の向の光線の當らぬ壁を見つめた。壁——灰色の暗い壁。默つて見つめてゐると、妾はそれがお美代さんと小母さんの運命を操る冷い手のやうに思はれた。

「大變寒くなりましてすね。」と小母さんが言つた。

「あゝ。」妾はぞつとしながら答へた。

「朝學校に行らつしやるのが御辛いでしやうね。」

「いゝえ、其樣でも御座いませんよ。」

併しその對話は直き杜絕えて三人は默々の間に種々の思ひに耽つてゐた。間も無く妾は辭して歸りかけた。門を出る時、四時頃のうつすらとした初冬の太陽の光を浴びながら、又しても不具な娘と、病の母と、そして暗い冷たい壁の色とを、妾は頭の中に繰り返さずにはゐられなかつた。

不具の娘と其母と、陰氣な親子の家庭が能く出てゐる。シンボリカルの筆も能く其材料に適してゐる。（評）

○傷痕

大分　錦子

寢返りをした機勢に硝子障子を透して、白い光線が、

パツと顔を照した其瞬間に、私はハツとして睡から覺めた。四隣は寂として何處か遠く遠く戸に、犬の啼く聲が現の耳に鼓膜に傳はる。南向の窓の曇硝子の西に寄つた、眞中から少し上方に、光線の强い所があつて、其から心持弱い光線が、四方に散つて居る。東の端に枝垂柳が分明と影ッて居る、どうかすると極々微に搖れ、る動く、耳を欹て居ると其度毎に何か私言てる如に思はれる、少さい影が時々飛ぶのは落葉するのだ、然雖確に外には、風は無いらしい。

小時して犬の遠吠が止むと、人の世は一種の沈靜に返る。私の腦は愈々鮮明と冴て來る、連想は連想を、生んで過去の幻影が、走馬燈の如に腦中を驅け廻る。心の奥の奥の底に、針て刺す如な痛を、感じるのは硝子を透す秋の夜の寂れた氣を含む冷つこい月光が、其處に觸れるからだ。

心の續く限り、涙の在りッ限泣いて、泣いて、泣き拔いたら、私の魂が今の壓迫から彈ね返つて、膨脹て死斯と化て、氣躰と化て、誰かの魂を包んで了たなら心がすつきりと消れさうな氣持がする。

他人の魂と私の魂とが合して融和たら、心が輕うなりさうに思はる丶、相手は男でも女でも誰でも宜い。

脫し得られないと斷念して居た、境遇から脫し得て、ホッと發した喜悅の息が、却て今は私を壓迫する如に感ぜられる。

老夫婦の間に一人娘と生れた私は、三ッの時に既に、人の妻と定つて居た。年月の經つに伴れ、物心の附くに從つて、兄樣とは一時の名稱、七郎樣を永久も、永久も兄樣と呼ぶ事は出來ぬのだと悟つた時に、父母や伯父や叔母が逝つた後に從兄弟が何になる？半身と賴む良人も時に依つては敵となる、百萬圓の黃金も心の不滿は充す事は出來ぬ、其よりか此なりに永久迄も七郎樣を兄樣と呼んて、私が人の妻となつた時に、母となつた時に、身に負ひ得ぬ事のあつた時に、相談相手となつて欲しい、何時迄も何時迄も、兄樣と呼び度と願つた事はあつた。然雖、決して、決して兄樣、七郎樣な良人と呼ぶに不滿があつたのではない、常に私には過ぎる位だと思つて居た、誰よりも誰よりも、一等好きだつたのだ、成績がよいとて學友に誇り演藝會に好評を博たとて、夢中になつて喜んだ。兄樣の事と言ば無精に嬉がつた。決して愛せぬのではない、唯兄弟以上の愛を捧ぐる事が出來なかつたのだ。七郎樣の熱烈な愛が、却て私に滿身の愛を捧ぐる

餘裕を與へなかつたのだ。

愛の壓迫に噎だ私は之を避度と欲た。

丁度七郎樣が東京の高等商業を御卒業なすつた年の十月、愈々來月結婚式を上げると言ふ時になつて、其以前から大分紛訌してゐた、政黨上の爭は、急に頭を擡げて父と父との衝突は、年來の交情を害た結果、遂に七郎樣の御生家から、破談を申込て來た。

日頃から彼方の父の人物を好かなかつた父樣は、「人前がなかつたら、此方からこそ、破談にして貰ひたかつたのだ」と誰に御相談もなさらず、御承知なすつて了た。而して二人は永久に隔てられた。

其時の私は、小鳥が籠から離された如に、無形の壓迫から、逃れ得た喜悦の爲、他を顧る時がなかつた。

七郎樣の落膽を見て、一種の誇を覺えたのは、ホンの小時てあつた。其から（二年餘）以來兩家の交際は絶てゐるので、七郎樣の消息は知る筈もない。

然雖どうかすると思ひ出す、が其は良人と呼び度のてはない、兄樣！と御膝に縋つて涙の限り泣いて見度如な、別れる時に「雪さん、涙は女の占有物てはないよ」と御仰しやつた涙が、七郎樣を支配しては居ないだらうか？‥‥と案じられる。五日の後は人の妻と定つた今日何だかすまぬ如な‥‥壓迫を感じる。あゝ私は‥

私の心を欺いて居たのだらうか？

愛はあるが、約婚と云はれると對抗心が起る。さて又自分が他へ嫁さうとなると、前の愛が自分をそゝる。是も近代的と云はうか、女性の矛盾性が面白い。文章も無難だ。（評）

○港の女

山梨　井上笹波女

濡れた手拭をパタリと拂つて欄干にかけて居ると、八疊間の隣の机に倚つて、手紙を書いた後らしい卷紙へ徒書して居た實子さんは「文子さん、弘さんは支店に居たやうでしたか？」遊泳するだとか猿股一つで濟て噪いて居たのを見かけたが妙に揶揄つてやりたいやうな氣がしたので「どうてしたか？遇はなかつたわ、何故？」「何故でもないけれど‥‥」と下唇をかんだ、これがこの人の癖て。

「何ならお迎ひに行つて參りませうか？」「あら左樣ぢやなくつてよ」と眞赤になつて下向いた。「そんなに秘さなくてもいゝわ、貴女の秘密皆知つてゝよ」私は心にもない事を云つて見た。「秘密」と、どきりとした樣子て頭を上げたが「そんなものありやしないわ」何てもなく筆の先をなぶり乍ら、わざとらしい眞面目な顔をして微笑した。

何かの話につけてよく弘さんの名を聞くが、別て此頃私が濱から歸れば、定つたやうに斯んな事を云ふ。私は讀みさしの小說を床の間から取つて、腹這ひになつて見て居ると、實子さんは不意に私の後から忍んで來て本を閉じた。「あら酷い！」云ひ乍らふり向くと、「およしなさいよう、小說なんて讀むと人間が軟化して了ふわ」と下眼を使つてたしなめるやうに立つて居た反對してやりたかつたが、敗ける嫌ひの性質はよく知つて居る、張り合つても限りがないと思つたので「私だけは大丈夫よ」それには答へやうともせず、雨上りの露を帶びた芭蕉の葉をぢつと見て居たが、「變な事云ふやうだが、貴女は弘さんをどんな人だと思つて？」「どんなつて？左樣ねえ、考へて見た事はないが、男らしい、いかにも軍人らしい方だと思ふわ」云ひきらぬうちに兩手を振つて「大誤解だわ、あれて仲々いけないのよ、東京にも女を圍つて置くつて伯父さんが左樣云つてたわ、ねえ文子さん、女に許り操を守れつて男は何をしてもいゝか知ら？私は操のないやうな良人は有たない心算よ」と息をはづませて居る。「ホ……豪い勢ねえ、弘さんはそんな方てしたかねえ」と私は輕く受け流して居た。



（入賞）枯木　牛込　佐野良子

十日許り前から私が宿つて居るこの吉野館は、實子さんの伯母さんの家て、此家の一人息子の弘二さんは陸軍士官學校の生徒だ。支店は濱の景色の良い岡の上にあるので、本店に宿泊して海水浴をする客の休所になつて居る。て日中は女中なども大概支店の方へ行つて居る。

實子さんの故郷もやつぱりこの港で、生家は一丁許り距つた横町の、大きな網問屋だ。歸省した當座はその方に居たが、ゴタ〳〵してうるさいとか云つて、この四五日前、丁度、弘二さんが歸省した翌朝から、私の室に同居して居る。書を讀むでもなく、海水浴をするでもなく只ぶら〳〵と日を暮して。「どうです、海水浴をしませんか」と云へば「海が恐

いからとか何とか云つて、朝夕磯を散歩する位だが、實際は色が黒くなるのを恐れての云ひ分だとは、私もよく知つて居る。それでも日に二度位は何かの用をかづけに歸宅するが、今日は朝から落ち着いて居た。

それから二十日程も經つた或日、私は例の通り一人で濱から歸つて、裏庭から入らうとすると、主人の大切にして置く、しやぼてんの、莖は折れ鉢は碎けて、廊下の上にも土塊が散つて居た。臺所からは「あれ程約束して置き乍ら先きに歸るなんて……今日は餘り失敬な事を云つたから……」と、めつたに本店には姿さへ見せぬ弘さんの切れ〴〵な、濁聲に交つて誰かなだめる聲がした。何だか樣子が變なので、胸をわく〳〵させ乍ら自分の室へ入ると机の陰に實子さんは、兩鬢を振り亂してすゝり泣きして居た。私が柱の側に立つてるのも氣付かぬ樣子なので、罪とは知り乍らそつと其室を出て、又濱へ引きかへした。道すがら「あんな不節操な女にも良心はあるでせうか？これが皆この港の娘ですよ、私の友達なども混つて居るが口をきくのも穢らはしいわ」と姿を見る度に、實子さんが苦い顏をする酌婦連の幾組かに遇つた。

今日の樣子を氣にし乍ら四五回も汐を浴びて、日が暮れてから宿へ歸ると、實子さんの姿は見へず、机の上に紙片が乘つて居た。「私ねえ少し都合があつて、今日から横町の方に居る事になつたから時々遊びに來て頂戴」と只それだけ走り書きしてあつた。

學校へも、もう二三日の中に歸らねばならぬ。此港へ來る途中へ一晩宿つた時「私此地で待ち合せる人があるんだが貴女と同伴だから先に歸るわ、惡いか知ら？」と云つた實子さんの言葉と其時の顏色とを思出した。

此前選者は此作者を男と誤解してお氣毒な事をした。而し男と誤解するほどに此作者の文章は力があつてシッカリしてゐる。此作は餘りに書方が粗ら過ぎて、實子の性格が充分浮ばぬ憾みがある。（評）

○行く路

埼玉縣　中村勝子

秋の弱い光をお揃の桔梗色洋傘で避て、英子樣と私は村の芝居みにとて家をでた。板橋を渡つてからは道巾が狹くて、二人洋傘を並べては歩けない。英子樣はパチリと洋傘をすぼめて「いれて頂戴」と私の洋傘に入る。「四時に始まるのだから緩々ゆきませうね」、口許に溢るゝ許りの笑を湛へて、墨をさした樣なパッチリした眼で私をみる。「ハア未三時よ、大丈夫、私は時計を帶の間に入乍ら「私の村ぢや書生芝居は初めてね、」つと眼を外して村の方をみるとお祭禮だけに一人も仕事

してるものはない、見渡す限り黄色の稲田許り、道傍からピョイピョイ蝗の飛出すのを面白さうに見てた英子様、思出した様にほゝゑんで「私達はよく見物いつてね、もう三日續けてよホ……」玉子色の半巾で口を覆ふと、菫香が又新らしく鼻をつく。「私ね不思議に思つてよ、東京の學校に居た時だつて餘りお好でなかつた芝居に毎日お出なんてすもの、田舎の芝居なんか面白くもないなんて私を甚く攻撃した癖に……」紅の寶玉を白薄絹で包んだ様な美くしい横頬を覗き込と、英子様は奇麗にお化粧した圓い活々した顔をクルりと向て「だつて今迄は村の役者で剰に定例昔のばつかし、あんなの大厭だわ」故意とらしく眉を顰めて、束髪に挿た白薔薇が落るかと思ふ程頭を振る。そして道傍に頭を垂てる稲穂を洋傘でツツツツと打作ら平生の美くしい癖の、一寸頭を傾けて物思ふらしい風をする。小豆色二枚重の揃模様、袖の長いのが丈の高い英子様には好似合て、歩く度にユラリ／＼緩やかに搖る。藤色の裾がさばける下からは緋縮緬の長襦袢がチラ／＼と。其様子が恰ど、一昨日は不如歸の川島浪子になり、昨日は又、影法師の船越菊野になつて、英子様がそれは／＼家へ歸るまで口を措かず賞てた、何とかいふ役者の菊野になつた姿によく似てる。」英子様そうした所はあの船越菊野にそつくりよ。英子様は吃驚した様に顔を上て「アレマア眞個!!私嬉しいわ利江様!」つと洋傘さしかけてる私の手に縋る。「アラ何なさるの洋傘で髪が亂れる事よ」「亂れてもいゝわ私ね利江様」つと力を入て私の手を握つて放して「全く私が似てゐて？そう、嬉しい！私はね、芝居なんか如何でもいゝの、全くを云ば只あの菊野になつた人が……みたい故なのよ、全く氣に入てよ」と物事に逆せ易い英子様、眼を輝かして「あのそら菊野が北海道の監獄の前で父様と抱合つて泣たてせう、あの時の口許の可愛い事つたら……あゝ私忘れられないわ」血の多い肥つた美くしい手で胸を抱き作ら英子様は、恍惚した様に上をみつめて無意識に歩いてる。まあ英子様たら私の前でよくもあんな事がいえたものと末心細い様な氣がしたが思直して「ホ……大層お氣に入ね」といふと英子様は耳にも入ぬらしく「私昨晩ね考へたの、寧そ女優になつて一生彼人達と一所に、身を藝術の神に捧げようかと、學士の妻の何のつて四角ばつて暮すより、その方がいくら面白いかしれないもの。」此の言葉は激く私の胸を突た。私の兄は英子様と許婚で現在農科大學に在

學中、やがては學士となるのである、であるのに私の前で今の言葉は!?、兄は英子樣が許婚となつた頃の樣に兄を慕ふてる者と固く信じてるのだが……英子樣は果して兄を愛してるだらうか、無論兄が卒業てくれば又兄を慕ふだらうけれど……。「英子樣、何を仰るの、あんな素性もしれぬ書生俳優など……また貴女がなりたいなんて身分を考へてご覧なさいな、戲言も程が有升わ」「アラそんなに見下た者ではなくつてよ、あの人なんかまして、必と此の藝術界を改革する立派の心を持つてるわ、そりや必とよ、私素性なんかいゝわ」と鼻息を荒くして「私ね厭な思して暮すより、自分の心を満足させて死ぬ方が好だわ」。私は反抗しようと思ふたが、英子樣の頰がポッと赤くなつて餘程逆上てるので默つて了ふた。一躰英子樣は熱し易い人、自分の言出した事は是が非でも……併しまたペキント折る人。いつだけか軍人て大騷したが今度も矢張いまに冷るのだから今反抗するにも及ばないと故意ニッコリして「私惡かつてよ許してね」、英子樣も笑顏して「アラ私怒りやしないのよ貴女」殊更に私の顏を窺込で「早く歩ませう私早くみたいわ」、先になつてゆく。「彼の樣に氣が變り易くて兄と長く平和が保てるかしら、併し兄は英子樣を信じて、私の言はきゝやしないんだから、兄は兄だけに何處か信じる所があるのだらうけれど……」不思獨り言ちた。そして私は今更に兄の前途が思ひやられた。

熱し易いと云ふ其性格は面白いが、敎養ある處女が田舍廻りの壯士役者に熱すると云ふのは如何かと思ふ。況んやそれを約婚の人の妹に口外するに於いてをや文章。は色彩に富んで豐麗だ。（評）

それは火事の晩であつた。夜の十二時過ぎ、川一つ向うの深川に出火があつて、私は擦半鐘の音に吃驚して目を醒した。お作媼さんもお母さんも慌てゝ飛び起きたが、川向うと隔いて安心して、二人はすぐ床へは入つて了ふ。私は東京へ來たてではあるし、火事珍らしさに一人起き殘つて、寢衣の上に羽織を引被けながら川畔まで出てみた。何れも川向うといふので落着いて居るのだらう、焰の照り返して屋根も庇もカッと赤くなつてゐるにもかゝはらず、軒並ひつそりと寢しづまつて居て、明り一つ洩す家もない、淋しい川沿の片側町を、長提灯の影がまばらに駈けてゆくばかり。それでも河岸緣には、邪過邏逍人の立て居る影が見えて、やれ風がないからだめだの、やれ大きくなりそうもないだのと、好きな事を言ひ合つて居る。深川も可也先方だと見えて、焰は低いが、なにしろ雨氣をふくんだ空へ一面に輝いて、大川の流は晝よりもあかるい、赤い空が水にうつゝてチラ〳〵焰の流れる樣な中に、大小數しれぬ舟の影が一つ〳〵かッきりと浮き出て、何の舟にも黑い人影が突立つて居る、川上の永代橋は提灯の影が入りみだれて、丁度火で出來た長虫が宙を渡つて蠢めいて居る樣だ。後れ走せに駈け着ける喞筒のけたゝましい音が橋の上に轟いてゆく、木遣の聲も聞こえる、私は東京の火事は勇しい華やかなものだとおもつて見て居た。

—（風葉ぐうたら女より）—

新體詩

横瀬夜雨先生選



○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○靈鏡（天賞）

信濃　太田喜志子

かすかなる草の匂ひを
逍遙のやみにてそかげ、
くねり松、杉と並びて、
森厳の暗を劃れる
北の方に瞳こらせば
太陽の光り消えつきし、
丑三の中空に、
雙生兒星、ちらつく星のかずうけて、
青黒くほのかに光れる
小さき泉見出けり。
白日のひかりを疑ひて
たゞよひふるふさすらひの、
ものゝ魂いざなひて
冷たく澄める其の面よ。

神のみ胸にかけられて、
いく千年を秘められし、
靈鏡今ぞ見る。
はづかしや、
若きを一人いたづらに、
沈める豚のいとほしく、
僻みては――夜の寂しらに慕ひよる
こゝろの起りかへり見る
わがてのすがたうつらばいかに―。
あゝ黒髮の根は
一すじ毎にさか立ちて
呼吸するたびに伸びゆくか、
重たきうなじ。
ねがはくば――
靈肉をはなるゝたましひの、
みそらを下りて、暗き氣となり、
寂なる空の泉の
不朽のひかりに
溶けて入らまし。

十一月十九日の夜、落葉を踏んで池をさまよひて池のほとりに立ちて作れる詩なりときく。信濃は山の高き國、地上の水を天にうつしてたゞちに神のかけたる靈鏡と爲すこの才あなどるべからず。しかも山田邦子と郷を同うして邦子より長ずること一歳、彼れおくるゝか此れすゝむか、進は近し、つとめよや。

○むしぼし（地賞）

大阪　木村春江

銀の燭火てりかへす
六曲の屏風たてこめて、
はれの一夜を胸高に
〆ける帶の廣きゆゑ
刹那の君が乳の上に

さわげる波は見ざりしか
ひなに遊ぶ十六を
賀名生の西に嫁ぐとて
角帽子せしたまゆらは
心の病も忘れけむ
つねは寂しき姉君の
眉も匂ひて見えにけれ
衣桁にかけし綾衣の
袖の紫思ふにも……
疊みかぬれば身に被けて
姉に肖たりと人のいふ
眉毛は知らず、たまゆらを
いたづら伏しの夢追ひて
短かき君が春に續ぐべき。

『曇鏡』の作家を現代の女とすれば『虫干』の君は舊き世の人なり、彼の氣のきゝたる、此のしとやかなる、ふたつながら敬重すべし。

○曇れる鏡（入賞）

房州　高梨知世子

曲り角髪ゆひ床の
縁の箔はげたる鏡
ひと入りて光り薄らぐ
玻璃の面――生命の疲勞
髮結ひの爺九十二
この主物を聞けども
この鏡物をうつせど
老ぼけて響も影も
定かには止まりも得せず
三味彈きも尺八吹きも
門に立つあれ一時
行き過ぎぬ曇る鏡に
戀のかげ映して消して
老人が聾せる耳に
悲の唄を殘して。

これは非常に感じのよい詩である、誰でもよく見受る景だが、千葉縣からの投書といふと十が九つまで眉毛に唾をつけさせる中にあつてこんな詩の來たのがめづらしい。

【秀逸】

○枯生

失名

草も枯れぬ木も枯れぬ
名無き流水もかれ〲に
野は親を失ひて
人の影さへ遠ざかる
萬古の道を説きつくし
聖僧寂に入る如く
默然として大野原
枯生黄色に横はる

僕かつて歌へらく『大野のきはみ草枯れて、火はもえやすくなりにけり、水せゝらがず鳥とばず、うごくは低きけふりのみ』と、最いたづらに大にして聖僧寂に入るが如きかなしみなかりしをうらみとす。

○胸

駿河　齋藤みね子

一人、ただ、いづこともなく
うらぶれてゆく路傍の
樹のかげに古き家あり。
はつ秋の灯點しごろを
くらがりに、人待つ廂

鎖されしまゝに崩れて。
ああ、胸のやれては君の
歸りきて住まざるものと
似たらずや――月はの
ぼりぬ。
夜となりぬひとめぐり
して
きて見れど人待つ廂
鎖されしまゝにくづれ
て。

説明してしまつてはまついけれど。冬隱春乃大野乎燒人者燒不足香文吾情熾、丸雪降遠江吾跡川楊雖刈亦生云余跡川楊。又いふ、君は別に天野ふじ子の名を用ゐて來てゐるがこれからそんな不正直なことをすると許しませぬ。

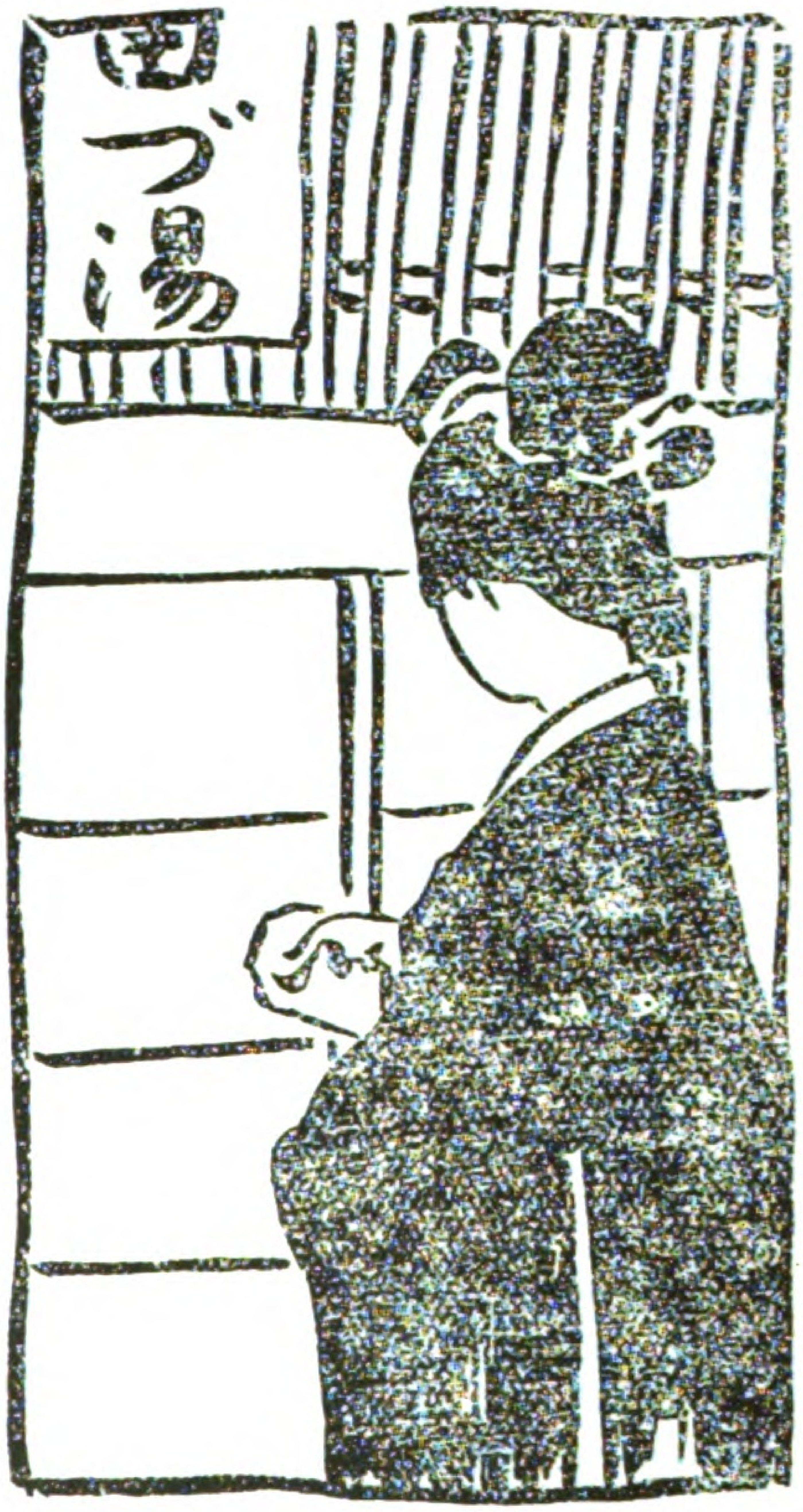
冬　玉

○若き笑

美津子

明けて迎へん新春の
去年を限りに落したる
肩のあたりの撫でやかに
自づからなる微笑の
秘むれど浮ぶ少女氣や
一年前の春の夜に
嫁ぎし姉を映したる
二九の齡の榮の日に
召せと賜ひし綾衣手にすれば
緋色の裏のほの見えて
若き我日を誇りぶり
鏡に向きて包み得ぬ
色よ、君見ば。

太田らく子さんの『若き耻らひ』が前にあるので、づぬけて佳いのなら兎に角、これではまだ採れない。



信濃　宮澤澄子

○籠

北米　合屋るり花

姿は鳥なりし‥‥籠の内
に、
飲まむに、情、泉湧き、
食まむに、寶、木菓なる、
夢むに、愛、暖かし。
されど雲井の友の身や、
南枝に歌ふ友の聲、
きゝては、青春き胸の血
汐は、
溢れてゝたり、籠の外に。
灰色なす――雲の斷れて飛ごとに、
森を掠めて翩然と、
綾を曳く鷹の影に、

歌はむ、うたは忘れたり。
涙枯着る丶胸を叩ち、
「饑飢」と「恐慌」を双翼に盛て、
ありし軒ばを眺めつゝ、
妾は、泣なり、夕晴に。

『われは鳥なり、十八年を』とありし十八歳の語を削る、よしんば三千里外に放浪せろ薄命の兒とすとも、傷鳥の靈非を戀ふるかなしみによするはあまりに古い、故郷在母秋風涙、旅舘無人寨雨魂、君が涙の何ぞ平凡なる。

○なつかしき眉

上毛　喜代子

花朝顔は泣き濡れて
夕暮の香に低首れぬ
さてそ我身は悲みの
眞洞によゝと咽びしか
涙の泉溢れ盡き
胸の思火悲しげに
焔を上げて其の昔の
戀しき眉を照せども——
幻なれば夢なれば

消えがてにこそ浮びつれ
夕暮朽つる朝顔の
あえかの樣を宛然に

『朝咲いてよつにしほるる朝顔さへも露に一夜の宿は貸す』いふから、と君のつくつたやつは夕ぐれまて泣きぬれてゐたことがあるのかも知れない。しかし胸の火は燃ともえふだらう しどんなに かきな臭かつたらう。

○逝く人

布哇　上土井定子

過し昔を偲ぶれば
薄靄に包む世は夢や
霞し山を見かへれば
よべの嵐に花は散りぬ
あゝ父は逝まし母は老いまし
杖にと丈てなてしこの
夕の鐘の胸に響きて
紅の膝に白露つたふ
うすき綠の色かへて
さと吹く風に煩ひの
野末に更し蝶のごと
病の床に散る紅葉

惑れ秋日のかたむきて
煩悶の蝶のひら〳〵と
殘る小萩に移る時
我が友はあへなく逝きぬ

翡なもとのみいふこと有りや、擲子に胸といふものありや、紅の膀、更けし蝶、苦しみて詩らしき詩を作らんよりはたゞありのまゝに歌へ。ダイアモンドヘッドに月落ちて霧モロカイの島にかゝる時、君が心に浮ぶある物なきや。況んや花下惑は深き他國の春。

○神無月

下總　小澤遊李枝

靜けき空を流れくる白雲悲し、
冷風に朽葉こぼるゝ神無月、
芙蓉の花も萎へはてゝあな衰への
眉目の色しみらに薰ず寂の露。
木の間もれ透く日影います、葉裏にしみて、
乾反葉はあはれ陰濕の地をつつみ、
嘆きの吐息——老ひほけし瞳のうるみ、

頽れゆく落葉の國の痛みを泣く。
あゝ黄金する入日かげ、うすれて行けば、
裸樹は過去の夢をし、たどりつゝ
ふとあくがるゝ、水無月の照り白む日に、
奏でてし、葉の樂の律調べ、
老い浸けし身のかぎりなき悲哀泣れ、
歎かるゝ――あゝ神無月日の夕べ。

擬散

○一夜

越後　佐藤浪子

月も無き、とこ闇の一夜なりき、
サラ〜〜と戸のあくけはひ、
ハタ〜〜と床の下を走る如、
輕く、しまりなく、怪しき音して、
氷の如き冷き手の、
ソト頬にふれしと、覺ゆれば、
叔母が此世の離別ぞや、と、
細きみ聲の、打ち絶えぬ、
夜一夜、案じあかせし、其朝、
都なる、叔母君の、逝きませし、と、
報せ來にけり、雨細き朝。

おばけ！おゝこわや。

○江の島の賦

神奈川　上原露葉子

鬼すむ島より流れて來たる
赤きほら貝の小城をつくり
運をまかせたり寄せ來る波に
君がろにからむ藻草の花は
潮の遠鳴をやがて運びて
渚に群れとぶ白き鷗の
朱冠の色にこくはゆるかな
すゞめは小波に啼いてはゝたき
黄昏の人の夢むすぼれず
玉藻袖に滿ち龍女の聲と
白浪噪げと浦島出てず。

賦らしき賦なり、大まじめに作つたと見える。

○指を切りて

岐阜市　篠田とみ子

あと云ふ刹那
如何なる機なりけん小刀は
我左食指を呪咀に似たり
熱き血潮は戀によふ味酒の如に
身を護らんと廻り來ては
道ふみわかれ道にはづれて
たら〜〜といたいけなう
眼閉づれば破衣せし額に
惱指に高かなる皷動繁し
あはれ白布染めんとにはあらざるを
眼開けば濃紅をぞや、やよ
ツキ〜〜のひびきぞまさる
眼閉づれば心は遠を迦るけはひ
堪へなん術もあゝ如何にせん此暫し

『破衣せし額』人さし指のあたまへきれの袋をかぶせたことをいふのであらう、氣取るのもかうなればもう申分はない。

○罪の小路

和歌山　伏見八千子

灰色に街路の土は早乾びて
時雨模樣の雲のかけり――

鈍き光線に乾反葉の、空に舞ふなる
夕暮よ
　罪の子を封じて
　冷かにそびゆる
　黒塗の大き扉
悪魔の聲がギイ〳〵と、鐵鎖のきし
り獄卒に
引かれ引かれて現はれし、女の囚人
小十人
縛持つ細き其手に握りたる戀の刃
(流血の罪)
あるは又色褪せし花にあきて濃き花
の香によひし(不倫の罪)
囚はれて此處に幾年、蒼白き額に彫
りし悔の字
錆色の衣油なき束ね髪
をどろ〳〵に流眄に、深笠の間より
見るはそも何
姿は瘠せて軀幹の覺束なげに
裳はき塵はき罪の小路を扉の方へ―

これだけの趣を捕ふる人であつて、かなの違つたのが十二もあるのはどうしたもんだ、も少しやさしいのを作つてごらんなさい。

○愛の大蛇

和歌山　岡崎さき子

豆菊の花に日影のにぶき日よ
道成寺蛇鐘を見んと、力なの足ふみ
しめて
三十の木階よぢぬ。
愛の執――黒髪はもえ〳〵て
少女は化ちぬ――七丈のをろち
卷しや八卷てゝの卷――銹ふかき鐘
玉の唇つとさけて、はくや紅炎――
怨念の戀の
内なる人は如何にぞや月代の青かり
しも夢よ
殘るは黒き一片の肉――
思ふ妻も女の身、白き乳房に蓋る胸
の
愛の扉の小暗きに、ひそめるは素裸
の大蛇
戀を僞る冷たき男の、手足を首を卷
かんとぞ思ふ。

素はたのをろちといふと、さしむき皮をひんむかれた蛇としかとれない、まさかさう、ぢやないでせう。月代はさかやきでもあらうか、大蛇の口が玉のと形容したのにも面くらう。

○あこがれ

芝區　眞崎靜子

露は置くなる天上の
星の來て寢る紅なるを
解き得ぬわれの紫の
小さき女の花は散る。

秘むれど足らぬわが胸の
響はゝや鳴る戀しさよ。
日向葵めぐる草にまで
君思はるゝ月の色。

亂るゝ雲はうつれども
うつらぬ君が紛な
胸にうつせば草の露
緑の香に消えたれや。

白き乙女の石像に
たゞ戀しとうちすがる
蕩に似たりや美しき
人の夢見るわれの憧。

○渦まき

熊本市　近野春子

菩樹立亞枝差し交ふ。
太陽の光。まばらに洩るゝ、
木陰の小川くねり〳〵に。

ふと大曲り。遙への深淵——暮色に。
群る棄甍の影を沈めて、
折々に寒風のどよみ。
底ひまで——世を呪ふごと、
渦巻きぬ。クルリ〳〵と、
やがて見よ黄ばめる木の葉。
流れきて、二度三度、
くる〳〵と——苑ら
の生活のもだへ。
心覗き、世の人の子
の、
誘惑に、落ち行く様
や、浮きつ沈みつ呑
まれ了んぬ。
父母も無く、孤獨の
身。
今にはたいくとせ
の、
甘き戀路夢圍めて、
そゞろにもさすらい
の、
堪へ難き寂しらに、
まのあたり、見る目
眥みて
ヒシ〳〵と今更のこ
と——胸の悩み
俯向きて目を閉ぢぬ——吾は。

○古跡の春　三重縣　美佐尾

胸とゞろ短簡見すれば、
狩衣の宮守人等、

熟睡せし夢やぬけたるよき花の
薫ゆるが中に、
くゆり合ふ心の丟烟。
甘酒くむ白銀色の、
盃を置きて紅の翅浮彫の窓によりしも、
荒れぬ〳〵春の光も、



舞姫　大阪　今西はるえ

暮色の焦土に反射りて、
影ゆらぐ跡の模様も、
かげろうに消えて跡なく。
あはれとて草にてる日も、
冷たしや花の一ひら。

○新潮　水戸市　靜代子

高啼く天の戸開きて、
黄金の光は闇へ
萬朶は瞬上けて、
悦樂の境に入る
初日さす海原は、
時といへる際涯なき
億劫の流れ遙へて、
大口に笑さゝめく
底ひなき胸の響き
よ、
靈き呑の溢れては
洗ひ去り清め來る、
新潮のさゝ光り
日の神と海の神と、
今入潮路を煙らせて
亂れ倚る胸と腕、
戰つ抱かれつ
ようも似ぬ我胸の、
砂漏れば湧く若思ひ

—❦—

▲正誤 前號新體詩欄秀逸「君を偲びて」の入代入重子にあらずして「扇子」と云ふ人の作なり此處に之を正誤す

草（課題）

河野槙

一

露の甕を双翼に抱きて
しづ〳〵と月の宮より
降りくる雲のひとひら
影うすう更けゆく夜なり。
冷かに默せる鐵路
響は遠く彼方に行きぬ
砂交り乾ける土に
花の命持つとも見えぬ
名無し草青き色のみ
淋しくも夢をむすべる。
夜の露重う沈みて
露も凍りぬ。
晝うけし野分の荒み
目もくれ心くれ
痍の疼きに垂るゝ葉や
莖も萎るゝわづらひの
涙のひまにふと見ゆる、

こは妖か
はる〳〵と瑠璃の大海
明らかの月の光のうるみくれ、
うするゝ光―
やがて其のくもりに生れぬ、
虹色の花の輝き
火の酒の熱き息をば吸ふ如く
華やぐ血潮
和魂のゆらぐまに〳〵
花の雲匂ひの渦に眩き
たゞ憧憬に馳けりゆく
夢の彩野の露一重
彼方にぞ、あな
恐ろしき物の轟き
走せかへるいとまもあらず
どよめきの波をうたせて迫りくる
鐵路の呻き地の震ひ、
すさまじきかな
空に吐く眞黒き煙
極熱のわめきくるめき
恐ろしき魔が関のこゑ。

―（六回）―

響は去りぬ、烟は消えぬ
星の御座いと崇厳に輝り並び
目は今淨まり澄めり。
ゆら〳〵と溢れ流るゝ銀の
殿の光を身に浴びて
小草はつよく身ぶるひぬ。

予はこの詩をよみ終りて唇邊にのぼるほゝゑみを止むるあたはずよろこばしきは年少くしてはやくもかくの如き詩を作りて人をしてたのしんで未來を待たしむる才なるかな。この度撰に入りし諸嬢の内君最も若く山田邦子實にこれに亞ぐ人はいふ女子文壇の詩は小說よりおくるゝを數步なりと、こひ願はくば足なみをそろへて共にともに藝術の道にすゝまむ。（夜雨）

鐵道線路の傍の砂交りの土に生へて居る無名草が月の光に顫へてゐると云ふのは誠に好い詩題ですが少しおもく〳〵しく考へすぎた爲に詩がかたくるしくなつて、却つて潤ひが乏しい、惜しい。（醉茗）

二

長曾我部菊子

春の日あゆみおそうして
行くやみどりの小野の路
日光笠におつれども
ひとりは寂し旅情。
鳥とぶと見る遠ち方に
塔こそ森に透いて立て

露盤は花の妙樂の聲——
淺黃、紫、紅の
夢まひめぐる霞して。
あら往かましかの塔へと
蔓なる路を東へ
茨からたち刈りそげし
新墾小野をたど〳〵と、
『空想』のはてはたどりしを。
暗のうちよりさゝやきの
聲はきこえぬ『うき人よ。
めざす路こそ西なれ』と
さらばとつきて西すれば
寂しかりけり礫原
駱駝ひきゐるキャラバンの
綠林望むみちのごと、
草の靑きは見ずなりて。
塔を中にしてめぐり行くに
目に霧る雲の眩やければ
足はしびれぬ。……
思ひ起すは古里の
母の手元に搖籃の
乙をみし日よ安かりし。
今失戀のかなしみの
『悔』は大野の春の草
『さとり』は小野の秋の草
胸のいたてはふかけれど
かへらんかな。原の草原に——。
戀の醉ひのみ我世のわざの唯一かは。

『駱駝牽ゐるキャラバンの、オーシス、望む途のごと』原作『サハラをすぐるカラバンの駱駝をたのむみちのごと』とありき。『悔は大野の春の草、悟りは小野の秋の草』ゝ新生と凋落と草のごとく亂れたる失戀のかなしみよ、よみ了りて涙墜つ。（夜雨）兎に角あなたは夜雨の詩を最も深く心讀してゐる一人てす。（醉茗）

三

根本松江

新らしき路は開けぬ
吾がために
愛の光りに照らされつ
幸の小笠
希望の杖を力にて
憧憬の山に殘月を愛て
吾世讃美の川も渡りぬ
遠方に鳴く鹿の諸聲
只にやさしく
夕日に榮る紅葉の坂もいそ〳〵と。
足とり輕氣に登り來ぬ。
歩み慣れざる若き身に
いつか覺ゆる、
身の疲れ
心の疲れ
何ものか木魂しぬ
『時』の木倒す
響きなるらむ
あゝ何かせむ
不朽に輝やく愛の光りも
乾き果てたる『生』の呼吸
いと繁く世は人は
かゝる山路に清水求めむ術知らず。
かさこそと
木の葉は告げぬ
路べに生ひし忍耐の
小草の露を口含み
蘇み返へりたる吾れは
再び歩みつゝけぬ。

詩は例によりて美しけれど『草』は題に遠きやうならむ。『草』よりも『生』の詩に近いとおもふ。（夜雨）
散文的なるを譏む。（醉茗）

四　太田きし子

七種の薬草——
今七つ目の唐薬草を摘まんとして
雑草に手をしとられて、ふと見る
龍膽の根や弟切草や
いたましのむくろ横へて
罪なりけりとおもひしか
あゝされど病める母
ひざまつきては天を仰ぎぬ
ものゝ光と活働を
夜のみ墓に導くと
木の葉いざなひ
贏き渡る柩草よ
草はなげきにさやくくと
やく方遠くうちなびく
いとしきにへのむくろ負ふ
われも柩の車かも。
柩車のかなしき名
母よ柩にてもり玉ふな。

『柩車のかなしき名』等句例の如し、されど薬草を摘むだけに終つて格別はたらかない。（夜雨）
文に詩に此君の才氣容易く得難い、殊に近頃の進境は目に立つて見える、但し此作は題に負けた。（醉茗）

五　山田くにゑ子

嗟、悲しい哉
昔は又なきものと眺めたりし
町の白壁
かゞやかなりし其面の
今は衰へし妖女のやせし胸とも。
うち沈みゆく秋の夕日の一とき
いまはの息吹きかくる時
せぐり泣く餘韻なき聲の
いかに悲しく我胸をうつよ——
我今此落日の前に
せぐり泣く白壁造の町の家の
たまゆらの榮華の夢より
醒めしなげきこそ耳にして
目はうれひに深くおとろへ
涙は蒼く頬をつたふ。
目をとぢんとすれど大きく開けし
此滅の前に我目ふるひわなゝき
安くとづるを得ず
あゝ此都のほろび去ると共に
我肉はつぶされ我血はほとばしり
かくて我生命もほろび去らん
すがらんにすがるものを知らず
かゝる絶對なる運命の下に
住む身のかゝる時
我もろくくの愛せしものゝ中に、
我を救ひ得るもの一もあるなし。
たゞ身は身を守りて此大なる苦境を
のがれざるべからず
のがれてつひのゆくへは
いづく——嗟！
茫々たる淋しき廣き草の原、
その草の原に身を横ふ
いづれはほろぼされ行く
世の人のをはりの
幸はかくのごときのみ。

評、醉茗氏にゆづる（夜雨）
五篇中最も力あり（醉茗）

美文



○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他國になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限乙種の賞を送呈す

○からす瓜（天賞）

北海道　笠子

三月あまりを自然に遠ざかつて藥餌に親んでゐた私は、病床に起きなほつてがらす戸越しに、かまひ人のない菊がなかばすがれて、庭に伏してゐるのと、風もないのに、山茶花がホロ／＼と散る以外、何の趣きもない庭をみてゐたがふと外へ出て見たくなつた、丁度二三日前少し位の散歩は差支へないといつた醫者の言葉をおもひ出して、義姉に話すと、それはよからうと、早速用意しておいたとて新しい空氣草履をおろしてくれた、私は何となく嬉しかつた、君子でもつれてといふのを、それに及ばぬと斷つて獨り家を出た、後から義姉はわざ／＼肩掛と洋傘をもつてきて、あまり遠くへゆかぬ樣に、とくれ／＼も注意してほんとに君子でもつれてらつしやればいゝのにつて歸つていつた、早稲田大學の前を通つて江戸川の傍へ出た、この前こゝへきた時はまだ稻も青くして、浴後の涼客が多かつたが……その青かつた稻の大半は刈取られ、かゞ子が淋しさうに立つてゐる雀は落穂をついはんでゐるゑのまさちやんが落穂拾をするのを手傳つてやつては着物をよごして、母樣にしかられた、そして一度は薄で手を切つてそれてこり／＼したつけ、そしたら母樣が……又しても亡き母樣の事が偲ばれる、息苦しさに、立どまつて川向ふをみた、と流へさしのべた榎の枝にまつかなからす瓜が三つさがつてゐる、私は又母樣のあつた幼時の事をおもひだした、うらの竹やぶにはそれはからす瓜が澤山なる、姉樣も二人でとつては絲に通してゐた、そしてかげ干にして糠に入れて使ふのである、母樣がよく、お前たちのおかげで母樣まできれいになるつておつしやつたつけ、いつてあつたか暮に歸つた折大掃除の手傳して居たら、物置の隅の方から絲に通した烏瓜の色もさめはてゝカラ／＼したのが出てきたので「まあこんなものが」といつたら「それはお前と私が幼かつた時に、うらのやぶのをとつてそんなにしたんですつて」「まあ、そんなものでかほ洗

つたのね――「えゝそれについて面白い話があるの、お前は餘程おませだつたとみえてね、あの政ちやんのおつかさんがね、家の政は色も惡いしつやもござんせんがお家のお孃樣方はえゝおいろつやでござんすなもし、どうして政はあんなんでござんしよ、つていふと傍にきいてたお前がだまつて烏瓜をもつてきてこれで洗つておあげなさいつていつたさうよ、何でもお前の四ッか五ッの時、其話の出たのもやはりこの烏瓜がもとでね、そして母樣は政ちやんより却つてお前の色つやの惡くなつたのを心配したつけ」

私の身を案じて下すつた、その母樣はもうない、私達二人を殘して逝つておしまひなすつた、ぼんやりそれからそれへと追想にふけつていたが、がたつく荷車の音に我に歸ると、私はむいしきに橋を渡つて胸つき坂の下まできて、そこの茶店にはいつた、汲みだされた茶に息をついてふと空をみあげると、はや大ぶ日の傾いてるのに、驚いて立ちあがつたがめまひを覺えて又よろ〳〵と腰をおろした、そして氣の落つくと共に早く歸國らうとおもつた、歸つて墓參をしやうと、

その場所、その感じ、その人、悠揚として迫らぬうちに表はれてゐる、奇を衒はず、文を弄ばず、自らにして成つた好い文章だ、完璧（評）

○夜業（地賞）

日本橋　吉田さく

いろ〳〵面白い話で急ぎ物の事も忘れる程でしたが笑ひくたびれると、後はお向の琴の音も、門の義太夫の音も云ひ合はしたやうに止て、只お師匠樣の立合せなさるへらのひときと、さら〳〵と云ふ絹ずれの音ばかり、つきあたりの柱には藍色縮緬近江八景の据模樣がかゝつて居て、紫の紋羽二重の二尺あまりの袖が美しく合はせた紅のふりを見せて、目のさめる程うつりのよさ、電氣の光はすみ〳〵までもあかるくてらして方々のたなの上は一ぱいになつて、さも年の暮らしい、皆樣の顔は上氣したやうに紅味を帶びて熱心に針を動かす、思て見れば早いもの、十四の年〃昨日までつゝ袖袴でとびあるいて居て急にすはるやうになり年上の人の中に入てしまつたので毎日泣いて居ましたが一つには氣位の高かつた、私、學校をさがつたのが自分の一生の望を失たやうに思たのでありましたが三年を過した今日此の頃は裁縫を自分の天職と思て、新らしい希望もありますが、やはり心の淋しさは同じでしてこんな華やかな人ばかりの中へ入ていて時々一人で泣いて居ます、そしていつも考へ出すのは學校をさがりたての時、返りの友の私をよんでは通た擧でありますそれても今の私の方がよほど幸福になつたに相違ありません、とだん〳〵想ひが遠くなると、やうやく、くけ

上たお召の衣服、お師匠様の前へもつていきまして、「どうぞ御らん下さいと、申します、それをお師匠様は順々におしらべなさつて、「少しふき綿がよりませんでしたね、とじだけなにして下さい、とおつしやつた、私は、がつかりして、肩は一さう重くなる、――皆様にはづかしくなつたので思はず、はら〳〵と涙こぼす、とたん、ちん〳〵と十時うつて下からお茶おあがんなさいと、聲がかゝる、から〳〵と勢よく格子戸のあく音、又急ぎ物のさいそくらしい。

暮の裁縫所の態が面白く書いてある、自分の淋しいと云ふ感じも好い（評）

○七人（入賞）

本郷　白菊女

お父様とお母様とどつちがい〻？と聞かれると妾達兄弟の五人が五人、口を揃へて皆お父様と云ふ、實にお父様はおやさしい方、暇さへあると子供を集めて、お話をして下さる、それが十九になる總領の妾にも、季は八歳の弟にも、誰にても面白い。夜もお休みになつてから、二度も三度も起きては子供の寝床を見廻り嫁になる様な妾に迄、寝冷えをするな、風を引くな、と注意して下さる、あんない〻お父様は何處を探しても無いと思ふ。お母様は所謂、男勝りのシツカリした御氣性、家中の事、子供の世話、何でもお手一ツ、グズ〳〵して居るのが大嫌ひ、だから一つ間違ふと直ぐお小言、一人叱られると後のとばしりが皆へゆく、こんな風だから誰も「お母様お小遣ひを」と云ふものは一人も無い、皆お父様だ。次が妾、四人の姉といふ名に對してもそれ丈の事をしなければならぬ、お父様もお母様も、おとなしいとほめて下さる、弟や妹も姉様〳〵と云つて云ふ事を聞いて呉れるからうれしい。



美枝ちやん　　名古屋　久保千代子

妹は今年十六、女學校の三年にもなつて居乍らそれはそれは氣が利かない、何をさせても下手に計り廻つて居る、お母樣のお氣に入る筈がない、從つて少さいの迄馬鹿にして誰も云ふ事を聞かぬ。其次ぎが十三の弟、中學一年生だ、腕白で向ふ見ず、兄弟喧嘩はいつもこれが發頭人、だが物はよく分つて居る、云ひつけた丈の事はチヤントする、妾はこの子が一番好き、其下が妹で十、小學の五年生、これはまた靜かな女らしい子何を云つてもハイ〳〵と聞く、いぢらしい稈やさしい子だ、其上學校の成績も家中で一等を占めて居る。一番下が八ッて男の子、未だヤット小學の一年生、兄の向ふ見ずに引代へて、充分に考へてからでなくては何事もせぬ、なか〳〵落ち着いて居る。大勢あると皆性質が別々で面白いものだ。

七人の氣質を、假令一ロづゝでも批評し、一言の中に其人を表はしてあるのは侮り難い筆づかいだ、遠慮なくはき〳〵と断定を下してゆくところも面白い（評）

【秀　逸】

○床に居て

信濃　太田喜志子

美しい猫を箱に入れて、丸い穴の穿いたふたをかぶせて上から窺いて見た事があつた、それは私の稚さい時に仕たとて有たと思ふが……、いゝえそんなとは仕た覺えは無いやうにも思ふ、決してそんな事仕はしない、それぢや眞個にうそであつたか？。鳥の寐息を窺つて見たいなァ、夜そつと彼の暗い森の中に佇んでそしてよく耳を澄したら屹度聞えるであらう、これはほんとに今思つたとてございました。

何てせうね私は、——かうして寢こんだ時から毎日見つめるあの屏風の、ちよつとした「シミ」がお高祖頭巾を、被つて合羽を着た女の人が前こゞみになつてゆくとしか何うしても思へてならないの、あの障子に射す光が只おッかなくて、いつでも斯うして布團を引被るの、なにッて私、あの光が一番おッかないものネ、あのう何だか知れませんけれど、かうして居ると、ちよつとの隙まなしに何か追ひかけて來て、やがて私の肉をも食べられて仕舞れるやうに思はれてどうしても目をとぢて踞んで居なければ氣がすまないんで、あの父母樣や兄樣に申譯が無い〳〵と思つちや起きて見ますけれど——、けれど矢張し頭が重くて光りがまぶしくて倒れさうなの、あれ、いやね——あのひゞきは全くおそろしいの、自分にはわかりません、何だかとり止めは無いけれどどこか遠くの方に、嬉しいなつかしい物が私を引き付けやう引付けやうとして居るでせう、私はそれに近づかうと思つてはもがくの、いつだつて行けりや仕ないのに——、ホヽヽなんのことてせうね

私、自分にはちッともわかりません。こんな軀をそつとかくして置いてくれるいゝ國はないてせうか永遠に永遠に。
私もう堪へられませんの、あ今、誰か私を呼やしませんてしたかあれ——、あゝさうぢやなかつたか。
おいやでせうね、こんな者になつちまつて。
ちよつと、この手をどうかいゝ具合に仕て下さいまし。

人は病氣に罹ると、神經ばかりが興奮して、多少調子は狂ふけれど、其言ふことや詩を成し文を成す、『床に居て』言ふことの、人刺すやうな强度の文字に富むのは此所以てあらう、（評）

○買物

日本橋　佐藤萬壽子

春着の支度にと私は一人て、三越へ行た、這入て直ぐ中央の階段を昇ると、たへなる音樂が耳に響く、何時も行く八番賣場へ來ると八人計り居た、少し右に寄た方に椅子が三脚空いてあつたので、其處へ腰を下すと、隣りに居た五十四五の意地の惡るそうな顔をしたお婆さんが、ジロリと此方を白眼んで其の娘らしい廿歳位な、白粉を眞白につけた女に何かさゝやいた、「あのお召を見せて頂戴な」と云ふと又私の方を向て、今度は頭の先から足元までじつと、輕蔑する樣な目て見下す、いやな人、何を買のかしらと思つて其の人の前を見ると、友禪やら糸織やら羽二重やらいろ〳〵の品物が堆く積まれてある、中にはふるへ付く樣な宜いがらも少なくない、「どうもお待たせ致しました此のへんては如何で」と、て、店員がお召を持つて來たの私は自分のを見ながらちよい〳〵隣の方を見て居た、「どうも宜いのがないね白木や松屋にはなか〳〵宜いのもあるけれど」と仔細らしく娘の方を見る「だけれどお母さん是は莫迦に宜いぢやあ有りませんか」娘は好いがらの友禪を翳してほれ〳〵と見て居る「どれ」と母親は一寸價札を見たが「そんなによかないぢやあないか又此次に仕樣よ」と云ひながら、立上た、娘は欲しくつてならない樣てあつたが母親に促がされて仕方なしに行て仕舞た、勘定を濟まして階下へ降る通りがけ、竹の間をちよいと見ると、今の母子が立派な椅子に悠々と構へて、お茶を飲みながらビスケットをたべて居た、歸りに品物を受取る處へ札を出したがまだ屆いてなかつたので、そこへ立て待て居ると、やがて來たのは先刻の二人、お茶をのみながら待てる人を冷やかに見ながら、札を出した、店員は直ぐ持て來たが、壹反らしいのてどんな品物を買たのかしらと、店員の開いた受取を何の氣なしに一寸見ると、金壹圓七拾錢也御裏地一反と、記してあつた、

『文壇の光』て拾ひ出したが、此の子果して凡ならず、其場の光景略える樣て面白うございました（評）

○やまから

羽後　菊池りう子

トン〳〵トン〳〵と眞晝の寂寥を破つて餌をあさる山

雀の音……。緋青紫坏の小切を集めて、お猿を縫ふに餘念のない私はふと又幼い追憶を誘はれた……。眞夏日にあの音を聞き初めてからは、度毎に起る此思、それにつれて母、といふ影がしみ〴〵此小さい胸にやきつけられる樣にきざまれる。そして、永却に其懷しい瞳をあふぐ事が出來ない、と思ふと何故かしら、涙は出ないけれど、只獨、遠い異郷にさすらふ樣な心地がして……。今て思へば母樣　矢張神經病でゐらしつたのか知ら……いつもあの薄暗い二階の八疊に、おこもりの儘、春は百花匂ふ時でも、秋は小山に茸かる頃てもそれは一歩も外出は遊さなかつた。それだとて、お休みの事は稀て何かしら、お書見か、又はぼんやりどことなく見つめて居られる事が多かつた。

お飯の事、其他一切はごくといふ婆やが一手にひきうけて、他人はよせつけられないので、出入の者すら母樣を知らぬ者が多かつた。八疊の眞中には紗房の籠があつて、中に入つてる美しい鳥はよく、釣瓶をつゝたり梯子を渡つたりするので、幼い私は暗いお室を寂しいとも思はず折々伺つてはうつかり長居をして「露樣もう彼方へ行つてお遊びなさい」と靜に優しく云はれた物だつた。父樣は其はお柔しく何につけても露、露と髮の世話迄やかれた、が御業に忙しく月に十日もお留りの事はない、現に今もカナダの方へ行つて居られる。

ては母といつても親しい言は夢にも交さず、勿論、世の母子の情といふ物は知らなかつた。噫あれは十四の秋、どこからか歸つてきたら薄暗い家の中て狼狽しく人がたちさはぐ。如何したときくと母樣がお惡い……。すぐ二階へ昇らふとすると止められた……。其から三日目、暗い家から寂しい柩が送られた。けれど當時の自分には烈しい哀愁も感ぜず、尙暗いお二階へおこもり遊して、と許り。三年をへて十七を迎へた夏の日、あれ、あの山雀の音を聞いた時から、ぞく〳〵母といふ物が懷しく戀しく、何故あんなに冷かに母に對したらうと口惜しくもなつて毎日々々こんな思をくりかへす。母なき後の父樣は尙更優しく。けれど、父てさへこんなだ物、母だつたら―と思ふと却つて悲しき思をつのらせる許りて―。それに何故か此頃ては以前の樣に父樣を戀しさ二なきものと親しまれない――何故そうかと自分の心を叱つても見るけれど矢張、どうしても、何だか只戀しい寂しい父樣とは思はれぬ。打消しても〳〵……。何故母樣のおかくれの時に私をよせなかつたのだらう……。もしや〳〵……。もしや……。噫何故此な事を思ふのだらう―。ても母樣は只お病い許りだつたらうか―。何か〳〵秘密が潜んてるのては……。と思ふと身内がぞく〳〵していやな〳〵思がする……。トン〳〵と又―。

それて山雀は母樣のおかくれになると鳥屋にやつて了

つたつけ……。もしや毎日音のする……。が彼ぢやないか知ら。ふと氣がつくと漸くの事でくゝつたお猿の足がはじけたので又針をとつたが、もう縫ふ氣になれない。トン／＼トンと又餌をあさる、響が頻に——。

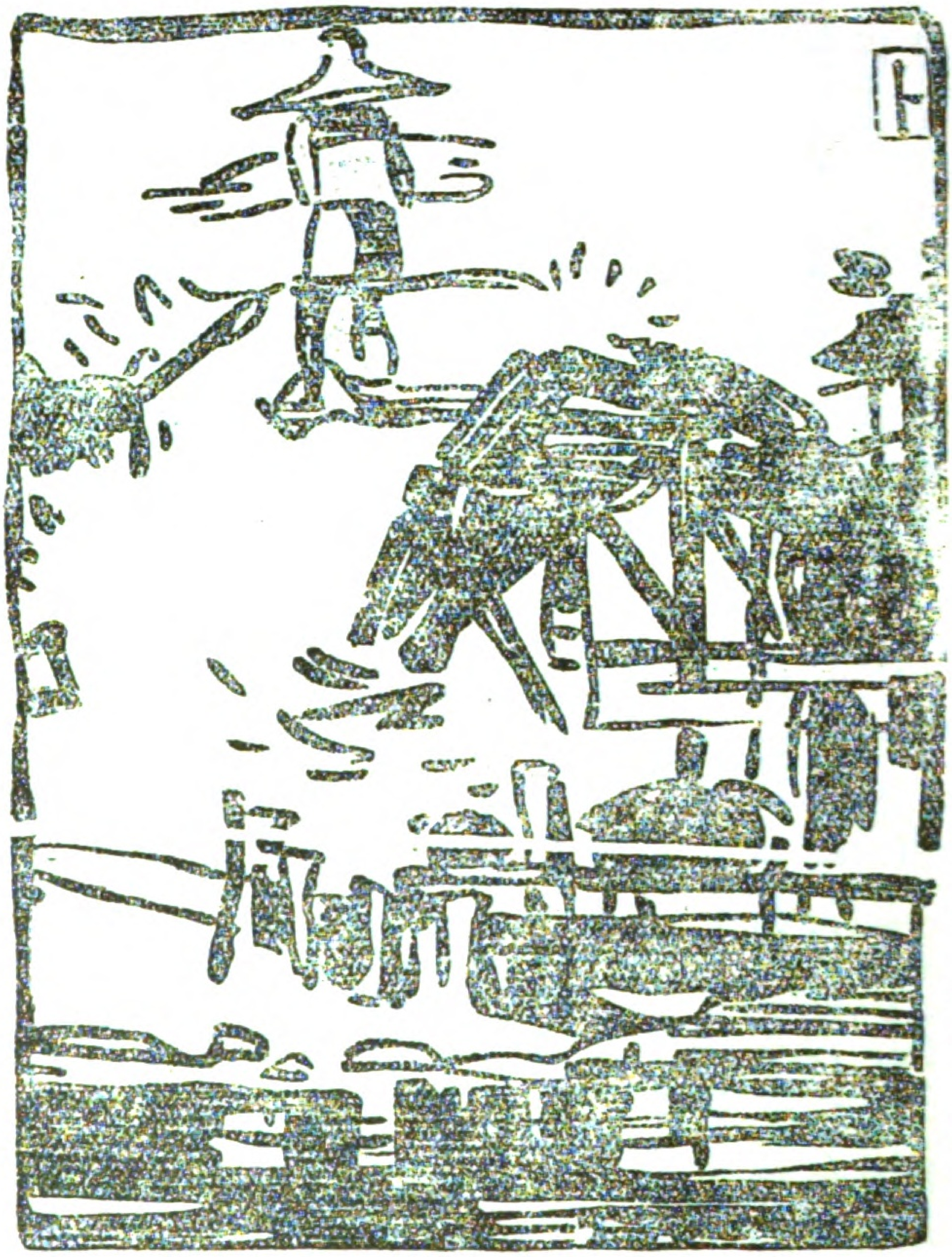
感情的の文章であるが、女性の生命は此處に在ると思ふ、比較的おちついて書いてある、山雀の撃も好い、母の鄕も好い、猿を縫つてゐるのも好い、父の愛を薄く思ふのも好い、あゝ若き女性（評）

○日の出

九段　しげ子

波の響に光を生んだか、

今迄仄暗かつた水平線の彼方一帶がほのかに茫と燻つた樺色を帶びて來たので我知らず睛々しく瞳を凝すと。沖の遠い遠い國から吹いてくる冷やかな朝風に、一刻一刻靄は東から剝れて、世は一歩一歩と白く湧き立つて居る波頭を踏まへてきはだつて光明に導かれて行く樣——



土橋　　陸奥　立花とも子

水平線上は樺色が褪せて最早オレンヂ色に返り四周までをぼかして其横の方に茶色の朽木形の雲が一片吊られ氣味に浮いて居る。見る中に雲は漸々金茶色に變じ笹縁をとつて縁から眩しい程の强い光を射反へして、其幾千の簇は一齊に漠々として居る雲の裂目からまで這入つて居る。空一面がほの／＼と白らんで來る。

山々は未だ紫の靄が搖曳いて居るが、陸は既に劃然り浮上つて、磯の黑い砂の上に碎ける濤の花が眞白に脚下から岬まで、雨に散つた庭の卯の花が飛石傳ひに這上つた樣に長く續いて居る。

と見る中に、夢から覺め出た樣に雲は奇しく變化して

行く、悠忽ち薔薇色に變じて、其が虚空一ぱい弧を描いて擴がり行くと、未だ中程までも行かない中に、最早弦の中央に落した様な一滴の異が見る〳〵擴つて同じく弧を描いて跡を追うて行く、忽ち白銀の翼を擴げられるかと見れば忽ち黄金の蝶が翔つて居るのに幻化するので、また雲の影を落した水も共に變化して花の開くがやう……七彩の衣に裹まれて淨光上に横へられて居るかのやうに、壯嚴と美麗に魅せられて恍として居る。永遠の地に彳んでるのではあるまいかと思う其瞬間にわかに燦とした大輝光に雲は燃え、天は燎かれ、地は鎖され、水は爛れ、朱黄色の横雲は裂かれて居る烈々の鎔爐の一大火焔の中から一道の光が迸つた。唯觀る榴花色を帶びた血紅色の大塊は大聖の現じるかの様に海上に頭を少し擡上げ様として居るのである。

日の出の盛觀は幾度も描かれた、けれども此の文は殊に雲の形や色を叙するのに力が籠つてゐる（評）

○わすれ得ぬかげ

筑前　ひで代

静子様は私が此方へ轉宅致しましてよりのごく親しいお友達で御座いました、静子様にはお一人の異質のお兄様がお有りなすつて、ほんとに羨ましい程お仲がよろしう御座いました、静子様がお遊びに被在しつて夜にでもなると、乾度お兄様がお迎へにいらつして「いつも静さんがお世話になります」とあの凛とした御顔立の美しい頬に笑みを浮べて、お禮を仰有るのが何かなしになつかしく存じました、月の夜などあの細板橋を渡つておかへりなさるお二人の後ろかげを見送り乍ら、私もあの御兄妹の一人であつたら、どんなに嬉しからう樂しからうとしみ〴〵思ふので御座いましたが、或る日のこと静子様より御手紙が參りました、あの美しい筆の跡の香もあふれてこまやかなお情深いことがかいて有りまして、其のしまひに、こんなお歌がしるして有りました「おもふはたゞやさしき人のわが爲めに姉ともならせならせとばかり」「妹とよべ姉ともよばせ御二十年に一つ加へしわが慕ふ人」と私はうれしさにお手紙をにぎつて心のかぎり泣きました、其の後あれ程お遊びに被在した静子様がチラともお姿をお見せなさらず、おたよりさへも御座いませぬので、どうして被在るだらう、もしか静子様にお氣に入らぬ事でもしたのではあるまいかと、毎日〳〵獨り心をいためて居りましたら、はからずも静子様の御親類の方が山田のおぢ様へ静子様の御兄様のお嫁にと私を幾度か御相談にいらつしたそうだが、お母様のお里の系統がおよろしくないとやらで、私にもしらせずお斷りなすつたときゝました時の、私の心のかなしさ口惜しさはどんなで御座いましたらう、泣いて〳〵泣きつくし

いました、おたよりもない筈です、其の後お兄妹御一緒に御勉强のため御上京遊したそうですこのおやさしいお兄妹のかげは私の命のつきにまで、いへ死にましても私の心の底より消えはしませぬ、そして永久に〳〵お二人の御幸福を祈つて過しまするので御座います。

恨むやうて恨まず、泣くやうて泣かず、運命と云ふ大きな力に服從してゐる女の面影が表はれてゐる、好奇の人が見たら平凡と云ふだらうが、實は之れ一寸得難き文（評）

○夢

神田　田中英子

或時此樣な夢を見ました。今自分が何處に居るのだか、それもわかりません。只ぼうつと、母樣の御笑顏が見へる斗り。……何とも知れぬ重い物が體を押して、……苦しい……生溫かい息が早く〳〵と、耳にささやくやうです。だん〳〵母樣御顏がうすれて行くやうで、又見えるやうで、……體を押す重みがますます重くなつて、氣味惡い息がだん〳〵耳もとへせまつてくるのが、こわいやうな、……胸がせまつて、ぼろ〳〵と大つぶの淚がつめたく頰を傳ふのが、よくわかります。わつと聲を立てる、……と思ふと、眼がさめました。丁度六つ位だつたと覺えて居ります幼ないゆめ……が、此時、私は乾度惡魔が、母樣と私とを、放さう〳〵として居るのだと思ふと、如何しても之れが夢とは、思へませんてした。十六の此年になつてさへ、一昔前の、古い幼ない夢を思出しては、秋夜まくらを濡らすのですもの。……

恐ろしかつた夢からさめると、又今更のやうに悲しくなつて、しつかりと抱いて居て下さる母樣の、乳房に顏を押つけて泣いた。「まア如何したの、……あゝ夢でも見たのだね。泣かないでねんねなさい。」お目ざめなすつた母樣が、靜に背をたゝいて下さるので、なほさら、嬉しいやうて、なつかしい樣て、足をばた〳〵やつて、しやくり上げて、泣きました。二時間も、泣いて居たらうか。

三年斗りも苦しみぬいた、母樣の御病氣、！やつと回復期に向ひ乍らも、未だ骨と皮斗りにやせたおうてに、抱かれて、溫かに頰ずりをして戴けなかつた、時分でした。此時分てした。どこやらのお芝居で見た、ちごわに結つた子と、青い衣服を召した、母さまとの別れ、……お祖母樣にはなしを聞されて、幼い乍らも身につまされて泣きましたが、……此後二三度、此樣な夢を見ました。その度に、私は長泣きをして、父樣にしかられましたけれど、未だまざ〳〵と見へる御病氣の時の樣に、シバラクは恐怖と疑惑で、母樣の御顏を拜すのが、こわいやうにも思はれました。東西を得わかぬ者の胸にも、死……別……と云ふ事が、夢の內に强くつよく印象せられまして、之が浮世を知る、最初の學門でありました。

夢から悲しい印象を殘すと云ふことは、あることだらうと思ふ（評）

○胸刺す言葉

名古屋　八　重　子

潤つと晴れた朝てある。御隣りのスックリ立つた樫の木や柿の木の間から、流れて來る秋の日光が、ぱつと映えて、狹い庭が憔悴れたやうに見える。草ても採つたら些とは美しくなるかと思つて、降りると、昨晩の雨てじめ〳〵した土に、庭下駄が喰ひ込んて、ともすると足袋が滑る。土の香が胸に泌みて、種々の想ひに耽る。手は無意識に草をむしる。

『御叔母ちやん！何してるの？』柔かい手は肩に觸る。『草採りよ。手傳つて頂戴な』『坊、厭だア。坊ボウフラ採りに行うや。昨晩約束したから。サア行きまちやう』と引張る。

此つちの先生忘れてるのに、御催促。

『精ちやん、兄ちやんに成つたのだから、言ふ事聽かなくちや駄目よ』談を轉へて見る。

精ちやんは悄氣て『ウムー、坊、赤ちやん嫌ひ。お乳呑まないやうに成つたら、小包みて祖母さんの許に送るの』と恁うだ、常ても、赤ちやんに自分の母を奪られたのが殘念て堪らないのてあらふ。夜も一共に寢られない。

突然、座敷てハヽヽヽホヽヽヽと兄と義姉の笑ひ聲がすると精ちやんは飛んて行く。私も覗きに行く。

義姉は赤坊を抱いて、今笑ひかけたとか、恁麼顏付きしたとか云つて莞爾々々してる。兄もチックタイ結び乍ら丸髷に頭を衝突する斗りにして覗いて居る。

精ちやんはチヨコ〳〵と二人の間に割り込んて、兄義姉の顏を鋭い眼で覗き込む。私は不圖厥いた。姉も氣付いた態度。兄は孤鼠々々と次の室に退つて上着を着る。沈んだ金風は淡い溫みを乘せて、茫然した四人を吹いて行く。

『出勤つて來るよ』兄はそう云つて、忘れ物でもしたのか、又机の前に坐つた。

突如立つた精ちやんは、スタ〳〵驅けて行つて、しつかり兄の頸に縋つて『父ちやん、父ちやんは、坊やよ赤ちやん、何方が好き？』

兄はギヨッとした、そして精ちやんの脆さうな躰格を凝と見詰めた。またゴックりと肩の力を落して、戰慄く腕て精ちやんを抱き締め『父ちやんは、父ちやんは精ちやんが一番好き!!』おろ〳〵聲て言ひ放つた。姉と私は眸を圓くする斗り。

『遲くなるから』と出て行つた兄は『ウム、何うも厥いた』と繰り返し繰り返し、帽子も被らんて出て仕舞つた。

私は、興奮した精ちやんの神經を沈めさせやうに思つて、背負ひ出した。

可憐いさうに此の子、二年の時、腦を患つて腦力が特別に鋭敏だ。お菓子だの、玩具だのしか映らない筈の

胸に、猜疑や嫉妬の雲が涌かうとは。本統に眞個に病氣が惡らしい。爽々する柴生の上て、淸らかな大氣を浴び乍ら、蝶を追ふお相手てもして、彼が疲れた魂を、慰めて遣らうと、公園指して足を急がせた。

觀察も亦神經質（評）

○ともし火

群馬　森下花子

塲末の町の煤ぼけた行燈にみな灯がともつて、人通りのない巷を秋風が吹いてゐる。

私は夕方その街を通つて何物にか襲はれる樣に後ろばかり見られた、灰色の少し白茶けた砂埃が、私の足元に渦巻いてる、私の草履の緒にはもう華やかな色は見えず、足袋の上にも塵埃が積つてゐる。塵埃！活き活きした地方人を日に〳〵煤ぶらする都會の塵埃！不圖近ごろ讀んだ誰かの短篇を思出した。

境遇を征する程の勇氣もない癖に、絶えず現在の地位や生活やに不平を抱いてる或男が、妙な機會から忝らしく上役と衝突して放り出されて、悲憤の情と孤獨の感とを押かくす爲に、强いて明るい夜の町を高歌放吟して歩いてゆく、といつしか自分の前に憔悴した男がとぼ〳〵ゆく、其男の足元をみたら塵埃がいかにも執ねく附きまとふてるので、あゝ俺も何日かあゝなるんだ、弱い者にばかり附く塵埃にもう餘程沁まれてるかも知れぬ、と其男が泣きたい樣な怒りたい樣な氣になつて無闇と酒を呑むといふ筋だつたと思ふ。私はまた足元をみた、あゝ若くして塵埃にまみれる女子！

私は儚ない感じを味はひながら、私じやない！私は塵埃にまみれるには餘り若い、美しい若い少女の身はきつと神樣が守つて下さるなどゝ考へ〳〵した。

軒毎の行燈の灯が、漸う罩めてくる秋の霧の中に、一つうすれ二つうすれして、たゞぼうと夢の樣な色になる、冷たい夜霧が静かに塲末の方から下りてくる。



若き姿　青森　山田てる子

遠くの方から重い轍の音がする、どろ〳〵〳〵、私の心には暗い影がひろがつてゆく、近づいてみると冷たい眼をした老人が、墓碑にでもなるらしい石を乘せて默つて曳いてゆく、秋風が少し吹き渡ると、一面に罩めた夜霧にや丶濃淡が出來て、やがてまた重たく行燈の灯を壓してゐる。

塵埃はもう立たない、若い人々の活動してる都會の空氣が、此あたりまで來ると餘程交ぢつてゐて、灯火の影を華やかに見せてくる、私はなつかしい悲しさに堪らなくなつてはら〳〵と泪を流した。夜祭の賑はひの遠音が、明るい町の方から聞こえてくる。

才氣恐るべし、作家たり得る素質もあり（評）

○入船

布哇　上土井定子

午前十時鏡の如き港内の波搖り起して入來るは桑港よりの定期船、コレア號、今し檢疫所の前を過ると多くの人々は或棧橋に集つて眺めてゐる、妾も其中に混じつて見てゐると、後からワイ〳〵と言つて來る十五六を頭に十二三位の土人の子供等、すわと衣服を脱ぎ二十人斗り一時にバラ〳〵と海中に飛こんだ、始めて見たる妾は何が何やら一向解せねば何するかと面白く見てゐる銅人形の浮つたやうにぽかり〳〵と浮いては一生懸命に今に入る大船を目かけて泳ぎ行く、船は次第に棧橋に近づく、子供等は船の航路の右側に浮いて待受けてゐる、アヽ危いと見てゐると、大船の先きに小さき蒸汽船が水先案内を追つて來る、四五人の子供等は早くも其小船に泳ぎついた、大船は波も起さじと徐々に進んで來る、首ばかり出して待受けて居た子供等は、ワイ〳〵と叫び立てた、大船は子供等の前を過る。乘客はデッキに人山の如く現れて面白相に手を叩いて居る、子供等は船に連れて泳いで來る、一人が今アップと沈んだと見てゐると、二人三人と沈んではフウフウと言つて浮いて現れるのが、恰度鴨でも浮いてゐるやうである、子供等は益々騒いで船を追ふて來る、早船首は棧橋に入込んだ、船上の人の顔が見分られるやうに近づいた、中に白人の若い婦人は何やら光つた物を海中に投げ込んだ、すると子供等はアップ〳〵と沈むと間もなくフウと浮いて摑んだ、兩手を開けば拾仙銀貨であつた、妾は始めて了解した、船は棧橋へ横に着いた、太き綱は船と棧橋とに繋がれて、早釣橋を卸さんとす、出迎の人の多くは白人と日本人、もう一時間前から棧橋へ詰かけてゐる、船客はまだ上陸を許されず、妾は下の方から船上を見上げて、多くの日本人が桑港から歸るを見て羨やんだ、そして何だか急に歸りたくなつたけれども、未だ歸られぬ、此地へ來てから僅二年しかならぬ、其二年がもう十年にもなるやう

な心持、不斗見ると見たやうな婦人が甲板の上に、妾は船舷に近寄て見ると其人も氣付て互に顏見合た、アヽ人違ひ、見れば立派な洋裝て首から胸へ何やらキラ〳〵と光らして居る、アヽ彼の人、此の人、幾年の辛酸を異國の空に嘗つるか、成功の程も思ひ知られて尊い、そを思へば妾はもう面倒な細かな間ぬるいミシンの稽古や、英語の研究も止めて甘蔗畑にても這入つて一と稼ぎ、物質的に成功して早くあんな嬉しい日を迎へたい、愉快な身になつてみたい、アヽあの船に乗りて故鄕へ錦を飾りたいと思ふてゐる内に、釣橋は架せられて、ドロ〳〵上陸が始つた、日本人白人少數の支那人、混じてコト〳〵と階段を下る、出迎の人々は兩側に列をつくつて立つて居る、その中をさも嬉しそうに過行く歸國の人々、半日をホノルヽに慰まんとて棧橋の外には馬車自働車好客來れと待受けてゐる。

場所が眼先の變つてゐるのと、考へも相當に表はれて居るので、なか〳〵面白く讀まれた、今少し文章にうるほひがあつたら、恐らく入賞したであらう（評）

○石狩

和歌山　伏見八千子

夢に幻に見る秋の石狩の國はどんなに美しうてどんなに心ゆく眺てしよう。

限なき曠い野、長いながい石狩川、遠くに見ゆる亂山はうす紫に其の上を白い浮き雲がふはりふはりと流れて秋晴の空には鳶が一羽ゆるう輪をかいて居ます、此方の河岸の銀毛を亂した樣な枯蘆の中には虎髭をうじや〳〵とはやした、人のよさそうなお爺さんが投網を手にして啣え煙管の煙を輕くふいて藍の樣に澄みきつた流れを見つめて居る大方鮭のよつて來るのを狙つて居るのでしよう。

白く咲き連なつた蕎麥畑を中にいぶせき農家は二三軒其のそばを銀の樣ないさゝ川が流れていて白い水鳥が二三羽花蓼の中て頻りに餌をあさつて居る。

黃色に實つている山續のもろこし畑には色々の案山子が立てられて夜は熊や猪が來ない樣に所々にかゞり火が焚かれるのでしよう。

暮色があたりに迫つて所々の農家から夕餉の煙が繪の樣に立ち上る、……とチリン〳〵と澄み亘る鈴の音勇ましい駒の嘶き……暫くすると落葉松の紅く染まつた林から眉美しい十八九の娘と嘶きの主とが現はれる其の背には美味そうな馬鈴薯を畚にこぼれる程入れられたのが幾はいとなく積まれて居る……歸つて馬が裏の廐て可愛い主の情ある手に頭を撫でられてフウ〳〵と鼻をならして香はしい秣を食べて居る頃は鎮守の森の木の間に夢の樣な夕月がかゝつてしづかに里を照して居るてしよう。

あゝ日々に想像する美しい石狩の國其の曠いひろい野に立つて乳色の秋花を額に香ある狹霧につゝまれて涙

の涸れる程ないて見たら御座います。

泣く理由が分らぬ（評）

○賣買

甲斐　網野やす子

私の學校へ通ふ途中に夫婦切りで暮して居る家があります。夫は桶屋職で毎朝日が高く昇つてから澁々しい顔をして仕事に出かけます。後は妻君一人、何とて仕事をするでもなく髮は何時見ても火がつきそう、家の中の掃除などもするかしないか、眞黑の破れ障子はいつも同じ樣に立つたまゝ一度も開いたのを見た事はない、それで此妻君なか／＼のお能辨家でお茶飲み會議では近所一の幅きゝとやら。

ところが四五日前の寒い朝だつた、夫は仕事に出ないで庭で一生懸命土練りをして居た、妻君も今朝は珍らしくも甲斐／＼しく襷をかけ手拭迄被つて一生懸命でトン／＼パン／＼とはたきの音をさせて居た。私は何だか不思議に思つた……歸りにはどうだらうと思つて見ると矢張り夫は土練りをして居る、内はと見ると奇麗に張り更へた障子はからりと押し開かつて中は整然と掃除して表へ向いて大きな棚が一つ飾つてあつた。

妻君は其棚を一心に拭いて居る、私は益々不思議でたまらない、其翌朝はどう成つたらうとつまらぬ好奇心に驅られて平常より早く家を出た、見ると家の前には四五人の子供が立ち寄つて居る、私も中を覗いて見た、するとあの大きな棚には駄菓子の箱がずつと並んで居た、そして障子には御菓子小賣と異樣な形の字が筆太に書いてあつた。私は初めてそれとうなづかれた、けれど未だあの練土の用途がわからないこれは又歸りにはわかるだらうと腹にきめて學校へ急いだ。

さあいよ／＼歸らうといふ頃は四邊は薄暗く成つた、校門を出て一角曲つてむかふを見るとその家か知れないが珍らしくも懸行燈がともしてある……だんだん近く成つた、家もわかつた、十三里とある字迄讀んだ、内に妻君の晴々しく笑ふ聲さへ聞えた、私の心はもうすつかりとけて仕舞つた、そして安心した又何やら愉快でたまらない。

其翌朝からは夫はむかふ鉢卷とやらに長方形の箱を左の肩に載せて右の手には大きな割竹の輪を提げて勢よく出かける、妻君は美くしく結ひ上げた髮に滿面に笑をたゝへて襷がけの甲斐／＼しき姿に愛嬌よく客を迎へて居る樣子は全然以前とは別の人かと思はる樣私は實に嬉しくてたまりません、又嬉しいと共に感じました、人には何でも一定の職業が必要であると。

一種の教訓が含まれてあり、而かも筆づかいも面白いから、種類の變つた美文として歡迎す（評）

○裁縫の一日

神田　森　千代

もう裁縫する日もろくにないので、ふだんお休み勝の方々も近頃は御缺席なく、島田桃割庇の二十餘人それぞれ晴のお召を手にして被入る、朝の内はさすがに、日短と節期でおし通して、だまつてお出てですがそろそろ足が痛くなると、同窓會の餘興の批評やら、昨日三越へ行つた話やら、さては流行物の品定め何さんの島田よく似合ふことなど互に語りあふ、

「まあ貴女、かけさして頂戴よ」「イヽエ宜しいの、可いのよ、少してすから」「アラだつてもこんがらかつてよ、かけさして下さいねえ、どうせひまなんてすから」と向ふの隅て赤い絹糸でもみ合つてると、此方ては「好いお召ねどなたの、お姉樣の、あなたのいゝお色けですこと」「イヽエ」とほゝ笑み乍ら紫縮緬の羽織の袴を付けてる、「先生、羽織のマチは多く出る方が前ですか」と私のお隣の方が伺ふとたい紅色菊模樣の被布を縫つてらした、先生がお眼鏡越しにこちらを見て「エ、そうですよ」仰つて皆樣をぐるりと見回し「アノ何樣のそのおみ帶、しんのつれない樣になさいよ」「ハア」と優しく紋羽二重の帶縫つてらした方がお顔を上げてにつこりなさる、「アッもちませう、たまにもたせて下さいよ」「イエイエ手が屆きますからどうも毎度お心盡しありがとう」「可いじやなくて御出しなさいましよ」「ソー、じや誠にすみません」と順直に持つて頂いて裾の出工合を見る、「合つてゝね」「ハア結構、ほんとに貴女のいつてもちやんと合つてるのね、羨しいわ」「オヽ厭やですこと」、「出き上りですか」と今先生の前に出來上りをもつて



万戯　　水戸北川うめ子

つたのを、ていねいに見て下さる「少しけんさきがおじきしましたねあとは可なりに出きました」「どうもありがとう御座います、と塋んで自分の座に歸ると、仲の好い方々が一度に「お目出度う」、「アラ何んですのナアニ」「あの絲が」「あらおふとんの下に御座いますのに」「まあそゝつかしいどうもお騷せ致しました」やつとこちらで沈まつたと思ふと「あの私のボーサン御存じなくて」「ひも何色」「赤のテップよ」「そう、じやこれ」「どうもすみませんありがとう」、やがて四時になるとやれ針がたりないの、へらがないのと、まるで戰場の樣な、さわぎをして漸く片付け、門口へ出ますと、いつもいつも、停車場の電氣はついております。

何處の裁縫所だらう、描寫は可（評）

○豐子樣

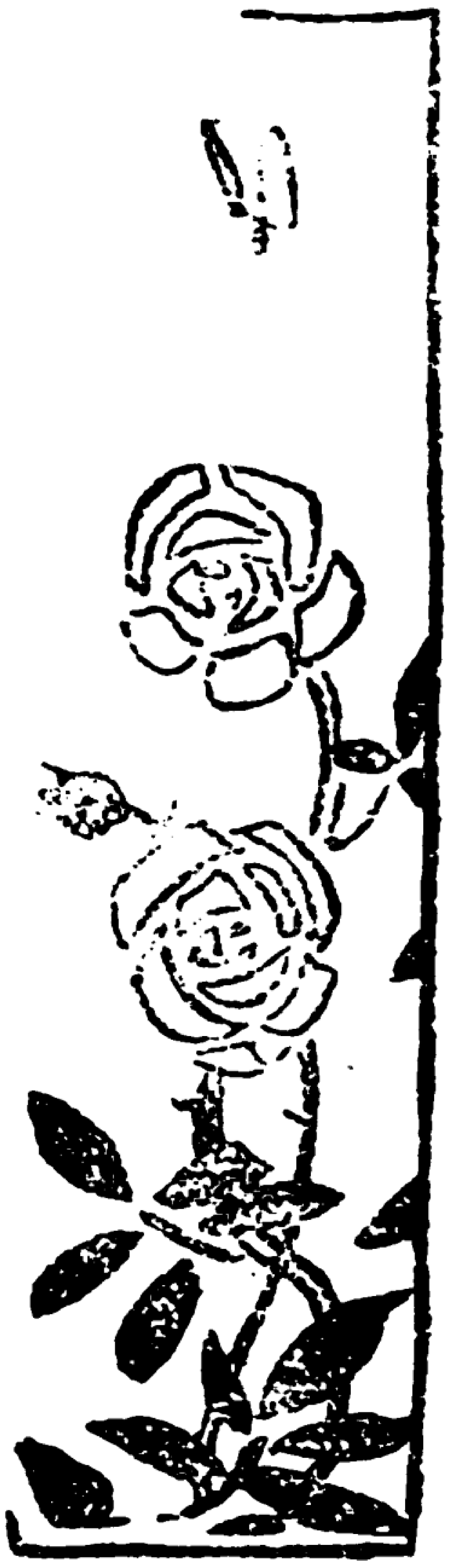
大阪　寺部君子

雪解けのごた〳〵仕た道が、下駄の齒形で凸凹に成つた儘、今朝の寒さに氷てかん〳〵と板の樣に成つて眞個に歩き難い、向ふから山本樣の少さい弟樣が道の氷を割つたり何んか戯仕乍ら來なさるので「山本さん、姉樣は」と尋ねると急にはにかんで「今髮を梳て居るよ」と言て惡い道を轉げ相に走て行て仕舞ふ。

豐子樣と私は近所の事とて、何日も誘ひ合ふて學校へ一緒に行くのです、利ぬ氣の豐子樣は御自分のお父樣が官吏な物だから、友達に話して居ても何うかすると人民が〳〵と仰有るし何彼に付けてゑら張つた事斗り言ひなさるから、誰とて山本樣を嫌はぬ者は無い位、自分も始めは眞個に厭な方だと思ふて居たが、一緒に行き歸りする樣に成つてからは、二無き友と成つて了ふた、山本樣のゑら張るのは心からでは無かつた、お父樣の僅な月給で、兄樣は兵學校に弟さんは中學に御自分は女學校に通ふて被入るので、御家は左程豐で無いらしい、其で學校に何んぞお揃ひて仕樣と言つても何時も組を外れ成さる、そして那麼事私大嫌ひよと、人も我も欺て被入る心を知つた。其杖とも柱とも頼むお父樣が、一月前に病氣で亡くなられた、勝氣の豐子樣も、其時斗りはお悔みに行た私に「私程不幸な者は有りませんのね察して頂戴、私の心を知て下さるのは貴女斗りよ」と私の手を取て御泣きなさつた時には私も共音に泣いた。日頃高氣な方だと斗り思ふて居る學校の人達は之を聞いて寧好い氣味位は心に思ふて居たで有らう、併し其から豐子樣は打て變て悄然と仕て淚脆く成つて、口數も多く利かず、今暫くて學校を退て國へ歸らねばならぬ、皆樣とお別れするのが何より悲しいと淚ぐまるゝを見ては、流石に同情せずには居られぬので有る。這麼事を思ひ乍ら歩いて居て、思はず道の氷に滑て前へのめりかけた。

書き方がおとなしい（評）

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日々の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

○一つ身日記（天　賞）

さつま　み　ゆ　き

第一日　此年月只もう〳〵夢の樣に過ごしてきた私は赤兒の着物を縫ふ事さへ知らぬ、何もかも自分一人で仕末をしなければならぬ旅の空、知らぬといふてすまして居られぬから裁縫の書物を出して見る、裁ち方が一通り出て居る丈け是ては大きい樣な氣がする、此間お隣りのおばさんに聞いたら、赤ん坊は貴女猫の子位しかありませんよ一尺も丈は入りませんわつて云つた、何だか不安心だ、此地へきて未だ半年打解けた御相談する樣なお心易い奥樣やお友達もない、吁男は氣樂てい丶もの、こんな心配がないから、考へ考へしてもう夕方になつてしまつた

第二日　今日は家庭百科全書を出して見る、初衣は裄はは入らず肩上もしないのもだと書いてある、寡聞な私は今更へーエと驚く許り、こんな時母樣の傍に居つたら——戀しくなつた、手紙て問合せるといふても「今迄私は女學校へ行つて英語も習つたしバイオリンもひけるのよ」つて少しは偉さうにして居つたんだから一々こんな事いくら母樣にだつて聞いてやり度くない、きらひだ〳〵つて裁縫の時間はちつとも熱心にやらなかつたがもう少し眞面目にお習しておけばよかつたとつく〴〵身にしみて思ふ、兎に角產婆はお孃樣らしいといふので夕御飯後吳服屋へ行つて肉色のネル五尺白紅黃の木綿一反づつ、それに小切を少し取つて來た、

第三日　昨日の肉色のネルを出して丈を一尺三寸袖丈五寸五分あとは一ぱいにして付や衿下はい丶加減にする裏は紅木綿の通しにしてふきを三分出した、綿を入れたら日が暮れた、

第四日　昨日の着物をくけ終へてつけ紐を緋のメリンスてして黃糸で束ねのしを縫付けた、春には何を付やうかとまだ考がきまらぬ、白木綿でこれに合せて襦袢を縫ひ、殘りを二尺五寸づ丶に切つて輪に縫ひむつきにする、夕方母樣の處から小包がきた、友仙のメリン

ス て一つ身、下着、襦袢まで付いて、ちやん〳〵が一つ、白木綿のむつきが五つ、八丈と矢絣が半反宛、外に瓦斯八丈の派手なのに勝色の羽二重金巾のすそ付けて綿を入れる許りなのが一枚「量が大きくなるから是には綿を入れなかつた其地でいゝ樣にしてお産をして寐てる時に着なさい、一つ身はこれを見てこしらへなさい當分の中は丈も袖ももつと短くていゝ」と謂いてあつた、何とはなしにほろ〳〵と涙がこぼれた。

好い日記です、若き妻の身に覺えあること、同情する方も多からうと思ふ（評）

○月末日記（地賞）

近江　小西愛子

十月二十八日、今日はほんとうにいやな日、朝から勘定して見ると四へん叱られた、妹とけんくわして一ぺん、お汁をこぼして二へん、返事をしなかつて三べん、もうこれでしまひかと思つたら、ランプのホヤをこはして四へん、ほんとうにいまいましい日。

十月二十九日、朝からはなれへとじこもつて文を作つたがだめ、さつぱりかけない筆の軸をかんでかんでつぶしてしまつた、夜從弟の健一さん來る、二三日とめてくれとの事又けんくわ相手が出來た。

十月三十日、書出しが來る、直本屋のを見るとあまりたくさん本をかつてあるので、びつくりしてしまつた自分では其樣にたくさん買つたつもりでないけれど健一さん後ろからのぞいて見て、文章家はちがつたもんだしやれた本ばかり買つてあるつて、にくらしい人、いつもならさんざん云ひ合つてやるのだけれど、今は、まあお小使が足るか足らないかの、心配中だから許しておく、後勘定をしたら、やつぱり足らなんだ、しかたがないから來月がらしまつをしやう。

批評も說明も理窟も何もない、只感じた通り、思つた通りを隱さず書いてある、愛らしい日記（評）

○年の暮（人賞）

本郷　千とせ

廿日、六時起床、今日はお花の先生へお歳暮に行かふと思つて居たが餘り寒さが嚴しいのに少し風氣だから見合せて裁縫をした、私はあと母樣のお羽織と自分の胴着さへ仕立てればもうお針仕舞にしてもいゝのだが姉樣の方が廻らぬらしいからお手傳ひせずば成るまい午後吉岡の伯母樣が被入つて、靴下一ダースと桔梗色のリボンと美しい花簪を下さつた、大方リボンが姉樣で簪が私のお積りだらうけれ共、姉樣はお島田だから皆私が頂いた、夕方雨戸を閉てに緣へ出ると寒いのも道理、白い物がちら〳〵落ちて來た、兄樣は明日市川邊へ遠漕するとか云つてお友達の處へ相談にお出掛、

本當に男程幸福せな者は無い、……盆でも暮でも一向お構ひなしに遊ぶ事計り考へて居るのだもの、夜なべに編物をして居ると「花の便り——戀の辻占……」といつもの可愛らしい聲が寒天に響いて裂帛のやうなのが、身に泌みて一入憐れを感じた。

廿一日、六時十分起床、夜の内にどの位積つたかと障子を開けて見たらほんのばらりと大掃除に石灰を蒔いた程、是ては初雪の名が勿躰ない、姉様は柱に倚つて凝とお庭の松を見入つて被入る、此の間中から餘程、「雪中の松」に苦しんでお出でのやうだがこれつ計り降つたのではお役に立つまい、食後新聞を持つて一寸炬燵へ手を入れると、全身がぽか／＼溫まつて來て離れるのが辛い、けれ共姉様が裁縫して被在るから私も針箱を持ち出した、お晝から母様と下駄屋へ家内中のを揃へに行つた、足駄三足（父兄弟）駒下駄八足（父母兄姉私弟吉岡の花さんお豊）東下駄二足（姉私）〆十三足、總金額、拾貳圓六十五錢、此の中で一番高價なのが姉様と私、私の駒下駄一足で兄様のが三足半買へる割だ、是だから女は不經濟だと云はれてもおこれや仕ないわ。



晦日　紀伊　神田とも子

お孃様達の眼に映じたる家庭は此迄が最も手ごろのやうに思はれる、文章も面白い、たくまずして自然の妙味がある（評）

【秀逸】

○菓子製造

鹿兒島　山本　さえ

お正月も明後日とせまつたので、私共兄弟は前の晩集まつて、甚麽お菓子を致さうかと相談を始めましたが、種々望みが出た後て、羊羹が一番良いだらうときまりました。私は作つ

て見た事は無いのだけど、寒天を入れて何か製へて見たく思つてゐましたから、羊羹とまあ一つこんな様なお菓子を工夫しやうと思ひまして、其晩直ぐ寒天と、メリケン粉、お砂糖、食紅と青粉、小豆と品々買つて歸りました、……さあそれから明くる日曜には、朝からお菓子屋さんの製造が始まりました。妹は小豆のゆで方私はメリケン粉に水を交ぜて捏ね方、弟は何時も火炊きでございました。小豆も焦げ附くやらして、漸く煮えました、それを弟と妹は擂鉢で擂り方でしたが、私一寸行つて見たら弟は擂つては水を入れ交ぜて妹の持つ笊に入れて居ました、笊の下には何も設かないで一方には小豆のかすが澤山、お重に入れてありました、弟は嬉しさうに……姉さんこんなに澤山出來たと、かすを示しました、私は大變驚いて、笊から出る汁が入用だと聲をたてゝ敎へましたら、弟と妹こそ驚いて見合してゐました然やがて合點が行つたと見えて、笑ひながら私の敎へた通り始めました……小豆の「ゴ」の取り目は少なく御座いましたけれど、寒天を煮溶かし砂糖を交ぜ漉して小豆の「ゴ」を入れ流し、箱には淺草海苔の箱をし、早く冷却る様に石舟の中に靜かに入れて置きました、弟と妹は喜んで石舟の端から離れません、私はメリケン粉に砂糖を入れ、寒天を煮溶かし入れましたら、そこ此所に固りが出來ました、けれど氣にもせず、三分の二つには紅と青に色を附け、殘りは白の儘で、それを蒸籠に木枠を入れ、濡れ布を敷いて、紅白青と流して釜の上にのせました、さあ其時の私の嬉しさ、心の中では蒸し上つて庖丁で切つた時の美しさが見える様で、未だか〱と何度蓋を取つて見たかわかりません……けれども一向固りません、蒸せば蒸す程軟かく成るので、私は不思義と暫時考へた末、あゝ寒天を入れたのだからと氣づいて、最う氣が氣でなく、弟や妹が未だか〱と云ふのが尚胸苦しく遂々良い策が出て「皆んなお湯に行きよ歸つた時は出來て居るからと云つてやりました。さあその後て私は蒸籠を下して鉢に移して寒天を最う一本入れて冷却し初めましたが、最うお機嫌が違つて固りません。一寸食べて見ましたら大變味しいけれど、赤と青が交つて變な紫色になつて、毒々しく、胸が惡るく遂々お流しから捨てました、丁度其時、少し眼の病るい婆が來て「石舟は空ですが」と云つて勢良く上からドット水を入れました、私は有難うと云つて流しを洗ふと柄杓を取つたら、先冷却して置いた羊羹は、ばら〱になつて水に浮いてゐました、……只一つ丈は少なくもうまく出來たと喜んで居るところに……私の其時の心、弟妹は姉さんて走つて歸つて來るし婆は「忠が不忠を致しました」と詫びるのに怒られはせず「宜しいよ私こそ……」と云ひつゝ羊羹の良い様なところを弟妹へ取つてやると「最う一つのあれは……」と

訊くので致方なく、ありの儘を云つてやりました……それからです私がお菓子を製ると云へば「又色粉と寒天入れ被成るの？」「流しの下の蛙のお喜び」と云つて私をいぢめるのです。

菓子は不出來ても文章は大出來（評）

○秋の末

夏衣

頭痛がするので、散歩傍々田端に禎さんを訪ふ、建仁寺垣の上からコスモスが頭を現はしてゐる、よくのびるものだと今更の樣に感心して門をはいると、菊がまつさかりて、ぷんといゝ香がする、名を知らぬけどいろんな花が一つぱい咲いてゐた、ずつと花壇にそうて裏の方へ行くと、井戸端て禎さんが揚子を使つてゐる、私は熱と知らん顔して花の方をみてゐると、子供の樣にぬき足さし足て、後から目かくしするから「およしなさいよ禎さん」といへば「ホどうして我誰といふ事がわかる？つて不思義がるから、男とをんなの手位わかりますわね」「それにしても早やいお出じやないか」「あんまり早くもありますまいよやがて十時ですからね、本統にあなたの樣に寢坊の人はありやしない」「だつて夜おそいのだもの君ちやんは何時におきたい」、「何時つてちやんと七時にきまつてますわね、いくら夜おそくなつたつて十時迄もねてられやしませんわ」「そりや君ちやん勝手さ、僕は僕の勝手て寢坊するのさ、君ちやんにね坊のまねができない樣に僕にも早起のまねはてきない、それをまねろといふのはむりな話さ」、「じや學校の倫理なんぞもずい分むりな話ね」、「無論いふ迄もないさ、……」「ホヽヽ」あまり賑やかなのでみよが出てきた、私のゐるのにびつくりしておやく お嬢樣てございましたか、大變お賑やかてゐらつしやるから何う遊ばしたかと存じまして、ホヽヽお早うございますまあ御はいり遊ばせ、若旦那樣お乳が暖まつております、

それても感心に禎さんはおばあ樣の處へ朝の挨拶にゆく、私なぞならこうおそくなつてはとてもきまりがわるくて挨拶なぞてきやしないがそれだけ禎さんはあつかましくなつてるわけね、

おひるの御はんはよばれた、その折ふわく 玉子とさらいな糸こんにやくがあつた、處が意地惡の禎さん私の玉子の上にこんにやくをおいて、「ホラく その上に虫がはつてるだの、やくそをくつただの、いゝものをあげませうなんぞつちやお茶わんの中にこんにやくをいれたり、していやがる樣な事ばかしするから「そんな事いつてよくむねがわるくありませんね、」といへば「何ともないさ」「じや質物があつても？」「そりや生た蠶がありやいやだけど」、といつて自分からいきた蠶は振つてるつて大笑ひ、（十月末日日記の一節）

日記か美文か分らないけれど、筆がらくに動く、而してすつきりしてゐる、此文を見ると、東京の若い女の顔が眼に浮ぶ（評）

○十二月卅一日夜の記

静岡市　鈴木佐知子

「へえお父樣ごらん下さいまし」

一ケ年賄費用總計

品目	價格	品目	價格
米代	百八十圓	魚代	七十圓
醤油代	十二圓	酒代	四十四圓
炭代	九圓	薪代	十圓
石油代	十五圓	砂糖代	五圓
雜費	百圓	賄手當	三十五圓

計金四百八十圓也

「ハヽヽ手當か——よからふ、お母さんより余程經濟學修めたと見えて中々上手だ、一ケ年の勤勞三十五圓武子萬歲」「おほゝゝほんとにお父樣、三十五圓なんか勿躰無いやうですわね、だつて私初めてですもの三十五圓なんてお金は」「ハヽヽヽ」「ホヽヽヽ」母の躰が忙しいと言ふので、七人に對する一ケ月の賄費用四十圓、一圓でも二圓でも餘つた丈は私の手當？兎に角お小遣ひに下さると言ふ定めて一月から引受けたのです。三月迄は二圓から三圓のお小遣ひが出ました、九月迄は三圓乃至四圓、十月からは二圓位しか殘らなかつた。「お前寒くなるとお米と炭が餘程違ふからね」信實に今月は五圓は殘るだらふと思つてゐたがお母樣の仰しやる通り、寒いから炭が要る、食が進むのでお米が要る、全然豫想はづれ「お孃樣此頃のやうぢや大變でご座いますね」おさん迄氣象をした位四月頃迄は御酒好きのお客樣が多かつたのに、あれ丈殘るんだもの眞實に今月なんか不思議な位——が全くあの時分はおかちんがあつたからだと今漸く想ふのです、何でも實地と經驗をさせなけりや細い處へは氣が付くもので無いと今更感じる、來年度のシマツ經濟を思ひつゝ十一時床に就く。

以來「家庭日記」欄には此種の記事も歡迎しますが、餘り沒趣味なのは採りません（評）

○ありのまゝ

羽後　菊池りう子

十一月二日、八時父君京に旅だゝる。常より氣をもみ給ふ事多ければ手ぬかりのなき樣にと昨夜より母君と、仕度調べし甲斐ありて、常程にはあはてず。風少しあれどさしたる事もなければ皆嬉ぶ。松井樣より御手植の梨頂く手前方よりもいも掘りてまゐらす。今日より母君中山樣、茂子、私の四人叔母樣よりお花稽古の約束なればとて、中山樣柳きりてまゐらる。四人並びて柳三本をいく。中山樣は三本迄折りて、とても駄目なりとやめ給ふ。夜戶じまりをかたくなして、何よりも火の要心こそ大切と委く見廻り早く休む。妾は今宵より二階の母君のお傍に休む事にせり。今頃は父君車中に眠り給ひてかなど語りあひて——。

三日。天長節。座敷に、御眞影をかゝげ一家心許り祝ひ奉る。常ならば父君の御話もあるべきに——。皆と相談して節句などに多くの財を費さんより、かゝる日

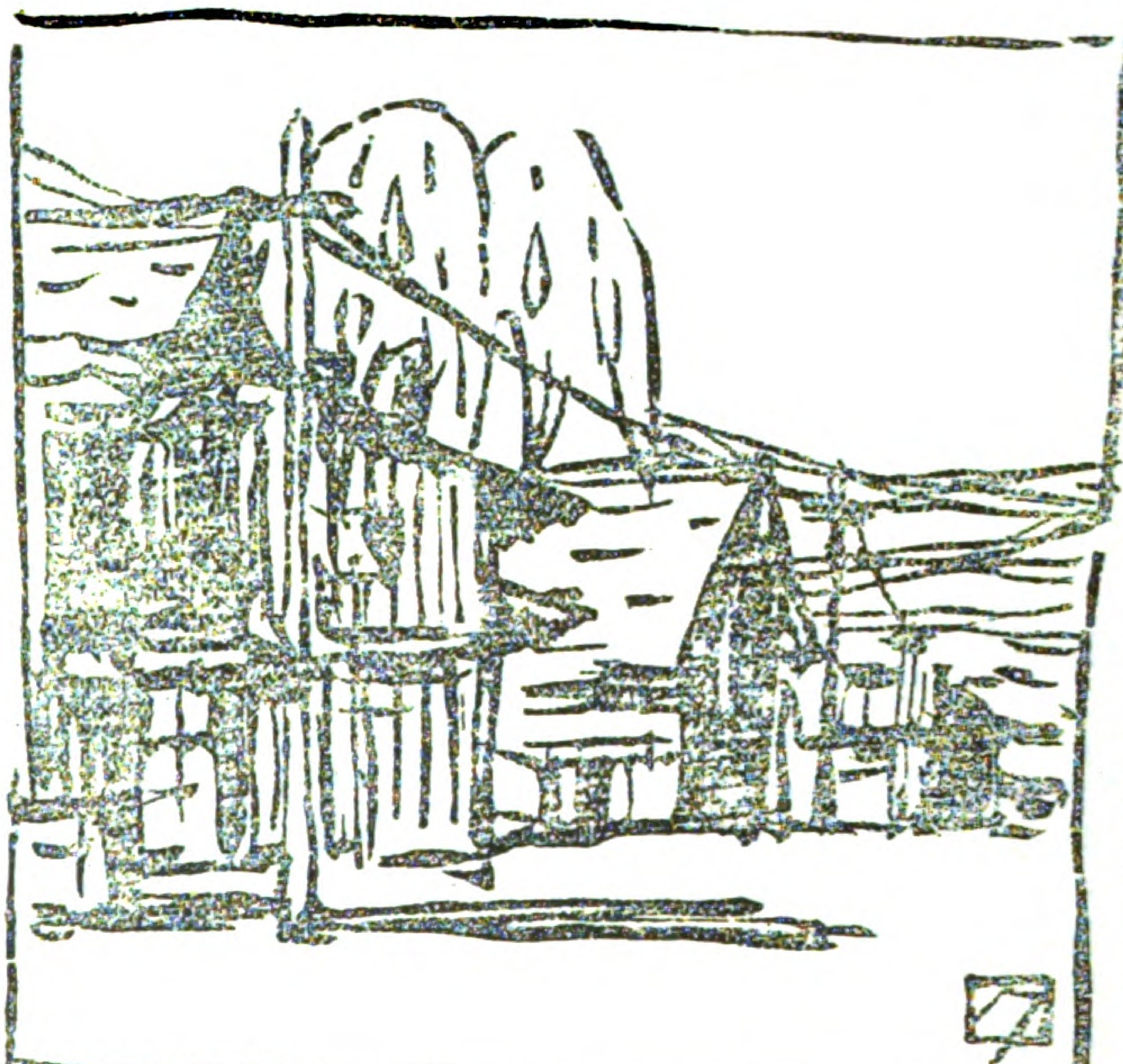
にてそ、お祝として何か馳走をなす事にと定む。姉君と二人、栗のきんとんを作る。裏より菊つみ來り、ひたしもそへて――。今日は母君裁縫もよして語りあふ。夜父君より「ブジツイタ」との電報來る。早くとも四日の早朝迄はと思ひ居たりしを、今更に文明の世の有難さを感ず。

四日。叔母君夜半より腹痛にて苦しませ給ふ。こんにやくをにて、布に包み抱かせまゐらす。朝醫師來り診察すれど明瞭ならずといふ。茶の間にて裁縫をなし居たるに突然傍の火針より灰ふきあがりたるに、驚き見れば誰やらむ生栗を二つ許りうめ置きたるが皮はれつしたるなりき。後きづき見ればぬひかけの布に少し許り穴あきたり。叔母君少しおちつき給ふ。嵐はげし。

常に見るものより鮮なきがうれし（評）

○夢日記

滋賀縣　磨志緒



夕暮の町　名古屋　三浦くろ子

十月七日。兄さんがテニスをしてゐて石にあたつて足の親指をけがしたとおつしやるので、見ると皮がはなれて肉が見へてゐるのでビツクリして石炭酸で洗つて繃帶してあげると血が外まで出てくる兄さんいたいでせう、ていつたら私の顔見て笑つてゐらつしやる、そして此傷がなをつたら廣島へ連れてつてやらうつて、うれしくて、うれしくて一日も早く治るやうにと心の中で祈つてゐた。おとう樣の咳で目をさます、傷の事がさか夢ならばいゝがと氣にかかる廣島行はほんとうならいゝと思つたすぐ兄さんの處へ手紙出さうと氣がせかせかするがまだ夜はなかなか明けん。

十月十三日。お友達の處へ行かうと思つて家を出るとどの道にもこの道にも蛇のゐる事それはそれは太い太いのが道をさへぎつてゐる一つよけて通ると又一つ漸く足を踏み入れる場だけあ

る計りもう〳〵氣味がわるくて走り出すと皆おつてくる、これはかなはんと思つてゐる間に一匹私の口にはいつた頭は最早腹の中にある尾が口に出てゐるので一生懸命手てひつぱつてもなか〳〵出んもうたまらんので聲をかぎり人を呼んだ。

お前何いつてるの恐ろしい夢でも見たのとおつか樣におこされて夢だつたと安心した、おつか樣は五六度起したとおつしやるなぜこんな苦しい夢見たのかしら。

十月十六日。此夜の夢程書きにくい事はないちつともまとめて一つの事に出來ないが考へ出して順序に記しておこう初め廣い野原て花を摘んで居たらそこへ外國人が澤山きてソレスミレ、ソレスミレといつたので之をあげた、と私はちやんと汽車に乘つてどこへ行くのか知らんが下女もつれずふだん着のまゝ一等にのつてゐる窓の外を見ると山計り傍の人が之が箱根ですとおつしやつた。それからはどうしたやら何やら噴火口の傍へいつたやうな電車でどこかへ行つたやうなへんな氣がする。

夢に僞りなし、僞りの如くにして眞なる處、夢の夢たる所以乎（評）

○日記ありのまゝ

府下　風間秀子

十月二十五日、朝。御殿山の、津脇子樣を訪ふ、例のお書齋で、人形の、着物を、縫つて、被居しやる所てあつた。其處て、ピンポンをして遊ぶ、勝は、相方二度、空也の最中を戴いて十時半歸宅。御隣の、房子樣に誘はれて、妙華園へ行く、花簪を買つて、妹の土産にする、南馬場で、丸髷姿の、由井樣に遇ふ、貴孃方が羨しいつて、御仰しやつた、夜。妾一人、留守番を言ひ付けられたので、房子樣と咲子樣を呼んで、時候はづれの、歌留多を取る。倦きた時分に、皆歸つて來た、鯉の子煎餅を、食べながら、雜談する、十時就寢。

十月二十六日、朝。學校て、勤儉勅語について、校長の訓辭が有つた、唱歌の時間に、水川先生が、ヴァイヲリンて、荒城の月を彈いて下すつた、別に、忍ぶの友を教はる。

晝。唱歌の時に、あまり、大きな聲を出した故か、御八つの御芋が、大層甘いしかつた、机に向つて、平氏滅亡の歷史を、讀んでゐると、白い蝶が、庭の、咲き遲れた、コスモスに飛んで居る、春や昔の、榮華を、夢見てゐるのではないか、と、平氏の上をも、思つて感が深かつた。

夜。吉川屋へ、クラブ洗粉を買いに行く、いゝ、響が目に、ついたが、今朝の訓辭を、思ひ出して、洗粉丈て歸る、嫌な、算術の宿題をやつて、頭が、滅茶滅茶になつたので、少し早いが、九時十五分床に入る。

和歌

與謝野晶子先生選



○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく淸新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○（天賞）　大阪　山内溪子
若水はかの天上の白銀の山をめぐりて來しと思ひぬ

○（地賞）　薩摩　國分つや子
おのれ生く弱き命とわが君にさゝげし强き命とありぬ

○（人賞）　府下　田村須磨
七色の彩翅つくろい我胸をひしと蔽ひぬ幻の鳥

【秀逸】

○　豐後　伏見琴子
春風は土佐の國司の京に入る青海原のふなべりに吹く

○　伊賀　山村龍子
願はくば悲みに泣き喜びに笑まふ身となり生きてあひ見む

○　靜岡　天野白藤
人戀ひぬ若き力の誘ひに愛の御神の心のまゝに

○　香川　香川育枝
追懷の野はたゞひろく一花も咲かねど鳥はうたはねどよし

○　福井　やまざと
やぶれては君又强き酒のみて眠りたまひぬいたましきかな

○　茨城　今泉磯千鳥
笑まれぬれたゞこともなく笑まれぬれ羽子板もてば手鞠をつけば

○　大阪　田宮薫菊
けうらなる七の少女の乘り給ふ御舟こぎこぎと見し春のゆめ

○　麴町　しげ子
魔神あり杖ふる如に颯々と空なるに似る冬の山かな

○　日本橋　吉田さく子
縫ひ更ふる袖に優しき香のゝこり夢のやうなる縫ひ心地よし

○　大阪　梅本龍子
いさゝかの爭かいごとに涙して怨むと言ふも趣はあり

○　八千代
葉の精の空へかへると流れゆく鈍色雲をさびしとおもふ

○　京都　岩淵國子
ふるふ手に細毛の筆をまねらせて今宵は歌も浮ばずなりぬ

○　寺部君子

咲きもやらず凋みぬ庭の白うばら強く君戀ふわれに似たるよ

○　徳島縣　野　菫

暗闇は君の俤たどりゐし我をおそひて涙せしむる

○　駿河　齋藤みね子

あか〱と夕日かげさす西山は紅の雪ふるとおぼゆる

○　山城　廣江正枝

白ばらの花をかざせる黒髮の美き姫君に春の風吹く

○　岩代　美津江

一つ二つ消へゆく星を眺めけり思ひ出をほき朝ぼらけかな

○　上總　今井政子

よろこびのあまりてか否か海鳥の群ひた舞ひぬあけぼのゝ空

○　岩代　入亜子

白萩の露を硯りに移し置きて歌思ひつつ夜を更かしけり

○　上野　八木芙蓉子

堪え難き悶へ抱きて野にたてば雁ゆく空にちぎれ雲飛ぶ

○　大阪　香崎靜子

子供等のさわける聲に窓あけて見れば嬉しきゆきぞ降ける

○　相模　渡邊八重子

淋しみになほ望あり命あり秋に咲くなる千草百々草

○　信濃　紫女

姉君が化粧の居間に嬉しくも今朝鶯の初音聞くかな

○　長崎市　一瀬みどり

このおもひ誰にかたらん風寒き枯野は冬の神もおはせじ

○　上總　金井菱花子

夕月の香れに影せる野に立ちて露にぬれつゝ君思ふ哉

○　豐前　赤田壽美子

七年の昔のわれを忘られぬ君なつかしき十七の春

○　尾張　成田いし子

何となし白光冴ゆる橋の上にゆく舟みつめほと吐息しぬ

○　芝區　田所米子

君ならて誰にか告げん二十二の胸を熱せしもゆる思を

○　千葉縣　關部留子

星一つ光る暗夜を木枯は雜木林に冬の譜奏づ

○　伯耆　新田文野

もみぢばと川瀬の水のさゝやきをわれは聞けり秋の夕に

○　羽後　三浦ふみえ

姉上のみ膝枕に草艸紙ひらきて見ける山茶花の宿

○　近江　岸つぎ子

こは甘き涙ながらに雨の夜は君もかくやと淋しさになね

○　福井縣　北利子

老ひたるも若きも共に打ち集ひ祝ふもうれし屠蘇のさかもり

○　信濃　青木みゆき

花の魂ひそかに訪ふ夜の風に天なる鈴の音なりやまず

○　岩代　郡市縣女

あやの袖黑き高髷綿帽子御影あはし月おぼろにて

○　下關　大野繁子

今日も父落葉拾ふか木枯の絶間〱に咳の聲する

○　若狭　汐汀春八

新潮は銀を高めぬ日の神は世界のはてに今みゆらし

○　千葉縣　山崎とよ

少女子が秋の形見に折りかざす袂にかをる白菊の花

○　大和　豐田晴子

朝の雨山にのぼりてよき人のころもの裾の野の虹を見ぬ

○　本郷　田村きみ子

我が胸をとき刄物もてとく抉れ君ゆゑ得たる罰にあれば

○　中洲　月枝

いつとせの片想想ふさびしさにおとめ十九のあき行かんとす

○　和泉　藤岡春子

花の散る幾十里に初夏の風にほひつつ五月雨は降る

○天の裾に眉美くしき八千人の舞子見てゝわが夢さめぬ
尾張　岡田信子

○
静岡市　根岸眞子
さびしらに秋の夜風に吹かれつゝ琴弾く胸の指あふるる

○
神奈川　内田悦子
秋の夜のそゞろさびしき病床に人知れず思ふ人もありけり

○
福岡縣　福田靜月子
面細き秋逝く宵に欄により故郷遠く人おもふかな

○
熊本縣　金子かたえ
われふたゝびかへりみすれば君か瞳とまたもあひぬる春の宵かな

○
大阪市　中村秀野
秋の日の暮れ逝く空を眺むれば我身ににたる果敢なさ覺ゆ

○
常陸　上土井定子
母居ます西のみ空をおろがみぬ雲間に出し三日月のかげ

○今日もまた夢より醒めて亡き母の面影思ひ涙ながしぬ
大阪市　高岡もと子



お客様
青森　松尾千代子君

○日はおちて空に迷へる夕靄の靄のうするゝさびしさに居ぬ
兵庫縣　菅原よしえ

○
奈良縣　西田鶴子
我が背子の門出送りてさきくあれと仰ぐみ空に時雨ふりきぬ

○
神戸　輝山巴
こぼれくる紅葉を袖に包みけり今日のあそびの家つととして

○
肥後　さかえ
朝明や五山の鐘に流れ行く霧の中より君が家見ゆる

○
上總　森岡誠子
美しきよき雲なびく南の國を思ひて寂すと云へ

○
周防　小野本良子
ながき夜ハ月もうするる曉たゞ何にをしみてや琴をひく

○
下野　川田よし子
鳴立ちて舟は渡岡に隠れけり折しも告ぐる三井の夕鐘

○
京橋　藤本よし子
高歌ひ木々に花さき草萠えて寂り床しき風も吹きゝぬ

○
牛込　見松吉江

花さかむよひとも思ひともし火に油そへても起きゐぬるかな
○　秋田縣　萩原とよ子

秋の日の垣根の菊に小雨してさびしき家に扉ひきし哉
○　紀伊　三栖久榮

はぜまじり紅葉かつ散る夕月にな鹿鳴くなり秋の山里
○　茨城縣　宮本竹風子

ゆく秋のとある夕べを辛うすき身一つ恨み天地に泣く
○　みどり

木がらしに庭のもみぢ葉はちりはてゝ淋しき冬となりにけるかな
○　岩手縣　昆美映子

有明の月は入江に影落ちてひとり殘れる舟の燈し火
○　千葉縣　三森ゆき

新玉の年を迎へて黒髪の長も延びたる心地するわれ
○　牛込　佐藤いつ子

つれ／＼と小雨そぼふる秋の夜は思ひ絕えたる君もこひしき
○　栃木縣　柳田富美子

いつまでもこの薔薇のごとく白かれと友が御胸にさしてわかれし
○　靜岡縣　濱崎照子

容なりき花野に立て若草の燃る心を語り合ひしは
○　紀伊　奥野夏子

うらにはに種々の木の葉は散りみだれ思ひつきせぬ秋のの夕ぐれ
○　大阪市　辻芳子

我が折りし戀の花草人々の持てるにまさりよしと思ひぬ
○　熊本縣　ほゝえみ

空青く植くれないの野邊にして馬子の唄聲冽渡り來る
○　下總　若杉とり子

君故に樂しかりにし日と知らばわれは笑顔を見せてしものを
○　佐賀　田中美枝子

白き雲西へ流れてひろの月うかぶ深山の水のつめたき
○　大阪府　櫻濱春枝

露ぐもりはれゆく山の日の影のうすあかるきに千鳥のなくなり
○　大阪　西戸政江子

文箱に秘め給ふとは面はゆしそは戯れに書きし歌反古
○　岡山縣　桐本悦子

谷川の岩間に咲ける姫百合の水に姿を映すやさしさ
○　山城　八田文子

若き女にこひする人は罪あたへ罪をかぞへて誇とぞする
○　相模　山本文枝

若き尼經よみたまふその時に銀杏はちりぬちりちりちりと
○　廣島縣　田坂芳溪

枯野原尾花の波のたそがれを旅僧一人ものうげに行く
○　熊本縣　入江竹子

ひるも夜も案山子はひとり畑中に弓矢にぎりて稲をまもりぬ
○　佐藤勇子

只一人ふみよみ居ればちら／＼と梨の花ちるおぼろ夜の月
○　遠江　小林とし子

雨降れば母とわかれし朝の橋涙にうかぶわが身なりけり
○　豐多摩　小森たけ子

黒髪は風に亂れて君を卷ゝ黄金と成りぬうたゝねの夢
○　安房　山本たか子

留しとて勞れ休むる切株の邊りにしろき野菊の咲きぬ
○　靜岡縣　齋藤しま子

火と燃えし夕やけ雲のうすれゆくそれにも似たるあだし心よ
○　上毛　岩田ろはち

みそさゞひ聲も立てずてとび行ける雑木林に木枯の鳴る
○　神奈川　大岡清子

へだたりて聲も言葉も通はれどたゞ慰むる君のうつしゑ
○　山口縣　深山紫

世は淋し時雨も降りぬ葉も散りぬ淋しき中に我はなやみぬ
○　徳島縣　芝かつ子

温かき胸の冷ゆらんさまをして水は氷りぬ雪は積りぬ
　　芝きみ子

野の眞萩君と連れ立つ嬉しさに大古の園も心に描く
○　茨城　須崎せい子

亡き母が手植ゑていにし白菊に今宵淋しく鈴虫のなく
○　本所　秋山欣子

煌と照る白き光のなかにしておびゆる魂よ終焉を思ふ
○　大分縣　河南しのぶ

秋ふく風冷かに冬來る朝にさびしき一花野菊
○　岩代　根本喜代子

秋の月波より出てゝ影清く松にやどりぬ雁啼き渡る
○　南部　さくら子

夕日さす山のもみぢの紅は我が心にもよく似たる哉
○　牛込　たつ子

秋のあめ淋しく窗を打つ夕べ長き眠りの母を思ひぬ
○　靜岡　川山よしゑ

戀すてゝよるべなき身の只獨り磯さまよへば夜を千鳥なく
○　常陸　大久保輝子

桐一葉落つる刹那の寂しさに今日も暮れぬと日記をかくかな
○　葛飾の里　金塚仁子

怨じては心のさわぐ秋の雨髪のほつれに白秋の散る
○　岩手　富士根小枝子

あさましき夢にはあられど然はあれど君が上にな凶はあらせそ
○　岐阜縣　傍島小枝子

幾そうの大船小船帆づなふく春風そよろ落日の海
○　沼津　鳴田笑子

とりの聖水くみおれば月影のはだえにしみぬ初霜の朝
○　横濱市　相樂きみ

僧が手の掃木を借りて亡き母の墓の落葉を我ぞはらはむ
○　信濃　くれなゐ

秋晴や伽藍の塔のいたゞきに白き雲浮く古郷想ふ
○　遠江　平野すみれ

靄遊を逃る里の子群貝なこゝゆる雨中息にぬくみめ
○　大阪市　鹿島あや子

おだ浪の騒ぐ直頭の諸小舟不安の夢に眠りぬわれは
○　熊本市　猪本とめ子

少女子が小琴彈ぶる秋の夜におのづとうたふ鈴虫のこゑ
○　沼津　波邉とよを

いな暗きや馬上の君が軍刀の音勇ましき初春の朝
○　芝區　栗生田茂子

老が身の友とこそなれ庭の面のおきなさび行く白菊の花
○　伊豆　野田早苗

西の京小雨ふり出ぬ振そではてすりによりて傘まちにけり
○　相模　槇木とよ子

かなしかる運命となりぬ文机に冷たくかをる水仙の花
○　長野市　小林勝子

若水にうち向ひたる少女われ嬉しき年の始のこゝろ
○　上田町　田村あい子

秋の日も夕影しめてかたぶきぬ尾上へだてて鹿の聲する
○　越後　小野綠松子

詩人は皆月花に歌へ共ひとり經讀む山寺の君
○　埼玉縣　岩田文窓子

森の中あかるう灯さし太鼓の音いとにぎわしき村祭かな
○　もと子

先の日に君と見るべくほゝゑみし心ないまはあざけりてなく
○　越後　文枝

幾千たび書て破りし文からの千づかをつみて中になきれぬ
○　熊本縣　釘崎るかえ

肥後の野や霜深く橋の白うして今朝こそ寒し朝明けの鐘
○　金子片枝

ほそきつな一人のきみにきらせて下りて見たき千丈の岩
○　上毛　飯島泣花

おん眉は三日月に似て日輪の光り放てり我が戀ふる君
○　肥後　山本紫水

侘びては古郷の空のなつかしき君住むあたり星一つとよ
○　宮崎縣　下川孤子
深山ゆきたきゝとる子や寒からんあらしとゝもに雪はふり來ぬ
○　熊本縣　高崎春江子
繪にしませ歌にしませと今朝も又波瀬照りし少女は十五
○　千葉縣　北田信子
月に世を果敢なみ居れば川上に枯消えて秋風さむき
○　上總　長谷川ふみ江
昨日まで涼しく聞きし瀬の音も何やら悲し今日の夕暮
○　信濃　駒澤ひろ子
水仙の花にうらみはあられども歌なき日にはかこち恨みぬ
○　山口　京家麻子
君に咲く我胸の野の花なればまたあだ人の摘むをゆるさじ
○　京都　堀尾ゆき子
おのづから心すぐれし君なれば心すぐれし戀君を見む
○　青森　西村みや女
人里を遠くはなれし我が宿は鹿のなく夜のさても淋しき
○　岡山市　長島とき子
寂寞の秋の夕野にひゞきてはわがつく鐘に我れもの思ふ
○　兵庫縣　加藤ちよ
萩桔梗花の下かげ扇搖げば袂のさきにいとどかをりぬ
○　備中　篠原しげ子
夕雲は大綱の如はびこりて赤き日包み眼となしぬ
○　伊賀　岡花子
いれもせず終日終夜君思ふわれを許さずいと憎きかな
○　名古屋　廣岡さい子
わがいのち淵に消ぬべき運命かも焔に似たる惱いだきつゝ
○　埼玉縣　岡本みどり子
夕焼に燃ゆる日をのみ大空に星あまた吹く富士の神山
○　大阪市　古川紫[illegible]
雨降る日靜かに木槿さく道を白き衣着て柩送りぬ
○　信濃　加納鶴惠
昨日まで我をむかえし白菊は今朝初霜にいたくしをれぬ
○　末丸逸子
かなしさをつゝむに餘る我胸にひゞくもくるし野邊の夕がれ
○　福島　三浦春子
春の灯を中にしおきてなつかしき人とうとめる人とよりゐぬ
○　羽後　大友みん子
み手とりて君と行く日は目にうつる物皆清よく美しと見ぬ
○　羽後　泉田秀子
天の火に山皆燒けて亡ぶともかへじこの音樂神に誓ひて
○　愛知　中神志津子
故郷に栗の實おほくたくはへて吾まちたもふ母をおもひぬ
○　信濃　宮澤すみ子
春は來ぬ人にまみゆと黑髮にあぶらぬりても待てる心に
○　岩代　はる
去年逝にし少さき妹を見るやうの心地せられぬ三日月のかげ
○　大阪　松葉要子
伸びあまる浮藻おさへし水の石の冷たきに似るさまたげ人は
○　佐賀市　田中安子
高なりになりこそどよめおん船の着くてふ今朝のわが胸の海
○　上毛　瀬口綠笛子
枯木立己が宿世もかくやらむと思ふ宿世あはれみたまへ
○　青森縣　馬場ちよ子
遠かたに桃咲き川はやさ背して春たわ／＼と暮れにける日よ
○　鹿兒島市　山本さゑ
青空をそれともかくす黑髮はきみの心と更に恨みぬ
○　麻布　江森美
氣高き操の花と仰ぐかな雪つみ立てる松の姿を
○　佐賀縣　交野こはぎ
君がすむ外山のあたり秋たけてゆふべ落葉の音しげからむ
○　神奈川縣　岩澤手更

秋雨や母よと呼びてすれもするうなゐあらばとふと思ひけり

○ 下野 宮島よし子

衰ろへのあゝ家むくろ秋風や誘ひゆくべきけはひして吹く

○ 熊本市 江添千々子

醜の影姿見に映し涙して再映しゑみぬかなしき

○ 岐阜縣 深谷 時子

書千卷よみて眺めて君とわれうらなく語るうれしき夕

○ 大阪市 花 子

ほがらかに日は今日も照る哀愁は胸に隠してほゝゑみて居む

○ 入谷の里 小笹 千代

ひやゝかに笑へる人の顔あまた涙のひまにふと浮びたり

○ 滋賀縣 若井 菊枝

ゆく雲に思ひをのせて君に逢ひ逢ひて笑まひぬ君は知らずや

○ 紀伊 白萍子

磯の宮白洲にしろす曉の松影を踏む白足袋の人

○ 岐阜縣 日野歌子

河向う雜木林に白煙立やほのかに灰色の家



待合室 山口縣 濱田しづ子

○ 常陸 りう子

衣のたまの色も光もくらむまでいよゝ輝やけ姫がみこゝろ

○ 京都 露野子

戀しらぬ君にしあれば七人の男子の中を眞面に行く

○ 名古屋 吉田 たま

わが心夏の日和のそれのごと逍遙ふ雲ははてしなく行く

○ 福岡市 田中とよ子

露草の二ッ開きし朝なり水色空に夏姫を見る

○ 上總 露 女

木枯の夜はあやぶみぬやはらかき君のおもひも忘れはつやと

○ 佐賀縣 入谷 菫子

まどかなる月影さびし旅に綴ろ夢より覺めて里の戀しき

○ 佐世保市 鈴木 結子

草も木も若めいてくる春風に長閑に蝶の舞あそぶかな

○ 上野國 柳澤もと子

落日やあゝ君みえず夕雲の赤うみだるゝ我こゝろかな

○ 下野 瀧澤秀子

山の彼方海の彼方の月落つる國戀ふるなる我や夢の子
岡山市　今東琴子

○

白菊や別れ惜みて吾が髪に一輪差しぬ月明き夜
京都　綿引古都

○

ふりつもる眞白の雪にいやはへて松のみどりの色ましにける
羽後　瀧本光子

○

我胸の奥に園あり朝夕に來て花をつみにくる君
相模　鵜田英代子

○

春の神下界に降りよき香する毯絨を敷きぬうすき霞に
大阪　紅女

○

大霜に數多の草木はしほるれど常盤木ばかり雄々しく立てり
豊後　安岐子

○

雲はれて木々の小枝に白銀の玉を宿しぬ雨後のいざよひ
和歌山　貞子

○

鐵瓶のくちより落る水晶の如きま玉をほゝ笑みて飲む
大阪市　佐川かをる

○

そゞろにも亡き兄戀しき夕暮を乳房つめたく秋風の吹く
秋田縣　小原あき子

○

何となく亡き母君のおもはれて涙ぐまるゝ春雨の日よ
秋田縣　小松とく子

○

小夜更けて月冴え渡る森のもとふくろふ鳴きぬ心ありげに
伊豫　曉子

○

何なればかくも小指のみだるゝよ袋ある衣と人はいはへど
三重縣　つるへ子

○

曉の瑞備さやけく地におちて年の初日ののぼるをぞ見る
茨城　大崎澄江子

○

小菊さく野邊を流るゝいさゝ川流れの末は君すめる里
麻布　花垣子

○

小さき火の遂には炭の大塊を焔に化すと君は知らずや
上毛　きよ子

○

君顔をゆめみて笑みておはすむと念じてゐたり春の夜にして

○

朝起きて庭眺むればうくしくも人待ち顔に朝顔のさく
越後　品田常子

○

すこやかに居ませと祈る我面を青く照しぬいざよひの月
大阪　和田倫

○

契られどかりは今宵も來るものを我思ふ子はなとて來まさぬ
兵庫縣　橘きみ子

○

七寶を帯にちりばめ緋の扇かざして舞へる京少女かな
若狹　山田小濱

○

天少女が羽衣まとゐ立つと見ぬ霰ふる朝のにはの姫松
京城　ゆかり

○

前の世の親のつくりしわがつみは人にも過ぎて二十歳となりぬ
若狹　早水その子

○

窓かけのみどり射通し室のなかをあかるくなしぬ夏の朝日は
兵庫　杉山春翠

○

名もしらぬ草生ひ繁る城跡に昔を思ひ虫聞く夜かな
栃木縣　河田芳子

○

源氏かく鮭をおきつつながめけむ石山寺の秋の夜の月
淺草　渡邊喬子

○

わが戀のしら玉君かくれなゐの玉と相なりよき音たてぬ
房州　高梨知世子

○

枝の音しわが名呼ばるゝ思しぬ旅寢の母の懐しきまま
福島　川名直子

○

門松の立つをうれしと思ひしは去年のわれより二十二の今日
茨城縣　佐賀達子

○

小羊のむれ遠近に白うして時雨ふるなり牧笛の音に
下總　荒萩の花女

○

戀人は有明がたの露となりぬ魂ありと見る下知火のかげ
佐賀縣　樋口みゆき子

○

小屋つゞき垣根〳〵に實蕎咲き稲刈忙し秋の日のてる
大分縣　本田一枝

○

三河　天野靜子

春雨に濡ふてほゝ笑む紅の花のやうなり君に逢ふ日は
上野國 柳澤しげ子

○

君が魂さまようと一ち墓碑の白きが上に月すめるかな
荏原 風間秀子

○

何夢むと小床にやせし身を置きて眠り中ばにほゝゑめる君
はな子

○

人ことにかはる思ひの心もて今宵の月な仰ぎ見るべき
筑前 高松ひで代

○

おく霜に千草八千草冬枯れてさびしき野辺を夕かれなる
小松原德子

○

三とせ前植えにし庭のばらの木の花咲く頃にかへりきましぬ
府下 中村りき子

○

見渡せば霞は四方に棚引ていとはれ〳〵と春のこしかな
土佐 堀原翠癸

○

ありし日の君が情を思ふかな朝々毎の紫ある空に
芝區 露居子

○

賑やかき春の都のまちゆきて枯野さまよふ心地する我
上毛 直子

○

いかめしき山のにほひと勇ましき瀧の響にあくがるゝ君
山口縣 輝子

○

物思ふ身にしわられど何となく夕はかなし村雨の音
大阪 阿以子

○

わが君とかたみに袖をしぼりしは小雨降る日の白はぎの里
大平安子

○

なにを見て何になやむかわがこゝろねざめの床に灯影うごく
神奈川縣 服部春子

○

門松にかゝりてとれぬ妹の手鞠に似たるひんがしの月よ
千葉縣 山本たけ子

○

つゆふかき千草にむせぶ虫のねにかなしさおぼゆ秋の夕ぐれ
長野縣 岩波むら子

○

子等去りぬ里の小川の岸の水中に漂ふ笹小舟かな
岩代 笠岡春江

○

秋きぬと告げて落つるにあられどもそれかとぞしる桐の一葉よ
古河町 長谷川ひろ子

○

恋といふ夢に現の園さしてゆく亂れ心のわが身となりぬ
廣島縣 上かつみ

○

うなゐ子が母と添寝の夢のごと春雨ほそく山吹にふる
雲山はる

○

わが心なゝめならずもよろこべりわが頬のいろのよろしきを見て
天盟文子

○

菊の花君が垣根にほゝえめる床しき姿歌にせしかな
横濱 阿部とし子

○

火の世界炎な吐きてあるさまを君は知らずや少女子の胸
横濱 宮部道子

○

こほろぎや古りしおもひのかず〳〵を訴することわが胸に啼く
明石 落葉子

○

願はくば濃き紅のばらと成り飾らまほしき君がおん胸
兵庫縣 米江

○

白菊の姿に似たる乙女子の柔しの姿われわすれめや
近江 金田喜子

○

別れにし君は如何にとよるひるにおもひおもひて年をへぬ
神戸市 近野たゞ女

○

白菊を閼伽に浮かせて若き尼紅葉隠れに映へ下りける
摂津 土橋まい子

○

女郎花淡の帝がたをやめを送るわかれのさまに立つかな
信濃 宮澤照子

○

君まちぬふりつむ雪を盥にいれて化粧の水と眷たくはへて
上毛 須藤浅子

○

うらぶれの身は野の末に小さうさく名なし小草の花にこそにれ
滋賀縣 磨志緒

○

ときはぎのみどりの松に雪つみて天洋ひかりのてりさふあした
摂津 赤松久子

○

○我もふるさとさしぬ野をへだて黄昏の月に虫をきく哉　　熊本市　近藤春子

○わが影を吐息乍らにおもふとき山路淋しう茶山花の散る　　遠江　岸とみ子

○この村の春暖かく桃の花はら／＼牛の夢にこぼるゝ　　群馬縣　藤橋君代

○鶴の啼くや初日はほのほのとわがつく船の港てらしぬ　　相模　金子はな子

○我心誰に語らむ人もなく今更なからなき君こひし　　徳島縣　百合子

○枯れ果てゝ淋しき庭のませ垣に残りてにほふ白菊の花　　加賀　登喜子

○玉の殿銀燭つけて金冠の天女舞ふと見るよ初日を　　徳島縣　四野花蝶

○病む人の枕べさむき秋の夜は庭の落葉に雨細うふる　　三河　宮田梅子

○きり／＼す暮れ行く秋の名殘りにとたえずも啼けな我が窓のもと　　筑後　梧桐知登子

○わがおもひ君が思ひとふれし夜に咲きけるものか紫の花　　長崎　江副野百合子

○新潮のよせくる彼方船見えて秋の御神のきたまふらしき　　和歌山　加藤直子

○鹿のこゑ燈籠に灯をともし行く人よむかしの秋にも似たる　　房州　露香仙女

○雁なきてあはれいや増す秋の夜に旅寢の君は如何におはすや　　播磨　内藤松園

○疾う去れと目閉づれど猶さりやらぬ君が昔のおもかげぞうき　　芝　鈴木露子

○かきあつめ落葉を焚けばいろ／＼の煙匂ひぬさびしきかなや　　三河　鈴木けい子

○ことさらに答は聞かれさはあれどやさしき君がひとみにたりぬ　　三河　鈴木まゆみ

○萬緑は吾をあざける眼して見ると覺ゆるかなしき日かな　　千葉縣　吉岡菊子

○秋の日や死にたる犬のなきからに花を手向けて香を焚くかな　　埼玉縣　岩田江舟子

○黄昏るゝ丘に上りぬさまよひて夢現にも君もとめ居る　　大和　我澤紫枝

○さらでだに秋は悲しきものなるを君に別れてこの身はやみぬ　　北米　合歡るり花

○夜の露玉しく庭にたゝずめば月のした行く雁の一群　　明石　冷鳳

○ひとりゐや世になき母のおん膝になきても見たき木がらし吹く夜　　京都市　大井順子

○こがらしは浪青色の空より來胸の暗路をひたはしりゆく　　大阪市　田中とき

○我心虚になりて物分かぬ一日の中の牛なりけり　　牛込區　平塚白百合

○その人と並びあひたる歌衣のそよきも胸さわぎする　　野の花

○幾ぬたうつ音たえ／＼に聞ゆるが人思ふ子のすさびなるらん　　熊本縣　富丸しえ

○吹きかへすものなし柳の穗先よりみだれて今朝は初霜ぞちる　　安房　田中やい子

○緇衣かづきて君を思ひ寢の夢のやうなる春の夜の月　　巣鴨　片岡昌子

○そのごときくらき心に灯となりて入らむと思ふわがねがひなり　　芝　椿友子

○霜の降る頃なり外の靜けさを落葉ふみつゝ犬のなくかな　　日本橋　太田操子

○小羊が山のけものを見ることく心に怖じて君を見るかな　　日本橋　保坂好子

○あなうれしうれひの影をかきけして月は今しも雲にかくれぬ



○嗜好の變遷（地賞）

京都府綴喜郡田原村字西口　向井光子

極く幼い時の事はおぼえませんが私の九つ位の事てした大層紫紺の色が好きでリボンも紫紺帯も紫紺、着物も紫の糸の多く入つたもの、下駄の緒も紫紺、本包の風呂敷までも紫紺といつて非常に父母を困らした事があります。

其時分こしらへた毛糸の手袋は今も殘つてゐますが此他擧げる事の出來ない程何から何まで紫紺づくめに致しました。紫の色のさめやすく何程もなくすたれて、今度は桃色がすきになりました、今まで小さいくせに割合ぢみな色を好んだ者が急に派手な色にうつりましてそれは〳〵可笑しうございました、この色は半年經つかたゝずに飽きて次はオリーブ色でした、襦袢の袖から着物のふきから、ノートの表紙、筆の軸までオリーブ〳〵とやかましく申しましたが、此時は私の境遇が思ふ樣に許しませんで、それで無くとも窮してゐるのにそんなに私の好みばかりきいてゐる事も出來ぬと母にひどく叱られました。

それでも好きで〳〵たまりませんからお使ひに行つてお小遣なんか戴くとすぐオリーブ色の毛糸や小さいリボンなんか買つてわづかに樂しみましたものです。その次は鼠色、お笑ひ遊ばすな自分でもおかしい程ぢみな色を好みました。しかしこれは遉がにホンのしばらく、やがて變つて今もなほ好んでゐるのが燃ゆるやうな赤色です。今までは只何ともなしに次ぐに其色がすきになつてゆくといふ風でしたが、今度の紅は少しちがつています、かつて私がお友達の家に遊びにいつた時、若い奥樣の大きい丸髷の根に赤い鹿の子が少しばかりのぞいてゐた其可愛らしさあゝ忘れられません、又野の小川で目高を追つてゐた時、賤の女が着物をかゝげ紅の湯もじを長くたれて白い大根を洗つてゐたの

○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸嬢が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

を見てから無上に赤がすきになりました。あゝ榮えある赤、華やかなる赤、赤は目出度い時盛んなる時美くしい時を意味してはありませんか。九才の下げ髮の折より今十六才まで七年間の嗜好のうつりかはりは以上の通りです、今後如何にかはるかはしりませんが美くしい赤は容易にすてぬつもりです。

論文としてはいかゞとも思ひますが面白く讀みました、「盛んな時美くしい時」なあらはせる志を「容易に捨てぬつもり」と云ふのもいつて居ますが如何にせん嗜好は意志ばかりて極まりせん「如何に變るか知れませんが」と云ふところが人生てせう(評)

【秀逸】

○感じた儘を

播磨　內藤松園

○小學敎師をして居る人に尋ねると大抵の人が小學敎師は眞聖だとか天職だとか言はれます。けれど今の小學敎師の中に衷心さう思つてる人が幾人有るでせうか私は此れ等は皆自分の虛榮心に對する申しわけに過ぎないのだと思ひます。

○私が床にヸオリンを置いて居ましたら生命保險會社から勸誘に來た眼鏡チックの人が初めて來たにも係はらず、しきりにヸオリンの話をして終には一曲聽かして呉れだとか本を貸して呉れだとか云つた。私は此の人はきつと輕薄な小才子に違ひないと思ひました。

○自分が大變美人だと自發して居ながら人が容貌の話をし出すと私なんか醜くいからと言ふ人は相手に貴女は綺麗だと言へと催促をして居る樣な物だと思ひます

○私は大變歌留多が好きだと仰しやつたから、其れてはといつて宅で歌留多を持ち出しましたら、三回目にもう止しませうと仰つしやつた。なぜ？と云つたら女許りじや面白くないからとの事、其れじや歌留多が好きなのか男が好きなのか。私は何だか其人が汚なく見えました。

○なあに病氣位と云つて暴飲暴食して病氣になり中には死んで行く人が有りますが、此れ等は生きてる爲めに食べてるのじや無くつて食べる爲めに生きてる人達じや有りますまいか。

○人が自分と同等位な人を賞めると何だか自分を低く見られた樣て心中穩かてありませんが、反對に同等位な人の惡口を言はれると、何だか自分が高くなつた樣に得々となります、此れ等皆人情の弱點てはありますまいか。

女性としては其直覺的觀察の節々を面白く思ひました中には陳套なものもありますが一寸皮肉が利くのもありますしかし皮肉が是れ以上になると野卑になるから御注意なさい(評)

○愛の容量

山梨　井上笹波女

各人が心にもつて居る愛の容量——語弊があるかも知

れませんが假りに斯う云つて置く――は境遇の如何によつて素より大少の差はありませうけれ共、其個人が專有して居る分量はどんな場合でも決して增減するものでないと思ふのです

新聞 寶子

其理由の一つとして申して見やうと思ひますが、嘗て私に一人の親友がありました、それは美津子さんと申して同職業ではあるし、境遇なども幾分似て居る故か、普通の女性に見る事のできない程美しい仲で、二人こそ眞に悲しい事も嬉しい事も倶にして居たのです、一昨年の夏、私が病んで入院した時など肉身の親も及ばない位心配して、晝夜看護して吳れました。處が其美津子さんが去年或る裁判官の許へ嫁いだのですが一週間もたゝぬ中に九洲の新任地へ行くと云ふので、其別れる時は二人とも隨分泣いたものです。又行つた當座は新婚の家庭の樣や感想などを時々知らせて吳れるので別れて居ても私は一種の樂しみを得たやうな氣がして居たのです。それがどうでせう此頃は當方から手紙をやつても三度に漸く一度位、極く簡單な時候の挨拶をざつと書いた返事をくれるぎりです。



長野 橫山京子

私は思ひました。美津子樣の愛の量が一升ならば今迄は私に其中の八合を注いで後二合を他へ廻はして居たものが、愛する夫が出來たので七合五勺は其方へ移されてあとの五勺が私の分に殘つて居るのだと、左樣思ふと何だか見捨てられてもしたやうな氣がして母に話したら母は申しました。「何時迄友達の事など思つて居られるものかね、今に子供でも出來てごらん、旦那の事さへさう〳〵は思はなくなるから」と。

成る程と私は他の人に比較して見たが、皆全くさうて

す。前に親しかつた友でも、嫁いだ方となつては偶に遇つても今に獨身で居る疎遠な人よりも猶ほ冷くて話も少いのです。すると愛の容量はいつになつても變らないものと見えます。だから注ぐべき範圍が廣くなればなるだけ淡くなるわけです。

近頃は斯う思つて了まつたので美津子さんをも怨まなくなりました。

是れも興味ある實驗的思索だと思ひました。然うして時が人を敎へ事實に依て學ぶのです、私共は飽迄に眞面目に之を究めればなりません(評)

○善い事惡い事

兵庫縣　秋野のぶ子

假に今もう死ぬといふ病人があるとしませう。其時醫者が參りまして「あなたもう一月は確に生きられます此藥を飲んで御覧なさい。」と云つて一包の藥を飲ませました。夫が爲に病人はだん／＼よくなつて、遂に一命を拾つたとしませう。しますとこの御醫者樣は善い事をしましたのでせうか。又は惡い事をしましたのでせうか。勿論善い事をしたのでありませう。けれどもお醫者樣は虚言を吐きました。虚言は善い事でせうか妾は迷ふのです。之と反對に、若し此お醫者樣が病人に「お前はもう非常に弱つて居る。もう一日と持つまい。」と云つて御覧なさい。病人は非常に驚いて一時間もたゝぬ間に死ぬかも知れません。此時は如何でしようお醫者樣は惡い事をしたと人は云ふに違ありませんけれども眞を告げるのは惡い事でせうか。妾は非常に迷ふのであります。迷つて／＼迷つた末、妾はこう考がつきました。何でも自分の心の底から善い事をしようと思つてした事は皆よい事だと考へつきました。また之と反對に自分の心の底では何とも思はずに、表面丈善い事をするのは惡い事だと考へつきました。夫ですからお醫者樣の虚言は宜い事で、若此場合に眞を告げましたら、夫は非常に惡い事であります。殆ど殺人犯と云つてもよいのでございます。けれどもこう云ふ罪は法律で罰する事が出來ません。未だ此外にこの類の大きな罪が澤山あると思ひます。妾は是から何事でも眞心から善い事をしようと思ひます。假令表面はよく見えましても、心にもない事は避けようと思ひます眞心から出た行は、假令表面は惡く見えても、必度夫は善い事だと固く信じます。

議論としては決して新らしくも無く引例なども的確で無い樣ですが迷ふた揚句に得た此自覺は貴く自然に倫理學で云ふ動機善と云ふに應ふのです、より深き御研究を望みます(評)

○時間

茨城　横尾志津

皆樣世の中で最も不思議なものは、何でせうか。私は時間だと思ひます。なぜなれば何んな偉人でもみな、

之に服從せねばならない事です。まして條件なしに、英雄も豪傑も烈婦も賢女も、君子淑女の論を問はず、一定の時が來れば、それを名殘に白骨と化せねばなりません。又如何程强い國でも一定の時期到來せば、衰亡して了ひます。彼のローマの敗墟を作つたのも時間です。現に支那、朝鮮などを衰へさせて居るのも時です。嗟何たる殘酷な時間でせう!!!
併し又花を咲かせて實を結ばせるのも時間。赤坊を、大きくするのも時。少女時代に鼻涕をたらして見るも忌まはしかつた子を花の如き美女にしたのも、腕白て母の手にあまつた少年をあつぱれ、名將大政治家大學者に、作り上げたのも皆時間です。
嗟何たる時間は、氣まぐれものでせう!!!
私達は條件なしに、服從すると共に適當に用ひねばなりません。

運命の有して居る先鋒が時間かも知れません、しかし是れは決して氣まぐれては無く殆んど數理の如く正しいものでせう、又一概に吾々を壓しやうともしない、服從すると共に統御せねばならぬとの御論は先づ喜びを得ました(評)

○常夏を讀みて

下總　小澤ゆり枝

月は靜やかに照つてゐます。孤獨机によつて夢みる思ひ、詩集常夏に讀みふけつてゐますと。いつか妾は美しい韻律の情緒に醉はされて恍惚となりました。

花草の原のいづくに金の家銀の家すや月夜こほろぎ。

何といふ美しい歌でせう。此宵の樣に月照る野路をたどつて行くと、名もない野の花迄、瞳をあげて月に憧れてゐる。何處からか優しいこほろぎの音が——あゝ優しき虫よ、廣い〳〵花野に夜もすがら啼きあかす汝は定めて野の何處に銀や金でつくつた家があるであらう。其處は汝の住む處でせう。妾は汝の家を訪ねて見たい。あゝ此の野の何處にあるのかしら——
しばし空想の人となつて妾もさながら虫なく野に立つてゐる樣に思はれます。
ふと、歌は思ひでを詠むものだ、と云ふ女史の言葉を思ひだしました。あゝ此詩集全卷皆、美しい女史が追想の華からできてゐるのだ、と思ふと知らず〳〵慕はしくなつてきます。どの頁を開いても優しい女性的な匂ひが致します。餘裕ある圓熟な詩想!そは此集に遺憾なく表れてゐる。そして何處とはなく西京式な艶楚な趣が見えます。かの亂れ髮時代の狂熱はなくとも、歌全體に一派の溫味が流れてゐます。さながら優しい姉に抱かれてゐる樣な風ですが稍々殘念に思ふのは、歌に少しく痛切な響きを缺いてゐます。が好く考へてみますと、却つて女性の歌としては、斯うした優しみのある方がよいでせう。
何となくうら寒い夜風に驚かされて、覺えず袷羽織の

樣をかき合せながら、思ひはいつか優しき君が面影幻にして、——窓下に起る虫の音も哀切です。何處からか、微かに木犀の香が夢の樣に漂うて來ます。

○婦人の臀部　京都　向陽女史

誰ても大きいお尻はあまり見よくもなく、ことにみごもりの人なんか、ほんとに見つともないものです、といふ私も大きいお尻の一人でよく母に笑はれますのです、しかし私は婦人の臀部の大きいのは天より授かつたものだと諦めていくら人に笑はれてもちつとも心にかけませんの、とはいふものゝやはり弱くつてね、人知れず啣つ事もありました、西洋人は臀部の大きいのを尊んで一つの美にかぞへるとかききました、まことに婦人はその美を神よりうけてゐながら不平を洩らすとは何といふ間違ひでしよう、神は決して無用の物を授けられませぬ、しづかに考へてごらんなさい果してお尻の大きいのはなげくべきものかどうかを、……きつと合點なさる處があるでしよう、お産の時に必用だと申します。

これを思へば不平をこぼす處でなく大いに感謝しなければならぬのです、今や美人の標準もおひ／＼かはつてきて今までのような血のかよふ人形でなくまる／＼としたつや／＼しい皮膚の色を好むようになりましたずつと見渡すに皆が皆までとは申されませんが大體は臀部の大きいものはからだが丈夫です、あゝ身躰の健全何たる幸福でしよう私はこれを以つて耻づる處でなく却つて誇りとしてゐます。

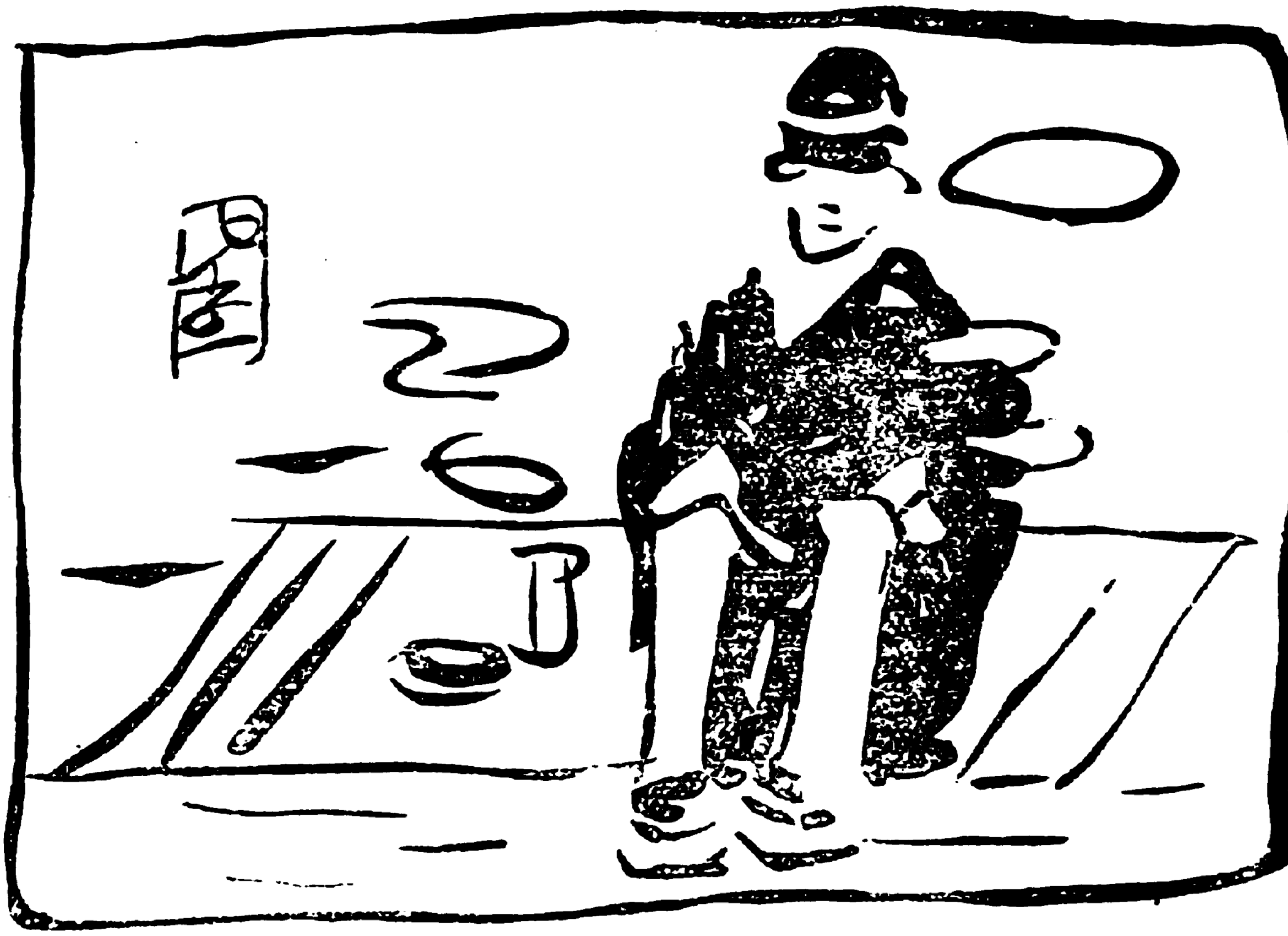
何だか通俗衛生談にでもありさうですね、しかし面白い、初は「耻」次に「啣ち」それが「諦め」となり遂に「誇り」となる凡べて眞面目なるを採る(評)

○女學生と化粧　沼津　八四六

私は女學校生活の大部を此沼津で送りましたが其時代には餘まり此化粧等はしなかつたのです、處が其後上京して見ますと、東京の學生達は皆綺麗にお化粧して居て一寸見ても何處となく優美な點が見えました。で、私も上京後に度々姉やおバー樣(姉の姑)に勸められ、又は日曜などに訪ねてくれる兄までに云はれて其年の十月頃でした初めて眞の薄化粧をして見ると、ソラ御覧なさい、十六七の娘が化粧した顔は誠にやさしくてホンに愛らしい、など云つておバー樣は得意になつて賞めてくれる、又自分が鏡を見ても實際惡い氣持はしなかつたのです、先づ此れが私の化粧の最初でした。

處で私の入學しました學校の先生達の話を聞き升と、女として化粧などをも構はない樣な女では困る、と申され升、又田舎出の學生はどうも都育ちの學生の樣に優美でない、とも聞き升た、其處で私は何故田舎の學生は優美でないかと考へ升と、マー自分の覺えてる事

は何でも女學生が化粧したりするのは大變不可い樣に勉强がそれる等云つて無暗に攻撃し、只身邊をもかまはないのをよいと思つてたんてす、けど其處へゆくと都會は開けて少女時代から身の邊りの化粧位は自ら注意するのです。勿論化粧と云へば却々六ケしいものださうですが、一寸お湯でも使つた折其手で襟元や面の化粧位をしたつて決して此れが學生に取つて勉强の妨害となる程の事はなかろうと、然し只其れがともすると境遇にはづれた過度の事をする人を出すかもしれないけど、假にも眞摯の態度を持つた女學生は各自の常識の處分辨別に依て程よい事はしてありたいものだと思ひ升、そして私は只男性的だとか矢鱈活潑だとか云ふのを誇るやうな蠻勇的のものよりも一見しても女子は女子らしき優に美しい女學生をより多く望むのでござい升



一休み　水戸　土田せい子

○篩の目

信濃　太田きし子

お月見の晩のおかちんに付るとてお黄粉をふるひました其時私はこんな事を思ひました女の心は此の篩のやうでなくてはならぬと斯う思ひましたの目が細かければ細かい程其人の行ひは正しい、篩の目が粗ければ下に出來るお黄粉は質の惡ひ味のないものになるてせう。心が篩の目のあらいやうにがさ〳〵して居れば乾度其行ひが惡いのです、反省と云ふ實を漉す目は極く〳〵細かくなければならないと存じます。私はつく〳〵感じました、自分を見る目があまりあらくあつた事を、これからは何事にも細かく深く注意して綿密につゝましやかな女とならうと思ひました。

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十五行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○新しい時（天賞）

神田　田中　英子

にこ〳〵と、新らしい時はおとづれた。美しい錦の袋に、人の世のはえあるさだめを包んて。……人は皆双手を擧げてむかへ、そしてうたふ。……若い人は。眞暗の中のこひ、はてな光にすはれて。……見とれて居る、老いた者も一とせの、さひはひを得ようとしてぞろ〳〵と集まつて來た。死の手が。その背から、五寸程しかはなれてないがそれを知らぬらしい――皆一せいに歌ふて新らしい時をむかへた。美しい歌の尾がしつとりした夜の森にひゞいて惡魔を逐ふやうに……ふるふ……ひゞく……森も……山も……

形は散文、内容は詩、此れも散文詩としてはづかしからぬもの（評）

○沼の日（地賞）

芝區中門前一丁目十一　長谷川靜枝

松林を通りぬけて何時だか心中のあつたと云ふ小さな沼のほとりへ出た。とすぐ側で釣をして居る一人の男が眼に入つた。後ろ姿を見た許りでもう五十の坂を越した人だと云ふ事が分つた。（釣れますか？）と私は何の氣なしに尋ねた。全く何の意味もなしに。けれどもその男は默つて居た。

（何が釣れるのです？）私は再び恁う尋ねざるを得なかつた。啞のやうな男は振り返つて迂散さうに私を眺めたがすぐまたフイと先ふを向ひて失つた冷やかな表情を殘して。

ポタリと松の實の落ちる音がする。漣一つない沼の日は眞蒼に慄えて居た。

勿論散文詩だが、私はもう一歩詩に近づけたいと思ふ、それには説明や叙事を少くして感情を能く表はすことに全力を注ぐやうにせねばならぬ（評）

○眠られぬ（人賞）

古河町　長谷川ひろ子

眠られぬ、如何しても街を通る下駄の響がカラコンと、自分の夢より夢をさゆさぶつて起すんだもの眠られぬ。

ジロリと四邊を見ると
時計が薄暗い行燈の
光て見えた、十二時過ぎだ、
眠られぬ、これから如何しやう。

短いけれど力がある、これから何うしやうと云つたのも好い、自然に出來た處に却つて詩らしい感じを喚起す（評）

【秀逸】

○僞りの花

名古屋　八重子

何處へ行かうかと考へながら道を歩いて居る。暖かい春の風は若草に觸れて、かすかな音たてゝ、和やかな曲を奏て居る。

シト〳〵と草の上を歩んで行く。ふと向ふて誰かゞ呼んて居るやうな氣がした。介意はないて歩いて行くと、今度は彼方から來るやうだ。その足音が近づくに從つて自分の胸に怖れが增す。そして硬ばるやうな氣がする。可成見まいと目を細くして足下斗り見て歩いて行つた。俄然、無意識に頭を擡げて見て仕舞つた。看るとそれは愛らしい少女である。少女は凝と自分を見た、瞳の力に胸おのゝいて立ち竦んだ。少女は手に持つた奇麗な花束を自分に指し向けた。「斯麽奇麗な花慾しかなくつて？　貴女に上げやうと思つて持つて來たのよ」眩むやうな花の色。しびるゝやうなかほり。ムラ〳〵と慾しくなつて手を伸さうとした刹那、身内の節は動かない。「けど、それは僞りの花てせう!?」自分は辛じて云つた。少女は唯、笑つたばかり。——引き寄せらるゝやうに、あはて、自分は此處を去つた。

美文と云つてもよし、散文詩と云つてもよし、扨て之を詩にして了ふと、之れだけは言へない、やはり斯んな自由な形を取らればなるまい（評）

○朝

長門　田中幸子

青い雲。——
うすい霧。——
森に林に
風は死んで
しづかな靜かな
朝の天地。——
鳥も啼かない。
何ものゝ響もない。——
大地の呼吸も、
しばしは、
止まつてるやう。——
あゝこんな時、
聖なるものも
生れるのであらう。——

—野に立ちて—

少しおしつけて、説明的にはなつてゐるが、餘が短い、自在に言へる、末に望みがある（評）

○夜の恐

下谷　細谷鏡子

何だか寒い晩だ
私の心は妙に沈んで
庭に立つて居る
白い菊が
はら／＼と足許へ散つた
生てる物の樣に
冷たい風がスーッと顏をなでる
芭蕉の葉ががさ／＼して
ぽろ／＼と雨がおちて來た
私の涙の樣に
茫然りして居ると
誰か後へ來た樣だ
そつと振り返ると
暗の中に
がさ／＼何か近づいて來る
何て凄い晩だらう
又後てがさ／＼
私は身動きも出來なくなつた
私はしばられた

類想はいくらもある、もつと新しく言ひたい(評)

○障子をあけて　撫順　みなしご

今日も好い天氣であつた、
眼が覺めるとすぐ斯う思ふ。
頭はやはりムシャクシャしてゐる。
限りなき不平の息を、
美しい花に吹きかけやうと、
何千の眞黒々の蛇が、
ノタリーノタリ
物凄く波打つてゐる間から、
釣竿をポキッと折つた——
それのやうな手をさしのべて、
障子を開けた。
草や木の葉は眠つてゐるのか、
瞬きさへせぬ。
空には灰色雲が羽を伸して、
オレンヂ色が薄れて行く。
ああ、私の胸の若い血潮も
軈てはあのやうに——
惡魔の流す毒潮にもまれ／＼て、
消え失せるのではなからうか。
と、俄に怖氣がたつてきて、
白い枕に突伏した。
髮はきり／＼きりと引絞つて
天井へでも捲きあげられたやう、
四肢は一時にピリッとした。

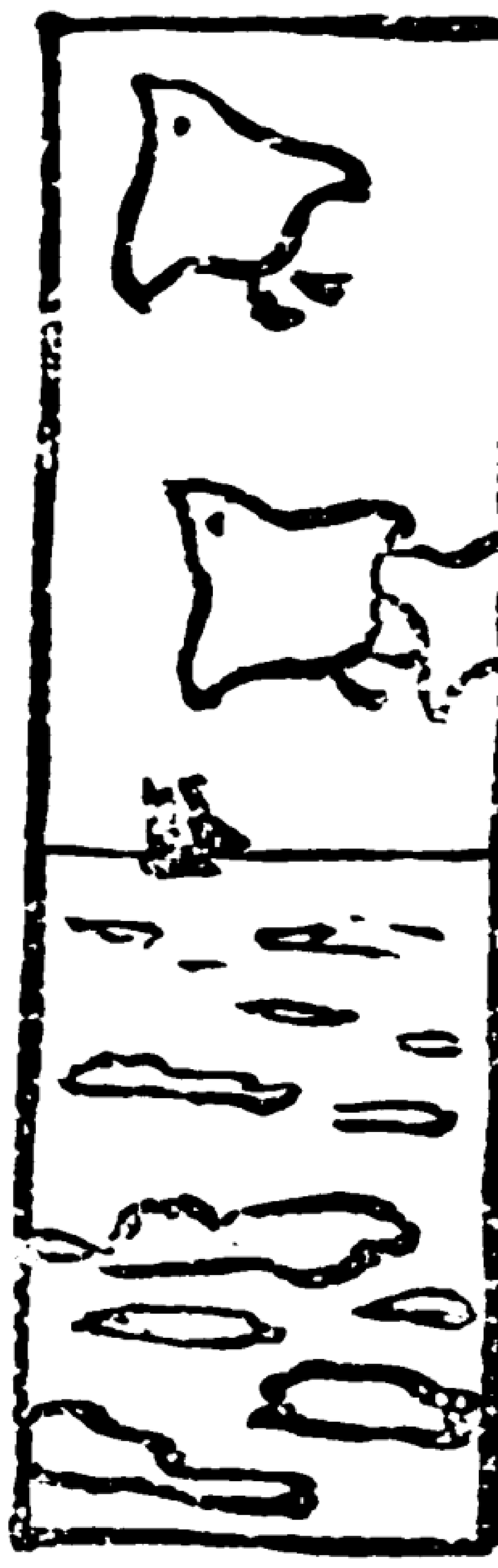
感じの強いのは好いが、態とらしいのは欠點です(評)

○子供　大阪　紅女

俄にぱつとあかるくなつた
あゝ日がもう暮るのであらう——
花子は何處へ行つたのであらう——まだ歸らない。
何だか心配になつて來た。
さがして來やうよ仕事をおいて
つと立と頭がふら／＼と
やう／＼足を踏みしめて
角結の草履をつッかけて浦に出た
「お月様なんぼ」可愛い聲が聞えて來た——ふと見ると
川向ひの柵をとり卷いて
歌ひながらクル／＼と廻て居る可愛の幼子十人程
あらひ朱に白い蝶の飛び模樣の被布
——オー花子——
暮れるのも知らんで戯れて
嗚呼それよ——天使

短文

中村文學士選



○落日（天賞）

埼玉縣比企郡小川町　岩田文窓子

今しも、日は鎮守の森へ入らうとし昔榮華をきわめた、名主の大門の處々落ちた白壁へ、美しく照つた。落書のへへののもへじ、明らかに見える。

遠くて鐘の聲が。

○山柿（地賞）

名古屋市中區白川町五丁目　三浦ろく子

あまり呼聲がよいので柿賣を呼び入ると、聲とは反對に醜柿てした。「澁さうだね」と聞くと『嫖樣。醜うても山柿だて甘てすぜ』と申しました。『醜ものが反へつて心が美しい』

○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきヘガキは許さず一人一章に限ること賞は丙種な迸呈す

と、淋しい心――醜貌を愧た――に強い矜と慰安とを得ました。

仮安くしかも尊き慰安。

○わからぬ日（人賞）

下總古河銀治町　荒　白百合

今日はまあどうした日てせう、天女の夢のやうな靹て清い國に往けよとうたるゝやうてあります、何んとなく物足らない、その癖頬りと胸が跳つて、顔にあたゝかいほゝえみが現はれます。あゝ七つの頃古里の道てふと往き遇つた醜い女の子に手紙がやりたうございます。

眞にわからぬ日。

○鏡【秀逸】

[illegible]　鈴木梅子

ある晴天の夕でした海を眺めて居た妹が「アレ岩の上に鏡が有つてよ」と突然に云ふので見ると今しも沒し懸つた夕日が岩の溜水に映つてきら／＼と輝いてゐるのてした。

自然の鏡。

○石切場

岩手縣　昆　みえ子

「おいもう飯にしねエか」「そうさなア、てはやるつペイ」銅色に日に燒けた大男が二人重箱片手に小丘に走つたとき、日がパッと明るくなつた。鐵鎚の音がカンカンと長閑にひゞく、遠くて馬の嘶が聞える。

景趣見るが如し。

○秋の庭

熊本縣　永畑ちき

秋の日は美しい、其の美しい日が美しい庭の黄菊を照らして一層美しく見える、冷たい風がそよ／＼吹くが菊は葉だけ動かして花は動かぬ、暫

らく眺めて居ると垣竹の上に血まみれの雀が止まつて、苦しさうな息をついて居る、雀が飛ぶ柿の葉が散る。

萬目蕭條。

○小春日和

大阪市　花子

朝から生暖い小春日和の屋根棟に雀が囀つてる、黄色い日脚が南天の霜を辷つて縁側に蹲まる猫の眼を糸の樣にする、白い手拭をだらり頰にかけた姉さんが張板を裏返して、眉を顰めながら一寸鼻の汗を拭く、祖母樣と妹が表の方から廻つて來た。

祖母曰く「お前なに考へてゐなさる？」

○五年目

青森縣　馬場ちよ子

私しの結婚日は今夜で丁度五年になります。その夜は月がありました。みち／＼あゝあの家で死ぬのかと考へながら來ますと、此の座敷には人がたくさん居りました。その夜の樣が目にちらつきます。五年は夢でした。子供は膝の上にすや／＼と、眠つて居ります。

夢の世！が苦しい夢でない事を感謝なしなさい。

○霜の朝

駿河　天野ふじ子

ポタリ／＼と水晶のやうな雫が明るい障子へ映るので排けてみると屋根の霜の融けるのであつた。庭からは水蒸氣が微かに立上つてゐる。四顧はひつそりとして雀がチユー／＼と囀りながら樋の中でコトン／＼ら雀躍してゐる。

あたゝかい日の光！。

○花の名

京都　露野子

「花買ひなはらんか」秋の朝あけを大原女よびて小さき籠の中よりあれこれの末、櫻めきし優しき花の一束。そのまゝ行く女とめて、花の名を問へは「何やら知らんが唐人はんの花や」。

コスモスでせう。

○窓

長門　田中華子

黄昏のうす明りが忍びやかに窓から入る。或ものゝ暗示をあたへやうとしてか、わが内心の秘密を探らうとてか？窓の下には盲人が行く。大きな犬がクス／＼嗅ぎながら、その後に從いて居る。私は默つてそれを見て居る。

遂に日はとつぷり暮れた。

○小春

相模　三浦ふみ子

一叢の萩が刈られて新しい葉が積まれた。蜜蜂の羽風にコスモスがはらはらとこぼれる、何所からか木犀の強い匂ひがゆるう／＼流れてくる、もう午だ。

ほんとに秋はいゝ。

○二人の影

鳥取　ゆかり

久し振りのお歸り故うれしさが胸にいっぱい。夕方二人海邊を散歩する足元には男波女波がよせて來て東の方には長い長い五間位も有る樣な影が二つ白い砂の上に。

こんな長い人間て有つたら如何てせうねえ：：人も家もまたいて步くさ。はゝゝほゝゝ。

眠る時には？

○初當選

若狹　山田小濱

郵便……バタ、それ女子文壇だよ、此頃は妹の方が先き見たがる姉さんの當選……エゝ何がと云ふ聲も遲く取上げあら本當に、胸には何やら運轉しだした。夢かと思うて再讀したら誠の私の故午御飯も呼びに來る迄忘れて見つめました。

そして何十遍となく繰返し讀むのてせう。

○新らしきのぞみ

京都　ゆかり

柔かい洗い髮を後へ長くたらして、菫の花やばらの花てこしらへた花輪をかけて、眞白い羽二重を奈良朝時代の女官の服に仕立て、そして紫の雲に乘つて世界一週がしたい。

到るところ喝采せられて。



村芝居　山梨　古屋しげ子

○新年の女子文壇

秋田縣　紫川女

五年初號の女子文壇！表紙—口繪—誌友の面影など、如何に、立派—美麗—なつかしいてせう？それよりも色紙の目錄を開いて、各欄を繰つて見て、若し自分の投書が……と思ふと、私は微笑を洩らすのを、禁ぜられませんてした。

その悅びの半分いたゞきたい。

○姉様

尾張　中神靜子

お針から歸ると、勝手の方て珍しい、何か洗ふ音がする。私は不思議に思つて、母に尋ねると母は「今日から下女を賴むだよ」といはれる。勝手

の人は笑つてこちらを眂いた。アラ東京の姉樣だと、私は其手にすがりついた。姉樣はニッコリとしたけれど、目には早涙が一ぱいてあつた。

有難い下女。

○赤瀬の秋

熊本　江添　無絃

雲仙ヶ岳はも早夕靄に込られて頂きばかり淡く紫に見えてゐます。鏡の樣な風潮を眞帆が二つに切つて走ります。背後の山は半ば黄色に彩られて、時々スウと冷い風が吹くと何處よりともなくコシリコシリと木を伐る音がひゞきます。

その音がやむと夜の幕が。

○煙

神戸市　胡　彌生

木枯の寒むう吹く夕べ・私は縁の柱に凭れて眺めた。田には薄すりと靄が渡つて、遠くの森や、木立が根方を暈かされて浮た樣に見える、谷には紅々と山漆の木が繁つてゐる、火を焚いて居る紫の煙は微かに棚曳て深山の谷へふわり〳〵と沈んで行く。

いとし平和に。

○白椿

大阪府　寺部　君子

私の庭の螺細工の樣な白椿は今盛りです、此は亡き母上が何處でか求めて來て植ゑられたので、花が咲くと床に一輪挿して、とみかう見仕て、樂んで居られたのです。思出多い此花を、何日も咲くとすぐ、母上に手向けるのてす。

母上も悦ばるゝてせう。

○おもふこと

越後　飛鳥　女

逢つたらあれも談さうこれも語り度い。ともう話の順序まで組み立てゝ置きますが、其場に成ると後にしよう、明日にしよう、と私のくせて誰の顔見ても只ぼんやりして了ひますの。

余計な口きくより遥によい。

○波の音

靜岡縣　清　子

バタリと本をとぢて目を合はせる、と、どー〳〵と波の音が。くらい海のそこから目のあたりよせて來るよう＝海までは二里半もあるのに＝胸いたきまで響く。兩手を胸にじーつと開いて居る。音はいよ〳〵高くなる「明日も雨だらう波の音が高いから」と母樣の御聲、氣がつくと烈しかつた雨垂の音はかすかに〳〵ポツリポツリ。

ランプはザー〳〵云ひだしました。

○思はぬ罪

大分縣　立川　悦子

四邊は、未だ深い霧に包まれて、朝の氣がひやりと。身にしむ。ザーッと、一釣瓶顔盥にあけて、冷水摩擦からいざ、深呼吸をと、勢込て、フーッと吹出す途端、前の秋櫻の花が、

胡蝶の樣にヒラ〱と……あ、濟まぬ事をした今日一日は持たうものを。

大變な深呼吸。

○孤獨　上總　みのぶ

小春日和の靜かな、朝てした。黄と白との蝶々が、三疋お庭の菊の上に、飛んで居りました。やがて二疋は、裏の蕎麥畑の眞白な花の方へ、飛んで行きました。殘された一疋が。何花の上を飛んでゐるのが、憐れてした。孤獨の淋びしみを感じて居る樣て。

わが身を顧てにか。

○天氣豫報　府下　岸野　靜江

私の村には面白ひ天氣豫報器がある夫は由と云つて氣狂爺さんていつても夕暮になると妻のをきんさんを大きな聲て呼ぶのてす其の聲がさつぱり聞へる時は大抵天氣て聞へない時は雨が降るか曇るかする樣てす全く戯談の樣だがよくあたります。

おもしろい豫報器。

○柿の木　岩代　笠間　松江

妾の裏庭に一本の柿の木がありますが妾の小さい時分お母樣に叱かられて泣いたのもこゝ叔母樣にお菓子を戴いて隣のおちよさんと仲良く遊んだのもこゝ、初秋の夕暮鈴虫の聲を聞きながら名月を仰いで湯浴したのもこゝてあります。

なつかしの木のもと。

○渚　和歌山　岩崎　雪枝

沖が暴れて鳴つてゐるので渚へ白い大きい浪が奔馬の鬣を振る樣。暗い汀を平氣て傳つて只だ一人行く人がある。弓形の渚は長い其上に日はとつぷり暮れて來た。あんな人にも希望があるのてせうか。四邊は夢の樣に暗い。

希望はありませう。

○朝寢坊　京都　眞砂女

起き心地がわるく、年寄には小言頂戴するし、一日の仕事ははかどらないし、終には一日良心がとがめてゝ不愉快なものだから、夜になると頭痛が催して來る、考へて見ると、一回の朝寢過しの結果がこんなに迄影響して來る、質におそろしいてはありませんか。

おそるべし愼むべし。

○花の露　銀波

美しくつて傍へ寄ると何だかからチャームされそうなあのばらの花を、香の高い何となく奥幽しい白百合の花を最う一つは雪にも打ち勝つて百花の魁に咲くと云ふ雄々しい寒梅と三つを絞つて其の雫を蒸溜して其を飲んて見たいと思ひますの。何んな

心になるかしら。

飲むとはチト……。

○菜摘み　信濃　犬飼　春江

雪がチラ〳〵と降る寒い日、學校から歸つて見ると母樣が眞赤な手をして菜を摘んで居りました。私は心の中で、嗚呼、母樣はかくも寒さをしのんでいらしやるものを私などがくちくせの樣に云ふのは實にすまぬ事だと思ひました。

反省の價。

○草の庵　京都　宮川たけ子

机に凭れて熟つと考へて居ると、ホト〳〵戸を叩く音がする誰？障子を明ける、誰も居ない、締る、又音が、名を呼ぶよう、ハテ……又明ける、居ない、秋の風が庭の木々に吹いて、落葉がひら〳〵、白菊が此方見て笑つて居る。

氣味わるい草の庵。

○逝く秋　靜岡　根岸　良子

赤い禿山から横に、さやかに雪を帶びた富士は、紺碧色に澄んだ秋の空に莊嚴な背景をなしてゐる。百舌鳥の鳴き聲がけたゝましく起る。鳴子の響きが田から田へ喧しい程傳はる。南の緣に佇んでゐた妹は何——そつと微笑だ。

○うき世　徳島縣　宮城かや子

花の都に生ひそだつて、一生苦勞知らずの若樣孃樣あれば、妾等のやうに、生涯眞つ黑になつて働ひて、何にもならない水呑百姓がある。お髮とく間にお飯をたき、お化粧する間に草を刈る。人生多大の相違である。アヽ、これがうき世といふものであらうか。

○叔母の家　福岡縣　林　末壽

私の叔母樣の家は後が竹藪前が青田暑い晩には殘らず障子を取除けると青田から吹き込む涼風が藪を素通りにして藪の竹の葉をさら〳〵と鳴らすときつと鈴虫がリンリンと鳴く叔母樣は之を活た風鈴だと申されます。

○金の世　中津町　やま川

いつも散歩にゆく川端の畦路で一人の農夫が、楕圓形の大きな葉のついた草を堀つて居るので夫は何にするのだと聞くと、山牛蒡で葉は食用となり根は藥屋に持つて行くと金になると言ふ。此時に思ふた、徒らに厭世離を訴ふる勿れ、活きた眼を以つて見れば道ばたにも金が轉つて居る。

○除夜　本郷　小禪　菊江

鬼と福と入亂れた樣な騷が少し靜まりお風呂より上つたら最う春の心地がすると惜しい樣な嬉しい樣な鐘の音が響く、壓板の下には晴着の明を待つ、奥では小判の耳が揃ふ時分、大きく羽ばたきをして初鷄が鳴た、愈々明治四十二年。

○寂しい秋の夜　神奈川　上原露葉子

寂しい夜でありました、蟋蟀が鐵欄の撞木をいたくいましめて居るのに、栗の實は風に落ちて僧に代つて鐘をつくと、夕映はうすれて行く〳〵、夕づゝが迎へる、月はさそはれたやうにすゝきの上にのぼつた、あゝこんな時に尾花の上に眠つて居る蝶の魂は、天にかへるのでありませう。

○山家の夜　滋賀縣　若井　菊枝

四隣は寂として何等の音もなく只だ小流の音がサラ〳〵と聞ゆる計り　お針の手を休めて仄暗い洋燈を眺めてゐると、ガサ〳〵と外を歩るく音がする。つと立つて淡戸を開けると夜廻りの爺さんが『どえれい霜でがすよ』と、月を仰ぎ乍ら隣の方へ行く。寒い夜である。

○夕月夜　和歌山　伏見八千子

障子を開けると夢の樣な夕月夜咲きみだれた庭の豆菊の花がしうしうと丁度乳でも流したかの樣隣ては粗搭につかれた身を温まるのでしようパチパチと粗朶を焚く音がして湯殿の方からだみ聲とかん聲の笑ふのが聞える家の厩では馬がまだ寢ないかして藁かむ齒音がぎしぎしと何と

なく寂しい夜です。

○生　壁　　名古屋　吉田　たま

きのふ塗つた土藏の生壁は いやな臭ひを家中に罩めてゐる。座敷へ行くと ぷーッとにほふ。離れ家へ行つても鼻を突く。外は雪まへから 降り續けた雨が止まない。

○すきな音　　熊本　さつき

鋏丁でリンゴを切る音 貴婦人の帶をする音 洋本をさらり〳〵とくる音 ぺんのはしる音 夜勉强時間に 先生の袴の御すそのきぬずれの音。

○惠方詣　　千葉縣　三森ゆき

『先きなのは 姉さんじやなくつて？』先車の美形は 無言で後を向く『どうかと 思つたら、やつぱり 姉さんだわ』と嬉ぶ『まあ 登喜ちやんなの』と驚いた樣、昨年嫁つた 姉さんが夫に連れられての 惠方詣りの途中だから たまらない、姉さん〳〵妹も お惠びす樣のやうな顔をして車を並べて東へ東へと行つた。

○なつて見たい　　千葉縣　白うさぎ

三度の飯は副物として第一に呉服屋の子になつてどつさり着物を着て次に菓子屋の子になつて自分の好きなだけ食べ 次に小間物屋の子になつて化粧道具は云ふに及ばず 裝飾品を貰つてそれから一番終に本屋へいつて 大好な〳〵本をどつさり讀んで見たい。

れえさん

鎌倉　たそがれ



○一家の不幸　　安房　伊舟　花子

一家の不幸は平和と 便利と快樂とを犧牲に供して、顧みざる傲慢無慈悲の嚴格なる 母の周圍に起る。

○女子文壇のお蔭　　岩代　たつ子

私は生付字が下手ですからお友達から御手紙がくれば必ず鉛筆かペンで御返事を上げて居りましたが近頃は文壇へ投書しやうと思つて時々筆を取つた爲めに少しは字が上手に成りました私の身に取りましては偏に女子文壇のお蔭と云ふのでせう。

○小　川　　兵庫　琴　女

自分の家の裏にさら〳〵と流れてゐる小川があるいつも黑い小さい魚が列をくんで泳いでゐるおり〳〵黑雲がうつると驚いて散つてしまう私はこの小川が一番すきで毎日裏に出て見ます。

○雪模樣　　上總　霞　女

朝から太陽を見ずに暮らした今日は、夕方に成つたら一しほ寒さが増した。灰色に濁つた空は動きもせぬが峯には 松風の音が凄じい。南の方てはしきりに海鳴りがする。噫 明日はたしかに雪でしよう。

俳句

内藤鳴雪先生選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使つても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

○（天賞）
公達の湯槽に春の月を見る　豐後　伏見琴子

○（地賞）
炭切つて黒き小庭や寒の雨　大阪　松葉燮子

○（人賞）
秋風や妹が歌書く紙を吹く　千葉　保花子

【秀逸】

若水や鵲の橋ほの白く　秋田縣　三浦ふみえ
茸狩や秋の哀を忘れ草　明石　冷風
元朝や古りし鎚つく山の寺　紀伊　榎本千鳥
芒野や落ちなんとして月赤し　茨城縣　濱田いち子
道場に栗賣る店や秋日和　下谷　細谷鏡子
風や愛宕を下る人の顔　巣鴨　片岡昌子
七浦に雁鳴き渡る月夜哉　日本橋　田代房尾子

くれなゐの烟はづかしや北の風　遠江　芳子
柿落ちて後は紅葉の霧家かな　長崎市　一瀬みとり
木枯や十少に人をかへりみる　芝　長谷川靜枝
太平は黄金の太刀の花見かな　兵庫　杉山春梨
拳納の初鶴なきし社頭かな　長野　朝堺あさ
蔽かれて江に寒月の光哉　京都　大井順子
寒月に向いてかこつ女哉　上總　森嬌笑
杖ついて初日を仰ぐ翁哉　秋田縣　柴川女
落葉して礁に日のさす伏家かな　群馬　清水たま子
古猫の爪尖りけり秋の風　牛込區　高橋まつ子
雪の日の土間に木を割る男哉　下野　川田よし子
炉ついて酒をすゝむや秋の雨　越中　柴田とき子
夜をこめて旅する人や笠の霜　大連　柿平千枝
神鵜の羽風高しや男山　京都　多寄子
秋の夜に為すこともなき男かな　香川縣　道子
紅葉山越えて尋き御ぶ哉　下毛　富梅子
さはるまじ露もこぼるゝ萩ちる　日本橋　磯部松風
小春日や畑に名知らぬ鳥のくる　岩代　川名なほ子
霜の夜や一犬吠えて靜かなり　靜岡　中村あい子
三尺の庭に白菊黄菊かな　麹町　牧野銀杏庭
時雨るゝや淀の夜船の舞金　府下　山脇敷子
火桶して店に梅賣る女かな　攝津　矢名
斐琴の音に落ちたる一葉哉　大阪　とき子

鶏の聲雄々しさよ初日の出　群馬縣　藤橋君代
泉水の水ぬるみけり鶺鴒　福井縣　けい子
手に受けて見る初雪の白さかな　安房　伊丹つれ江
御降や朱雀大路の寂として　秋田縣　菊地まき子
もづの鳴く方より晴るゝ日和かな　神奈川　松野みどり
朝霜や人を渡さぬ神の橋　和歌山　加藤重子
水鳥の羽はたきさむき夜川かな　芝區　鈴木壽子
人の世の冷たきものも心なり　麻布　花子
雨寒くともし燈暗し田舎町　下野　瀧澤秀子
初雪や犬の親子の睦しき　秋田縣　小野久子
葬の提灯赤し夜の道　名古屋　三浦ろく
師走とも思はぬ雞の歩みかな　愛媛　松村さみだれ
燈火と親む頃や殘る蟲　石狩　吉永豐子
迷猫を炬燵に見たる霜夜かな　鹿児島　山本さゑ
年忘れ舊師に舞を望みけり　神奈川　岩澤幸亮
あこの出て又菜摘みぬ秋のくれ　池田町　寺部君子
月影のもるゝ雨戸や冬こもり　大阪市　山内溪子
燒跡に一むら草の萌えにけり　伊豆　加藤鶯子
馬の背の草に一聲きり〲す　明石　落葉子
初日の出雪の社頭に拜しけり　横須賀　松山君代子
野路をゆく女氣高し秋の月　上總　今井まる子
殘菊や欧に灯す伊勢か軒　山口　京家瑛子
藍匂ふ染屋の庭や縹り花　秋田縣　大友みん子
白菊のものとなりけり夜の庭　兵庫縣　加藤ちよ
掃跡に又新しき一葉かな　青森縣　紫苑女史
三弦の一弦きれて時雨けり　和歌山　伏見八千子
錦ぬふ君が手白し小夜しぐれ　和歌山　岡崎さき子
秋風に吹かれて脛の細り哉　三重縣　伏見良子
母上の手植の菊ぞさかりなる　大分　千草
走る人息たえ〲に枯野かな　青森縣　馬場ちよ子
雁鳴くや顔に冷やつく枕紙　矢名

冬の海漁人乗せたる小舟哉　陸中　入重歴たけ子
橋を越す少女に散りし紅葉かな　肥後　竹下[illegible]子
秋の雨赤らむ柿の品定め　愛知　靜子
遣羽子や受る人なき拍子拔　信濃　宮澤すみ子
秋風に少女心や熱し柿　上總　長谷川ふみ江
月を踏む紅葉の陰の二人かな　上總　北村花江子
咲きのこる蓮の浮葉や明やすし　靜岡縣　川山よしゑ
晝は皆冷たかりけり虫の聲　常陸　大久保てる子
紅葉山雪山となる昨日今日　信濃　駒澤ひろ子
白萩に詩情つめたき端居かな　秋田　すみれ
若水を銀の瓶に湛へけり　長野　みゆき
白菊の白きが上に月夜かな　神戸　靜娥女
夕暮の秋風さびし鳥河　信濃　犬飼よしみ
忠臣の祭りに冬の櫻かな　千葉縣　關玉
鳩なくや八幡の鈴に風起ちて　鳥取縣　長崎春子
酔ひ潰れし夫守る夜半や雁の聲　麻布　花の垣子
かけ稲に豐かに見ゆる小村哉　茨城　大崎遊枝子
古馬塲や畑ともならで冬のくさ　羽後　月岡みや
とろり〱榾火は燃えて夜は更けぬ　相模　鍋田美代子
盆池の水鳥の聲に冬來りけり　大阪　紅女
ひら〱と舞ふは胡蝶か木の葉かも　豐後　安岐子
初雪の積れる松や御勅題　若狹　浦本うき
妹の羽子浮ぶなり春の水　伊豫　曉子
鳴いてゆくすゞめのやどや秋の暮　やま川
花籠の花に胡蝶の名殘かな　秋田縣　小原あき子
煤掃や羅漢にまじる寺男　芝區　粟生田茂子
妹あまた雛の天子の御幸かな　伊豆　夢田早苗
風呂吹に冬暖きまとゐ哉　相模　楠木とよ子
元日や我が世も一つ老けにけり　愛知縣　永田舞鶴子
湖の上を舞ひ行く木の葉哉　青森縣　月館いつ子
秋の野に戀ひ歌嘯く少女かな　千葉縣　石井きぬ子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行迄匿名の方は別に本名を記せ　丙賞

○可愛いゝ鳩（地賞）

美濃山縣郡葛原村　深尾みや子

朝學校へ參りまして直ぐと、運動場の南の銀杏の下へ行きますと、もう待つて居たやうに二羽の鳩が、妾の側へとんで下りますので宅から持つて來た豆を少し宛分けてやりますとうれしさうに、羽ばたきしてはどこへか飛んで參りますが、授業がすんで妾が歸る時は、いつも〳〵門の外迄ついて參ります、妾は此鳩が可愛ゆくてなりませぬ。

○大切なものは（人賞）

奈良縣吉野郡白銀村赤松　福西田鶴子

私の受持は、尋常の三年生なのです、まだ一ヶ月前に赴任したばかりで、何の勝手もよく分りませんが、或る修身時間に、かう尋ねて見たのです。「皆さん！皆さん學校で一番大切なものは何ですか」。「先生知つてゐます、それは、机でせう。」「先生違ひます、それは、先生です。」「先生々々それは、書物です。」「或はボールドとか、或は樂器とか、或は、標本とか器械と云ふ答ばかりで、「御眞影です。」と答へたものは、たつた一人しかありませんでした、私は、ほんとうに遺憾に堪へませんでした。

○書方

函館　元木ゆき

始めて、尋常一年生に書方「タロー」を敎へた時程困つた事はありませんでした。筆の持方、墨のすり方、姿勢等について、一々注意しましても中々云ふ通りになりません、筆をねかして墨をべたべたにつけて書くのですから、字も何も出來ません、私は、如何したら、之が書けるかと、心配で〳〵其晩は、寐られなかつた。それから色々苦心してやつゝ居ます内、二度三度と、練習が重つて追々筆の持方、姿勢もよくなり、「イネコメムギ」のあたりになりましては、嬉しい程筆力が出てきました、之てこそ苦心した甲斐があると眞實に嬉しくなりました。

○嬉しさ

德島縣　野菫

私は一年生を受持つてゐます、何さま幼い事ですから隨分氣兼を致します、然し受持つて嬉しいのは一年生だと思ひます、草花が時をきそふて咲く二學期、私には毎年嬉しいのです言葉遣ひさへ知らなかつたのが、今の成績行爲、入學時代と對して見ると如何にも大人らしくなつたのが明に解ります、是が一つ〳〵の敎によつてなつたかと思ひますと、是程嬉しい事はありません。つい此の間の雨あがりの秋日和でした、授業が終へて六拾餘人が思ひ〳〵に歸路につく時一人の女の子が唱歌に氣をとられてついたふれたのが場所が惡くてたんぼの中でした、前に歸つてゐた女の子が直ぐふり返つて包みを受取つたり下駄をはかせたりして、又歩き出しました、此れを見た私の心は何なてしたらう、實に云ひ知らぬ嬉しさが一時にこみ上げたのでした。

○習字の時間

京都　多喜子

私が今の小學校に奉職して未だ一ヶ月程しかたゝぬ時の事でした。一番樂だと云ふので女生の二年を受持せられましたが、或る習字の時間に一生徒の双紙を見ますと、忘れもしません、一枚へふの字を六つ書いてある其二つ目が、一寸よく出來て居ましたから、何の考もなく持つて居た朱筆で丸をつけてやりました。すると、其子が「これは昨日先生が書いて下さつたのです」と眞面目な顔で申したので、私は敎室から飛び出したい位、恥しう御座いました。而し此の時に自分の手の惡い事を一層明にして、只今になるまで毎夜一時間の習字を怠りません。けれども生れつきの惡筆は仕方ないもので、筆のさき程の上達も見えません。

餘興

寫眞（課題）



○規定　每號課題を出して諸孃の餘興に供す十六字詰十行迄にして一人一章に限ること丙種の賞を進呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

○私の寫し初め（天賞）

府下瀧の川一二一　山脇數子

確か十五の秋、萬歲遲き山里に寫眞師が來たとて大騷ぎ、お友達と三人襟首を氣にしながら川に沿ふて一里許り行くと其處です。傾き懸つた藁家て鎌や鍬や破れ草履と並んて二三枚の寫眞が日向暖してゐる。馬小屋の跡へ幕を引いて寫したのてす。宛て霧の中のお化けの樣てすが流石に今でも捨てないて持つてゐます。

事に興味あり、文に雅趣あり

○冷たい手（地賞）

島根縣安濃郡波根西村大津　りう子

妾は寫眞を寫した事は十七の時に一度あるが、一枚は朝鮮にある姉に送つて、歸國の際難船の爲に、荷物と共に海の藻屑となつたが其代り姉樣は助かつて大禧て一枚は窃盜が這入つて錢箱と取違へて、妾の小箱を持つて迯げて無くなつた、此處に殘つて居る一枚は、去る人が日露戰爭の時持つて出征し遼陽附近て戰死した時冷たい手に握つて居たと云ふことは、戰友の章殿が聞かしてくれた。妾は此寫眞を見る每度に、あの冷たい手に觸れる如な氣がする。

寫眞の經歷談

○實地の經驗（人賞）

下谷三ノ輪町六十一番地　細谷　鏡子

寫眞を寫すについて自分て經驗致した事をお話し致しませう、先まる顏の方は少しなゝめに撮り、面長の方は眞向を撮り、丈の高い方は腰をかけ、ひくい方は着物を少し長めに着て立つて撮る、そしておしろいはうすめに、紅は餘り多く付けない方が宜い樣てす、白粉をこくつけると、顏が死んて、人形見た樣に寫り、紅を多くつけると口が大きく見えます。

寫眞撮る時には好參考

【秀逸】

○東京寫眞師の一口評

澁谷　青柳

先づ丸木は總躰にやさしく寫しますが頰をふくらますのが欠點小川はあまりつくりすぎて自分てないやう、

然し美人にとれます、江木は先達てまては大そういきに作つていけませんてしたが此頃見違へるほどよくなりました、中島はやはりつくりすぎてむしろこわい顔にうつります、田中は學校やその他の團躰を寫すのは上手てすが個人の寫眞はゼロてす。

寫眞屋通

○小兒の顔　京橋　岡田つる子

都は花の霞棚引き人は遊樂に耽る春四月、妾は隅田の花を寫そうとピントを合したのは言問の堤。行くさ來るさの人が珍らしそうに立つので急いて寫して歸つて現像して見ますとぱつと小兒の顔が鮮に現れた。此は乳母にても抱かれて居たのてせう、不思議なものだとレンズを覗いた時の表情がありあり分る。妾は此小兒に何時か會へるだらうと思ふ氣がするので大切に仕舞てある。

詩的寫眞家

○より好く寫れ　播磨　松園女

レンズを眞直ぐに自分の方に向けて寫眞師がイザと身がまへた時其の人の心中には唯一つ自分より、より美しく寫る樣に……と唯其れ丈、私は此の一瞬間の心情を最も眞面目なる野心だと思ひます。

眞面目なる野心は變な言葉てす

○心配　大阪　紅女

今年の夏の事てした、私の里の近くに瀧が有升ので歸て居ました時毎日散歩がてら其所へ行きました。或日の夕方其所へ行き升と人氣はなし瀧の音計ドッ〳〵〳〵と實に勇ましい。我れ知らず岩に腰架け、音に和して「聞けよ〳〵瀧の音」と大聲て歌つて居ました。ところが不意にゴホンと咳が聞えましたので、ふと振向升とまあ大變、何時の間に來たのか寫眞機をチャンと組立て今や景色と共に私を寫さうとして居るのてすもの、驚いて岩を飛びのくはづみ石に躓いて倒れましたの。羞しくつて後も見ず走つて歸りました。其事思ひ出す度に倒れた時の姿を寫さなかつたかと思つて心配でなりません。

向ふては大よろこび

○見合の爲め　京都　露野子

十七歳の時、朝鮮に居る兄から、「妻にと云ふ人がある故寫眞を送れ」と申して參りました。實際、私は京女としては珍らしい程醜い容貌てしたから、母が氣を揉んて、着物も一番上等を、髮結も上手を撰んて、土地第一の寫眞屋へ連れて行つて下さいました。顔や躰や樣々注文された上にやつと寫して貰ひ、さて、歸る時に私は笑ひながら寫眞師に申まし

た。「いくら可笑しくても宜しいからあまり手を入れて下さるな」と。

其一言能く己を知る

○簪の先てめちや〳〵

山口縣　深山鶯

始めには何ともない心持ちて居りましても、レンズに向ひますて何だか恥かしうなつて來まして、貴婦人の前にても立つて居る樣な心持ちがしまして、急に顔がてら〳〵する樣になつて來ます、寫眞屋さんに、「動いてはいけません！」と云はれますと頻りにまたゝきを催したり躰が震ふ樣になつたりして夫れは〳〵辛う御ざいます。それでも度々寫して見たいのてす、其寫眞が工合よく寫つて居ますとようございますけれど、若おかしなものてありましたなら、誰にも見せずに直ぐに簪の先てめちや〳〵にかき裂いてしまうのであります。

凡ての女を代表して言ふ

○我儘な寫眞屋

肥前　とよ子

申すもお恥し乍ら地方には寫眞屋が只一軒しかありません、ですから我儘と云つたらお話しにはなりません、妾等が寫しに行つた時成可く來と頼むと生意氣にも、フンそんなに急いだとて此家ては二ケ月たゝぬと出來ません、其れてよければお撮りなさい、いやなら他家てお撮りなさいと云ふ。云はれた時は腹が立てたまりませんが他にないので又もや行く。早くまじめな寫眞屋が來ればよいと撮る度に思ひます。



大漁　牛込　佐野貞子

○機械のよしあし

若狹　津田汐女

妾は本誌にお出しになる諸嬢のお寫眞を見て、その土地の寫眞師の機械のよしあしを知ります なぜなれば機械の好いので寫しますとお顔が浮いて居ます、もうそれがわるいのですとお顔が畫いた樣にみえます。

○命から二番目

三重　ふよ子

文机の上に座を占めてゐる手箱の中には十五六枚の寫眞が奉書につゝんで其上を、白のリボンて結へたのが、はいつて居ます。其内一番寫りが惡くつて古いのが私に取りましては命から二番目に大切で、毎日此寫眞を見ない日はなく、休暇の時の旅行等にも必ず懐中に入れて行きます。之は亡父母兄と私と都合四人皆健康で家も全盛を極めて居た時分の寫しゑです。私は之を見るのが何よりの樂で、見るとやはり涙の種。

○美人が羨しい

京都　みゆき

容貌位どうでも可いわ心さへ美しければ、と言ふのは全く口先丈けの負け惜しみて矢張美人になり度い。殊に寫眞を見る度びにしみ〴〵然う思ひます。美人に生れて被居つた皆樣は、夫だけ神樣から幸福を受けて被居るんでせう。私達は神樣から幸福を受ける事が出來なかつたのだと、あきらめ樣としてもあきらめる事が出來ま

せん。

○も少し好く　梅花

誰れても幼き時の寫眞を見て樂のしく思はぬ人はありますまい、私は大變樂しく感じますそれ

私は毎年一度は必ず撮します、けれど其度に氣に入つたのは一枚もありません、自分は身體は小さく横にころびそうてスタイルは大變お可しいけれど顏はそんなに醜くゝないから顏だけても最少し良く撮りそうな物てあると平日も思ひます、之も自分の慾目て見たものてありましやう、今度撮したなれば記者樣にも御目にかけましよう。

○古い寫眞　沼津町　飛奈久枝

妾は五六年前迄は近所の子供を集めて思ひ〳〵に遊んて居る所を寫してブックに挿むのを樂しみにして居りましたが今は故あつてすつかり止めたので今其古いブックを出して見ますと今は皆變つて花を持て寫した愛らしかつた子供が丸髷の奥樣となり無邪氣に毬を持て寫した子がハイカラの女學生となり實に愉快てす同時に其當時の事を思ひ出します。

○魂が拔ける　長野市　西條梅子

人間と云ふものは寫眞を取れば、取る程馬鹿になると母はいつも云ひます なぜなれば寫す度に魂がぬけて行くのだと、道理て此家の兄は若い時一年に五六度も寫したとか、今ては大酒呑のグラシなしのコンマ以下の人間になりました。

○殘る聲　東京　多美子

私の机の上には、いつも兄樣の寫眞が飾つて有升、御優しい目元、引しまつたお口、去年香港に行かれる前迄「多美ちやん」と仰つしやつた御聲がまだ耳に殘て居る、御歸になつたらあれも是も買つて戴かふと思つた居たのに、あゝもう兄樣は永遠に歸られない、私ももう何にもいらないから、只も一度あの御口から「多美ちやん」と云つて戴きたい、あゝいつそ世の中に寫眞などなかつたらと……。

○學校踊り　札幌　忠子

皆が寫眞を取りましよと進めるので、御隣のシヅ樣と學校踊りにそつと行きました、寫眞屋樣は叮嚀に私等を並べてくれましたが、何共氣に合ひませんので、今寫ると云ふ時 呼吸を吸ひ、口を閉ぢました。すると寫眞が目はくろ〳〵して口はさくんて腰まて出て居るので、皆にまるて姿やの怒つた樣に出來たつて、大笑ひされました。

○泉水のほとり　麹町　ひさし

十七の初島田に紀念の爲め撮て置く樣と、母樣のお勸に鞘崩しの縮摸樣に、緋縮珍を立矢字にメてお庭の泉水の邊に立ちました、結び馴ぬ髮の重さにともすれば俯き勝なのをもつと首を確り顏を擧げてなど注意を受け今、シヤツトに手をかけた途端ヤア素敵と御座敷から兄樣の大聲にハツと思つて顏に手を當てたので出來上つた寫眞の可笑しい事尤も寫眞師は父樣てす。

○學校て　神奈川　元木美和子

丁度、去年の事、學校て先生が、今日は女生徒ばかり、寫眞を撮影する！、と言はれたので、大喜び否大騷ぎてす。皆んな髮をかき上げたり、着物を着直したり、そして顏を見合せてはニツコリ、私は初めて撮影するのだから、内々心配して居た。運動場て撮影するので、皆樣と行儀よくしていると、男生徒が、他家行の顏をしていると、笑つたので、こう澄して撮影した故、笑止な寫眞だつた。

○履の女學生　越後　飛鳥女

ころ〳〵と肥滿した留やが寫眞、出來てまゐりまして評所はヮイ〳〵と大賑やか、見ましたら成る程お袴を付けて書物を横抱へして、假裝の女學生てございますもの。斯かる片山里の無盲の下婢てさへも、世の進歩につれて自然の感化を受けて、とあんな内氣勝な留やの平氣て寫つて居ます樣子にショ〳〵頻笑まれました。

○秘密箱　甲斐　綱野やす子

私の叔母には、今年九才に成る敏男といふ可愛い子があります。けれど叔母のほんとうの子ては無いのてす。生の母は敏男が二才の時逝去つたのてす。敏男は未だ叔母を實の母と思つて居ます。それて實母の寫眞は一切秘密箱に入れて確く秘して置ます。此秘密箱の鍵を開けるのは敏男が成長して一通りの物心が出來てからだそうてす。噫敏男が其時の心持は甚麼てしよう。生の母親に初對面の其時の心持は??

○待遠いこと

奈良　稲西田鶴子

「頭ヶ少し引いて、も少し右向いて、そして茲を見て下さい。」まアどんなにすればよいのかと、云ふがまゝ姿勢を正した。「よろしいか。」「……」……餘り見詰め過ぎたかしら、口元は？髮は？襟元は？毎日氣に掛る、今日か明日かと郵便ばかり待兼ろ、到頭來た、幾度も出して見てよ、存外上出來。眞個に嬉しかつたわ、私が初めて撮つた時の思出は、かうですの。

○失敬な寫眞屋

埼玉　登久子

失敬な寫眞やだわネ小林さんが寫しに入らしつたら、そんなに肩を張らないで入らしつては如何です貴女のおゑらい事は承知してますからつて云ひましたつて。それから遂ひ此の間ですの姉が寫して一週間ばかり立つてから催話で、小僧をやりますから渡して下さいつて云ひましたら小僧さんでなく是非貴女が入らつしやいつて、きつと書生のいたづらでせうけど知りもしない人に失敬だつて姉はおこつたのよ、とは友人のお話。

○假粧

兵庫縣　胖子

一昨年の、暑中休暇の事でした、鏡やかぶとの、虫干をなして居ましたら、丁度近所のお寺のお坊さんがいらして、「是から皆假裝して寫眞を寫そうじやありませんか」といふので、皆思ひ〳〵の風して先づ第一がお坊樣の鎧、書生の上下、看護婦、ハイカラ紳士、學が一番に目について、見る度に、吹き出さずには居られない。

○弟

徳島縣　西野花菱

「姉さん」と大きな弟の聲に「エ」とふり向と早シヤツター撮つて「ハヽヽ姉さんの今の恰好、面白いなあハヽヽヽ」としきりに笑ふて居る、ほんとに毎日ゆだんも何も出來ません、こういう風にしらぬ間に撮るのが大好で、そして誰彼のえんりようなしに門から來る魚屋でも何でも窓から撮つて獨て喜んで居るのです。

○山百合

土佐　つゆくさ

夏の歸省中の事です、兄が樂に、寫眞の獨けいこなして居ますので、今日は丁度いゝ天氣だから撮してやろうといふので、名代して、今朝取て來た山百合を持て、かべの前に、立たのです。兄が度を合す間、姉が私の樣子を、向ふてなり。私は、襟や袖をつくろつたり、花を持代たり、余念なき折柄、失笑したので、ふと、上を見ると隣の二階で大勢の人が――と、もう大事の百合はあとに、なげ出されて居たのです、

○女の寫眞

千葉縣　吉岡菊子

いぢけてゐるのもいけませんが、かたないからして、務な尻つこけにはいて寫たのも、ハイカラとか、活發とかで、いゝと被仰る方も有かも知ませんが、私は、品も位も無て女の寫眞としては、餘り感心した者でもなからふと思ひ升、どこ迄もしとやかで、どこ迄も女らしく、フックリと寫したのがいゝやうに思はれます、

○幼な時

常陸　初澤さく子

段々とした振分髮に友禪の被布着て小さなポツコ下駄はいて居るのが、私が四つの時の寫眞です。寫眞師が大そう長い髯をはやして居たので、「こわい〳〵」つて泣いて困つたつけといつも母に笑はれますが、その度今一度あんな時代になつて見たいと思ふ心が增して來ます。

○胸騒ぎ

堺市　權田つや子

寫眞を寫します時には、何だか胸騒ぎがして、手足が自然と震へる、樣に成ります。妾が、先日母樣と共に、寫しに行きましたのです。今寫さうと言ふ時に何だか面白く成て、來たのを笑ふまいと耐らへた、時にはもう寫して終たのです。出來上てから見ますと、ほんとに變な風に寫つて居ましたわ。寫す時は餘り堅くなり ます、と變な風になります。又手は前の方へ出さない方が宜しい。出すと大きく寫ていけません。

○四季

靜岡縣　植田清子

妾は、寫眞を一年に四回とります。春夏秋冬と合せて四枚。そして時々寫眞を出して去年の春のと今年の春のと比べたり去年の秋のと今年の秋のと比べたりして、樂しみます。

○動く

新潟縣　丸山規子

此の頃、當地の寫眞館で、撮影した處が、丁度、月に幽靈が出た樣に出來ましたから、其の譯を、尋ねましたら貴女が、寫る時、動いたからと言ふのです。夫れ故、二回、寫し直しましたが、前とは、少しも、變りがないので、遂、諦めてしまひました。併し、他の寫眞館で幾度も、撮影しましたが。こんな事はないのですが、動くと言ふのが此の寫眞師の特長で、完く、技術がたりないのであります。

新歌謡



○規定　古來の俗謡の形式を取りて専ら優美洒脱なる作を歡迎す野卑猥雑なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）

落ちた枯葉を集めて焚けば白い煙が天に舞ふ　府下荏原郡南品川二日五日市村　風間ぴて女

完全の作

○（人賞）

山は紅る雁とぶ頃に谷で米つく水車　佐渡夷港　田村貞子

谷の一字、此謡の生命となる

【秀逸】

○清い秋風吹くのはよいが露でぬれます此袖が　廣島縣　富田玉代

○稲は刈られる木の葉は落ちる私ばかりがやせはせぬ　奈良縣　よしみ

○盛りと云ふのも僅の間ほんに女は朝顔だ　北越　小野塚松子

○妾の家には時計はないが汽車の響で時を知る　北海道　吉永豊子

○駒が嘶く日は暮れかゝる尾花七尺歸り道　滋賀縣　若井菊枝

○兄さん短歌でわたしは歌謡父の得意は新體詩　若狹　山田小濱

○鈴はリン／＼野は暮れかゝる月は並木に躍りだす　下總　荒登代子

○時雨降る日に枯葉が落ちる恰度蝴蝶が舞ふ様に　相模　鍋田美代子

○褪せずに何時までありたいものは髮の緑と頬の紅　和歌山市　加藤重子

○あなた白菊妾は黄菊花の簪似合つてよ　熊本市　近野春子

○帽子かぶつた子供のやうな雲がふら／＼西へ行く　京都　露野子

○神が冠のかざりの玉を散らしましたか蜜柑山　紀伊　田中文子

○裳からげて若狭の少女朝の汐干に貝拾ふ　若狭　早水その子

○私の住む家後が山であとの三方は野と畑　岩代　武藤たみ

○花も咲かねば鳥まで啼かぬ満洲荒野に月一つ　旅順　内田蓮子

○もつれながらも仲よく咲いた白と赤との朝顔は　若狭　汐汀春人

○花を取りたやあの山百合を私そこまで手がとゞくなら　大阪市　高間もと子

○あやめ咲いたは昔の事よ今じや芽も出ぬ潮來町　本郷　北村千代子

○花はつぼみよ娘は十五男ははたちの春がよい　紀伊　奥野直子

○小春日和に洗濯すれば木の葉ちりこむひら／＼と　大阪　榎浪春枝

○昔戀したあの姫さまは空へ消えたよそれが星　靜岡縣　富永朝子

○捥るつもりでなかつた橘を月に見とれてうか／＼と　沼津　鳴田笑子

○妾しや奉公妹は子守り何んと果敢ない姉妹　上總　渡邊奈加子

○私しや晝間は學校に勉め夜は小窓に歌をよむ　信濃　駒澤ひろ子

○わたしや嫁入たい海軍士官それがならずば水兵の　熊本縣　富丸しえ

○かるた會では花嫁一人勝を弟にゆづります　山城　幸子

○手燭かざして歌留多の友を送る柳に春の月　本郷　田村きみ子

○奥羽食ぬけ關東の着ぬけ四國九州はうそ上手　宮城縣　齋藤きくの子

○今年十九の厄年さうな私や何だか氣にかゝる　秋田縣　紫川女

○滊車で信濃の諏訪路に入れば山の凹に春の水　信濃　宮澤すみ子

○母が縫ふて紅葉の山を越えた氣がした宵の夢　上毛　關口綠富子

○ものをいひそで言はないものは可愛い子供とお寫眞と　山城　文子

○むりに願つて都へ出れば家がこひしいあの空が　齋藤しま子

○君は都でわたしは鄙で雜煮祝つて年をとる　福井縣　北利子

○汽車も通はぬこの山家でも雜煮ばかりは祝います　大阪　西戸政江子

○鳴いてくれるなこの荒屋の母もない子にきり／＼す　廣島縣　賀川みつゑ

○今の文壇は電車か舟か花の姉さんを皆のせた　本所　常枝子

○蟹の穴まで春風吹いて磯はのどかな浪の音　信濃　宮澤遲子

○限りある紙つきせぬ思ひ又の便りと止める筆　上毛　須藤淺子

○投稿幾く度規定を見るに選者のお顔にはづかしい　茨城縣　荒木りき子

○朝の心に丸窓開けて入れてまぶしい日の光　播摩　内藤松園

○月に浮かれて來たとの仰せ秋のいほりの御客様　下關　大野繁子

書簡文

○規定　手紙文はハガキの通常の音信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一卒に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○白菊を添へて寫眞を乞ふ（地賞）

羽後酒田　菊池りう子

白菊の一本もちて必ずとお約束まゐらせし御うつしゑ昨日今日心せはしきは、はら〳〵散り、遲きも又開かぬはなき時節と相成り候まゝ、今か〳〵と配達の來る時刻をはかり、門に出で、まちまゐらすれど、そよとのおとづれももらし給はねば、いさゝかお恨み聞えあげんと思ひ居り候處へ、今朝程の御葉書、さてはと拜讀致し候處「作りし菊のさきつ朝の霜に損なはれて思はしからねばこん春には白梅の一枝をもちて必ず〳〵〳〵」と、又してものおひきのべ。今度こそは、如何樣に仰せらるゝ共承知仕らず候。池のあやめをぬきてとのたまひしは五月の頃に候ひしか。それも夢の如く打消し給ひての今日迄の御約束を又もや御ひきのべ遊されなば梅咲く頃は、はや齡一つ重ね給ひての後には候はずや。春若き十七の御姿をこそ慕ひまつれ。それに昇樣の御出京次第、今にも御上京遊ばさるゝやもはかり難き御身。終にあだなる望みとなり候はゞ抔、誠に〳〵心もとなく候まゝ是非とも今度は無理にもお願ひ申上候幸宅の白菊二本許り、昨日より咲き出で候て、稀なる大輪と人もほめ、私も誇と致し居り候を、母に申て一本きり、翁にもたせつかはし候まゝ、何卒此花をあだに萎ませ給はぬ樣、ねぎ奉り候、まづは。

「させもが露をいのちにて……」と云ひて止みし人もありし世のならひとは思へど、かゝる巧みのまへには否と斷れんすべもなかるべし。才象（評）

【秀逸】

○山中より

熊本縣　岡本田鶴

第一信

此處は、町を去る十二里も山中で、大きな、奇麗な、山寺で御坐います。前は、細く麗はしい小石の上を、チヨロ〳〵と流れて居る小川で、私共姉妹は、毎朝此

の清水て顔を洗ふのてす。後ろは山又山て、其の麓は緑を取つたやうに松林が連つて、半空を劃つて居ります。實に空氣のよい、靜かな所て御坐います。

第二信

相變らず靜かて御坐います。夜は餘り靜かて淋しくありますが、此頃は、村のお孃さん方が、裁縫や、ヴアイオリンの御稽古に御出てたり、又カルタ等が大變賑かて、些とも淋しくはありません。

第三信

此頃は、時々頭痛して胸がムカ〱するので困ります。妹が心配して居りますから安心して下さい。村のお孃さん方も、大變御親切にして下さいますのよ。當地は、既う毎朝のやうに霜がおりて、朝夕は大分寒う御坐います。

第四信

彼方も、こんな靜かな片田舍に來たいと被仰いますが眞實に見るもの聞くもの總てが如何にも暢氣て好い所てすよ。朝例の小川て、妹と共に顔を洗つて居ると、小鳥が、まだシットリと夜露を浴びて睡たさうに林に群れて居ます、すると向ふの遠山の肩から、朝陽が、ゆるやかに紅の波を顫はせつゝ昇るのであります。實に實に好い景色てすよ、四邊の生物死物總てが紅て。眞實に自然はいつも美しいものですね、妹は、いつも此の御日樣に向つて妾の病氣が早く癒るやうに祈るのであります。妾も祈つて居ります。

第五信

奇麗な繪葉書、有難く拜見致しました、妹も大悦びて



停車場にて　府下　白然子

した。此頃は、妾の病氣も餘程快いので今日は、お孃樣方と一緒に氏神樣へ參詣しました、御宮は今日、明日二日間の御祭日て、田舍には珍らしい賑やいて御坐います。村里の女も美しくあります。やはり都の風が吹いて居ります。

おのづから山中の香がします（評）

○故郷より

大阪　高間もと子

只今宅に着きました。僅か二年の間に村の樣子もすつかりと變りました、人も變りました。私は歩いて居る間も道を間違へた樣な氣がして家々の表札を眺めました、名前も大分に變つて居ります。眞當に道を間違つて人に敎へて貰つた事も二度三度ありました、都の人よりは餘程親切て問はぬ事まて丁寧に敎へて呉れます、都に住み疲れた私も此村へ入ると絹夜具に疲れた足を延したかの樣なゆつたりとした心持が致します。都會と田舍――、何もかも皆違つて居ます、都は華やかてすけれど田舍はしんみりとして居ます。その代り家も汚いし、道も餘程惡うて凸たり凹つたりして居ます、村へ入つたのは夕暮てありました、夕日に彩る西の空も趣が變つて居ました。丁度子供等が表へ出て宜く遊んで居る處てした、その中には私の知つて居る子も居ましたけれど私の顏を眺めても又た顏をそ向けて餘念なく遊んで居るのでした。

宅に着きますと、父も母も笑を浮べて出迎へて呉れますので、勿躰ない樣な懷しい樣な氣が致しました。弟は少さい手を膝の上に置いて私を見て居ますので、幼年畫報をお土産に遣りました。茶粥は珍らしうてお美味しう食べました。今宵は月の明らかな晩てあります。父は緣側に出て本を讀んで居ます。風吹く度に菊の花が靜かに搖れます、弟は最前の本を出して來て話しを仕て呉れと云ひますから私は話しを仕始めました。始めは殊勝に聞いて居ましたけれど、中途からそろそろ惡戲を仕出し、私の脊中に乘つて、馬、馬と云ふて喜んて居ます。父や母の小言も仲々聞き相にもありません。母はお針の手を動かしながら二年間の出來事を話し始めました。皆驚く樣な事許りてす。月は段々高く昇つて行きます儘父の聲は高く響きます。弟もとう〳〵すや〳〵と眠つて了ひました、菊はしつとり沈みながら時々露をこぼします。明日は師の君を訪ふ心組てございます。面白い材料は未だ〳〵つきませんけれど夜も大分更けましたのてこれて失禮いたします、いづれ又た後からお報せ致しますさよなら。

全體の調子落着いて可し（評）

○嫁ぎて後嫂の許へ

大阪　生田房子

銀燭まばゆい曠れの座て、わなゝく手に盃をうけました、それはきのふでございました、今は花やかな新婚の夜を、淋しい小まどの下て涙てむかへて居ります。思へば一年は夢とすぎました、あの時はそれ程邪慳になるなら嫁きます私だつて嫁く處がありますと腹立まぎれに、前後の思慮もなく、只前途は光明につゝまれて樂しい家庭を心にゑがき、我から進んで當家へ參りましたが、結婚當時の嬉しい夢も早消えて殘るは愛と悔恨のみにもだへ／＼て暮して居ります。姉樣、私は始めて人の世殊に女の身のはかなき悲しさを、しみじみとさとりました。夫は勿體ない程優しく愛してくれます、けれど勝れて淺かな夫の愛は私には一しほ深く……

あゝもういへませぬ姉樣、私は／＼は一年前迄姉樣にこんな想をさせたのだもの姉樣私は氣隨氣儘でございましたね、兄樣が姉樣に優しく遊すのを何だか自分の愛を奪れる樣に思つて只わけもなく妬ましくあられもない事云つて姉樣を苦しめましたが思ふと恥しうございます、さぞ其時は鬼とも思し召したでしようね、あゝ鬼でございました、惡魔でございました、あなたを苦しめた惡魔は其れ以上の惡魔に苦しめられて毎日／＼涙の乾く間もございませぬ、これも自分の罪は自分に歸る自業自得でございますから誰を怨む樣もございませんが、自分の悲しいにつけ、姉樣のあの時の悲しさはまあどんなであつたろうと思ふと、私はもう／＼身もよもあられぬ程空恐ろしく日々良心に責められて明暮れ悲嘆に身もやせて愛を語るはたゞ涙のみでございます。

姉樣さぞ憎らしく思召てしようが、私が慘憺な運命に弄はれて憂苦にすごすのをせめてもの御心癒せと思召ゆるしてやると只一言仰しやつて下さいな、ゆるして貰はねば私一日も心の安まる日はございません、ね姉樣、あゝ鬼千疋とはよく云つたものと今更乍ら感じて居ります。

痛切なる懺悔文、さりながら淨瑠璃氣味なり

○病床より京の友へ

大阪　花子

秋も漸く酣に、おほ方樹々も色づき初め申候處、御許樣にはお變りもあらせられずや、私事今にはか／＼しからず毎日あぢきなき日を冷たき床に暮し居候、御許樣がお尋ね下されしは未だ庭の青葉が打萎れて、苦しき息を吐き居りし三月の昔にて候、其折御許樣が秋風の吹きそめなば必ず全快の報に接する事よと喜び居候、其節は二人手に手を取交し嵐山の紅葉に飽くなき樂しみを貪ぼらばやなど、種々慰めのお言葉賜はりしが、元より叶ふ可き事に非ざればにや、世は早くも秋更けて徒らに思出の種と相成申候、死の神と手を握るべく覺悟致し居候もの丶流石に華ぎし昔を思出でては

若き身の惜まれて候、此頃は羨しき御筆に、魘はしき嵯峨野のお便り、もう下さるか賜はるかと東の空のみ憧憬れ候、さはれ其慕はしき東の空も眺め得られぬ身は眞と寂しみの極みにて候、小夜更けし枕邊に桐の一葉がバサリと悲しき音を立て候時は、思はず慄として急ぎ胸の鼓動を鎭し申候、暖き母が看護を思ふては、世の倒事に泣き、妹のあどけなき慰めを見ては心を悶え一時とて安き日は之なく候、扨も嵐山の紅葉は如何にか候ぞ、うなゐ子連れて罪なき遊びに匂やかなる笑を洩らしつゝ、紅葉の下に立たせ給ふ御許の姿いとゞ〳〵偲ばれて候、是も弱き掠れの子が病てふ强き魔がつみの劍に、刻一刻髓やかなりし頬肉を、豐なりし胸の血を、削ぎ取られ搾り採られて、むくろは空しく寢れ行き、かてゝ神經の働きいやが上に鋭く、其れや是れやの想が恨みにまつはりて、扨てこそ斯くのごとき淚の跡を綴り申候は幾重にも〳〵御ゆるし下され候へかしあはれ親しの友よ、朝な夕なに御身御厭ひ遊ばされ、必ず〳〵妾が如き冷えたる床にあたら若き淚を、御濺ぎなされまじく呉れ〳〵も申進め候、さらば。

流螢の筆（評）

○弟の留學に就て問はれし返し

北米　合屋るり花

昨日までは夏季の全盛を極めし綠翠も今は凋落し落葉に宿る露の光も草むらにすだく虫の音も秋の哀れを留めて最淋しき折から御玉章給はり何よりも嬉しう繰返巻返し拜讀いたし候

就ては時雄樣には先祖代々住馴し故里をあとにして遠き此の國に御留學致され度御志望の趣誠に感心の至りに御座候、然しながら是は時雄樣の一生の浮沈に係はる岐路に候へば熟考の上にも熟考を重ねてかりそめにも人間到處在青山など申して無鐵砲に御渡米遊ばされては大不利益と存じ候、

留學生の多くは中途にして放蕩や病氣の爲に志を果さぬ者多く百中の八九名が漸く成功する位にて候、日本の學生の多くは大低一日に四時間乃至五時間働きて寄宿せし上に一週間二弗乃至四弗の給金を受け居り候、學校は別に月謝を徴收致さず候へ共物價の高き處に候へば隨分雜費高く相付き候まゝ暑中休暇三ヶ月には田舍に行き菓實採りの如き百姓の勞働をなすか、或は專問のクックをやりて一ヶ月に三十五弗内外の金を得て學校に歸り申候、四五時間働くと云へば聞くだけは何でもなき樣に候へど勉强と勞働が每日每月と續いては堪へ難く中には身體を破る人も之あり候

然し時雄樣の樣な忍耐と强壯な身體で人が四年でやる處を六年も掛る氣ならば成功は明かに御座候、時樣も又中學校卒業の上殊に英語は普通の書物が讀める丈け日本で研究して來られるが最も必要と存じ候米國にさ

へ行けば英語は獨り覺へる樣な空想にて御渡米遊ばされては大不利益に候へば特別に申添へ候。かしこ

大膽の匂ひ少きが遺憾、しかし過意の文（評）

○蜜柑の里より

紀伊　田中文子

百舌の聲梢に高う、秋はいよ〳〵更けゆきて、紀南は有田、園の木の實も色つきそめ候、行空の雲間に見ゆる八ようの峯に紫雲のたなびきて、高野山と聞えしを源に十三里、海に近き處、兩岸の堤の櫨もみぢして美しう河原には青海苔青々とほしつらねられて十月の末とは云へ例年になき暖かさ、眞蜜などは日當りよき南の縁に居ればぽか〳〵として春日の如く睡氣を催ほす位に御座候

もとより都に遠き田舍の事、聞え上ぐべき事なけれど里の自慢名物蜜柑についてひとこと思ひつき申候、そは木にある蜜柑を取る時花を咲かさぬ樣にせねばならぬ事に御座候、花を咲かすとは蜜柑につきたる花時代のがくを後に殘すを云ふたるにて候、若し殘せば翌年は其跡に實らぬ由にて大に忌まれ申候、

園の山々黄金なす頃ともならば、一度は杖曳き給ふべく願上候、友もなき鄙住居、菊花うつらふ夕には其咲きのこれるをかざして野邊に秋を送らばやと思居候、塒ゆく鳥の聲哀れに淋しき里の夕、此宵は雨ともなるべき空模樣に御座候。

南國の色がよく出て居ます（評）



新聞配達　栃木　角山やす子

○寒中見舞の文

中津　やま川

霜の槍地を劈き、氷の盾池に川に朝の威を誇る時、嚴めしき鐵騎に乗りて、冬は來ました。

山里なれば殊更に、人目も草も枯れはてゝ、雀のお宿

の竹篌蔭は寒くとも、勞働に鍛えたる身の皆々様なれば、御壮健の事と推察仕ります。其血をうけたる私、温き御膝もとは離れても子供は風の子、御心配被下ますな。
此落語本はお祖父様に差上ます、火燵の中から音だけ出して御覧なさいませ。さようなら

「雀のお宿の鼓」「落語の本」が好かつたです（評）

○奉公先の姉が許へ

大阪　梅本龍子

姉様今朝早くお手紙がつきました、お母様の前で讀んでお聞かせ申しましたが、泣いてはいらつしつたけれど、どんなにお心安く思召したでしよう、妾だつてほんとに嬉し泣きに泣きましたの。
姉様にお別れしたのも早十日の餘になりますのね、あの時のことを思ひ出すと身の毛がたちますね。悲しい日にはふさはしいどんよりしたお日和でした、灰色の空に日の光も見えず、何とはなしに頭を壓えらるゝ様な陰氣な日でしたね。
お母様がお病床から椽まで這うてゐらつしやつて、お痩せなすつた頰に涙をつたはせて（お前、からだをね、大切におしよ……）と仰有つた時、姉様は叔父様と一緒に車に乗つてゞしたね、妾は、お別れにお見送りもしないで、其儘裏え走つて、あの柿の木に凭れて、心ゆくばかり泣きました、妾が袖を顔からはなした時、はやお車は影を小さう、夕靄につゝまれてゆきました。
それから翌日も翌々日もお母様があなたのことばかり仰有る故、もしお病體にさわつてはと、どんなに心を痛めましたらう、が、お母様もあのお手紙で大變落つき遊ばしたゆゑ、お病氣も追ひ〱快い方に向ひました今朝はいつになう、御飯を重ねなすつた程ですから、此方の事は少しも心配して下さらないやうに、只々御主人様、殊に奥様へはお氣にそむき遊ばさないやう、お奉公なすつて下さいませ。
あなたがおいでの時、ほら、公執の叔母様とこから貰つた、あれは、機に下ろしましたが、綿入れに仕立てましたゆゑ小包で送りました、胴裏は古いのですが堪忍して頂戴、どうぞね、時折お母様の御安心遊ばす様なおたよりを下さい、寒中故お身を大切にして下さいよ。左様なら

よく情があらはれて居ます（評）

○年の始人のもとに

藤井高尚

年の始は若菜小松に千年の春をかけたる御祝などいかにたのもしき御遊び多く侍らん、こゝにもほと〱に祝ひごとどもし侍るにうちまぎれて七日の御遊にだにえ參らでふる年の御物語など聞え承る事も侍らればおぼつかなくてなん、なほうちつゞきさはることゞもの侍りて月のうちにはえ思ひたまへたつまじければ、あまりにうと〱しき罪さり聞えんとて、文していさゝかことぶき申すになん。

お伽噺

巖谷小波先生選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳說を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の燒き直しは許さず二十四字入十行以內凡て振假名つき原紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

○牧場の小女（天賞）

日本橋　けい子

荒ゐ白飛の筒袖の上に洗ひ立ての雪のやうに白い牧場着を著けて今やうやう太陽の上り初めた許り、秋も半の朝風が心持はだ寒い羊小屋の前に立たのは環さんてす。十二の年にはませて智慧のある子まつ毛の多いぱつちりしたひとみが色白の面に可愛らしさを添へて純白な服がよくうつる環さんは牧場の主人が愛娘です。小屋毎に戸を開けてやつて愛らしい羊供の變りない姿ににつこりしながらさて是から朝の飼料をやるのです。羊は皆揃て眞白てすが中に一疋前足と後足とに褐色の點のある小羊是れは十日程前から何處からか迷て來たのを優しい環さんは可愛想に思て朝夕飼料をやつては可愛がつて居るのてした。其小さな姿と他に異なつて居る所が小さい牧者の愛を引いたのてせう。太陽がだんだん上て後の山の梢をはなれる頃環さんは大勢の羊を連れて家續きの廣い牧場に行きます。是が毎朝の何よりも樂しい務でした。牧場には草が一面に生へて居て眞中を銀鈴のやうな音を立てて流れてゐるのは山から來る水晶の樣な淸水羊共は環さんを捨てゝ三々五々流れに走るのてした。環樣はこの樣子をじつと見てほほ笑みながら草の上にごろりとなつて眞青な空を見上げながら可愛らしい聲を張り上げて唱歌をうたつて居ります。裏の山には何鳥か四方の靜けさを破てしきりに鳴きしきつて居ります。何とも云へぬよい氣持環さんはうつとりとなつて仕舞ひました。羊はと見れば水にも飽いてか草の上に日を細くしてうづくまつて居るのもあり二三疋打連れて遙か向ふに遊んで居るのもあります。環さんは暫く夢現て居ますとふと冷たい水がぽとり額に落ちたのでびつくりして目を開きます

と目の前にかの小羊が立て居ります。はつとして起き上て四方を見廻しますとまあ是れは不思議あたりは一面に紅や黄や紫やとりどりの花が咲いて居て何とも云へぬいゝ匂ひがぷんぷんと鼻をつく春さながらの景色です。環さんは暫く口もきけません。如何したのかとあきれて居ますと小羊はこちらへ來よと云はぬ許りに頭を振り動かしながら振り返り振り返り花野の中の一條道を行くので理は知らず環さんも其後について行きますと行手の方に立派な御殿が見えました。御殿の前につきますと小羊は前足でことことと門のとびらを敲きました。すると俄に中の方が騒々しくなつてとびらが開くと中から出て來たのは畫にある天女の樣な人達です。環さんの姿を見るより「まあよくいらつしやいましたねえお姫樣が先刻からお待ち兼ですさあさあこちらへ」と右左から手を取て立派なお座敷に通し錦のしとねの上へすわらせました。とやがて襖のかげから目も覺めるやうな美しいお姫樣が大勢の待女共を從へて出ていらつしやいました。こんな美しい人を生れて初めて見た環樣は思はず見とれて居りますとお姫樣はにつことなすつて「環さんや。よくお出でしたね。今日貴女をここへお連れ申した羊は私の召し使ひの者ですが道に迷て歸れなかつ



たのをよく今日まで親切に可愛がつてお呉れてした。其御禮に今日は一日面白いものを見せて上げますからゆつくり遊んでいらつしやい」と優しいお聲で申ました。のてさてはさうかと初めてがてんが行きました。其中に種々のごちそうが出て、中には環さんの未だ見た事も聞いた事もない果物などがありました。お姫樣は亦侍女共にお揃ひの著物をきせて胡蝶の舞と云ふ其は其は美しいおどりを見せて下さいました。實に何とも云へない程きれいなので環さんは今はもう家へかへる事も忘れて猶もいろいろなものを見せて頂きました。するとお姫樣はやがて一つの美しい箱をお取り出しになり「其ては環さん餘り遲くなると不可ませんからもうお歸りなさい。ついては是を上げますから何か欲しいと思た時にはこの箱を開けてごらんなさい。欲しいと思た物は必ず入て居りますから、」と云て其箱をお渡しになり「今お家へ送らせて上げませう」と云てぽんぽんと手をたゝきますと何時からか、紫の雲が出て來ました。環さんは皆に厚くお禮を云て其雲に乘りますとまたたく中にいつか元の牧場へ來ました。其後環さんのお家には世の中にありとあらゆる物一つとして無い物はないさうです。環さんは相變らず大勢の羊と一所に牧場へ出てさも幸福さうに唱歌をうたつて居ります。手には彼の箱をさも大切さうに抱へて。

（評）文章流暢當々見る如き心地せられお伽噺としても比較的瑕のなき作物であると信じます。

○黄金の卵（短篇）

熊本市袚分町壹番地　近野春子

今は昔或る片田舍に、八助と平吉と云ふ二人の男がありました。八助は性質大變正直て、人が何と云つても一度も腹を立てた事の無い樣な男て、何時も獨りて、何か莞爾し乍ら、孜々と仕事をしてゐました。が一方の平吉と云ふのは、一寸見た處でも小智惠の回り相てどことなく拔目の無い、惡く云へば少し狡猾い方なのて、折々八助の正直に付け込んで、惡い事ばかりしてゐました。

或日の事、八助が例の通り一心に勢出してゐる所へ、平吉がやつて參りまして、「オイ八どん。大概に勢出しねえ。今日は俺が大變な金儲の種を聞出して來たから手前にも分けて遣らふと思つて來た。」と申しますので八助も一寸手を休めて、「ソリャ有難ふ。そして吉どん一躰どんな事だい。」と尋ねました。すると平吉は、さ

も勿体らしく、「おやあ話すがねえ。實は先の町に、一羽の珍らしい黄色の鷄がゐるんだ。今は未だ小さいが成長うなつたら、一日に一つ宛金の卵を生むんだつてよ。どうだ剛氣だらう。そして價と云つたら、僅た麥一俵分だ。愚圖ついちやあ他人の手に入るかも知れねえ。汝と俺とて買つちやどうだい。」と甘く持ち掛けましたので、八助もすぐ、乘氣になつて了ひました。

扨て翌日になりますと、平吉が一匹の小さな鷄を抱いて參りました。成程奇麗な金色なので、八助は物珍らし相に、抱いたり撫でたりしてゐますと、平吉は氣の毒らしう「時に八どん。今日は少し都合が惡いから、汝俺の分も一緒に出して置いては呉れまいか。其代り鷄は家に置いとくから。」と申しますので、飽迄好人物の八助は、一人で二人分共拂つて遣りました。愈々其翌日からと云ふものは、平常早起の八助が一倍早く起出て丶、甘い餌を澤山與つては、ククと嬉し相に啄んでる鷄を見るのを樂みに、自分も一生懸命に、仕事に身を入れました。

月日はいつか夢と過去つて、例の鷄も見違へる樣に成長うなりました。或日の事です。突然平吉が參りまして、「八どん大分太つたの。おやあ今日から此鷄は、俺の家へ持つて行くから。」と引つ奪くる樣に、鷄を持つて行きましたが、其翌日、青い顏をして又平吉が參りました。そして「いや大變な事が出來てね。昨夜あの鷄を狐めに奪られちやつた。」と頭を掻き〲、言惡相にこそ〲行つて了ひました。これは眞赤な嘘で、奸い平吉は、八助を僞して鷄を買はせ、其の大きくなるのを待つて、之を町の鷄屋に賣り飛して、出奔したのでした。でも佛性の八助は、別に怒りもしません。矢張莞爾顏て、毎日稼いでゐました。

處が一日、八助が少し用事があつて、町に出まして、とある鷄屋の前を通り掛ると、けたゝましい雛の泣聲がします。何だらうと覗いて見ますと、鷄屋の亭主が一羽の鷄を締め殺さうとしてる處なので、八助は吾を忘れて飛び込んで、「モシ〲鷄屋さん。醜い事だ。俺に其鷄賣つちやあどうだい。」と若干の金を拂つて、家に持つて來て見ますと、紛もない曾て養つて置いた鷄てすから、始めて平吉の惡策がスツカリ分りました。

處が、其年ももう五日程で暮れると云ふ頃から、例の鷄が巣に這入つた切り、どうしても出ません。はてなと思つてゐると、愈々大晦日の晩、不思議な夢を見ました。それは黄色の羽衣を着た、頭に眞赤な冠を被つ

た神様が、「善哉々々。八助明日を樂しめ。」と仰言つたのでした。程もなく夜は明けました。年の始めの太陽は、紫の雲間を洩れて、祝福の光を投げてゐます。八助の鷄屋では、勇ましうコケーコーの聲がします。ムツクリ起き上つた八助は、鷄屋の戸を開けて、心から吃驚しました。だが堪へ切れぬ嬉しさはありあり溢るゝばかりなのです。恰度巣の眞中には、どうでしよう。普の卵の二倍もあらうと思はれる程の卵が、横になつてゐて、そして、美くしい金光が、目出度い初日に照り映へていたのでした。

（評）作者のお伽噺に巧みにして且つ熱心なるは殆ど毎號募りに應ぜらるゝを見ても知られ殊に本篇の如きは酉の年に因みて面白く出來ました。



田舍者　　名古屋　三浦くろ子

○智惠の架橋（入賞）

徳島縣小松島町西町
西野花菱

或所に大きなお金持がありました、此家の主人が二三ヶ月前から病氣にかゝつて色々とよいお醫者樣や、珍らしいお藥を用ひて見ましたが少しも効能が有ません。其上奥樣が大層心配の餘り是も病氣に成そうなのです。ところが太吉と云ふ今年まだやう／＼十三の小僧が、御主人の御身の上を大層心配しまして、毎日々々かゝさず七八丁程もある氏神樣へお詣りをして居ました。今朝も太吉は跣足の儘てお詣りをして歸らうとしますと、御社の側て二三人の子

供が何だか暄しく話して居ますので聞ますと、此裏山の奥に一つの深い／＼谷川があつてそれには橋がなくてそして不思議な事には其向の岸に、何時も眞赤の美くしい花が咲いて居て、いゝ匂ひがプン／＼此方まで するので慾かして行かうと思うけれども行けないとのこと。其處へ二三日前から白髪頭を髭結んだお爺さんが現はれて「誰でも自分一人の知惠や力で、此谷へ橋を架けて渡つた者には、智惠の袋と何の病氣でも直ぐ癒る藥をあげよう」とニコ／＼笑うて居るとの話。太吉は飛び上る程りに喜んだ。何でも其お藥をと思ふとすぐ裏の山へ登つていつたのです。木々の生ひ茂つた細道を辿つて奥深く來た時、成程さきの話の通りの白髪のお爺さんがニコ／＼して、おいで／＼と手招きして居る。何とも云へぬよい匂ひがして來た、見ると向ふに綺麗な赤い花が咲いて居る、开麼に遠くもないのに谷は深くて下には物凄く水が轟々と流れてゐる、凝と見て居る内先刻の小供も來た、お爺さんは皆の顏を見比べて矢張笑つてゐるそれは／＼氣味が惡い程。一人の小供が空の鳥を指して「あの鳥が羨ましいなあ」と云ひますとお爺さんが「自分の智惠でやらなけりや駄目だ」と云ひ乍ら太吉の顏をうち守つて居ました。太吉は先刻から彼方此方を見廻して居ましたが、不圖上を見るとニッコリほゝ笑んでスタ／＼と歸つて了いました、其後姿を見てお爺さんは獨うなづき又皆を見てニッコリしました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

太吉は翌朝大きな鋸と太い綱を持つて氏神樣のお詣りをすまし急いで昨日の處へ來て見ますと、矢張お爺さんが居ます。太吉を見ると又ニコ／＼笑ひ乍ら凝とする事を見て居るのです、太吉は其綱を持て其處の大きな松の木へよぢのぼつていつて、谷の方へ出てゐる大枝に綱を掛けておりて來ると、其綱の先へ大きな石を結ひ付ました、松は石の重みで枝が谷の方へ少し下りました、それから鋸で松を根元からゴシ／＼と伐出しました。お爺さんは石に腰掛て居ましたが思わず中腰に成て見守つて居ます。見る間に松は大分伐られ忽ちメキ／＼と大きな音がして谷の上に倒ました、そして見事な橋が出來ました。「やあ感心々々」とお爺さんは手を拍て立ち上り乍ら「さあ私について出」と先に立て松の上を渡り出しましたから太吉も後から行きますと、赤い花が皆お爺さんに默頭しました、太吉はそて御主人の御病氣の事を話して「ですから何卒其お藥

だけ私にお恵み下さい」と申ますとお爺さんは「お前は餘程感心な子だそれてはこれを上よう」と一包みのお薬をくれました、太吉は思わず小踊りして「お爺さん有難とう」厚くお禮を云つて歸らうとしますとお爺さんは鳥渡呼びとめて「これ〱約束の此智恵の袋も乃公には最う不要のだからお前に上よう、何でも困つた時此袋の口を開けると直ぐ良い智恵が出るから、だが誰にも見せてはならないよ」と云つて渡しました、そして何と思つたのか持て居た金の杖て松を突ますと、見る〱松の梢が跳上つて太吉が「アッ」と云ふ間に元の所へ生て了いました。驚いたの何のつてお爺さんは私を騙したのだなと屹度なつて睨みますと、相變らずニコ〱して「太吉お前の智恵を最う一度驗すのだから又何うかして橋を架けて御覧」と云ひますの、太吉は泣出し度成ましたが見ると松の枝から先の石が下つて矢張プラ〱して居ます、太吉は不意に「お爺さん綱を下さい〱」と叫びました、お爺さんが綱を與へますと其端へ又石を結はい付て「エイ」と掛聲も勇ましく先の石目蒐けて投ますと、其はづみに石と石とが絡み合ひまして最う幾程引張つても解ません「メた〱」と太吉は喜んて其先を木に括りました、お爺さんは其智恵に感心しまして「お前は實に智恵が深いさ早く歸つて主人に其お薬をお上なさい」とニッコリ笑うてスタ〱山奥へ行つて了いました。太吉は其綱につかまつて猿の樣に谷を渡り無事に歸り直御主人に其お薬をお薦めしましたら、流石の重い御病氣も二三日の内にすつかり快くなりましたので大層喜ばれまして、命の親の太吉を此家の坊ちやんにしましたとさ。めでたし〱。

（評）題も面白く内容もよく出來て居ます。

【秀逸】

○鶯姫

越中　廣瀬はつえ

或る處に大した富裕の華族がありました。此華族には御子樣が唯一人て、而かも其御子樣は白薔薇に露を、含んてる樣な姫樣てした、この姫樣は當年十歳て學校の成績も優等なので御親類の寶物になつて居られました。すると或日の事急に病氣にかゝられ二箇月程て床を離れられましたが、情無い事には、この御病氣後、咽喉がつぶれて終ひまして、少しも聲が出なくなりました。勿論醫者にも見せ、神佛にも御祈願を籠められましたが聲は依然啞れた儘てございます、てすけれど

も御體軀には別狀がありませんから始めて、學校に通はれました、いよ〳〵授業が始りましたが其時は生憎唱歌でありました、で姫樣は可厭でも其嗄れた聲を張上げ、皆と一同に謠はねばなりません、すると大變聞き苦しい可厭な聲が自分の耳にもつけば他の子供の耳にも入りましたので皆姫樣の顏を見ては目ひき袖ひき、卑しむやうな笑ひ顏をして謠つて居るので御座います、これを見ると姫樣はもう胸が充滿になつて耐ら無くなりましたから其授業が終りますると、直樣御邸に御歸りになつて日頃愛して居た鶯の處に行て泣いて居られました、そして言はれるには「鶯、お前は羨しい可い聲を持つて御出ね、そんなに可い聲を持つて御出だから、妾を可憫さうとお思ひなら、何うして可い聲になれるか教へておくれ」と云はれて又泣かれました、其晩の事でして、鶯が美しい申分の無い娘となつて「貴君の聲を明日全快して上げましようそれにはアノ梅の木の下で毎日忘れずに唱歌を聲張り上げてお謠いなさいまし、さうしなされば日數の立つ中、乾度私の一念で癒して上げまする、それには姫樣に永のお暇を下さらなければなりません」と言ふと、鶯の娘は消えて終ひました。

其處でお姫樣は朝早く鶯の云つた通り、其籠の中を御覽になると、可哀さうに鶯は、止り木から墜ちて死んで居たのでございます。これを見られた姫樣は、さては昨宵永の御暇と云つたのは死ぬ事であつたかと、大層悲しまれましたが、恁ふまで物事が間違はぬから、鶯の云つた通りにしたなら、必ず自分の聲も可くなるであらうと思召して、毎朝乾度、庭の梅の木の下で聲を上げて唱歌をお謠ひ出しになりましたが不思議と次第々々に、お聲が可くなつて參りまして、一ト月計り經過た頃には、誠にお美しい、以前よりもづつと可い聲になられました、これも鶯の御かげと云ふものゝ、一つは御姫樣が鳥のはて迄もお思遣りが深かつたからでありましよう。

手まり唄

うぐひすや〳〵、うぐひすや〳〵、たま〳〵都へ上る時、梅の小枝に晝寢して、お千代は何々着せてやろ、上衣は紺々紺ちりめん、下着はちん〳〵ちんちりめん、夫を着せにやつたれば、道でころぶか、手なつくか、殿樣が通つたらお辭儀せよ、おん馬が來たら傍へ寄れ、手習子供をかまうなよ、かまうと草紙でぶたれるぞ、まづ〳〵一貫お貸し申した。

少女文壇



○規定　本欄は明治二十八年以後出生の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す出生の年を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○謡曲（地賞）

山口縣豐浦郡長府村印内　木村千代子（十四才）

私のお父様は大そう謡がお好きなのですそれで毎夜々々おけいこをなさるのですが、私も又大好きていつか聞き覺えに小さい聲てついてうたふのてす。其内ても、小督と紅葉狩が一等好きてす、月淸く尾花に宿る白露が、仄白う見える夜、小督をおうたひ遊ばすのを、きゝますと、ずつと昔の嵯峨野の有樣が夢の樣に目の前に、うかびます、それて御父樣が、それ程好きなら敎へてやらうとおつしやいますが、何だか恥しくて習ふ氣にはなれないのです。兄樣は先月から、お始めなさつたのてすが、側から、きくと丸て、お經を讀む樣なので、皆大笑ひをするのてす。すると兄樣は、いつも「ナニ今に、お父樣の樣になる」と云ていらつしやいますが、中々なれそうにもありません。

兄樣たるもの奮發せざるを得ない（評）

○和歌（人賞）

伊豫　美惠子（十三才）

魚釣りて歸る野路て友は言ふては父上にては母君に

とゝのへり（評）

○友の許に

大津市　近藤きく子（十四才）

御存の通り昨日は、我學校の紀念日です、あの廣い廣い、うらて運動會が開かれました、からすこし御話申ます式がすむと第一に尋常一年が桃太郞の遊技よ、小さな愛らしい人ばかりで髮に蝶の樣な、美しいリボンをつけてれ、樂隊に合して、見物人は皆可愛／＼つて申しました、第三が私等の、はしりごくこよ、ピーイと笛の音、皆一度にバラ／＼と走りました、樂隊はしきりと、はやしてますが夢中だから聞えません、まあ／＼私は二番目、嬉しかつたわ、今ても其時の事を思ふと胸がドキ／＼しますわ、そしてれおしまいが先生達の、はしりごくこよ男の先生ては、あの近眼のれハイカラな先生が第一よ、女ては佐々木先生てした、それから皆て唱歌を歌つて、歸りには、ソラ、例のおまんじゆよ、まだ／＼ありますよ面白い事が澤山々々。

○福袋

相模　長島みち子（十四才）

妹をつれて吳服屋の賣出しを見に行きました。店は立派に飾られて誠に美しく、大勢の小僧さん等は、皆忙がしさうに働いて居ります。妹のほしがるまゝに、福袋を買ひました。妹は、直、開けたがりましたが家へ歸つてからの樂にと、急いて、家にかへりました。さあ、どんなのがあるてせうか。あけるまでが樂てございます。

文章を書きなれてゐる（評）

○柿拾ひ

山形市　鈴木こう（十五才）

今日は天長節にはの柿もだいぶ赤くなりました學校がおへますと直ぐお兄さんと庭の小屋のきの柿に行きました兄さんは上でどしどし落してよこします私は、籠に拾ひ集めました上の兄さんは赤くておいしさうな實を、たくさんたべて居ますが私には、澁さうなものを下さいます、柿取りをやめてから、日本おとぎばなしのさるとかにの話のようだといつてわらひました。

○初鼠　（四季ノ歌ソフヘレテノ節）

兵庫縣　木村　白子（十五才）

うからやからな打こぞり、
三寸、低き屋根裏の、
古巣、そろりと打いてて、
柱くだればひとはしり。
蓬萊飾り麗々と、
一段たかき床の間や、
並に集ひし初ねずみ、
おゞ、ばゞ、孫よ、それ曾孫。
ぢゞが曾孫の手をとりて、
鏡もち山、はるばると、
登れば下は一目にて、
十疊、座敷廣いかな、
やんれ祝へや初春を、
御代は治まる目出たいぞ、
やんれ踊れや初春を、
御代は榮ゆるめでたいぞ。
それ、やれ、祝へ、それ踊れ、
ナウ〳〵〳〵〳〵〳〵

少女文壇

○　奈良縣　福西しづ子（十二才）

指折りて待ちにまちにし十三の春も目さきに來りてうれし

○　神戸　ゆりえ（十五才）

空晴れてやまがら啼きぬかゝる日におきなは山に薪とるらむ

○　福岡縣　田中もゝ枝（十四才）

少女子よ心して行け秋の野は千草八千草露ふかければ

○　京都市　堀尾ふみ子（十二才）

今年こそ幸多からめ我が門の雪つむ松に初日てりそふ

○　愛知縣　豐　子（十二才）

晴衣きて手鞠つき居る妹に小猫ぢやれつき其手たゆたふ

○俳句　新潟縣和田小學高等二年　市橋わたる

○夕霧に月見てさくや月見草

○川の上かげうつし行く螢かな

○旅まくら心さびしき霜夜かな

○お父樣のおことば　熊本縣　佐々木芷子（十四才）

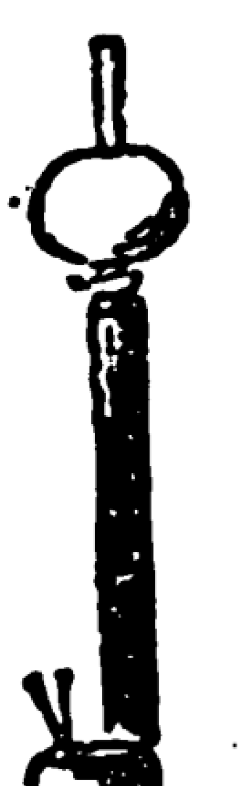
お父樣は、いつも私等に「築山の松でも、しつけしないと自分の思ふまゝに成長して少しも見かけがない。それで、おまへ等も、先生や、親の敎へを守つて、手を入れた築山の松のやうに、育つてくれ」とおつしやいます。私は、此言葉を、去年迄は、解する事が出來ませんでしたが今年は深く胸に感ずるやうになりました。

○玉菜　若狹　津田　瀧子

あたゝかい秋の日、畑にきて、先頃まきつけた、玉菜の苗床を見るとさゝやかな二葉のみどりはそこゝゝに各の門を開いて、日かげに笑みかはして居るやうです。

○かるた會に招く文　下谷　細谷　秀子

春子さん、昨日はおぢやま致し色々御ちそう樣になりまして有がとう御ざいましたどうぞ御伯母樣によろしく御禮を申上げて下さいまし此りんご弘前の兄さんのところから送てよこしましたから御ふくわけ致しますそれから今晩宅でかるた會を致しますの御承知の松子さんとし子さんが御出になりますからあなたも文雄さんをおつれなされてぜひ御出て下さいませ御かへりは必らず兄さんが御送り致すと申して居りますから御安心なさつて御出て下さいまし御まち申して居ります、さよなら。



笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし賞牌の話ても一口話ても當座なり賞ハ纏

○御年始（天賞）

芝　廣瀬玄美子

「御免」と云ふ聲に松が出ますと、兄様の御友人もう大ぶ御機嫌で御足がひよろ〳〵。「新手御目出度存じ升」と仰つしやると次の間で下女が「クス〳〵」。御歸になつてから「御前なぜあんなに笑ふの」と申しましたら「だつて御嬢様あの方これて三度御年始に御出てすもの」……。

○無邪氣（地賞）

越後長岡市千手町　佐藤浪子

姉「お母様、花さんはお芋の煮へたもご存じないのてすから、眞實に赤面致しましたは。」

妹「あらつ姉様てば嫌、妾だつてお芋が煮へたか煮へないか位食べて見ればすぐわかりますは。」

○新聞配達夫（人賞）

愛知縣東春日井郡旭村大字新居　谷口しん

私の村の新聞配達夫は、十二三歳の兒てあります。或日兄さんが「お前昨日は何故新聞をもつて來なかつた、」とおしやると「途中て一錢に賣つてしまつた、」とすまして居る、重ねて兄さんが「其錢はどうした、」と尋ねると「お菓子買つてくつちまつた。」

○明日の分

鳥取市　上山八重子

尋常六年の妹の美重いつても反省録に其日〳〵の事を記すのを忘りますから私が嚴しう申します、今晩も如何と思ひ尋ねますと、美重ちやん得意顔に電燈の下て小猫とされながら「エ、姉様私あしたの分までイチヤンと書いて有ますよ!!。」

○吸取紙

沼津町　飛奈久枝

子供「母さん手をどうしたの繃帶して」

母「今手を切つて血がとまらなくてこまるから」

子供「そんなら姉さんの机の上にある吸ひ取紙を持てきましようか早くとまりますよ。」

○試驗

？　栃木　大塚くま子

私が來たばかりの女子文壇をごはん時もかまわず讀んで居ります と下女がおすまし顔に、あらまた試驗てござ います か、さぞお忙がしいてしようね。

○妹の作文

常陸　初澤さく子

妹が筑波登山の記といふ作文を敎へて頂戴と云ひますので、自分て作つて御覽なほして上げるからと云ひましたら、やがて書いて來たのを見ると「十一月二日本校生徒一同は喜び勇んで」まてはよかつたが、其次は「筑波登山にのぼりたり」と。

○舶來品

新潟縣　丸山規子

ハイカラ紳士曰く「これは私が特別に西洋から取り寄せた品てす

客人「成る程何ても貴方の物に限りますすれ

ハイカラ紳士儼として「もう私は舶來品てなくては使用しないてす

ハイカラ紳士の息子「お父さん内のお米も外國のだれえ。

○そうじ

若狹　津田汐女

姉が妹をだましてお菓子を戸棚から出して居ると、妹が、姉さんそこに何にがあるのとたづれると、そうじして居るのです。

女子健康顧問



○痩せる法　私は人樣に肥つたと言はれるのが何よりつらくてなりません。簡易な痩せる法をお敎へ下さい。又味噌汁を食べると肥りますか（肥女）

『答』何回もお答へする如く、肥る程結構な事はありません、決して痩せる法など、不心得を御出しになつてはいけません、結婚後、御分娩でもなされば自然痩せまして、今度は肥る法に苦心せんければなりません。味噌汁は特別に肥る事はありませんが營養に富だよい食物てす。

○毛深き質　私は十五才の少女でありますが、生れつき毛深き質にて恥かしくあります。跡なく抜き取る法はありませんか。（埼玉　愛讀女）

『答』火鉢の灰を毛の生へてる部へこすりこみ、一本每抜きとり再び生へれば又抜く樣三四回繰り返せば遂には生ぬ樣になります。

○規定　女子の身體に就いて衛生生理疾病等各種の質問に應ず葉書差支なし

○腦が弱い　私は少し込み入った事や辭書などを調べると直ぐ頭がいたみます。此れも腦が弱いせいでせうか。（豐前　腦の弱い女）

『答』規律的の生活をなさるのが肝要です殊に睡眠時間を不規律にならぬ樣夜間は必ず十一時に臥し朝は六時に起きる事に定め間食を斷ち書見等の際は他の事を考へず書物に興味を持ちて取調ぶる樣心掛けらるべし

○瘻小便　私事今年二十一才ですが瘻小便にて他へゆく事出來ませんから、哀れと思召されて止まる法を御敎へ下さい。（岩代　きぬ子）

『答』瘻小便の原因は種々ありまして其原因に向つて治療せんければなりませんが多くは近來行はるゝ腰髓注射なる法を用ふる時は治するものであります此法は熟練なる醫師に御依賴なさるがよいのです。

○聾　私は耳が聾して居りますが、腦、鼻、目等の惡くなつたのも皆耳のせいでしやうか。耳だれは如何すれば治りますか。一旦、聾したものは元の通りになりませんか。（横濱　交換手）

『答』鼓膜が破れ居る爲めに腦鼻眼等が悉く惡いとは云へませんが兎に角病源が腺病質と云ふ體格にて皆之れより來るものと思はれます耳だれの原因も同一です故に此腺病質は滋養物を充分に食し其他夫れに適應する藥を醫師より處方し貰ひ少くとも一ケ年位い服用せんければなりません加ふるに耳其物に向ひて專門家の治療が入ります鼓膜の破れたるのは人工的に鼓膜を造る法はありますが完全には參りません。

○十日位　私は本年十八才ですが月の始に月經が十日位は必ず續いてあります、が別に差支はありませんか、（上毛　とよじ女）

『答』妙齡の時には病的にあらざるも月經の長期間續く事があります故に御自身に於て他に故障を感ぜざれば別段差支へありません。

○便秘　私は冷水浴も深呼吸もやりますが、平生食を過す時は一日一回の便通ありて心が清々しますが、食を節しよく咀嚼すれば五六日も通がありません。そして常に下腹部が膨れ

て居ります、運動は一日二時間弱の徒歩です、てこの身躰を根本的に直すにはどうすればよう御座いますか。（羽水女）

『答』凡ての衛生法を御實行なさるゝも御快癒なきは慢性腸加答兒の結腸に弛緩を來し居る樣思はれます夫れには相當の藥用をせんければなりません其他每朝食前「コップ」に一杯宛食鹽水を飲用なさるのが良いのです。

○生え際は　私は生來生えぎはが惡くいろ〳〵に藥を試みたが何の効もありません、その上生えてる毛は短くてすこしものびません長くなる法はありませむか。（十九の思諸）

『答』生來の生へきわの惡しきは人工的に治すことは出來ません脱藥をお塗りなされば却りて害がありますから其儘になし置く方がお爲です。

○胸がやける　近頃どうしたのかお南瓜や甘藷を食べると胸がやけて仕方がありません、何んとか治す方法はありませんか。（岩代　きち子）

『答』胃加答兒を起されたる樣です當分南瓜や甘藷を食するを御見合せになり一定の食時の外間食を廢し胃に向つては醫師の治療を御受けなさるのが宜いのです。

○キサヾ　私は三四ヶ月前より髭の毛にいゝキサヾの樣ならのが附着して日々ふへてゆきます、全治する法をお敎へ下さい。（愛讀少女）

『答』營養不良の爲めです務めて滋養に富みたる肉食又は鷄卵等を御攝りなされ髭の毛は每朝熱湯にて御もみなされ上等の椿の油を御つけなさるべし。

○小皺、瞼の光澤　（一）額に小皺多くて見苦し、これを治する法。（二）上下瞼の光澤あしゝ、これをよくする工夫はありませんか。（十八の見習子）

『答』小じわのあるも血色あしく光澤なきも皆營養不良の結果です務めて滋養物を取り「ヘモグロビン」なる賣藥があります之れは血液を増し大に効を發しますれば三ヶ月間程持續なさるべし知名の賣藥店には何れにもあります。

○乳房が黑い　私は十六才の未婚のものですが、乳房が眞黑ですが何故でしやうか、又よき療法がありましたらお敎へ下さい（京都、御願ひ女）

『答』先天的に黑きものなれば別段良き方法はありませんが分娩後哺乳さすれば脫色して白くなります。

○經行不順　本年十八才のもの十四才の夏より經行あり十七才の夏頃二ヶ月程閉止せし故每月丸を服せしに何等の効もあらず、故に其後服用を中止せしに又引續き經行あり、されど常に不順にて先月は十四日にあれば今月は十五日、その翌月は廿日とだん〳〵おくれ、七月は十日位に經行ありしが八月は三十一日になるも未だなく白血樣のもの出て、又時々頭痛す、これは皆病的にて又不姙症の一因なりや（愛讀者）

『答』月經は元來廿八日目每に來潮するのが正規なれど一時の精神感動とか或は重き病氣に罹りたる時などは閉止し或は早期に來潮する等不順になる事があります之等は其原因を去ると全時に再び正規に復するものです然るに御質問の如く引續き不順で殊に白帶下等あるを見れば子宮に疾病があると考へます依て醫療を受けらるゝのが必要です治療に依りて全治すれば姙娠には差支ありません

質問諸孃へ

總て藥は其用法如何によつて奏効もあり亦害にもなりますから假令普通藥とても專門の智識なくして用ふることは危險ですそれ故此の欄では絕對的に藥液療法は申上げぬことにしてありますから諸孃も其お積りて質問を願ひます。

讀友倶樂部



〇規定　し本欄隨意は諸友諸嬢の御機とくに使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす雅作所本名は詳記するを字の明瞭を要す

交際を望む

〇雪の降つた知らせ　當地に今日初雪だすばかり積りました今も止まずに降つて居ます。これから寒くて少しの樂みもありませんわ、つれづれの慰みに編物を致しますから、編物の交換ひきつゞき繪葉書枝折の交換を願ひます、又お玉章肉筆ゑはがきも十一月九日。（秋田縣山本郡藤琴村太良礦山梅澤ふみ子）

〇英文又は和文　諸友の姉妹がたと英文又は和文にて御交際を願ひます（東京市赤坂區青山北町六丁目四六渡邊方　深野ゆり子）

〇亡き妹の爲に　八月二十七日本誌の愛讀者たる妹は死くなりました、私はせめてもと拙い殘りの原稿を清書して投書しました、尚遺言に依り左の雜誌を御分與いたしますから御申込み下さい。本誌、女學世界、文章世界、秀才文壇、婦人世界、ムラサキ、文藝倶樂部、少女界、玉椿、等。（富山縣西礪立野村字高田島長瀬榮）

〇四市　大阪神戸岡山廣島、四市の方に信書交換を望むくはしき事は文通の上返書確實（廣島縣賀茂郡仁方町手島政子）

〇教育家に　教育に身を委ねてゐられる御方にお願ひします私は山地に住む賤しい者ですが何卒御交際下さいまた皆樣の内に乳姉妹をお貸して下さるお方はありますまいかもしお貸し下さるお方がありますれば一寸ハガキてお知らせ下されませさすれて改めて御相談いたします（高知縣高岡郡新野々局區白石大野榮枝）

〇紀念繪葉書　諸友の諸嬢樣私は當地に擧行されました大觀艦式の紀念繪葉書に切手を貼て其日の紀念スタンプを押捺した繪葉書を數種持て居ます紀念として諸嬢樣方に分配いたしたいと思ひます御入用の御方は紀念繪葉書か御寫眞其外紀念となる御品と交換下さい先着の御方から順に好いのを御送りいたします（神戸市濱花町六十六番館橋本秀子方今村芳江）

〇年始狀の交換　繪葉書御交換の諸嬢には一々御返書いたしましたが殿方には御返しもれもありますが元旦には殿方へも御挨拶いたします御年始狀の交換御願ひいたします（大阪松島町一丁目西劍丸山マツ樣方岡本靜江）

東京、大阪、京都

〇私は兄弟姉妹の無い頭に淋みしい身のうへですどうか信實愛し給ふ御心あらば末永く御交りの程を私は立派な繪葉書等は決して望みませぬ只御なさけのこもつた御玉章て（大阪市南區數津町一〇一二番地川崎道江）〇文壇の諸姉上樣今月二日迄の御手紙は番地が違つて居りましたので著きませんかつた妾の町は左記の町ですから不相變御文通して下さいましな（東京市日本橋區本石町三ノ十七大葉方樋口清子）〇皆樣私は孤獨の身で賴る處もなく毎も一人淋びしく暮らして居ります、お情け深い諸姉上樣永久に御交際をお願ひ申します御玉章や繪葉書やリボンなり御惠み下さいませんか私は御厚情を下さいましたお方には御禮を必ず致します（牛込區水道町一〇辻方香川せい）〇諸姉樣よ何卒水さゐ濱の繪葉書一組御送被下ましたら寫眞と陸軍大演習の繪葉書一組と御送り致します何卒御願申します（京都市東洞院通佛光寺上ル下村萬次郎方川本米子）〇御なつかしき大阪の愛讀者の皆樣私は誠の友なく只本誌を誠の友としてさびしく暮しておりますなれば妾の近くに御住みなさる愛讀者と永久に御交りを願ひます（大阪東區清水谷西之町土橋仙花）〇親愛なるお姉上樣方よ妾は淋しき田舍から初めて此大阪に參りましてたれ一人たよる人なく毎日心淋く暮して居りますが折ふし本紙を拜し數多の御友だちが被居てこんなに嬉しい事はほんとうにありませんわどうぞ此後繪葉書や玉章の交換を御願ひ致します（大阪市西區英住吉西門前圓光院內秋野露子）〇初春の御ことぶき目出度御祝申納めます昨年

中の御疎遠を御詫び致し併せて本年も相變らず御交際下さる樣御願ひ申上げます（下谷三崎町六一杉谷欽子）○男子の方は一切御ことわり致します。（深川洲崎町口静子）○親愛なる諸姉様方よ久しく御無沙汰致しましたが此度此方へまいりましたから一層親しくお交り下さいそして編物や繪端書其他の交換を願ひます（本郷根津八重垣町五ノ五小林宏山）○御交りを願いました方々へ、一身上の都合により暫らくの間お交りをお斷り申します、又今までの身となりましたなら親密な御交際を願ます。（大阪松島二四戸政江子）○皆様明けましてお目出度此度都合があつて上京しましたから何分よろしく（神田連雀町三栖静子）○皆さん中で何雜誌でも送つて下さるお方には先着二名だけに妾の寫眞と美しい繪はがきとて御禮致しますその外の物でも必ずお禮致します、また東京市内のお方て淺草の邊へお出の時は必ず妾をお訪下さい、（東京市淺草區川島町四十二番地、萩原様方渡邊喬子）○本誌御購讀の諸嬢よ先づ新年にて御目出たう御座います何本年も御諸嬢様には御厚意下され新らしき玉章寫眞繪端書を送つて下さい先着五名の御方には必ず感謝狀且つ美人繪端書を以て御返禮申す可く候間御望みの方はどしどし玉章を御送り下さい。（東京牛込市ヶ谷佐内坂町三八小山方佐藤いつ子）○皆様御變りは有りませんか妾は久しく父の病氣にて本國へ歸へつて居りました何分病の介抱はなかなか用事が多くて本紙を拜する間が有りませんでしたまた是から度々御目にかゝりますから又繪葉書や書面を下さいな父は全快いたしましたから御安神下さいまし繪端交換の方は申込み下さい今までの様になんても立派な繪葉書て申込みの御方にて返り上げます但し可笑しい繪葉書の方には繪葉書て返事上げますのみてすよ。（大阪市西區川岸四番地内海方木妙草子）○私は今迄投書した事がありません是から毎月投書しますから諸姉宜敷御教導願ひます以後御見捨なく御交際下さいませ。（大阪南區高津町二番丁三四中野菊代子）

●●●●東京より四

○姉様よ妾も先月より女子文壇愛讀の仲間入をしたのよ妾今年拾九歳で縣立女學校へ通ふて居ましたけれども大兄様は海軍へ入團致し次の兄様は步兵へ入營致されました後は年老いし御兩親の事とて不幸にも遂に退學して御手助けする様になりました其からと云ふ者は忙がしくて勉強も何も出來はしません仕事の間には文壇を見て勉強してゐるのよ貴姉様よ何卒末長くエハガキや玉章の交際して下さい此度妾御禮は致します御願ひよ。（豐後東國東郡西安岐村實際寺内今村ふさ子）○御なつかしき誌友の皆々様よ玉章繪葉書を親しく御惠み下さい私は唯松風の聲波の音のみ聞きながら淋しく日々送つて居りますから何卒御交際を願ひます。（肥前國唐津町千六十三番地濱崎方濱山さや子）○記者様一同おすこやかで御座いますか、誌友の姉様方お手紙下されまして有難くお禮申上ますどうぞ又相かわらずお交り下されませおよばず乍らもお返しは致しますからさようなら。（信濃上田町二、二、五、八田村あい子）○最愛なる諸姉様よわたしは先月より女子文壇を愛讀するものであります、以後末長く御交を願ひます（相模よし子）○天龍川の岸邊より皆様に御交際を願ひます（靜岡縣岩田郡岩田村寺谷二八吉川滋子）○年は一夜にあくれども清きお交はりは千代迄も願ひます（近江淺見梅子）○廣島の信月女子様よ御住所と本名をお教へ下さいそして永くお交を（三重縣安濃郡主村大字神山十八小宮禾子）○皆様無事てお目出度！謹んで御祝ひ申上ます、誌嬢の健康と併せて本誌の隆盛をはるかに伏見の里よりいのります（山城伏見京町六丁目廣江正枝子）○親愛なる諸姉様よ妾も愛讀者になりました以後はよろしく御交際を願ます（岐阜縣惠那郡福岡村字新田吉田巖方深谷時子）○賢明なる姉君よ妾は片田舍に住む不束者よどうぞ一時的てなく長く〳〵御交際下さいな御返事は共進會スタンプの繪葉書で致し升併し男子のお方は平に御ことわり致し升わ（長野縣上水内郡三輪村上松小林久子）○誌友の諸姉上様よ不束なわたしも以後ぼつ〳〵投書致しますから誌友のはしくれと思ひ宜しく御交際して頂戴（和歌山縣海草郡紀伊村大字北島居邦子）○私は病床にて淋しく暮らして居るものですが姉上様方どうか御交際を願ひます（兵庫縣赤穗郡赤穗町上假屋町田淵鮮子）○本誌愛讀諸兄姉様、妾は極く不束な者ですけれども、一時的でなく永久的に、レター、繪ハガキ、書籍、交換を願ひます。御ニユース、ペイペ、も！妾より近江新聞か、毎日新聞、送ります。（近江神崎郡御園四二六金田富子）○御なつかしい御姉上様方に御照會致しますあたしのつい近くが日野公園でして、池には舟もうかんでをります、それから日野へータを見てやろうと思ふ方がいらつしやたら御知らせ下さい繪葉書て御見せ申ます（近江國蒲

生部日野町増治百合子）

〇皆様御手紙下さいまして有難う誌上て厚く御禮申ます 餘り多勢の方から來ました爲め 返事にもれた方があるか知れませんが惡しからず思召下さい（熊本市井川淵猪本とめ）

〇私事大阪の岡本覽子さん服部濵子さん方へ絵葉書の交換を願ひましたら絵葉書を送つてくれませんわ、ひどいお方てす 私人を欺いたりするのは厭てすから 絵葉書を交換してくださいきつとへんれいしますわ（大阪府泉南郡佐野村字市場 西阪迎 道方大引文子）

〇皆様 私は水彩畫と俳句が大好きなのよ、それて 三銭郵券御送りの方にわ肉筆水彩畫葉書な 俳句は硯とか筆とかどをゆう事を讀んてほしいと申込み下されば早速 美しき短册に書て御送り致します（近江國伊香郡片岡村大字 東野七〇山川ゆう子）

〇誌友の皆様私十一月 初めて熊本へ參りましたのお友達もなく淋しくてたまりません 何卒いつまでも御交際御願ひ致します（熊本市新屋敷水道端門池内ゆかり子）

〇誌友の諸姉様妾は草深き田舎に住む卑なき處女てすが文學が好きて女子文壇などを愛讀して居り升 何卒長へに御交際を願ひ升（三重縣北牟婁郡引本町櫻木歌子）

〇誌友の皆様私は田舎者てすが 玉章の交換を永久に願ひます（三重縣桑名郡古奥村瀬木八重子）

〇玉章や絵葉書を送てください 私は北海道函館市佐の育ちの絵葉書と私の 寫眞とて御禮をしますよ（羽後玉來町岩本中澄芥子）

〇新設者てすが絵葉書郵糸葉貸送つて下さつた方には 親縫式スタンプ付記念絵葉書を御送り致します（神戸市兵庫湊本通四丁目二十九番四八大野春子）

〇靜岡縣安倍郡大里村下島の杉山弱子様 九月四日に小説集月及び御願ひのヘガキ差上ましたがとゞきませんか今だに返事下さいませんが いかゞて御座います（香川縣仲多度郡多度津町東濱香川方にてまさ子）

〇靜岡縣なる誌友の姉君達にお願ひいたしたいことが御座います。 それは美しい詩文と共に其の御寫眞をも 誌上にて拜見させて頂き度いのてございます 御願ひいたすのもお恥しさのあまりと御承諾下さいませ、（靜岡縣の一少女より）

〇本誌愛讀の諸嬢方よ妾は幼い時から書を好んて今は 本誌の愛讀の一人てすが何とぞ改めて本年より お玉章絵葉書の御交換を願ひます（遠州周智郡宇刈村字岡三拾番地川藤敏子）

〇お懐かしき誌友の皆さん 葉書に朝來と冬がまえの式題廿句以内を書いて送つて下さい 先着十名に美麗な繪はがきを差上げます（石川縣石川郡金石町岡谷ひさえ）

〇二月青森から秋田縣田澤郡小山村藤田別莊内に來ていらしゝ藤田みどり子さん七月十五日に出したから十九日には私の寫眞着きましたてせう間もなくはがき手紙出せど一度の返事も下さらず殘念てしたけれど又九月出すと是に受取り又 不在と書いた紙をつけてもどつて來ました 青森へ御歸りになつたのですかそれにしても 一度はこゝを御覧になつたらすぐ返事を下さい待つて居ます（富山縣よし子）

〇誌友の諸姉様方よ 妾 玉章絵葉書の御交換を御願ひ申しましたら皆様から 御懇の下さいまして此んな嬉しい事は有りませんの、 何卒他の姉様方も御交際して下さいませ 妾御返事は必ず致しますわ、 此度男子の方からも玉章を御惠み下さいました方も御座いましたが男子の方とは 交際致しませんから左様に御承知下さい（靜岡縣磐田郡上阿多古村落合田口津多子）

〇誌友の皆様妾のような田舎の無學の女を愛して下さいましてうつくしいゑはがきや御玉章を有りがとう孫相變らず御交際を（福井縣北利子）

〇したわしの誌友の君よ御情あらば御 無跡おこそ …… 御なつかしい 姉様私旅行はよしましたからどうか御便りをれ待つて外よ（高知市外彤三入内山内志津子）

〇物あわれなる秋の夕私は片山里に居りましてまだ見ぬ誌友の姉様方の面影しのんて居ります 高田町直江津の御近所のお方て一時的てなく御交際下さる お方はありませんてせうか（信濃上田町二、二、五、入用村あい子）

〇妾は未だ淺學の少女てすが 本誌の愛讀者と成りました以後お見ててなくよろしく 御交際を願ひます（松本市宮村町伊藤氏子）

〇なつかしき満天下の諸姉様方よ私は 信濃の浅間山の麓にさびしき月日を送つて居る賤に 淺學者てすが御心ある皆様はエハガキ 玉章又は編物の交換を願ますどなたてもかまいません 御返事は必らず致します（長野縣小縣郡縣村本海野柳澤敬子）

〇皆さん絵端書や御玉章の交換を末座より願上げます（長野縣諏訪郡永明村加藤養鶏所内加藤芳枝）

〇御交際いたしたいのてす（福岡縣久留米市字坂川町一丁目綿梅子）

〇姉上様方よ御注意遊ばせ、私函館港汐見町二十三、 羽佐間内にて芳陽子と言ふ方へ、 新山浦島を送りましたが向ふからは送本致しません、 其の後ははがきを送りましたが又返事は來ないのてす。 如何したのてしようか、 皆様御注意遊ばせ皆様御交際願ます（呉市二川町西本通二丁目碓井清温）

〇諸嬢様絵葉書の交換を願ひます乾度お返しは致します。（愛知

御書所村服部洋江子）○何卒本年も相變らず御交際お願致します（信州東筑摩郡坂井村櫨現原安坂宮美子）○御情け深く末長く繪葉書玉章の交換を願ひますそうして又土地變れば品變ると申しましていろ／＼と變りし事も有りませうから何卒知せて頂戴な御返禮は怠りなく差上げますよ（名古屋市東區東櫻町三番戸船橋重助方楓子）○誌友の諸姉様よ私は天龍川の片田舎に住て居るものてすが何卒繪葉書を交換して下さい（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷新田鈴木このよ子）○横須賀の原田安子様に、貴姉様、あつきみ情にいろ／＼と御恵み下さいまして私何とも有がたく嬉しく厚く御禮を申し上げます早速の御禮狀さし上げやうと存じますが私は悲しい哉、御交際を御ねがひ致す事が叶はぬ身の上となつて仕まひました故どうぞ／＼御免遊ばして下さいまし、いづれまた御交際をおねがひ申せる時がくるてせうからそれをたのみに致して居ります失禮のほどはいく重にも御ゆるし下さいませ、（信濃きし子）○妾は小說や歌が大好きてありますけれ共家が貧しいので思ふ様に買ふ事が出來ません可愛想だと思召して小說や歌本を惠て下さい編物ても何んても宜しう御座います裁縫や造花を習ふによい本や高ヘタのカザリの掛方や珍らしい織り方や便利なヘタを數へて下さい必ず御禮は致します（島根縣安濃郡波根西村字大根岩谷忠太郎内りう子）○御なつかしき御姉様へ私は片田舎にすむ不束者てすが末永く御交際を願ひます（愛知縣東春日井郡鷹來村大字田樂鈴木慶治郎方鈴木ひさ）○諸姉様逆以後繪葉書交換文通をして盛んに御交際を願ひます妾はそれお何よりの樂みてあります（伯耆西伯郡大國村大字原村長谷川區逆方永江夏子）○誌友の諸嬢様よ、何卒、玉章、繪葉書の、御交換を願ひます。（石川縣鳳至郡七浦村字皆月茶木ゆう子）○諸嬢様方は不束な者てすが何卒末永く御交際を願ひます繪葉書などの御交換を願ひます（石川縣鳳至郡七浦村大字皆月高島初子）○妾は山間の伏屋に住む賤が女てありますが以後は宜敷御交際を御願ひ致しますそれから極く寫眞に繪葉書や玉章の御交換、お願ひします（信濃國上水内郡鳥居村久保田たつ子）○文壇の姉上様私の如き不束者になつかしき御玉章御送り下さいまして誠に有がたう存じましたどうぞ今後ともよろしく御まじはりの程をひとへに願ひ奉ります（福井佐住枝上町八三福岡きぬえ）○皆様の御手紙に接しましてまことにうれしく存じます以後相かわらず繪はがき玉章の交換を願ひ上げますそれから皆様の御寫眞も何卒御送り下さいれ（熊本縣飽託郡白坪中山てる子）○私も愛讀者の仲間てすから以後よろしく御交際御願ひ申ます又不用の書物御送り下されば御禮は必らず致します（大阪府北河内郡守口町久保とし子）○私は大變御無沙汰いたしました皆様の内に思想面白くかつ將來の爲の考へを御遠慮なく御玉章に御發表なりたる御方々と御交際願たく何卒たのみますよ（福岡縣朝倉郡松末村屋形熊谷つね子）○文壇の御姉様方よ妾は至つて愚者てすが、文壇愛讀の一人てす何卒以後御見捨てなく御書面の御交際を願ひます。（靜岡市屋形町十一番地岩田方鈴木りん子）○文學宗教に深い趣味をお持の御方思想の交換を御願ひ致したくなほ永久的御交際いたしたく貴御寫眞御玉章御めぐみ下さる方には必らず返信いたす事神かけ契り申候（福岡縣久留米市櫛原町中川內、神崎子）○妾美濃の山奥に住む不束者てありますが美しき繪葉書や寫眞玉章等の交換を願ます（岐阜縣可兒郡廣見村淵之上中屋敷庭內加納雪枝）○誌上の皆様御玉章、繪葉書、編物の御交換を御願ひ致します。（大阪府岸和田堺町是東方本多つゆ子）○諸友の皆様繪葉書や寫眞編物の交換を願ひます御禮には妾の寫眞に奈良地方特別大演習紀念繪はがき一葉づつ添へて御送り致しますしかし男子の御方はいやてすよ（奈良縣北葛城郡浮孔村大字勝目森田たきの）○御懐しき誌上の諸姉上様方よ妾は至つて不束者てすが何卒末永く玉章や繪葉書の交換を願ます（福岡縣遠賀郡洞北村字鴨生田福田静月子）○妾は草深き片山里に住むふつゝか者てすが眞ある御方と永久に御交際が致したうございます繪はがきうつしゑの交換も何卒（筑後三潴郡江上村原中牟田、柴田百枝）○本誌愛讀の姉様、妾は田舎の至つてつまらぬ者てムいますが、何卒御引き連れて下されませ、向は御玉章や繪はがきの交換を願ます男子のお方はお斷り申しますよ（日向宮崎町中鶴日野清子）○親愛なる誌友の諸姉様方何卒玉章繪はがきの御交換を願ひます必らず御返禮には佐世保名所繪はがきて御禮申します亦寫眞もどうぞきつと御願申します（長崎縣佐世保市花園町榊原謙次郎方中村シズエ）

●●●●● 東京より來

○諸姉様玉章やエハガキの交換を願ひます（茨城縣筑波郡小野川村大字小野崎高野民三方くら子）○妾の手許

に當地の風景風俗やアイヌ繪はがきが澤山あります故御入用の方は御寫眞か御玉章で御申込下さい一組拾貳枚入必ず差し上げます但し男子の方と繪はがき御申込は絶對に御斷りいたします(根室國利乘村河内樣方堀れゐ女)○誌友の皆々樣よ、私は筑波山を相臨る平野の地に住ーているものですが何卒御玉章の御交換を御願上候(茨城縣眞壁郡下館町東於切久保茂子)○誌友姉樣方の寫眞繪葉書玉章の交換何より望ましく思はるゝにより幸に寄せ給はれ御前は言はぬが花。(岩代國安達郡和木澤村瀬澤字堀之内川名直子)○姉上の姉上樣よ私は左の山中にて淋しく月日を送つて居りますどうぞ姉上樣よ御交際を偏に願ひ上ます繪葉書書物などの交換も願ます(秋田縣雄勝郡稻庭町石川みつ子)○去年てしたか信濃の四山ふち子樣に古切手を餘程差上ましたところふ葉書を以て先着五名に御禮をしたが品切になつたからとの御返事私は御禮を受けやうために上げたのてないからよろしう御座いますが御返事のふはがきに尊通葉書の切手のところを切り取た物を貼てありました(岩手縣下閉伊郡普根沢川小學校藤根くし子)○記者樣皆樣明けましてお目出たう。文壇が益々進歩しますのを嬉しくお祝ひ申ます。私共まで時々投書はして居ましたが以後もどうぞよろしく。それから皆樣誌上ての御交際をお願ひ申ます。(札幌鐵道れい)○誌友の姉樣方よ私の樣な拙ない者を憐れと思召しエハガキや玉章雜誌の交換を願ひます決して御情にはそむきませむよ(茨城縣新治郡牛渡村下郷佐賀由子)○おなつかしき皆々樣、私は十六才の處女てす今後どうぞ末長く玉章や繪はがきの御交換を願ひます、(秋田縣平鹿郡横手町谷口孝子)○私はお友達から音樂狂といわれる位音樂好の一人てす、今はヴァイオリンの稽古中てす、以後御交際を願ます繪葉書の交換も(岩代若松市外東イ戸小島方信子)○芝の中村しげ子樣御手紙差上げましたがもどつて來ました、何卒くわしく御住所をおしらせ下さいませ(岩代東宮町千代子)○誌友の皆々樣よ妾は霞ヶ浦のほとりに住んて居る者てすお交りを願ます亦エハガキの交換を願ます妾よりは常陸名所エハガキお送りいたします(茨城縣稻敷郡阿見村鈴木梅原しん子)○私は遠く古郷を離れて修學中の身てありますが毎日學校から歸つて來ると先つ諸々から送つて下さるお手紙雜誌などを讀むのを何よりの樂みとして居るのてすから皆樣どうぞ繪葉書や玉章にて御交際を願ひます(茨城縣行方郡麻生町新莊樣方雪江)○御懐はしき誌友諸姉樣、妾は孤兒の身て片田舍に寂しく暮らして居るものて御座います、無學な者てすが、妹と御思召して下さる御方と永久に御交際したう御座います、一時的の方は斷然御ことはり致します(千葉縣山武郡睦岡村上谷渡邊奈加子)○お情け厚き皆樣よ私は都合によつて半年ばかり交際をやめて居りましたがまたいたしますからどうかよろしく(千葉縣佐倉町新町十四番地吉田秋子)○皆樣には御變も御座いませむか、思へば我が女子文壇の斯く盛んに發達するのも畢竟は皆樣が奮つて御投書下さるからてす、本年はこぞよりも尚盛むに御投書あらむ事記者さむに代りて御進め申ます倶樂部らむも尚盛むに御交際あらん事偏へに御願上ます、嗚呼時は來れり皆へよ誌姉よ、(茨城縣新治郡牛渡村佐賀進子)○誌友の諸姉樣新年紀念として地方の繪葉書を交換なされてくださいませんか私しは日本三瀑の一なる當地會津[illegible]瀧隣の風景繪葉書を送ります(岩代河沼郡飯谷村大字[illegible]長谷川光子)○皆樣妾は草深き山里に住む無學の者てすが何卒繪葉書や寫眞の交換を願ます必ず永久的に又男子の方と雖ども神聖なる文の交換ならば致します(野州足利町雪輪町資家内松永よし)○本誌愛讀の皆々樣よ御願ひ申します私は今春までは都のスタールに居りましたが只今は極く／＼淋しき村里に本誌を此上もなき樂しみに愛讀して居りますどうぞ繪はがきやレターの交換を末永く御願してよ(下野那須郡大内村大内宮田方桂木さと子)○東京の草の家秋月樣に申します、先日は増刊澤山御送本下され難有く頂戴致しました、何卒、住所姓名お知らせ下さい外御送本下されし三十二名の御方に厚く御禮申し上候(足利町榮町一、白露)○全國の親しき諸姉樣方よ繪葉書や小說の交換なして下さいな外若干名には野山名所繪葉書もえて御返禮致しますさよなら(千葉縣東葛飾郡福田村大字上三ケ尾飛卷げん子)○今年も相變らずお心ぞへのほどお願ひ申上ます(千葉縣匝瑳郡[illegible]町加瀬つる子)

讀者通信

○京城より　記者樣御變りございませんか、京城はめつきりおさむくなりました去年の初雪

は十一月七日で午後からまばらに降りましたが今年は昨日(八日)の朝から、初霙が降りました、午後からは「あられ」と雨と交りて降りました今朝は道路もすつかり氷つて居ました、今夜の投稿を書きますに硯の水が半氷になつて墨がうすくなつて仕方がございません、のよ(ちゑ)
●●●

○紀伊より　兼て御承知の通り紀伊は蜜柑の名産地、其うちにも私の地方(有田)は本場です、有田は東西十里餘南北三里餘細長い土地です、殊に私の生地は其まんなかで四面山で取り圍まれ、山々は凡て蜜柑の樹が植附られて、目下綠樹に黄金の帽子を被らせた樣です、男子は山へ取り入れに行き、女子が其蜜柑の上下を撰り分るのです、それから箱につめて船に積出します、山では花島と云ふ長い／＼節のうたを歌つてゐます、其一つ二つ

今度くゝ時もてきておくれ有田蜜柑の枝折を

有田蜜柑の枝なりよりも殿の御手取り袂み取り

又他の人は

有田よいとこ蜜柑どこ茶どこ嫁やりたや婿はしや

と歌つてゐます、十二月一日頃から二十日頃までは取入盛りですから記者さま皆さんをお連れなさつて御見物に入らつしやい何処の誰人がお出になつても蜜柑拜見と申せば何地の山へでものぼられます、私の宅にも少々あります、御案内いたしますから入らして下さい(南紀、駒愛子)

▲面白き通信を募る、特に此欄に記載を望まるゝ方は「讀者通信」原稿と附記されたし、其地方の近狀を報ずるなど面白からん

品物の交換

○寫眞繪物の交換をひたすら願います、寫眞を送つて下さつた御方には妾の寫眞か面白い小說御望のを送ります、(熊本縣鹿本郡中富村下分田富丸しえ)○誌友の姉樣妾は内地をはなれて本島に獨り淋しく暮して居る者でありますそれ故何卒かお寫眞の交換して下さい先着九名の御方には總督府發行の始政式紀念エハガキ臺中式場スタンプ付きのを一組づゝ添へて御返禮致します(臺灣臺中廳大肚下堡塗葛堀庄岡村君江)○本年も相變らず繪物お寫眞お送り下さいお返し致します男子の方はおことはり致します(信州東筑摩郡坂井村字宇權現原安坂富美子)○皆樣のお寫眞繪物美しきリボン梁造花珍しき京花及び美人使用ゑはがきひじつき其他何んでもお交換を願ひます、妾の寫眞も澤山うつしてありますから、お寫眞を下さつたお早い方十名樣に妾の寫眞に婦人世界一部づゝ添へてお送り申します、(秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山藤澤ふみ子)○妾は友もなく只だ淋しく本誌を愛讀するのみ願はくば同情を表し給ひ何卒諸孃の寫眞を以て下名の所迄申込て下さい先着九名に限り妾の寫眞と霞浦名所繪葉書並に繪物を以て返禮致します(茨城縣稻敷郡阿見村大室舟脇三十番地大嶋禮枝子)○誌友の諸姉樣よ妾も去る月より本誌愛讀者の一人になりましたから何卒繪はがきや玉章の御交換を……別けて御寫眞を送つて下さつた方には繪物でも、見惜き妾の寫眞でも、御望のもので返禮致します、(上毛群馬郡豐秋村字石原木暮やつ子)○皆樣方妾は本年秋季にパイオラーを播種致しましたら大そう生來ましたパイオラーと云ふのはパイオレツトと最大輪三色菫とを花粉媒助法にて改良致したもので花形パンジーにそつくりで芳薫はパイオレツト以上でございます　お好みのお方は一錢切手六枚にて二本づつ送りします尚各種草花苗か種お持ちの方は交換をねがいます(佐賀縣小城郡小城町蛭子町川尻貞子)○お懐しい諸孃樣達よ何卒淋しな私にお手製の栞をお惠み下さいませんか御返禮は自顔繪端書か上等繪端書又は小說等で必ず致します(信濃東筑摩郡麻績村宮澤澄子)○御情ある諸孃よ何卒シナリヒツ突寫眞等を御惠み下さい御禮には上等の繪葉書に妾の見にくい寫眞を添て御送り申上ます。(和泉國泉北郡南池田村大字萬町高橋雄子)○誌友の御姉さま方キヌハンケチ御送り下さつた方には種々の雜誌に美しいゑはがきそへて御送りいたします御手紙もそれからお寫眞も御送り下さい(常陸國久慈郡四小澤村落合海野きん)○四方愛らしう諸孃樣妾の手許に、洋琴、蹴擧、テーキン、其の外色々の雜誌などあります。以上御望の方は、絹じクツキ、上等繪葉書、上等エハガキ掛、絹寫眞帖等で申込下さい。必ず御送りします。(伊豆賀茂郡安良里村□方山地綾波)○私の手許に東京神田川錦樂町ノ資生堂藥局にて新製の最新式月經帶(月の帶)甲種未使用なのがありますから皆樣に御ゆづり致そうと思ひます御望の御方は相當品ノ御交換いたしませう。(常陸土浦川口町高橋しん子)○諸孃樣よ妾は印旛湖畔に住む初歲からの愛讀者です極美しきひじつき栞御送りの

力へは相當の本か繪葉書で乾度御禮致します御玉卒の交際も願ます（千葉縣佐倉新町小山方吉樋安子）

圖書換讀

○紅葉の遺族　姉は故紅葉樣の崇拜者で常に其御遺族を慕つてるのですが、新天地初號に委しく御遺族の事が出てるといふので頻りに見たいと申して居ますから、皆樣の内でもし初號お持ちの方は御送り下さいませんか。相當の禮を以て必ず御禮致します（羽後酒田寺町菊池りう子）

○晶子の歌集　皆樣の中で、與謝野晶子先生の歌集お持ちのお方は、十日程おかしくださいませんか、お禮には繪はがきを添へてお返しします、又妾の二十八宿、不如歸の歌、岡歩集、お入用でしたらお貸しします。（福井縣丹生郡吉野村金田片山千里）

○文集と文壇　女子懸賞文集第壹輯と、十月一日發行の、女子文壇、御不用の御方が御座いましたら、御ゆづり下さい、各一冊（長野縣小縣郡武石村ヒ本入沼内とし子）

○辭典　皆樣の中に東華堂發行の賀川和英新字典御不用の御方が御座いましたら何卒お恵み下さいませ、私の英和新字典、最新英和辭典の二冊か又は國語漢文辭典其他不用書にて乾度御返禮いたしますから（備後尾道局區内吉和村一〇五藤田方朝江）

○俳句の書物　妾の手許に鳴雪俳話。老梅居俳句問答。子規の俳句問答。子規隨筆續編。紅緑の俳句新註。俳句新註。俳句修辭法。碧梧桐の俳句初歩。碧石編季題辭典。蕪村句集講義全四冊。蕪村遺稿講義全四冊。花紅葉等がありますから他の俳句の本や小説御持ちの方はどうか御交換してください（青森縣西郡水元村秋庭方花代）

○文學書と教科書　皆樣の中で小説夏小袖少女の戀皆我（二冊）一葉のたけくらべ心の波をお持ち方は私の御稻水滸傳、女學世界、婦人世界、少女界、女學校篇報、文壇の光、中央文壇、秀才文壇ハガキ文學、裁縫教科書、家事教科書、日本國文典、女子中等國語讀本などそれに美しいリボンを添へて差し上げますから送つて頂戴な女の方に限ります（伯耆國伯郡高等女學校内長谷川謙子）

○明治風呂　何號か忘れましたけれども文庫の附錄御作の明治風呂 女湯の出て居る號お持ちの方は御送り下さい御禮致しますから（大阪松島二四川山張付四戸政江）

○諸姉樣　妾の手許に小説不如歸と女子文壇秀才文壇文藝倶樂部冒險　女學世界が有る諸姉の手許に金色夜叉か寛風懸風か己が罪と交換したいのユーハガキも送て下さい御返事します（新潟縣佐渡郡加茂村代田村國之方貞子）○記者樣及び諸姉樣方よ、明まして御目出度、今年も相變らず御願申ます、さて皆樣私は、金色夜叉、が讀みたいのですが御持の方は下の本と御交換下さいな、銀山王、航海譚、奇人の寛法、支那奇談、立身膝栗毛、世界冒險少年譚、海國美談、不如歸、滑稽德川明治史、武者氣質、女の一心下、肉彈、黑木爪百話其他色々あります故御望みの方へ美くしき繪葉書を添へて差上ます、そしてね私雅號を見竹と致しましたの（呉市二川町通二丁目座井見竹）○妾の本箱に小説月に立かけ、（前後）渡邊作山（前後）戀ゝ戀、新小説、秀才文壇數冊、婦人世界臨時増刊（化粧かゞみ）其他少年世界及少女界少年界数十冊ありますから御望の御方は、左の本と交換して下さいませ。乳姉妹 寛風戀風、金色夜叉、土佐日記、戀の行末、不如歸、少女の煩悶、亂れ髪、徒然草、緣不緣、女子文壇本年一月より六月まで、右御指名の上御送り下さい。御返送は着次第しますから（岐阜縣可兒郡實見村字淵之上中島敬方加納舞舟生）○妾の許に金色夜叉全部、伯爵夫人、妙な男、心の涙。其他數種の不用小説があります、皆樣の内にコブシ、寒風戀風、雛子、青春御持ちの方は交換をして下さい（鳥取縣氣高郡勝部村大字八束寺村池田正由方桃枝）○諸姉樣の御許に不如歸、百合子、思出の記、雛子、夏子、和歌入門、己が罪、宮海等御持ちの御方は御ゆづり下さい（茨城筑波郡小野川村大字小野崎中山けい子）私の小説、伊達政宗と外、文藝倶樂部とどなたかの青春或は乳姉妹とおとりかへ下さる方はありますまいか。繪はがきも添えます。（青森縣八戸町下組町山田益子）○手許に、金色夜叉合本撫花戀と戀二人女主新曲浦島乙女の操女雛族上下月魄上下コブシ上中下心の波上下女學生繪師の戀上下花あやめ吾輩は猫である上中下 語らぬ戀いさゝ川夢の外小説深山ありますから、諸姉樣の中でハイカラ令嬢十七八 乳姉妹血潮微笑夏少女の煩悶美人草心の影犯さぬ罪有情無情青春上中下女の秘密不如歸寛風懸風 上中下多情多恨女裝探偵戀ざめ自然主義等お持ちの方は何卒御交換下さいな又

お送りの絵葉書ポンヱハガキか皆様のお寫眞を添へ御交換下さらば嬉しうございます（秋田縣山本郡藤琴村太良鉱山梅澤ふみ子）〇女學校中にても小説狂と言れる程です若し皆様の内に終不絶思出の記歌風戀風新婚旅行もつれ髪怨の饗新婦の秘密等お持ちの方は妾のハイカラ夫婦戀か夢か露か戀の戀新不如歸露子深山の夫婦等交換して下さい尚は玉草の交換も（茨城縣稲敷郡阿見村大字舟島坪三十番地大崎雅枝子）〇皆様の手元に、歌集新聲 同明暗同くさぶえ、作歌自在、発句十萬集 浜口白羊先生発長詩近藤西殿 其他新詩雑誌数十册ありますから、堀内新泉先生著人の兄か、風葉先生桐汀先生の小説と交換下さい、希望に應じて下さる方は下名まで絵葉書で御一報下さい、 相當の絵葉書で返事は致します、男の方でもかまひません。（上毛多野郡小野村字砂原村飯島泣花）〇先に御交換下さいました方に御礼申し上げます 又御依頼申し上ます。 太陽の増刊明治名著集お持ちの方はふた葉に文章世界二册添か種六の入町居屋と交換していただき度ムいます。もう一つ漂流記人外魔境武侠艦隊がありますから無人島小年水滸傳冒險記と交換して下さい然し探ね交書で申し込て下さい。 又探検世界及ムラサキ二十册許り不用てすから寫眞なお送りの方には一册づつ御掛けてお送り致します（香川縣綾歌郡坂出町田尾北山方草方とし子）〇私は賤俳び々歌だの大和田建樹先生著の女子文の林だの其他雑誌澤山持つて居りますが藤懐の内て綵子とか乳姉妹とか家庭小説と御交換下さいませんか（越後寺泊町作吉丸山叙子）〇なつかしの姉様方よ、私の手許に實録少年、数島、小學世界、大農園、月華、少年界、秀才文壇などの不用雑誌があります皆様の内に盆栽仕立秘法、菊盆栽談、栽桑新論、生殖衛生論、書道秘法、家庭料理法等の實物御持合せの御方は何卒送つて頂戴前次第に迅速に差上ます（新潟縣佐渡郡野村栗野江谷川かつら子）〇親しき皆々様よ、文章世界、新林文 女學世界 婦人世界、懸賞文集 美文作法、玉藻、あはれ 春日影 家庭小説 姉百合、女子文壇、心の花女學生、文學倶樂部、其他いろ〳〵の小説や新雑誌等御古しても宜しくありますから御返送して下さい、御礼にはハンカチフー絵葉書東宮殿下東北行啓紀念品等を送りますよ。（福島縣伊達郡福田村羽田字宮前三浦春子）〇おなつかしき姉様方へ今私の手許にコブシ前編中編己が罪続不絶内彈新誌は 文庫其外色々有りますが皆様は中夏子節子ハイネの詩青春不如歸歌御持ちの御方は何卒交換して下さい（長野縣中野大町下盛坂町日岡村岩江）〇私しの手許に女學生の栞、をんな、女學講話、東京の女學校、少女鑑、女學世界、戦事文學、第十六丁册御さいます故思出の記か助ばれか編物て御申込み下さい早速御送り致します（備中國吉備郡乃妹村竹田房說）し妾の手許に月魄 己が罪、夏子 節子、伯爵夫人、黒風 母の血 母の紀念、春る人、乳姉妹、寶風戀風、町の仙女、心波、小女の戀、多情多恨 世聞 花あやめ長恨、露子、夏人の自白、芦分小舟、白菊御殿 小桜、海陸大王、空詩人、立志兄弟、杉の花、不如歸、後の不如歸、小説家新ナポレオン、島の女、女恋條、桑弓、城山嶽、ヨ人娘 出口柳、捕鯨船、自由結婚、海の冒險其他にも新聞小説冒險談等もございますおのぞみのお方は交換下さいませ皆様方も目録としておしらせ下さい（佐賀縣小城郡町横丁田尻新聞館なほ子）〇妾しは雲深い山里の冬を皆様の御もとに有る小詩園、不如歸、みだれ髪、乳姉妹、戀人、朝晴、小猫、文藝倶樂部、新文林の一卷など私の手許にある、日本少女倶用、夏子、平家物語、小華族、宮海、かぐや姫、日の出島六册、伯爵夫人、少女界などと交換したいと思ひます又は、お寫眞、栞、リボン、スメンプ附絵はがき給ひし方に差上げます。（信濃下高井郡佐郷村夾新田青木幸子）〇玉虫刷ばれ第一懸賞文集 其他和歌俳句書類御不用の方がありますれば御送下さいませんか 御礼にはゑはがきを差上げます（松山市三番丁百六十河野みさわ）〇誌上の御姉様よ御手許に一葉全集、 ハイネの詩、自然と人生お持なさいますれば私の「婦人世界少女界少女世界少女の友幾册なりとも 又は小説「古王宮、日出島人の運命、新聞賢子、人か鬼か、女波男波、思出の記、女心、」等の中御望みの本御指名下され御姉様の御本を御送り下されば三日より五日までには必ず御返事御礼差上げますから御願ひ致します（香川縣仲多度郡東滋香川方にて雅子）〇私の手許に不如歸、想夫憐、自然と人生、キイツの詩、ふる郷、青葉集、雅子、晴小袖、露、寂風戀風 暗然、秋、青山白水、思出の記 女子懸賞文集等ありますから、どなたかお持合せの金色夜叉か天うつ波か青春、（夏）の卷かとお交換下さいませんか、 外の本てもかまいません、 先着の方にはみにくき寫眞に添へて當地の名所絵葉書お送り致します （静岡市水落町二の二四根岸方中村静子） 〇皆様の内に不如歸

天うつ浪、玉むし、我が輩は猫である、一葉全集、金色夜叉の歌、菫菊白菊、伯爵夫人、枕の草紙御不用の方は妾の朝晴白ゆり、紅葉全集第六、脚本金色夜叉、不如歸の歌、空中大飛行艇、女學生氣質、詩人の旅行葉末集、明治才媛文集等と御交換下さい（三重縣飯南郡柳川村野原奥川邦子）○手許に下の不用書あり、女子教育裁縫の數、女子作文のしほり、淑女美文集、婦人世界、女學世界、秀才文壇、少女世界、少年、日本少年、內地旅行唱歌、假名唱歌夕飯、お伽話、散歩唱歌春の卷。以上・ハイネの詩、思出の記、土佐日記其他古雜誌栞などと御交換を乞ふ（静岡縣磐田郡二俣新町御開方郁江）○私の手許に左の不用書あり希望者は自己の寫眞にハガキを添へて申込まれ無代進呈す、女學世界、新小說、不如歸、夏子、銀山王、歸雁之譜、美文資料、造花機論、青海、新緑、秀才文壇、姉と妹、言文一致文範、房州名所繪葉書七十一枚（千葉縣安房郡山木村上小原伊丹花子）○女子作文資材、多情多恨、式部小路、寒風戀風、女學生の栞、處女の衛生、戀學生、ハイカラ令孃、眞人の自白、十七八、自然と人生、夫さだめ、戀と戀、女學生健康法、紅葉新作抄、女性訓話不用ですから新作文辭典、新文章話法、婦人の日常生活法、少女の戀、人生の眞相、女殿下、若き愛、書信文大成、日常の書翰、手紙大觀、男女衛生寶典等にて御申込下さい直にお望みのを御送り申ます（備後國尾道局區內吉和村一〇五藤田方にて楠江）○諸嬢様の內に寒風戀風御持ちの方がありますれば貸してください讀終り次第御返しいたします（岡山縣邑久郡朝日村大字西片岡桐本東吉方關本悅子）○諸姉様方よ妾も十二歳より讀者の一人と成りました以後宜しう妾の手許に不如歸一冊と他の雜誌が有りますから皆様の御手許に金色夜叉か寒風戀風と交換して下さい（佐渡郡夷町藤浦田村方貞子）○皆様の地方の新聞と妾の地方の新聞とを交換致したう存じますから御望みの御方は申込んで下さい本妾より先に送つても宜しくおりますからよ（福島縣伊達郡梁川村字宮前三浦春子）○皆様の御手許に美文資料、青海國語作文中辭林、川晩、一葉全集、青春　紅葉全集のいづれか御不用でしたら私の日本文學全書第二編、銀鈴、初根草、文かきぶり、秋天地、女學世界女子文壇、大學豫科國語讀本、其他新雜誌數十冊と御交換下さい御望みの本と雜誌つけて差上けます、（千葉縣東葛郡古澤村石野郁子）○諸嬢様の內で邦文日本少女の米國日記、不如歸の歌、小波新戀の落葉樹、夏子、夏花少女、和歌露の塵、花守、新撰歌典、テニソンの詩其他生花や歌の書物の不用の御方は私の一葉全集不如歸思出之記食道樂（春秋）女學世界ハガキ文學などゝ交換して下さい短冊もれ（千葉縣山武郡成東町成東並木茂登子）○嬉しい誌友の御姉様妾の許に戀學生、白露女（二冊）奇美人、野のゆくへ、多情多恨、戀無情、天うつ浪、青春、新夫人、はるさめ集、殘し獻、風葉集、にせ紫、少女の煩悶、紫苑（二冊）。又美文では田山花袋美文作法、小森松風美文作法、高野美文斷片、美文指法、鹿驕松、美辭寶鑑、美文組立法　美文言葉の泉、美文精英、美文傑作其他文章新辭典、言文一致文範、短文軌範、敍事文作法、雜誌では秀才文壇　婦人世界、女鑑、女子文壇、其他諸雜誌の臨時、定期增刊など求めて只今不用になつて居りますから御好みのお方は何卒御交換遊ばして下さいまし（常陸國笠間町在大淵坊はな子）○どなたか文藝倶樂部増刊心中物語お惠み下さる方はございませんかお禮は他の雜誌（文章世界中學世界女學世界新小說其他）又は繪はがき十枚程差上ますその他どんな古い雜誌でも御送り下すつた方にはお禮します（駿河國庵原郡庵原村天野ふじ子）○皆様の中本誌七月九月號文壇の光　婦人世界七月九月十月婦人の慰十一月分御不用の方あらば直に御送り下さい御禮には土佐風景か代價か御好のものにて必ず致します　繪葉書の交換も御願ひ申ます（土佐國高岡郡佐川町牧野たき子）○妾の手許に金色夜叉寒風戀風天地有情自然と人生、瀧口入道其他二三冊の不用書がありますから諸姉様の内に青春黑潮其他何本でもようございますから御交換して頂戴な　（岩代國河沼郡飯谷村字藤笠間松江）○共益商社の（長唄、清元、常盤津、樂譜）又は（マーチ集）御不用の方は私の（勸進帳、越後獅子、中學唱歌、國歌集、須磨曲、離れ小島、露營の夢、バイオリン教科書、バイオリン新曲）其他色々ありますから御好みのと御取換え下さいませんか（岩代國若松市東木戸川島方信子）○誌友諸姉私の手元に日本少年、少年界、成功之少年、秀才文壇、中學文壇、中學世界、文藝倶樂部、學海山其外不如歸、新不如歸、後の新不如歸、ハイカラ朝顏日記、露子、等がありますから何雜誌何小說にても宜しいから御交換して下さい、（埼玉縣兒玉郡賀美村勅使河原關口瑞月）○諸嬢様よ私の手許に家庭小說。嫁と姑。魅戀魅歌。寛の池。ふところ日記。明治戰記。戰爭文學。キッス特集。諸花一人智。茶の湯と生花文藝倶樂部。女日用かと

み・女學生の氣質・などと交換してください先著三名の御方には九十九里繪葉書を差上ぐ（上總山武郡白里村四天木藍野きよ子）○皆樣御正月そう〳〵ですけど私は左記の書物が不用ですの皆樣御入用でしたら皆樣の御不用の書物と交換して下さいな現代の代表的人物、女殿下、戰學論書、偉大の母、終りに皆樣に御交際を願ひます（近江國蒲生郡内大路村仁本木河治百合子）○私の手元に女子文壇文藝倶樂部文章世界新潮新聲新文林、中學世界、中學生、東風草紙、明星新誌小琴、小說等ありますから御厚意の方は寫眞、栞、美人繪葉書にて御申込下さい早速御送り致します何卒繪葉書雜誌の交換も願みます（近江國伊香郡片岡村東野七〇田川ゆう子）○お懐しき皆樣妾は女子文壇、女學世界、婦人畫報婦人世界など愛讀致たして居りますから何卒皆樣方の秀才文壇、文藝倶樂部、女鑑、ハガキ文學など丶毎月御換讀下さいませんか、一冊だけでも宜しう御座います、（高知市樅形三八内にて山内志津子）○姉樣の手元に、不如歸、入昕長屋、女學世界、寫眞畫報、日本外史、今昔ものがたり、お話ならば何卒おゆづり下さいな、お禮としてはいろ〳〵の雜誌及び繪葉書を差上ます（水戸市上梅町一番地細引まさ子）

記者と讀者

○記者樣にお願いたします俳句和歌小說其他文壇上の作物を載つて居ります古本屋御地に御座いませんか若しありますなれば二三ヶ所でよろしうございますから町名店名知らし下さい（とし子）（記者曰、古本屋は餘り澤山あるのでお知らせ出來かねます、寧ろ在京の御知人か、誌友の方に御頼みして何か調へて買つた方がよろしいでせう）○一寸、御伺ひ申ます、私は和歌ばかり投書したいと存じますが葉書ではいけませんか（しと女）（記者曰、半紙にして下さい）○若狹山田小波さんに、御親切に御知らせありがたう○周防欧かれし女さんに、それは何うもお氣の毒でした、仰せの賞與御もつともで○大阪、吉川紫見、千葉、双陸子。相摸、尾崎みつ子。近江、かすみ。秋田、大山愛子。汀森奕・牛込、佐藤いつ子。靜岡、鈴木武子。府下、みどり。岩代、たつ子。美濃、林東雲。廣島、田坂芳溪。京都、園田すゑ子。靜岡、丸女。土佐、紫子。沼津、ふじ子、ふみ子。備中、原こみれ。原ゑつ子。青森、本庄なほ子。近江、紐野その子。熊本、ゆかり、政子、玉谷邦子。名古屋、愛子。伊豆、新井紫子。以上の諸嬢から早くも新年の挨拶又はいろ〳〵用事を尋ねられましたがお返事はいたしませんけれど確に拜承しました（記者）

年賀狀に就て

例年諸嬢より年賀狀をたまはる數は隨分澤山てすが同じく年賀狀を賜はるならば多少其文飾又は趣向は新思想新工夫のあるものが望ましいのです如何なる年賀狀にても送つて下さつた方の御名は凡て次號の紙上に特載して御禮を申しますが其内で特に優れたものは其文章を紙上に載せ又意匠（例へば肉筆繪葉書）の秀逸なるものも世間に紹介いたしますから務つて御送り下さい（記者）

但し御恵贈の年賀狀は凡て紀念として本社編輯局に保存いたします

問合せ

○東遊千鶴　御生れは鹿兒島京都同志舍御出身にて日清日露兩戰に看護の任をおびて海外に行き給ひ今は山科の神官に嫁せられしとか聞く御存じの方は住居を御知せ給はりたし（滋賀縣甲賀郡佐山村岩田方臥忘詩）

○小林露枝樣　相州熱海の方です、今は都に遊學して居られる答です、現住所を紙上でお知らせ下さい、御禮は謹つていたします（近江、潮子）

個人消息

○猫はな子　常陸笠間町在大洗に移轉す

○井澤菊江　八王子に在りしが上京して小科菊江と改まれり

注意

四卷十八號の分　美濃、立川花子。俳句人「蝶一つ」は文章世界二卷十三號の地「蝶一つ手取りにしけりな」を燒き直したるものなり。

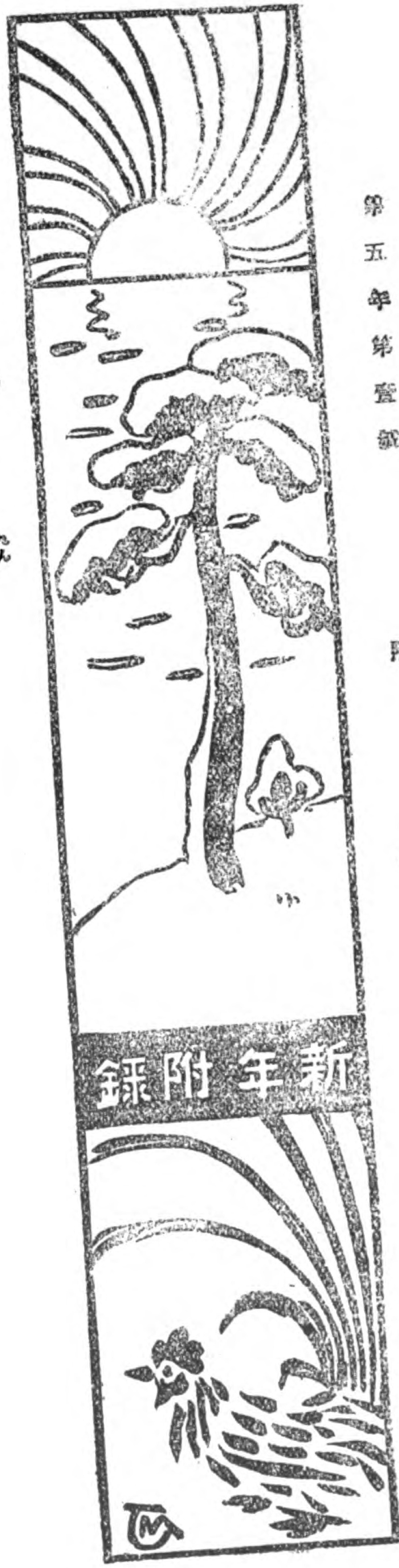
十六號の分　水戸、中川靜江。スケッチ天「朝寒」は五月以來の中學世界か（又は草の世界か）の、本郷の山田貫のものを燒直したるものなり。

同號靜岡、小尾谷良子、俳句人「足もとを」は、すみれと言ふ地方雜誌より。剽竊せしものなり。

十四號の分　尾道、強子。實川文地「放浪なる從弟へ」は中學世界八ノ十號伊藤聖柴の「放浪なる東都の友の許へ」を剽竊せしものなり。

右何れも剽竊とみとむ。

今回注意をあたへられし諸嬢は秋田すみれ子、雨蝶女。神田、MT生。信濃、穴さがし女。



縄暖簾

眞山青果

その晩に限つて、何んの爲めだか判りません。私は妙に氣を引かれて、横寺町の或る居酒屋に飛込ました。十月も末の事でした。寒い秋雨がシト〳〵と降つて、足先が痛むほど冷たい晩です。横吹の雨に膝から下がグッショリ濡れて、その氣味の惡るさと云つたらありませんでした。

十一時過ぎです。もう大抵の家は大戸を下して、町は眞暗でした。

私は別に何處と云ふ目的はないのでした。仕事に疲れたから寄席を聞いて、心寂しく小日向の家に歸らうとする途中なのだが、その居酒屋の前を通ると、眩しいほど明るい瓦斯燈が街道に射付けて居る。賑かさうな話聲も聞える。一つはこんな所も見て置きたいと云ふ好奇心もあつて、ツイ何氣なしに中へ入つたんです。

客は然う立込んでも居なかつた。職工らしい陽氣な連中が二組居る外には、小商人らしい二人連れとか、

低い醤油樽に腰掛けてチビ〳〵やりながら、何かヒソ〳〵商賣話をして居た。

私はズウと見廻して、隅ッこの方に唯一人默然と、おゝみづッて居る男の直ぐ傍に陣取りました。その男は些いと見の如何にもヂヾむさい、年寄染みた男で、この頃はやる泥パイプとか云ふ素焼のパイプで安煙草をパフパフやつて居ました。前にはお銚子が六七本行儀よく並んで居ます。小鉢の酢のもの、小皿や煮肴が出て居たが、それへは箸を付けた模様もありません。そして、女中なぞに注文する様子が、如何にも知己らしく、云はゞまアこの家の御定連の一人だと云つた風を見せて居ます。

年の頃は四十三四てせうか、頤髯がモジャ〳〵と薄穢なく伸びて、頭の天頂はツルリと禿げて居る。垢光りに襟の光る薄穢れた紺絣の綿入に、同じ羽織の肩先に鍵裂のあるのを着て、ダブ〳〵したメリヤスは掌に押覆さつて居る。盃を取上げる度にそれをグルリと塞し上げる。指の爪は真黒てあつた。

私が傍へ坐るのを見て、その男はジロリと私の顔を見詰めたが、やがて、

「おい、何うした。」と落付いた錆のある聲て言掛けます。

私が不思議さうに見返るのを見て、又云續けるには、

「忘れたと見えるね。」と云つて小さく笑つる居る。

「君を……誰方てしたな。」

「神谷だよ。」

私はハッとしました。吃驚もする筈てせう。仙臺の東北學院に居る頃、同級生てあつた神谷元策と云ふ華族なのてす。

「や。」と私は思はず渠の手を握りました。餘りの意外に聲も出ませぬ。

「そして、君は今。」

「何うして居ると云ふんだらう。何うもせんさ。御覧の如き風來坊さ。」と云ふ。投出した調子てす。

「て、今の職業は。」と押して試みて見ました。

「御覧の通りさ。」

「ても、毎日。」
「毎日〳〵同じ事さ。」と相變らず煙草の煙を吐いて居ます。
渠は盃の底でコト〳〵と食卓を叩いて、
「おい、熱くして二合。」と女中に命じました。
「二番さん、お銚子のお代り。」と女中はそれを帳場へ通します。
「へえ、二合。」
注文の酒はプンと烈しい香を立てゝ、私共の前へ搬ばれました。
「小さいものは面倒だ。おいコップを二つ持つて來い。」
コップを取寄せて、それになみ〳〵と注ぎました。酒は卓上に溢れ流れて、タラ〳〵と土間へ落ちました。
神谷はそのコップを取つて一息にグッと飲り付けました。口髯に付いた雫を平手で拭取りながら、
「そして君、久し振りて會つたんだ、何か新しい珍説てもないかね。聞かしてくれ給へな。」
「然うだね、別に新しいと云つて……新しいと云へば、世間のもの總て新しいんだからね。」
「理屈は止し給へ。そして、君の職業は何んだね。」
「相變らず意句地なし、繪を畫いて居る。」
「繪かきか。そりや面白さうな商賣だ。」
「何か面白い事がありますものか。それよか、君その後の經歴を聞かしてくれ給へ。」
「僕は今も云ふ通りさ。」
「だつて人間だもの、何か爲ないと云ふ法はない。」
「まるて市勢調査だね。僕アね、御覧の如き浪人よ。全體、人間は何故に働くんだ。僕にやそれが判らないよ。君、働くのは何んの爲めだ。働くのは誰の爲めだ。自分の爲めか他の爲めか。無論自分の爲めだらう。同じ自分の爲めに働くなら、寧そ自分の快樂の爲めに働いた方が氣が利いて居る。僕ア僕の快樂の爲めに活きて居る。」
とパイプを髯の中に突込んで、また新たに酒を命じ

た——

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇 第五年第三號 臨時增刊

新美文

來る二月十五日增刊

現代の若き女子は如何なる**感情**を抱きつゝありや又如何なる**趣味**を待ちつゝありや之を窺はんとする者は本書を見よ或は**家庭**を材とし或は**自然**を描き或は**人事**を叙ひ或は**都會**を寫す百人百樣の**觀察**は讀者をして送迎に遑なからしめむ**選擇**の嚴正にして**批評**の痛切なる蓋し**最新式**の**文章**を學ばんとする者には**無双**の寶典たるべし既に出版したる『文壇の花』、『文壇の光』に一歩を進めたるものなり**附錄**としては**當代名流作家**の美文十數篇を收め以て文壇の春を飾るべし請ふ刮目して發行の日を待たれよ

頁二百四十 口繪 彩色優美 價貳拾錢 郵税一錢半

最廉無比の懸賞文書

女子文壇社編輯局選評

女子懸賞文集 文壇の花 ●全大判二百四十頁 價二拾錢 郵税一錢半

女子懸賞文集 文壇の光 ●全大判二百四十頁 價二拾錢 郵税一錢半

女子懸賞文集 第二 ●全中形五百頁 實價二拾錢 郵税六錢

世に作文書多しと雖も、妙齡花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 (振替貯金東京口座七貳九番)

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

國學院學士 小森松風先生編著

東宮侍講本居豐頴先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌

女子美文作法

全一册大判二百卅頁 賣價貳拾錢 郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を摸範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

理學博士坪井正五郎先生序文
山田美妙先生序文

女子言文一致文範

全一册大判二百卅頁 賣價貳拾錢 郵税四錢

現代の文章は殆んど言文一致に限られんとす、言文一致體の文章を學ばずして現代の文章は作り難し、此書最も選擇に注意したれば言文一致の文範書として殆んど完全せり

報知新聞記者
中村木公君著

實地精査

女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

賣價拾五錢 郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

(G四)

出版元 東京市京橋大鋸町 女子文壇社 (振替口座東京第壹貳七九番)

賣捌 全國書店



「僕ア最う自分の運命を決めて居る。何うともなれの主義ぢや。生きる、死ぬる、まア何うでも好い。僕ア何も思はん。僕ア斯うして明日が日死んでも現世に執着が無い。若し思出すものがあるとすれば、まアこの居酒屋ぐらゐなものさ。だから、僕ア何も思はぬ。妻もない、子もない、心配もない、悲嘆も無い。何も無い。何も無い。」とグビリ〳〵盃を乾して居る。
「然し君、毎日斯うして、盃中の人となつて居る譯でもありますまい。」
「豈圖らんや毎日です。僕ア同志社を出て以來、ズウと斯うして居るんです。」
「だッて君。そんな自暴自棄は不可ません。人間の踏む道ぢやない。貴方だつて何かしら爲殘したいてす。人間は生れた以上、世間に自分と云ふ印象を殘さずに居られますまいが。」
「所が僕だけは然うぢやない。まア聞いて下さい。僕一日の日課は斯うだ。先づ毎日起きるのが正午てす。顔を洗ふと直ぐこの家へ來ます。朝飯を輕くすまして、直ぐ一杯やる、三四本をチビ〳〵倒す間に、彼此して夕方になる。晩飯、また酒だ。夜の酒の味は格別だて。て、十二時過ぎまでズウと飲續ける。その間に店を仕舞ふ時間が來るから爲方なしに自分の家へ歸つて冷たい蒲團に潜り込む。さて何が辛らいと云つて、この家への御歸館ほど辛らいことはない。何んと云つても、僕ア學校を出て以來、十年のうち六年はこの居酒屋て暮らして居る。殘る四年、その四年は即ち家の蒲團てさ。始終これだ。年中相變らずだよ。」
「然し京都から東京へ出て、最初に君が爲た仕事は何んてす。何かやらぬと云ふ事はありますまい。」
「旅屋の女中に御祝義をやつたよ。」
「それから。」
「車へ乘つた。」
「そして。」
「そして、この早稲田の下宿屋へ轉つて來た。以前僕の父が世話した男なもんて、何時までだつて喰はしてくれる。」

私は心の底に皎むつとしました。神谷の調子が何うも私を莫迦にして居るとより思はれませんゆゑ。
「神谷君。恍けた話はまアそれ位に爲ませうよ。君は思ふに、何かしら非常な悲嘆に遇はれた事がありますな。事情は何んてす、失戀てすか、然うだ、乾度然うだ、君は慥かに運命に心を傷けられたんだ。――時に君は今年お幾つてしたな。」
「三十。ても四十五六には見えるてせう。」
私は眞正面から渠の顏を見詰ました。黒く黃ばんだ、皺の深い顏立は何う見ても年寄てす。頭の天頂にシヨボ／＼と薄い毛が生えて居て、それがある爲めに顏立を却つて衰さして見せます。
「然うてすかな、何う見ても四十以上には見える。」
「それや當り前さ。僕は十年この方、外氣を吸つて日に當つた事がない。乾度君は何か大失望の悲嘆に遇はれた事があるのに相違ないんだ。」
私は渠の云ふ言葉を信ずる事が出來なかつたのだ。
「君は乾度結婚された事があるに相違ない。戀を爲拔いて苦んだ揚句てなければ、君のやうな思想になるもんぢやない。」
「いや、僕ア女なぞに關係した事がない。」とゴスゴスと指を入れて、頭の雲脂を振り落した。そして、目を上げて頭の上の白熱瓦斯を見上げながら、
「僕の頭が斯う禿げたのは瓦斯の所以さ。此奴毛髮の大敵だからな、はゝはゝゝゝ。」と笑上げた。
「君は面白い事を云ふ。一體何時から然う云ふ、その絕望的の境遇になられたのてす。君の境遇は決して順當ぢやない。自然ぢやない。貴方の生涯の裏には乾度ある秘密な歷史が潛んで居るに違ない。」と私が眞面目な調子になつて、渠の心を誘ふやうに言出すと、幾らか引入られた風が見えた。
「然う云はれると、然う、僕の斯うなつたのは小兒の時からだ。僕は小兒の時、非常な大打擊を受けた。それ以來僕の生涯は全く暗黑になつた。恐らく僕の一生はその暗黑に終る事だらう。」
「一體何う云ふ事情なんてす。」

「それを聽きたい？聽く親切があるなら聞いてくれ給へ。そら、君も知つて居るだらう、僕の育つたあの邸宅を、僕の父はもと式部官まで勤めたのだが、病氣の爲め引退して、仙臺の別莊に暮して居た。あの屋敷さ。然う／＼君何時か夏休みに遊びに來た事があるね。

僕の父母は君も知つて居る通り、實に嚴格な人でね、横の物は横に、縱の物は縱にと云つたやうに、總て几帳面でなければ濟まない人だ。朝起きるにも夜寢るにも、イヤに儀式張つた挨拶を僕等小供にまで仕付させると云つたやうな人なんだ。

僕は母を崇拜して居つたが、何う云ふものか父には馴染まなかつた。然し偉い人とは思つて居たね、何しろ來るほどの人が、父の前に出てヘイ／＼するだらう。小兒心には何んとも云はれぬ矜さ。何所へ行つても父の兒だと云ふために非常に尊敬されるんだからね。至くよ、師團の聯隊長だつて僕の父には一目置いて居た。

僕はその頃十三だ。

十三と云へば腕白盛りの惡太郎だ。――あの年頃は誰でも然うだが、家がそんな風だから、隨分亂暴も爲たよ。我儘の仕放題、欲しいものはねだり放題と云つた調子だ。

丁度九月の末の事だ。僕が同志社へ入る五六日前だつたよ。例の如く廣い裏庭へ出てね、木登りをしたり、木の枝でブランコをしたりして遊んで居ると、明神樣の横の廣場のベンチに凭れて、父と母が何かヒソ／＼話をして居るんだ。

僕、驚かしてやらうと思つてね、窃つと籔蔭に姿を隱しながら忍び寄つたと思ひ給へ。腕白だッたからね。思出すと至るて昨日だね。十幾年も前の事たア何うしても思はれない。有々と目の前に浮ぶぢやないか。

その日は恐しく風の暴れる、ひどい日であつた。繞林林が風に壓されて、枝がギイ／＼撓る。木の葉がパラ／＼／＼と雨の如く降る。纖弱な胡桃の樹などはヒユウと風に撓ふぢやないか。小兒は皆然うだが、僕はこんな日が大好きでな、無上にはしやぎ出した。ズウと側まで寄せて行つたが、急に恐ろしくなつて

な、僕ア兩親を誑かす氣も無くなつた。二人の居る五六歩手前の杉の木を小盾に立停つた。

睦しく話して居ると思つたら大違ひ。兩親は今激論の眞最中ぢや。喫驚したよ。何か平常でも感情の鋭い親父ぢやらう。それが大聲を上げて何か言罵つて居るのだから耐らないよ。

「何んだッて關はん、俺は俺の自由にする。默つて記名調印すればそれでお前の役は濟むんだ。」

「いゝえ、何んと被仰つても私はいやで御在ます。」

と云ふ母の聲は何時に似ず、凛として鋭いものでした。

「然し、俺は最う先方とも約束を決めてある。登記さへ濟せばそれで可いだけに話が搬んで居るんだ。」

小兒ながらも僕に話の樣子て飲込んだ。その頃父はその縱な欲の爲めに、母にも云はれぬ借財に苦しんで居たんだ。それを整理する爲めに、田舍にある山林を賣飛さうと云ふ相談なんだ。母は屹つとそれを撥付けたものと見えます。尤もこの山林は母が嫁入りの持參金の中で、名義はその頃も母のものになつて居た。

「お前は私の妻ぢや、お前には財産の獨有を云ふ權利がない。」

「いゝえ、ありますとも。私は元策の母です、あの財產は元策に讓らなければなりませんのです。」

「俺に背いても？」と云ふ父の聲は低いが、目は血走つて睨むやうに母を見た。僕は恐しくなつた。

「はい、私は子があつての母でございます。」と母も屈しない。

「子あつての母だ？」

「はい。」

「ぢや、飽迄私に調印を拒むな。」

「は、素性も知れぬ賤女にお騙されなすつた、そんな尻拭ひは何んぼ私だつて出來は致しません。」

「屹度するな。」

父の怒は絶頂に達した。ブル〳〵顫えながら眞蒼になつて、行也母の襟髮を引摑んだ。

「何をなさいます。」

「何んでも好い。」と二三度腕を打揮つて、グッと母、

を突飛ばした。地上へ蹌踉めく母の躰に跨つて、父は打つ〳〵。果ては土足にかけて母の腰の邊をいやと云ふほど蹴上げたのだ。

母は聲を立てなかつた。齒を固く喰しばつて耐えた。君、僕はその時、何を思つた。恐怖、悲哀、そんなものはかりぢやない。耻だ、耻だ、子として見るに云ふに忍びざる耻を感じたのだ。」

渠、神谷元策はこゝまで話來りて、酔眼を伏せた。盃を凝つと見詰めて居て話がない。如何にも遣瀬なさゝうな樣子が溢れて見えた。

「だつて君、何も君は……。」と言掛ける私を制して、

「君が怪しむのは最もだ。然うだ尤もだ。君にや僕が何を耻ぢたか判らないだらう。判らない筈さ、僕ア何も云はないんだもの。」とホッと赤くなつて神谷は眩しさうに私を見返して、

「いや人間は耻の無い活物だ。渠は唯野性あるのみ。」

「野性だつて。」

「まア聞給へ。話し序だから話してしまはうぢやないか。」

渠は二三杯改めて盃を乾した

「僕はその淺間しき光景を見て、思はず聲を立てゝ泣いた。その聲に驚いたらう、父は屹つと僕の方を振向いた。そして僕の姿を見付けた。

獸の目だ。血を帶びた獸の目だ。行也起上つて僕を追駈けやうとしたが、僕は夢中になつて飛出した。

晩になつても僕は歸らなかつた。唯何んの目的も無く野道を歩いた。

僕の頭は湯の如く沸つて居た。

夜晩く、夜路にビッシリ濡れて家へ歸ると、兩親は平常と變らぬ樣子で睦まじく何か話して居た。

それでも母は、

「まア今時分まで何處を歩いて居たの。心配をかけるぢやないかね。」と云ふ。

僕がヒョイと顏を上げて母の顏を見てやつたら、母は知らぬ振して外方に紛きらした。流石に赤い顏して

居た。
父は苦り切つて、一言も發しなかつた。
　それから少し經つて、僕は京都の同志社へ遣られる事になつたのだ。
　ねえ君、斯う云ふ譯なのだ。
　僕は事物の反對な方面を見たのだ。然うだ、裏面の暗黒を見たのだ。それ以來僕は人生の美い方面を見る事が出來なくなつたのである。どんな事が僕の心中に起つたか、どんな奇態な現象が僕の思想を斯う歪めたか、それは僕にも分らないんだ。いや、判らないんぢやないかも知れぬが、僕はそれを判らせたくないんだ。
　僕の今には、最う何んの趣味も無い、希望も無い、愛もない、野心もない、僕はもう地獄の暗黒に目の眩んだ人なのだ。
　唯、些いとも措かず、僕の目に有々と映ずるのは、十幾年前の栗林の下て、父が母を虐げる淺間しい姿のみだ。

　母はその後四五年にして死んだ。父ももうこの世の人ぢやない。
おい、女中、酒を一本。」
　神谷は蒼殺げた顏を女に振向けた。
　女中は命じられた酒を持つて來た。さて、神谷は片手に盃を取上げ、片手に例の泥パイプを取上げたが、手が震へてゐるので思はずポキと二つに折つて了つた。
　渠は大慌てに慌てゝ了つて、「失敗つた。失敗つた。このパイプは僕一と月の間寵愛した代物だ。こんなに美しく色が付いたになア。」と悲しげな目付して、凝つとその手中を眺めて居た。

懺悔

薄田泣菫

おしづ——
みどり——
おつゆ——
さゆり——
あなひとり、
名ぞ思ひ出ね、縮れ毛の
小柄なりつる……
……みそさざい——
またしも一人、古沼の
蛇の如、新肌の
つめたかりつる……
なべて皆、
わが盃に盛る酒の
瑠璃のみ、黄のみ、縹のみ。

——日の濁さにはかへがたき
野の猪盃子のみ。
瑠璃なり、
黄なり、
縹なり、
はた猪盃子なり、——
さもあらばあれ、
私語、流盻、抱擁の
來しあまみをしのぶにも、
あゝ……知らぬかなた、
底の底なる……
……かどはかし——
自我てふ陶のさかづきの

はがき

楠緒子

落ちし缺片を拾ふかに、
心はまどふ……
拾ひはすれど繼ぎがたき
胸のさかづき、——しかすがに
心はうれふ。

一

良人の他出した後で、伊佐子は何思はず書齋の机の上にあつた繪葉書を手に取つて見た、良人の書いたもので、出かけに持つてゆくことを忘れたものと見える、

繪葉書には斯うある、

僕は此頃非常に寂寥を感じる、

豫期したとほり、子供の泣聲は决して善いものではない、妻君の顏は一日一日と古びてゆく、明後日の日曜に君の許へゆく、散歩にても出かけやう、何處かへ、

何か新らしいものを見付けに。

と、斯う、天童が飛んで居る繪の下にペンで小さく書いてある、名あては號を弦月と呼ぶ文士の所へ出したので、彼は良人の親友である。

伊佐子は是れを讀むと、いふにいはれぬ不快を感じた、たとへそれが葉書で、夫程深い意味では無いにしても書かれてある文字が一々忌々しい、手に持つて見つめた其儘引裂いて、捨てたいやうに思ふ、もし是れが良人の實際の心事であるとすると、良人は今迄自分

を偽つてゐたものである、けれども良人は、よく心と反對な事をいふ癖がある、況して家族に對する滿足は、苦痛でもあるかのやうに他人には吹聽する事もある、これも其傳かとも思ふが、それにしても、良人が此樣なことを書いたのを見たのは始めてゞある、然う思ふと、目に立つて冷遇するといふのではないが、結婚當時のことを考へると、此頃の良人の擧動は、全然て以前の愛情は消滅してしまつたと言つてもいゝ樣に思はれる、思ひ思ひする事が筆の先から斯ういふ文句になつて顯れたのであらう、いかに、文士は誇張して文字を弄するといつたつて、まるつきり戲談に書いたものとは思はれない、眞實斯う思つてゐるのかも知れぬ。

と思ふと、伊佐子はうか〳〵と逍遙うてゐた明るい野が、俄に眞暗い暗に蓋はれて仕舞つて、今までの興は夢と醒めてしまつたやうな氣がする。

机の前へ膝を立てゝ考へてゐると、庭に添ふた垣根の側を歩いて來る良人の足音がする、忘れた葉書を取りに戾つて來たのである、伊佐子は、直と葉書を元の通りに机の上へ繪を表にして置いて、急いで二階の書齋から下りて、素知らぬ顏で茶の間へ入つて仕舞つた、春生れの俊吉といふ男の兒は、小さい夜着をかけて安らかに晝寢をしてゐる。

良人は庭木戶から上つて、二階へ往つたが、直と又梯子を馳け下りて其儘出て往つた、何時もなら出ていつて何とか言葉をかけるのであるが、伊佐子は態と知らん顏をしてゐた。

どうしても良人の擧動は腹が立つ、何故寂寥を感じるのであらう、子供が生れてからは、一層家庭は賑かに成つた、自分は然う思ふ、可愛いと、子供を抱く度に、此兒は二人の間に出來た寶である、此兒の母親である限り良人は自分の良人である、此兒が父と母との緣を永久に强固と繫ぐのである、然う思ふと、一層良人も懷かしく一層此兒も可愛い、子供が一日一日と智惠づいてゆくに從かつて、輕浮してゐた自分の思慮も落ちついて來て、角がなく丸くなつてゆくやうに思ふ、

自分は然う思ふものを、それを泣聲が喧ましいと言はない斗りの事をいつて、何て冷淡な父親てあらう、妻君の顔は古びてゆくなんて、人を愚にしてゐる、と考へれば考へる程腹が立つて、今にも夫が、歸つて來たらば、何とか言はなければ濟まぬやうな氣がした。

いつか俊吉が眼をパッチリと開けて此方を向いて莞爾としてゐる、伊佐子は溜らぬやうに寄つて往つて、抱き上げた。

二

良人は床屋へ往つたのてあつた、暫時すると綺麗に散髪をして髭を剃つて歸つて來た、

「おかへりなさいまし、」

と、懐しげもなく言ひはなちながら、これも日曜に出かける支度てあらうと、伊佐子は熟と見る。

良人は例爲る通り、茶の間の日當りへ出て、今朝の新聞を擴げて俯きかゝつて讀み始めると、玩具を持つて遊んでゐた俊吉はバタ／＼と這ひかゝつて往つて、新聞の上へ乘しかゝつた、伊佐子は、良人が何うするてあらうと、手を出さずに見てゐると、良人は靜に子を押し退ける、子供は聽かぬ、片言をいひながら益々膝の方へ手を延ばすを、幾度も制してゐたが、終には煩さげに、

「其方へ連れて往け、」

と、妻君の方を見た、氣荒に言つたのではないが、伊佐子は厭な顔をして、

「好いじや御坐んせんか、所天も偶には坊やの相手も爲ておやりなさいましな、」

と、遠くから見た儘でゐる、俊吉は、やつぱり新聞を乘越して父の膝へ這ひかゝらうとする、

「おい、連れていかないか、」

と、又言はれて、

「ほんとに、父ちやんは酷いわねえ、」

と、言ひながら、伊佐子は子供を抱えて、

「子供だから泣くのは當前ですわ、それを所天は、泣

く度に喧ましいと言はないばかりの顏をなすつて、」

泣く度に喧ましいとは思ふが、口へ出しては喧ましいと言つた事もないに、妻君は妙な苦情を言ひ出したもんだ、と良人は思ふ、同時に、今朝書いた葉書に、子供の泣聲の厭な事を書いたことを思出したが、見られたとは氣がつかぬ、伊佐子は流石に葉書を偸み讀みをしたことは言はぬが、何となく怨みがましい、

「ねえ、所天、所天は坊やが可愛くはないんですか、」

と、乳房を含ませる、

「何故、そんな事を聽くんだ、」

「何故つたつて、坊が生れてからといふものは、始終煩ささうにばかり爲ていらつしやるもの、他所とは全然て反對ですわ、」

「僕のやうに頭腦をつかふ者は、つひ小供なんぞには搆つてゐられんのさ、けれども可愛く思はないんじやない、夫れはお前の僻みさ、」

と、穩かに宥める、彼れは筆て書く程、鋭い露骨な事は口ては言ひ得ない性分だ、

「だつても餘りですもの、」

と、伊佐子は何となく掻き說く、

「あゝ、それどころじやない、明日の原稿が未だ出來て居ない、」

新聞を捨てゝプイと彼れは立上つて二階へ往つた。

俊男は、私立學校出てはあるが、評判の好い文士である、元は盛に新體詩を作つたものであるが、今は切りに小說を書く、其小說も頗る評判が善いので、新聞や雜誌への執筆て、なか〳〵忙がしい、年齡は二十八て、極めて感情家て、始終何物かに渴してイラ〳〵してゐるやうな質て、學問のある故か風彩も惡くない、その以前妻君の伊佐子に非常に戀したものて、狂するかと思はれる程熱中して、結果結婚したものである。

伊佐子も學校出て、色白の眼に付く容貌て、虛弱てはあるが、俊男とは好一對の夫婦である、結婚當時の二人が中は文士仲間の評判であつた、が、此春俊吉が生れてからは、妙に俊男は妻君を物足らぬやうに思ひ始めた、餘念もなく子供を可愛がる妻君の擧動を見る



度に、自分のみを慕つてゐた妻君の情は子の愛に惹かされて仕舞つたやうに思つた、父親に成るよりも未だ未だ壯い情熱に燃えてゐる俊男は情から醒めたかと思はれる妻君を面白がらぬやうになつた。

伊佐子も又、子を生まぬ以前は何事につけても初々しく全然で無邪氣に、良人にばかり附き纏ふてゐたものが、母親になつてからはガラリと變つて、眞面目に濟し切つて、子供の事で斗り日も夜も夢中になつて、他所から良人が歸宅つても、今迄は待ち兼ねて居て迎へに出たものが子供に拘泥けて迎へぬ樣になつたり、襁褓の取代に急がしい母親は、良人の衣類の着替にも手傳はぬやうになつた。

俊男は日に日に妻君を面白がらぬやうになつた、然れども擧動には成べく見せぬやうにした、それは何だか自分の兒に對する嫉妬のやうにも思はれたからで。

三

伊佐子は言はう〳〵と思ひながら、偸み讀みをしたと言ふ卑劣な弱身があるので、終に葉書の事は言出し得ぬうちに日曜が來た。

案の如く何時になく俊男は早起をして朝飯を濟ますと急いで洋服に着換へた、

「何方へかいらつしやるんですか、」

と、しらばつくれて聽くと、

「今日は約束で、絃月の家へ往く、」と、言ふ、

「さうですか、お晝飯は何うなさいます、」

「晝飯は待たずに仕舞つて呉れ、多分何處かで食つて來る、」

然う言ひながら、もう玄關へ出て往く。

子供を抱えて送り出す伊佐子は、何となく良人に突き離されるやうな氣がした。

子の無い前は、日曜には夫婦して能く散步に出たものだ、其時分は、良人も友達なんぞへは疎遠になつて仕舞つたもんだから、よく人に戯はれたものだ、それが坊やが生れてからは諸共にとては出られなくなつた、それでも一度坊やを連れて、お花見に往つた事が

あるが、癎癪だの屎だのと騒ぐものだから、良人は頃さかつて、二度と子供を連れては往かうと言はない、然うかと言つて坊を置いては、氣になつて往かれないし、夫れつ切り良人と諸共に出た事はない、良人は再び友達とばかり歩くやうになつた、可愛い坊を得た爲めに、餘儀なくも良人の愛から遠ざからねばならぬ事を思ふと、伊佐子は只、然ういふ境遇に甘んじてをらねばならぬ女の身の果敢なさを思ふ。

案じられるのは、寂寥を感じるといふ良人が心變りをせねば好いと思ふことである、今日は何處へ行くのであらう、新らしいものを求めると葉書には書いてあつた、惡い遊びでも始めるのでは無いかしら、其樣な事でもすれば決して承知しない、承知しないと言つても、若し飽かれて捨てられたら如何しやう。

伊佐子は居ても立つてもゐられぬ、俊吉を相手にしても今日ばかりは慰さまぬ。

正午は無論歸らぬ、夕方に成つても歸らぬ、夜に入つてから、少し酒氣を帶びて元氣よく歸宅つて來た、まだ寢ないで這ひ廻つてゐる俊吉を、何時にないことよ、膝に載せながら火鉢の前へ坐つた、

「何處へ往らしつたの。」

と、顏を見たので少しは落ち付いた伊佐子は疑はしい眼をして良人を見ると、

「なに、何處へも往かなかつたのさ、紘月の家へ社の者が二三人來てゐたので、盛に飲んだのさ、愉快だつた。」

と、抱いてゐる俊吉を搖ぶる、いふ通り愉快さうな顏をしてゐる、事は夫れ丈であつたのかしらと、妻君は猜疑はしく思つてゐると、

「二三日うちに、女の客が來るかも知れないから、其積でゐてくれ。」と、言ふ、

「エッ、女のお客、なにしにです。」

と、伊佐子はドッきりする、

「なに、英語の質問を爲に來るのさ、教へて遣つて呉れと、紘月に頼まれたんだ、紘月の知つてる女だよ。」

「さうですか。」

妻君は、それつきり何にも言はぬ。

四

果して二三日立つと、

「御免下さいまし、」

と聴き馴れぬ女の聲がした、伊佐子は胸を動悸つかせながら自身出て見ると、年頃は二十位で、華美な色の被布に、袴を穿いて、強く厚化粧をして、眼に態とらしい愛嬌を含めた、男の然も好きさうな女學生風の女が立つて居る、岩間艶子といふ名刺を出した。

見たばかりでもギヨツとして、良人は留守だと言はふかとも思つたが、そんな大膽な隱し事も出來ないので、兎に角通じると、俊男は周章て散らかつた机の近邊を片附け始める、その擧動が、自分が良人と結婚前、良人の寓居を訪ねて往く度に爲た擧動と、よく似てゐるので、餘計に不快な念が胸に蟠まつて、厭な顏をしてグズ／＼してゐると、

「直、此方へお通し、」

と催促された。

成程女は本包を抱えてゐる、書齋へ通ると、形態を作つて良人に挨拶する、束髮の前髮から髮がパラリと落ちるのを、白い手で、掻き上る、その樣子を、伊佐子は意地惡く見詰める、二人を此處へ殘して自分丈引き下がることは忌々しさに堪へぬが、附いて見張をしてゐると思はれるのも、心の奥底が知られて殘念だと思つてゐると、折から下では坊やが泣き立てる、急いで下へ下りながらも、二階が氣になつて成らぬので、俊吉を賺し／＼ちよい／＼梯子段の下まで往つて見ると、氣の故か、話聲がヒソ／＼と囁くやうに聴える。

一時間近くもゐてから女客は歸つて往つた、二階へ上つて往つて見ると、西洋の裸體畫の寫眞版なんぞが散らかしてある、良人が見せたものと見える、女の坐つてゐた邊は何だか好い香がする、それも氣の故か、良人は夫れを懐かしさうに嗅ぐやうに見えた、

「ちよつと、美人だらう、」

と、機嫌の善い顏をして俊男が言ふ、

「でも、余りジヤラ〳〵してゐますわ、」
と、伊佐子は自棄になつて言ふ、
「女が見ると然うだらうさ、」と、言つて、
「金曜日毎に教へて遣る約束をしたから、金曜日毎に
來るよ、」
「え、金曜日毎に、所天は、よく金曜日がお好きてす
ね、」
と、伊佐子は唇を震はす、
伊佐子が、結婚前良人と交際をしてゐた時も、やつ
ぱり金曜日と極めて置いては會見したものだ、そんな
事は俊男は、もう忘れてゐる、只もう未來の希望にイ
ラ〳〵と憧憬てゐるかのやうに疑がはれる、
伊佐子は、もう腹に据ゑ兼ねて、日頃の良人に對す
る不平を全然言つて仕舞はふと思ふ、俊吉は好塩梅に
晝寢をしてゐるからと、彼女は良人の前へ故ありげに
坐り込んで、
「所天は、以前の事を全然お忘れなすつたとみえる、」
と、少し面を赤らめて言つた、

俊男は、妻君が變なことを言ひ出したと思つたが、
畢竟女客が來るといふのが氣に障るのであらう、と
何とか言はうと思つて居ると、
「男心と秋の空つて言ひますけれど、よく言つたもん
てすわねえ、」
と、苦い微笑を浮べてゐる、
「何故だ、」
「女は同棲に居れば居るだけ、情も深くなつて來るも
んてすが、男は少し經つと、直飽きてくると見えま
すわね、」
「なに、然うじやない、女の方が早く情が醒めるのさ、」
と、俊男は少し眞面目に言ふ、
「そんな事は有りません、」
「女は母親になると同時に、良人に對する愛情は薄ら
ぐ、」
「あら、所天は然う思つていらつしやるの、」
「さう思つてる、お前が第一然うだもの、」
「まあ、」

と、伊佐子は呆れたと言ふ顔をした、それを、然うてはないと辨解するには、なか〳〵骨が折れる、子供の世話をするために、良人に對する取扱が疎略になつたことは事實であるが、それを一概に情が薄らいだものと取るのは無理である、良人は子に對して何の責任も持たないのかしら、それも、これも、充分辨解をしやうと伊佐子は胸を落ち着けやうと爲る時、寢かしてあつた俊吉が、下の坐敷でワツト泣き出した。

やつぱり、子供が邪魔になつて、その時伊佐子の辨解は出來なかつた。

* * * * * *

女客は約束の金曜日には必らず來た、もう二ケ月にもなる、良人との交際は益々親しく深くなるやうだ、時には戯談も言ふやうだし、面白さうに話もするし、全然て、以前自分と良人とが交際した時のやうな有樣であると、伊佐子は切りに氣に病んだが、結果、肉體まで惡くしたと見えて、晝間もちよい〳〵病褥に就くやうになつた。

すると、不意と、女客が來なくなつた、伊佐子は却つて氣にして、俊男に聽いてみるが俊男も知らぬといふ、隱してゐるのかと疑がつたが全く知らぬに違ひないらしい。

そのうち、別の友人から葉書が來た、

氣の知れぬ彼の美人は、終に獨身の絃月君を擒にして、房州地方へ新婚旅行に出かけ候。

斯う書いて有つた。

葉書から起つた事件は、再び葉書で落着した、伊佐子は、ホツと胸の痞を下ろして、病を忘れた。



眞白き影

蒲原有明

人げなき化粧の間に
こもりたる香油の
濃やかなるにほひの
深きぬくもり……、

鏡の面に、われは見る、
たそがれの影に薄黃む
水銀のかすかなる
波のたゞよひを。

われは又みる、鏡の
つやめく面に
眞白なる——なよやかに
這ひよる眞白なる影を。

人げなき黃昏の化粧の間、
人の香を、ぬくもりを、(あゝ紅き
褥よ)たづね寄る小猫の眞白さ……
細めたる青の眼のたゆげさよ……



冒險小說 狂人島

江見水蔭

一

海獸獵に出た――丸。船名を發表するのは御免蒙りたい、假に符號で記して▲▲丸は、僅かに百三十噸の帆船てあるが、運惡く甚しい不獵て、これては船主に合せる顏が無いのみならず、自分達も一文にもならぬので、船長以下乘組員悉く悄氣た。

僕は銃手見習て、左樣さ、別に名乘つたからとて、差支は無い。大原源道といふ者だが、總べて此海獵船員の給料なんてものは、有つて無きが如して、前借又前借、出獵前に半分受取つて、歸つてから殘部を貰ふのだが、それも抵當に大槪失くして居る。目的とするのは分割を貰ふそれなのだ。

けれども其分割が如何かといふと、獵か無いのだから別に割りやうが無いので、全船大悄氣に悄氣て、オコック海の某點まで來たのが今から三年前の十月二十三日だ。忘れも仕ない、午後の三時頃。

後部甲板に居た松谷といふ水夫が大聲を揚げて。

『難船が有るぞッ』と呼はるので、はて、此好いナギの海上に、如何したのかと思ひながら、皆甲板へ出て見ると、なる程難船だ。前方三千米突ばかりの處に、大きな船が既う沈むばかりに成つて漂泊して居るてはないか。

『變だぜ、信號だけは揚つてるが、人は一個も居さうも無いぜ。大方避難した跡なんだらう』と一人はいふ。

『いや、皆んなあの船て死んてるんだらう。行つて見ると骸骨ばかり居るかも知れないが……』と言ふ

者ふある。

『何しろ行つて見やうぢやアないか』と衆議が一決した時に。

『止せよ、つまらない。人が居ないのなら救助する必要が無いぢやアないか』と留めたのは、船長の富塚といふので、人が右と云へば左――左と云へば右といふ流儀。例のが又始まつたと皆んな顔を見合せたのである。

すると運轉士に藤沛といふのが有つて、これが利かぬ氣の人だもんだから。

『だッて船長、信號があるんてすぜ。エヌ、シーが揭げてあるんてすぜ。そんなに航路の損てもないから、行つて見やうぢやアありませんか』と、言出てた。

富塚船長も、此藤沛運轉士には一目も二目も置いて居るので、それなら行つても好からうと成つた。

や、既に此談判の間に水夫は梶を向けて居たんて。

行つて見ると大變、密輸入か何か企て樣として、軍艦にても見付けられたのか、それを反抗せずに拿捕されゝば好かつたのだらうが、逃げ樣としたと見えて、大砲の彈丸を數ヶ所に食つて居る。それても幸ひに濃霧ても懸つてか、軍艦の目からは逃れ得たらしいが、到頭沈沒間も無い運命となつたと見えて、乘組は殘らず端艇て逃げ去つたか、一人も居らぬ。

船の運命は既う十四五分――いや、それも難かしさうに見えて居たのて。

『如何だい、何か積荷は無いか？』斯うなると海賊同然さね。手當り次第、何んても漢ても引渫つて來やうといふので、端艇を下して、各自に持つて來たのが、何んだといふと『アルコール』の樽詰。其他ジンだとか、ウ井スキーだとか、ブランデーだとか、强烈なる酒の壜詰ばかりだから驚くては無いか。

いや、未だ他に積荷もあつたのだらうが、それまて手を出し得なかつたので、見る〳〵船は海底へと沈んて行く、いや、實に悲慘なる光景さ。

二

さアそれからが如何も大變て、船長が留めたつて聞くのでは無い。持つて來た酒を片ッ端から飲む。醉ッぱらつて、唄ふやら、踊るやら、喧嘩をするやら、後には船長が氣に喰はぬといふので、到頭富塚船長を船室の中へ封鎖して了つた。戸を釘付にしたのだから溜らない。

何しろ乘組は十六人だ。船長一人憤慨したつて追着いた話ぢやアない。それて、藤浦運轉士を船長代理に水夫連の方から選擧して了つて、さア飲め〳〵と底拔け騷ぎ。船の進行なんざア如何でも好いと、帆は張放して、梶なんか氣を付けて居る者はない。全船悉く醉つたね。いや、僕も無論醉つたので——餘り醉過ぎて苦しくてならぬので、寐て居ると、其夜半、非常なる大音響と共に僕の躰はハンモックから刎飛されて下へ落ちた。

そりやてそ、難破、暗礁へ乘揚げたなと、吃驚して甲板へ飛出して見ると、坐洲だか、擱岸だか、何んだか分らぬ。既うそろ〳〵氷塊に出合す時分だから、或はそれかも知れぬが、何しろ眞暗だから、少しも分らずよ。

其所へ、出て來る奴、出て來る奴、皆それが醉つて居るのだから仕様が無い。

『なアに船……船なんか、ぶッ碎いても好いや。酒さへ有れア結構だ』なんて、誰も彼も太平樂を言つて、手當り次第に又飲むのだから、無茶な話さ。

夜が明けて見ると、遣ッちよる、遣ッちよる、露領の——島（名は斷じて言はぬ。殺されても人には敎へぬ）單に島と呼んて置くが、其所の岸へ船を乘揚げて居るので。

仕方が無い、積荷を島へ上げて、それから船の修繕が出來るなら仕やうとなる。第一に揚げるのは酒だから驚く。醉ぱらひながら荷役をする内に、命より二番目の水樽をひッくりかへして了う。米俵を海へ落す。さん〴〵の失敗。

それから、まア、島に、住民が有るか無いかと調べて見る必用を生じたが、皆醉つて居るので、本統の探



驗は出來ぬ。
　何んでも周回が漸く二十七八町位はあるだらう。北寄に三百米突ばかりの岩山がある。人は居らぬ。何處かに水は無いだらうかと、こればかりは一生懸命に探して見たが、一滴も無い。木が無い。草も碌々ない。海鳥の糞は積堆して居るが、其他何んにも無い處。
『さア弱つた、如何したら好いだらう』と此時ばかりは一同の酔も醒めた。

三

　仕方が無い。まア、何んとか工風をしなければならぬ譯て、兎も角も、小屋掛の必用があるといふので、本船から帆片や木材などを持來つて住居をこしらえる。船長も釘付の室から引張り出して來る。斯う成つて見ると、宮塚船長、往生して居る。ぐづ〳〵言ふと殺されて了ふからね。
　て、まア、小屋が出來たといふので、祝盃とやらかす。ヤケ氣味て飲むのだから、堪らない。忽ちに一同酔つて了う。酔つて來ると益々喉が渇いて來る。さア水が無い。舌が焼切れるやうだが、迚も水は得られない。苦し紛れに又酒を飲む。益々苦しくなる。後には誰も彼も氣が狂はずには居られぬ。
『井戸を掘らう、井戸を掘つて見たら或は水が得られるだらう』と言出した者が有つたので、それが好からうと、忽ち地面を掘り始めた。中には素手でやるのて、生爪を剝がす。夢中に成つて掘つて居る間に一人が大聲て。
『出た〳〵』と叫んだので、皆飛上つて喜んて。
『水か、水か』と言ひながら穴を覗いて見ると、水ては無い、砂金!!!
　嗚呼、此島は砂金を以て充滿されて居るのであるか、此塲合、そんな物は、如何ても好い。砂金が何千萬ポンドあらうと、水一滴の方が、どの位嬉しいか知れぬので。
　一同がつかりした。又酒だ。苦しくなる。又酒。到頭一同發狂して了つた。

發狂して、笑ふ者がある、泣く者がある、暴れる者、踊る者、さま〳〵である。僕は幸ひにして其發狂をまぬかれて居る事が出來た。といふものは、途中から氣が着いて、これはいくら苦しくても酒を飲んでは溜らぬと警戒したからであつた。

如何かして水を發見したい。然うして他を狂態から救ひたいと考へて、一個て島めぐりを始めて、岩山の麓まで行つた時に、吃驚した。

岩の上に女の首が一個のツかツて居る。串戯ぢやアない、女も女、美しい娘の顔が一個岩の上にのツかツて居る。何んと、これて驚かずに居られるかい。

四

なアに、それは娘が、岩の後から顔を出して、昵と此方を見て居たんだ。首から上だけしか見えなかつたから、然う思つたのよ。此岩の後には、竪穴を掘つて、小屋掛をして、人が住んで居たのだが、酔つた眼で偵察したので、此所に居るのを見殘した譯なんだ。

『お前は如何したのか』と僕は問うて見ると、娘は平氣て居る。唯ニヤ〳〵笑つて居る。氣味が惡くて溜らぬが、何しろ水が一番の目的だから。

『水の有る處を知らんか』と問うて見ると、娘はカラ〳〵と笑つて。

『砂金が澤山有るよ。持切れない程有るよ』と答へた。

おや〳〵これも發狂して居るのかと思つて弱つたね。

其娘といふのは、色は白い、髮は黑く、少し縮れて居るが、濃くて長い。それを肩から後へ垂らして居る。服裝は内地風だが、如何もこれは千島アイヌかも知れぬと感着いたね。

それから娘に構はず、小屋の内部を覗いて見ると、其有るわ〳〵、中は殆ど砂金を以て充滿されて居る、其所に瘠せた老人が一個、ぼろ〳〵の洋服を着て居てね、これは日本内地の者らしい。

『どうか水が有るなら分けて貰ひたいが』と申込んて見ると、老人も亦カラ〳〵と笑つて。

「水をやるから、船を持つて來なさい。船へ砂金を積込むのを手傳つて呉れたら、砂金をやるよ。水は水だけれど、船がなア、三百六十五隻ばかり必用なんだ」といふ。

此老人も發狂してゐるんだ。

小屋の後へ廻つて見ると、其所に天水を溜めてある桶が七八個あつたので、何よりも先づそれをガブ／＼飲んだので、漸く元氣が着いて來た。

それから、其水桶を一箇取上げて、僕は早速皆んなを救つてやらうと、行きかゝると、娘は後から取縋つて。

「いけません／＼、船一隻と取替へるなら好いが、タヽ持つて行つてはいけない」と言ふ。

「好し／＼船一隻でも二隻でも上げるから、何しろ此水は貰つて行く」と僕が言ふと、小屋の中の老人飛上つて喜んで。

「船!!! 船!!!」とつゞけて呼はり、嬉しさうな顏をしながら、それて涙をホロ／＼零すのであつた。變さね、狂人だから。

五

強烈なる酒を無闇に飲んだ上に、水が一滴もないのて、神經に異狀を呈して、狂ひ廻つて居る船員の處へ、水を一桶持つて行つてやつたので、夢中に成つてそれを飲んで居る間に、自分は片ッ端から酒の壜を、ぶち破つて了つて、酒といふ物を一滴もなくして了つた。

醉漢等は、然うとは知らず、水を得た嬉しさに、殘らず快い心持に寐て了つた。

* * * * * *

眼が覺めて見ると、酒はない。けれども水があるのて喜んでそれを飲む。然うして居る間に、一時の酒狂も、次第々々に治つて來て、眞面目に物を考へる樣になつた。

斯うして居ても仕やうが無いからと、一方は船の修繕に掛る。一方は砂金を發掘する。然ういふ具合て着々事業が進んだが、狂人父子の貯水も然う長くは續か

ぬ。砂金はいくらでも有るが、然う掘つても居られぬので、好い加減にして切上げて、船の假修繕の成るのを待ち、砂金を可成り澤山積んで、島を發した。

無論狂人父子を便乘さしてゞある。後で分つたが、此老人は、舊幕時代の海軍方で、それから後、千島に渡り、土人を妻にして生んだのがこの娘で、それが此島に砂金の有るのを知つて渡來したが、船を大浪に奪はれてから、如何する事も出來ず。砂金は澤山有つても、救の待くさりて居た間に、食物や、氣候や、それから單調の生活やらで、二個とも發狂したのであつた。それでも船に乘つて北海道へ歸り着いてから、父子供全治したよ。

ヤア、然ういふ具合で、海獵には失敗したが、砂金では成功した。其島へ又近々發狂しに行くつもりだ。如何だ、這んな發狂なら、一寸は好いだらう。はゝゝゝ。

舊都の歌

與謝野寛

西の都の時雨月、
鞍馬の山を根としたる
雲のなびきに北の空
片曇して、古町は
花くちなしを搾りたる
淡き香油を撒く如き
狹霧の中に濡れたれば、
格子づくりの家並の
狹き通りの小暗さは

瓢のほどとも思えず。
五條寺町、角店の
矮き擔端の大いなる
赤き扇の看板に
仄かにあたる日の影は
夕月夜にも見まがひぬ。

わが小車は幾めぐり
小暗き町をよろぼひて、
古き鏡の奥ふかく
朧にうつるまぼろしの
物影に似る中ゆけば、
仙洞御所の前通り
木高き下に青白き
築土の名殘つめたくも
室町の世の衰へを
正目に見ると身に泌みぬ。

車とまりぬ。わが前を
今よぎるは、白々と
大根を積める荷車の
眠氣にゆるぐ黄の牛。
また傍には澄みわたる
御溝の水のせせらぎに
黄なる銀杏ぞ流れたる。

ふとこそ思へ。歌、妓樂、
戀慕、名聞ものまなび、
すべては夢の夢とても
さめし心のやすらひに
わが歸るべき『寂靜』の
故郷にしも今着きぬ。

牧師

徳田秋聲

ずつと既う昔のことてござんすがね（と或る若い未亡人が語つた。）然うね、私が十八の時のことてすから彼是もう十年程になりますが。私の家の近所に若い牧師さんが住んて被居いました。笠井行雄といふ方で、その頃何でも二十五六てしたらう。色の白い眉の明晰した、中脊のなか〱確乎した方で、よく私共の宅へ遊びに被入いました。何でも東京の神學校を出ると直ぐ、本部の方から私共の村に派遣せられなすつたんだとか承りました。

私共の村——つまり故郷でござんすね——といふのは房州も外海岸の方、人氣が荒く、風俗が惡く、故郷と申すのも恥しいやうな土地てござんすが、そんな土地へ撰ばれてお出てなすつたのですから、笠井さんも隨分道德堅固な方だつたらうと存じます。

私の家は元庄屋を務めて居た家でございまして、村ての舊家てはあり、兄は二人まで米國にまいつて可成り立派にやつて居ますししますので、村の人々からは隨分尊敬せられて居りました。それに父が大層物堅い義侠心の強い男だつたものですから、笠井さんも布教の都合上私共一家と親しくして置いた方が宜いとお考へなすつたんでせう、もう毎日のやうに家へ被入いました。尤も父は元慶應義塾などに學んだこともございますので、老人に似合はず譯の解つた方で、牧師さん方とも親しく話し合つて居りました。

父は鹿爪らしい程物堅い質でしたのに反して、母は人並はづれて氣輕な女で、始めて被入つた方にでも構はず言ひ度いことを言つて退け、いつも男みたいに高笑ひをして話を結ぶ女でした。いつかも東京から避暑

に被入た學生の方を捉えて、

「夏中は此の村は女と子供だけですから、貴下方あ女ても拵える氣なら勝手次第てございますよ。」

と申すぢやございませんか。若い學生さんは只呆れて眼を丸くして被居ると、

「てもあんな色の黒い女ぢや厭だらうねえ、アハヽヽ。」

と例の大聲て笑ひましたので、相手の學生さんは餘計眼を圓くなすつた程てす。

それほど無作法な母も、笠井さんだけには始めつから失禮な口も利かず、大層尊敬してるやうてございました。

笠井さんは父とても母とても、又やつと十三になつたばかりの妹とても、誰とてもよく話をなさる方てしたが、然し宗教とか、信仰とかいふ眞面目な問題になりますと、父や母ては一向埒があきません。てすからそんな話題になりますと、いつも私がお相手て、随分熱心に聞いたものてございます。然し御説はあまり解りませんてした。或はあの方の熱心な若々しい勢のある聲に聞き惚れて、只夢中て聞いて居たのかも知れません。非常に明晰した澄んだ聲てございました。

それて父が居りませんと、いつても私がお相手になります。私も兄は米國に行つて了ひ、妹は少さいし、東京に出度いと思つてもなか／＼父が許して呉れませんので、勢ひ笠井さんとばかり親しくなり、東京の女學生の話など承るのが何より樂みてした。裏の私の室て、たつた二人て話をして居ることもありますし、又妹を連れて三人て海岸など散歩することもありますので、時々厭な風説を立てられたりなぞしましたけれど、私は別に何とも思ひませんてした。笠井さんはあんな正しい方、私は未だほんの子供みたいな女てしたもの。

「貴女は無邪氣て眞實に結構てすねえ、何時までもそんな美しい心を持つて居て下さいよ。」

とよく笠井さんが仰しやいました。

「ても私是てゝ心配があつてよ。」

と申しますと、」
「どんな心配？　え」
と肩を寄せてお訊きになります。
「でも東京に出度いと思つてもお許して呉れませんし、兄さんは居ないし、妹は小さいし、私一人で随分心配してゝよ。」
「はゝ、それ位な心配なら却てあつた方が宜い位なものだ。だから貴女は無邪氣だ。」
と情深い眼をして私の顔を眺めては何時もお笑ひになりました。
一度などは、こんなことが御座いました。
七月の上旬頃の或る暑い朝でございました。私は一人畑の中に入つて、玉蜀黍の葉蔭であられもない前歯で皮を剝き／＼砂糖黍を噛つて居りますと、突然に笠井さんが何處からか出て來て、
「これは驚いた。」
とニコ／＼笑ひながら仰しやいました。
その時ばかりは流石のお轉婆な私も、もう／＼穴にも入り度いほど極りが惡くて覺えず頸まで眞赤になつて了いました。
そんな罪の無さですもの、未だ眞の子供で、村の人々が彼是云ふやうなことは決してなかつたのでございます。然し村の若い人達の眼から見たらいくらか變に思はれたかも知れません。笠井さんになら私は如何なことでも隠さずお話するし、時には駄々を捏ねたり、甘えてみたり、眞實に兄妹みたいに心易くして戴いたのですもの。又笠井さんの方でも私を妹のやうに思つて居ると自分でも仰しやいました。私はもう恁んな優しい慕はしい人は無いと思つて居ました。
ところが、その嬉しい交際が四ヶ月ばかり續きました後、偶としたことから私は嬉しさと悲しさと恐ろしさと恥しさとを同時に味つて、而して兄さんのやうな笠井さんと別れねばならぬことになりました。
それといふのは九月の始めになりまして父が私に東京遊學のことを許して呉れたことでございます。父は「女の癖にそんなに學問しなてくも宜い」と始終言つて

居りましたし、又誘惑の多い東京なぞに娘一人を出すといふのは大した間違だと思つて居ましたのを、宅の兄――米國に行つて居る――の妻の實家で、今度末の娘がさる女學校に入ることゝなつたが、清子さんも一緒にお入りになつたら如何かと申してまいりましたので、父も漸く私を出す氣になつたのでございます。

それが決定ると直ぐ私は笠井さんのところへ飛んでまいりまして、

「先生、喜んで下さいまし、私父が愈々東京へ出ることを許して呉れました。」

と喜ばしさを押へ切れないで、息せき切つて申しますと、

「そんなに嬉しいですかね。」

と笠井さんは笑ひながら仰しやいました。餘り喜ばしさうにも見えませんでした。

私は喜んで貰はうと思つたのに、笠井さんの言が存外冷淡でしたので、不尠不平を感じました。

「だつてそれは嬉しいわ、何遍頼んでも許して呉れなかつたのを漸々聽いて呉れたんですもの。貴下可いとはお思ひなさらなくて。」

「それは結構ですとも。然し然う學問したつて餘り益する所はないものですよ。餘り多く望を囑しないが宜いですよ。」

「でも怎んな片田舎に居たつて何にもなりやしませんわ、貴下だつて怎んな土地へ永く被居りやしないでせう。」

「はゝ私ですか」と笠井さんは淋しさうな顏をして「さあ如何なりますかね、貴女が學校を卒業なさつて、立派な奥さんになつて歸つて被入るまで此地に居るか、それとも又直ぐに轉任して了うか、それは一寸解りませんよ」

「私お嫁なんかに……」

と私は思はず眞赤になりました。何だか笠井さんの言が意味あるらしく思はれましたので。

少時してから笠井さんは非常に眞面目な顏をして、

「清子さん、東京に被行るなら餘程注意なさらなくち

やがけませんよ。貴女は無邪氣な性質だから心配はないやうなもの丶、無邪氣であるだけそれだけ乘せられ易いかも知れません。東京は至つて誘惑の多い處ですから、くれ〴〵も注意することですよ。」

と染々した聲で仰しやいました。

然し私はそれほど東京を恐ろしい處とは思ひませず、只恁んな親しいお方に別れるのが何だか辛いやうに思ひました。て其事を申しますと、

「はゝ、貴女にも然ういふ氣がしますかね。」

と笠井さんは何だか淋しさうな顏をなさいました。

それから愈々明日立つといふ前の晩になつて、私はお暇乞ひに笠井さんのお宿までまいりました。近所と言つても田舍のこと、三丁や四丁は離れて居ります。もう秋風がそろ〳〵吹き初めやうといふ時分で、空は拭つたやうに晴れ渡り、星の光りが間近く燦めいて居りました。

竹籔の多い田舍道の暗闇を提灯に照らし照らし、笠井さんのお宅にまいりますと、例の書齋に燈火が耿々と點つて何か本を讀んで被居るやうでございました。田舍のことて庭先にまて虫が鳴いて、四邊は水の底に沈んてゞも居るやうに靜かてございます。私は暫し庭口に佇んて、虫の聲を聽き、燈火の光りをジッと眺めて居りました。

やがて緣側から窃と訪れますと、笠井さんは大變なお喜びて、

「これは〳〵善く來て下さつた。もうしみじみお話も出來ぬかと思つて居たのに、眞實によく來て下さつた。」

と心から嬉しさうに、手づから茶を入れたり、お菓子を出したりして接待して下さいました。

「いよ〳〵明日立つことになりました。色々お世話さまになりまして有難うございました。」

と申しました時、私は何だか悲しいやうな泣き度いやうな氣がしましたので、覺えず頭を埀れますと、

「いや私こそ却て。」

と笠井さんも默つてお了ひなさいました。

障子の隙間から流れ入つた冷たい風が、洋燈の灯をハタ／＼と搖めかせて、庭の蟲の音だけがジイ／＼と厭に耳につきます。今でも覺えて居ります、あんな訝しな氣がしたことはありません。默つて恁うジッと坐つて居りますと、何だか恁う込み上げ度いやうな、歔欷り上げ度いやうな變な氣がして、寧そ一思ひに膝にしがみ付いて思の儘に泣いて見たらば、少しは心も安まりさうな工合てした。

多分笠井さんも然うだつたかも知れません、妙に口が利き難くて、偶に何か話してもお互に聲が嗄れて居り、一向相手の言ふことが此方の耳に入りません。それても色々話りました。自分達のことよりは却て他人のことよて、妹が此頃大きくなつたとか、今度行く親類の家の娘は如何な人だとか、そんなことばかり話して居りました。些とも暇乞ひのやうてはありません、そして二人共妙に堅くなつて居りました。

それて、もう別に話もないから歸らうと致しますと、もう少し宜いだらう／＼とお止めなさいます。それてはと言つて又腰を落ち付けましても別段お話はございません。何遍か立ち掛かり、何遍か引き止められた後、今度こそはと立ちますと又お止めになります。

「でも既う遲うございますから。」

と持つて來た提灯に火をつけますと、

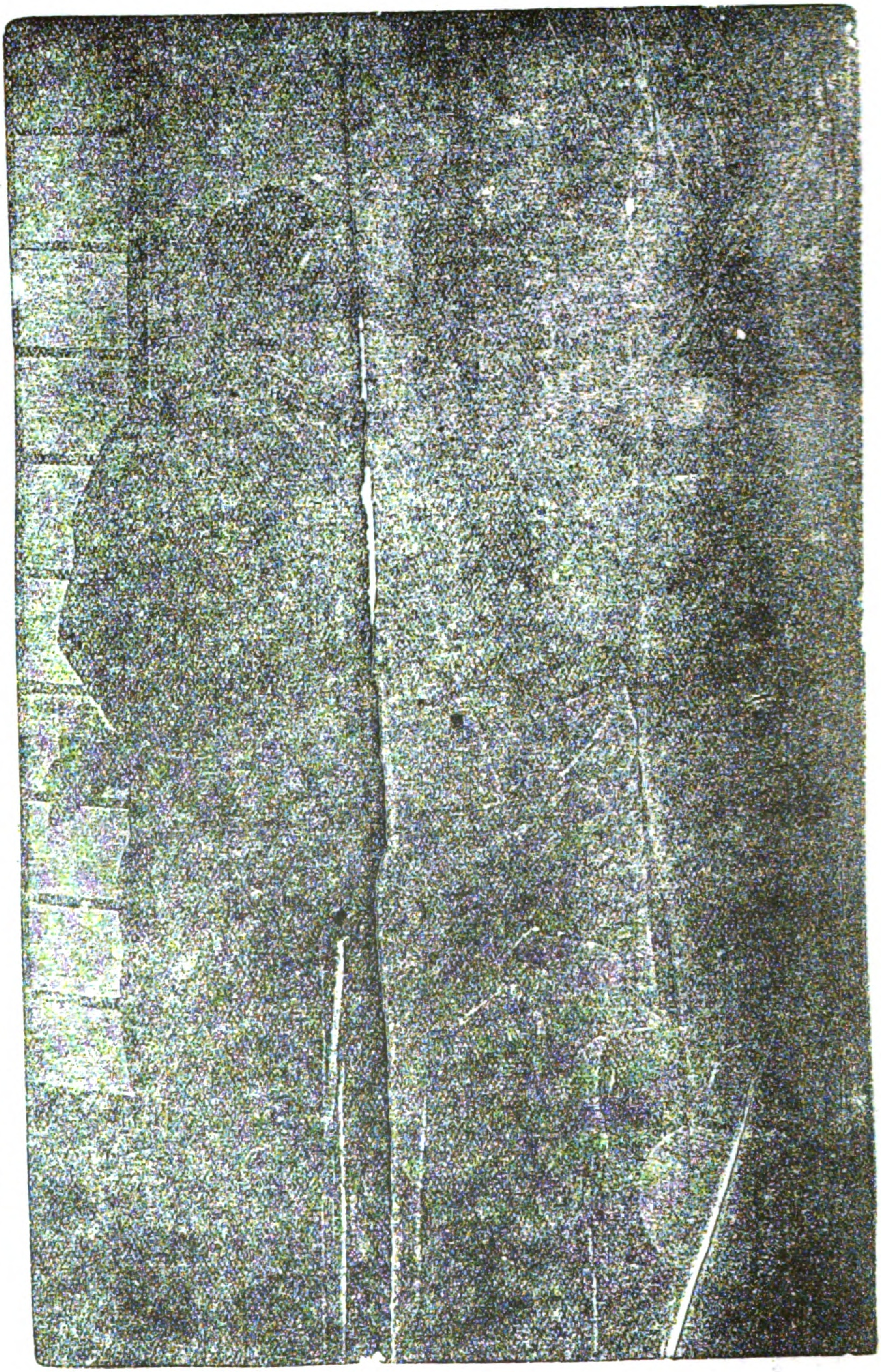
「そんなに急がなくとも宜いぢやありませんか、直き其處ですもの。東京に出ると云つて、急に然う他人行儀にするものぢやありません。」

と恁んなことを仰しやいます。滅多に然ういふことを云はない方てございますから、私もすつかり困つて了つて、

「でも眞實に遲いんですから。」

「まだ漸と九時ですよ。滿子さん、貴女は此村てたつた一人の私の友達だつたぢやありませんか、貴女が居なくなつた後の私の淋しさを察して下さい。も少し位宜いぢやありませんか。」

と私がウロ／＼して居るのを見て、ツカ／＼と進んで來て、提灯の火をフッとお消しになりました。



私は何だか恐ろしくなつて來まして、急いで又點けますと、又フッとお消しになります。蠟燭の吹き消した後の厭な匂ひがプンと鼻を搏つて、私はもう眞實に泣き出し度いやうな氣がいたしました。

「何卒もう歸らして下さいまし。」

私は涙聲で頼みまして急いで立ち上りました。

笠井さんも、既う仕方がないとお諦めなすつたものか、默つて洋燈を取つてお立になりました。その時瞥と眺めてみましたら何だか靑ざめて痛ましいやうな顏をして被居いました。

私は既う何とも云はずに門を出ると、直ぐ一生懸命に驅け出しまして、何遍か轉びさうにしました。そして笠井さんの室の燈火が見えなくなると、何だか落膽して、思はずワッと泣き出しました。如何いふ譯かは今でも解りません。たゞ張りつめた氣も緩んで、心行く限り泣きました。後から〳〵と涙が流れて來ていくら止めやうとしても止りません、我知らず聲も出て、私は手巾を顏に押し當てた儘、イと〳〵と誰憚らず泣きました。眞實に今から思ふと不思議なやうでございます。

少時立つと涙も止りましたので、私は其處を竊と立つて、濱邊の方へ歩を運びました。泣き顏を家の人達に見せ度くございませんでしたので。

濱邊は又濱邊で、星の光り、波の音、漁火やら、何處か遠くで歌ふ唄の聲やら却て悲しさを増すばかりです。私は濕つた砂をザクザク踏んで歩きながら又涙を流しました。悲しくも何ともないやうで、只涙だけがポロ〳〵と頰を傳ふのです。私はいつそ又引き返して笠井さんの處へ行つて見やうかとも思ひましたが、それほどの決斷もなく、涙の痕が汐風に乾くのを待つて悄々と家へ歸りました。

「如何したえ、大層長かつたぢやないか。」

と母は怪訝さうに顏を眺めて訊きましたが、私は只默つて、濕つた手巾を持つた儘急いで床に入りました。

翌る朝眼が覺めてみましたら、私はジッと手巾を口に噛み締めたまゝ寢て居りました。

それから上京したきり、その年は冬の休暇にも歸りませんでしたが、その翌年私は不幸な病氣に罹つて澁谷の病院に入りました時、笠井さんにお目にかゝりました。

その時は健康も大分恢復して居ましたので、運動旁々庭を散歩しながら話さうぢやないかと、看護婦の許しを受けて、二人で庭を歩きました。

丁度二三日前まで咲き誇つて居た八重櫻も既う悉皆青葉となつて了ひ、廣い庭には杜鵑花のみが時を得顔に咲き亂れて居るといふ時分でございました。病氣の疲れもあらうからと、笠井さんが肩を借して下さいましたので、私も失禮して馴れ〱しく肩に手を掛け、活々するやうな若葉の下や、燃ゆるやうな躑躅の中をお話を聞きながら歩き廻りました。

「清子さん、お別れしてからもう十ケ月許りになりますね、その間私は毎日貴女の爲めにお祈りして居ましたよ。」

「然う有り難う。」と私は又その時分のお轉婆さんに歸つて子供みたいに首肯いて笑いました。

笠井さんは矢張り落ち付いた調子で話して被居いました。

「先生、あの晩私は一人海岸に行つて泣きましたよ、子供のやうに。」

「あの晩」と笠井さんも何か思ひ出したやうに、「あの晩は私も眞實に失禮しました。後で如何してあんなことをしたかと泣き度いやうな氣がしましたよ。」

「いゝえ、私こそ却て。」

と私達は互に紅くなつて顔を見合はせました。二人共上氣して居るやうでした。

「如何です、疲れはしませんか」

と笠井さんは肩に捉まつて居た私の手を窃とお握りになりました。

「いゝえ、些とも。」

と私は眞赤になつて答へましたが、丁度その時私達の傍を人の惡さうな看護婦の一群が通り過ぎましたので、私達は吃驚して飛び離れました。

お歸りなさる時、
「私はもう恁んな病氣になつて些とも樂みはない。」と思はず溢しますと、笠井さんは思遣りの深い眼をして、
「決してそんなことはありません、病氣などは直ぐ療つて了ひます。何事も神樣の力をお賴みなさい。」と確乎した調子で言つてお歸りになりました。それぎり既うお目にかゝりません。

それから私は三年目に松崎に嫁いたのでございます、松崎はその時分中尉でした。

その翌年笠井さんは蛯原さんのお媒介で同じ信徒の方と御結婚なすつたとか、承りました。何でも今は大坂とやらの教會に彼居るさうで、御夫婦の仲も睦まじく、もうお子さんが三人までお有りなさるといふことてございます。それに引き換え私は良人には死なれ、子供はなし、朝夕の不自由がない程却て淋しゆうございます。

一度笠井さんにお目に掛つて、色々お話し申し度いと存じますけれど、もう彼方樣ではお忘れなさいましたらうよ、何しろ十年と云へば一昔前のことてござんすからねえ。

雑報

婦人界消息

○北白川宮武子女王御降嫁　北白川宮武子女王殿下には今回舊伊勢津藩主伯爵藤堂高紹氏へ御降嫁の事愈々御勅許相成り今春四月中旬吉辰をトして華燭の御盛典を擧げさせらるゝ由であります。

○帝國女子大學起工式　私立帝國女子大學起工式は去月六日午後から其建設地なる大塚町の敷地で開かれました、同校長西澤之助氏の談に依れば大學は「命懸け」と「婦徳」との二つを教へる目的で在るさうで其「生命的、育」の内容には果樹園藝、牧畜事業などの鼓吹も在るやうです。

○愛國婦人會役員の行賞　卅七八年戰役に於ける婦人の活動團體として功勞ありし愛國婦人會々長岩倉久子氏の勳四等を始め同會創立者たる故奥村五百子女史及び中山幸子氏の勳六等、其他近衞貞子谷玖満子岡部抵子濱尾作子山脇房子諸氏に對し、兼て何れも叙勳又は金盃の下賜の行賞の御沙汰がありました。

○百人一首の研究　蓄膿大學の御殿で東亞協會の諸方面の學者連が集まつて百人一首研究會と云ふ時節柄な催しがありました、佐々木信綱氏の百人一首の由來其他に係る詳しい講演を初めに、井上博士の百人一首歌留多遊反對に就いての辯駁がある、三輪田元道氏も亦之に賛成して大に其效能を述べ立てる、別に異議も無く差支ないと云ふ事に可決、猶夫れから萬葉等から直してある歌に就いての考證が始まる、終りに芳賀博士の發案で歌の價値の批判があつた、天智天皇から段々と讀み上げて可とする者は手を擧げる、其結果最高點は『久方の』で次が『逢見ての』『淋しさに』等、『今はたゞ』も仲々評判が好くつて情緒切々全く壓卷だと叫ぶ人もある、更に零點中の歌を選んだら『吹くからに』が不名譽の當選をしたさうであります。

文界近狀

○大辭書の出版　書肆三省堂では「日本百科大辭典」の刊行を企て向ふ一ヶ年間に全部七冊紙數八千頁項目十萬挿繪三萬の大辭書を完成する目論見である、蓋し我邦空前の大出版と言つて宜い、去る十一月廿二日其第一卷出版を機とし披露の園遊會を大隈伯邸に開き來賓三千名近頃の盛宴であつた。

○北原氏の詩集　北原白秋氏の詩集「邪宗門」は愈よ來春早々易風社より出版のことゝなつた篇數も多く體裁も凝る由

○島崎氏の旅行　島崎藤村氏は舊臘十日頃より下總稻毛の海岸に赴き、靜養かたがた執筆される由

○新しき出版物　島崎藤村氏の「春」、小杉天外氏の「回想記」、瀨沼夏葉女史の「チエホフ傑作集」、藤田泣葉氏編の「名家書簡集」、水野葉舟氏の「響」等新しく出版された、何れも寄贈を受けたが餘白なきため批評は次號にゆづる

▼お斷り

豫告の如く嶋崎藤村氏の新作を請いて附錄に掲載いたす筈でしたが全氏近來聊か頭腦の加減惡く餘儀なく掲載を延期されました、其爲め本號の附錄の寂にくはず誠に記者の遺憾至極に思ふ處ですが遲くも一二ヶ月の間には其新作を請ひ得て本誌上に發表いたしますから讀者諸君も何卒それまでの御猶豫を希ふ

▼餘興課題　汽車

次の「餘興」の課題は汽車です、例に據りて簡單に解題して置きます

▲或る時汽車に乘つた時のことを思ひ出して書くのもよろしく▲汽車に乘つて旅行した時の心持▲汽車に乘つて失策したること、不平であつたこと面白かつたこと、苦しかつたこと▲心得になるやうなこと▲乘客のさまざま▲各地方の汽車又は停車場の特色▲停車場待合室の觀察▲此頃汽車の通じた地方のこと▲汽車を知らぬ人の感想▲都會近邊の汽車又は停車場の特色▲時間に就ての感想▲其他汽車又は停車場に就ての事なら何でもよろしい▲原稿は十六字詰十行以內「汽車」の二字を題に書くこと▲締切り本月十五日▲懸賞は例の通り

寫眞懸請

諸友諸嬢にお望み致します、本誌愛讀者の面影を紙上で紹介致したいと思ひますから、從來の如く盛んに御寫眞の寄送を願ひます、お一人の寫眞に限りません、愛讀者の方々が時々催される小集の紀念に撮った寫眞など最興味があらうと存じます、或は二三人連れでお友達同士お寫しになつたのも結構です、なほ家族の寫眞も歡迎致します、女子の雜誌ですから家族でも女子の方が多く寫つて居るのを希望します、又可愛らしいお子樣達の寫眞も好いのです、名所、風景、又は風俗寫眞も勿論掲載致します風景などは成べく餘り世間に紹介されて居ない新しい場所が好いのです、以上凡て人物以外には各地の『乞返送』と書添えて下さいますれば、用濟次第御寄送の寫眞は直ぐ御返し致します、何卒貸與を懇請します、且人物風俗其他何れの寫眞にても、奇拔にして餘り世間に類の無い好い寫眞でしたら相當の報酬を差上るとになつて居りますから、其邊の所も御承知置きを願ひます。

▲投稿締切日

凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇投稿各種 懸賞定額 (四十二年一月より改正)

(甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す)

▲特別賞金五圓

▲甲種 (短篇小説、美文)
天賞金參圓。 地賞金壹圓五拾錢。 人賞金七拾錢。

▲乙種 (お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩)
天賞金貳圓。 地賞金八拾錢。 人賞金四拾錢。

▲丙種 (和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、致への庭、少女文壇
圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る)
天賞金壹圓。 地賞金五拾錢。 人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、(但他人の作物を剽窃したるものは無効とす)

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲▲▲▲毎月一回(一月定期發行)

一册(一回分) 定價金拾五錢 : 郵税一錢五厘 計金拾六錢五厘
三册(三月分) 同前金四拾五錢 : 同四錢五厘 計金四拾九錢五厘
六册(半年分) 同前金八拾四錢 : 同九錢 計金九拾三錢
十二册(壹年分) 同前金壹圓六拾六錢 : 同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲▲▲年四回(二月、五月、八月、十一月臨時增刊)

一册(一回分) 定價金貳拾錢 : 郵税一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二册(半年分) 同前金三拾八錢 : 同三錢 計金四拾壹錢
四册(壹年分) 同前金七拾貳錢 : 同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部▲▲▲十六回

四册(三月分) 定價金六拾三錢五厘 : 郵税六錢 計金六拾九錢五厘
八册(半年分) 同前金壹圓三拾三錢 : 同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六册(壹年分) 同前金貳圓三拾八錢 : 同三拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▼申込注意 ◎◎◎◎

振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は本材木町局、郵便切手代用は必ず壹割增(收入印紙謝絶)、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……	部數多く有効に比し無類の割安
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切毎號十五日前

特約取扱 ○京橋 日本電報通信社 ○京橋 明治廣告社 ○神田 博報堂

明治四十一年十二月廿九日印刷
明治四十二年一月一日發行

改正定價 金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話(本局六〇七番) 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し偖は横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成最早此の上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に趣き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に望みたる大患が斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會及び印度パタビアヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に悩める人士なきにもあらじ天壽を完ふせんと欲せば速に本劑を服し難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核●肺炎●氣管支加答兒●肋膜炎●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舖 川名助次郎

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 福井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七
東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
靜岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ヶ谷町 櫛田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷萬次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
大阪西横堀舟町橋西詰 賣藥卸賣株式會社
馬關西南部町 賣藥會社
東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀨戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
相模横須賀汐入町 茶本商店
東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
越後國長岡市 藤井卯吉
東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通 大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷回春堂
上野市大門町 小林傳兵衛

(全國到る處の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)

婦人病自宅治療者の福音

新春早々、婦人病自宅治療者の爲め茲に最も完全なる子宮外用藥發見の報告をなすの光榮を有す

弊舗、子宮病血の道藥、中將湯發賣以來茲に十數年に亘り此間幾多の婦人病に付て研究し曩に加減中將湯十數種を調劑し、其病狀に應じて服藥の法を試みしに著々良好の成績を得たれば、尚一層自宅治療者をして遺憾なからしめん爲、完全なる外用藥を得んとして多年苦心焦慮の結果最新の良藥を發見するに至りしかば、之を專門大家に質して學理上多大に有効の成分あるを確め、直ちに中將湯服用者中下記病症の諸婦數千人に施して其醫治經過を試みしに、其靈妙に驚き或謝狀に或自身店頭に來りて答禮せらるゝ等最良好の結果を見るを得たり故に之を「中將球」と命名し、婦人病者の使用に供し以て疾患を治癒し、姙娠を促かし天賦の性能を助けて、婦女子の幸福を計らんと欲す、幸に病症に應じ本劑を適用せば必ずや滿足すべき好果を修めらるゝ事を確信す。

世の婦人病始めて絶滅せん

中將湯は本誌を始め各新聞に廣告する如き婦人病一切の內服藥にして今回發見の中將球は、子宮內膜炎、白帶、赤帶、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、子宮糜爛、前の惡臭、前の搔痒、小便しげき、月經時の疼痛及び良人の痳疾に罹つて居る時などに、中將湯を服用して中將球を兼用するのである斯て世の婦人病を絶滅する事が出來るなら、中將湯、中將球の効や眞に偉大である、病に惱める婦人達の切に愛用されん事を望む。

●中將湯中將球は全國到る處の藥店で販賣す、若し無き時は病人の容躰を詳しく書き添へ、本舗東京日本橋通四丁目津村順天堂へ注文せられたし、本舗は其病症に應じ適宜の加減藥を發送す。（●津村順天堂は一藥を以て萬病を全治すると云ふのでない、多年の研究によりて發賣する十數種の加減內服藥と數種の外用藥を以て婦人病の全治を保證するのである●）中將湯代價五週分二圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分 圓十錢、一週分六十錢、四日分三十五錢、中將球定價四十五個入二圓、二十個入一圓、九個入五十錢、試分三個入二十錢。

【東京秀英舍印刷】